風雲の如く

楠乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風雲の如く

【Ｎコード】
Ｎ５１２２Ｓ

【作者名】
楠乃

【あらすじ】
オタク？な『青年』が転生？的なよくある東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作小説です。
この小説には作者の妄想及び願望が多大に入ってるかも知れません。
原作破壊やアンチ等が嫌いな方は、ご覧にならないほうが精神安定に繋がると思われます。

プロローグ（前書き）

当作品は、弾幕ＳＴＧ『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』シリーズの二次創作・幻想入り物です。

作者のもう一つの作品も終わっていない上に、他作品の多大な影響を受けて書き始めてしまった駄文になっております。

別にどうでもいいよ、という方。ありがとうございます！
それでは『風雲の如く』始まり始まり～。

プロローグ

『喉が渇いた』。

眼が覚めて、始めに思ったのがそれだった。

とりあえず喉を潤してくれる物は無いかと、立ち上がり闇雲に探す。

眼は開いている感覚があるが、真っ暗で何も見えない。
耳も良く聞こえない。というか何も聞こえない。
鼻は詰まっているのか何も感じない。
皮膚は何に触れているか分からないし、そもそも上がどちらなのか
地面がどこまであるのかもよく分からない。

それでも手を延ばす。
我武者羅に、感覚を延ばす。
何かが欲しくて、誰かに会いたくて、誰かに助けてもらいたくて、
無間（むげん）の闇に立ち向かう。

暫く闇を進んで、光が見える。
出口だ、と思って迷わず突っ込む。
穴の様なものを潜り、眼前に広がるのは、

青く広がる大空、広がる山々の絨毯と、どこまでも続く海。

定型文みたいだが、そう言わざるをえないほどの絶景。
強く光る太陽が眩しく自分を照らす。
なんだかとても嬉しくなり渇きも忘れ、『大空』を走り出す。

……あれ？『大空』を『走り出す』？
大空とは…『天空』？『空中』？
つまり…自分は空に浮いていて？尚且つ、『走っている』？

そういえば私は家でゴロゴロしていたのではなかったか？
何故いきなりあんな闇の中で目覚めたのだろうか？

色々な疑問が湧き上がり、走っていた身体を止め、『空中に止まる』。
この表現も何かおかしいような気がするが…。
とりあえず現在地点を確認する為に、『下を向いた』。

……高度は自分の位置が高すぎて分からない。

とりあえず隣に雲が浮いていることから、４０００ｍくらいはありそうだ。
それよりもそして、自分の身体が――――――無い。

「……はぁぁあぁぁぁぁ！！？」

自分でも驚くほどの大声を出す。
すると身体は無いはずなのに出した声は大きな『突風』となり、近くの白い雲を吹き飛ばす。
雲は千切れそれぞれが小さくなり、風に流され消えた。

「…ちょっとまて、落ち着こう。こういうときは素数を数えるんだ」

ガラガラの喉で無理をして喋っている為に物凄くひどい声になっている。
…声帯とか、喉やらが無いはずなのに。

「２，３，５，７，１１，１３，１７，１９……落ち着けるかあぁぁ！！！」

今度も声が衝撃波となり、山々の森を揺らす。

……なんだかとても虚しくなってきたので、地上に降り立つ。
空中での動き方が分かる。と言う新たな疑問点も出てきたが、とりあえず近くの山に降りた。

降り立って気付いた。足が無いのだった。
とりあえず滑るように移動しながら、周りを見渡す。

木々は太く逞しく、人工的に創られたような道はなく、全てがコケ

に覆われている。
そういば上から見ていて、近くに街というものが無かったと思い出す。
とすると、ここは人の手が加えられていない自然なのだろうか？

しばらくして、清流に出た。
喉がガラガラだったので思いっきり飛びつき、手を伸ばす。
が、そもそも身体が無いのにどうやって飲めばいいのだろうか？
などと考えても仕方が無いので、直接口を着けるような感じで顔を水に着ける。

「……あ～、冷たくて美味い」

しかし、喉を通る感覚のあった水はどこにいくのだろうか？
疑問は深まるが、とりあえず喉の渇きは癒せた。

とりあえず、清流に沿いながら下流の方へ進んでみる。
水を飲んでから既に3時間は経っているだろうが、疲れはない……
…というかそもそも足が無いんだし。

歩いていると、清流から少し離れたところに広場があった。
綺麗な花畑が広がっており、私はフラフラと近寄ってった。
……中央にナニカがいる。
その時、私は『誰かが居る』という事ですっかり安心していた。
……いや、元が人間だったから危険なモノは無いと慢心していたのだろう。

気付いた時には目前に、鋭い牙や爪を持った狼…『異形』が迫っていた。

「グルルル…！」

縄張りを荒らされたのが気に喰わないのか、今にも襲い掛かってきた――いや既に切り裂かれていた。
鋭い爪が肩の部分を切り裂いた。
肉体は無いのだが、肩の部分の『何か』がはじけ飛ぶ。

「っがぁっ！？」

痛みが尋常じゃなかった。
痛みで何も考えられなくなって私は、おかしくなった。
後で考えてみるとはじけ飛んだのはどうやら肩の部分だけでなく、
何か脳のネジも飛んだ様だ。

パニックになった頭は何故か良く分からない過程を通り謎の結論を導き、肉体はそれを行動に移す。

――早く逃げなくちゃでもどこにここにいたら殺されちゃう異形に妖怪に殺されちゃう身体を動かしてこいつと戦わなくちゃこのまま逃げても無駄だよでもどうやって早く逃げようこいつはどれぐらいの速さで追いかけてくるかな空中は駄目だ飛ぶやつかもしれない助けてくれる人はいない自分でもどうしてこうなったんだとりあえずどうしましょうか逃げるいや無理だろ理解しろよ妖怪だ戦え水に潜れば追いかけてくる泣くな対抗手段は無理だな妖怪だって自分は――自分は……妖怪？――そうか妖怪肉体が無いのはそのため無理だよ私は妖怪我は妖怪勝てないいける後ろにこいつ等なんてただの雑魚妖怪戦う戦う圧倒できるでも――ワタシは人間――今は違う理解しろ妖怪自分はなんだいける過去を振り向くな駄目だそれでも怖い恐怖を焼き尽くせ異形は相手だけじゃない殺される周りも全て敵よでも相手も生きてるんだぜそれでも自分は生きなくちゃいけないどうしてこうなったのよ倒せ殺せ戦え――我は、異形――そうだ僕も妖怪私も妖怪俺も妖怪人間よ逃げるな自分戦えたとえ過去がどうであろうと怖い今は今だ現実を見ろ私は生きるお前はここで私に倒される立ち向かえ後ろには何も無い敗北だけ逃げろ風は此方に吹いている勝てないんだよ相手を叩きのめせ理解しろ――僕は生きる――此処で死ぬのは俺じゃない君だ早くいい加減にしろ戦え抗え立ち向かえ敵に逃げよう拙者は妖怪理解せよ無限の戦え君は妖怪異形相手は可能性をいける信じろ雑魚だ清流速さは競え追いかけろ圧倒しろ対抗しろそうだ自分は――我は『鎌鼬（かまいたち）』也……。

瞬時に指に感覚を伸ばし、相手を切り裂く様に素早く動かす。

なぞった指の痕は爪、刃となり異形の手足を切断、最後に首を切断する。
妖怪は絶命。噴水のように溢れる血が広場の花畑を汚していく。

私はそれをぼうっと眺め、フラフラと広場を立ち去った。
先程まで私は清流沿いに浮いていたが、今は方向も定めず動いていた。
恐らく先程の異形の血を見たのと、脳の異常な回転によりオーバーヒートしたようで何も考えれなかったのだろう。
むしろ意識すら保てていなかったようだ。

私は気付くと樹木の上の方で幹に寄り添い、寝ていた。
時刻は朝ぐらいだろうか。

…まぁ、仮にも『イタチ』なのだから、こんなところで寝ていてもおかしくは無い。
問題は……。

自分の姿が何処からどう見ても『幼女』であることだ。

「……なにこれぇぇぇ!!?」

ロリボイスが辺りに響き渡る。
ああ、どういうことなの……???

よし、もういいや。色々と諦めよう。

と、心機一転（？）物事から逃げずに自分を見詰め直す。
身長は一メートル強ぐらい？
服装は黒の着物…というか、紬？
紬はそもそも女性用…って女性だった……。

とりあえず回りを確認する。
……木々しか見えない。
と、落胆してとりあえず歩き回ってみようかと思い、気付いた。

「……どうやって降りよう？」

寝ていた木はかなりの大木、枝の位置もかなりの高さだった。
私にはどうやってこの高さまで登ったのか全く解らない。
私は今まで寝ていた枝から立ち上がろうとして、

立ち上がろうとして、――――――手を滑らして、枝から落ちた。

「…えっ！？――――

何時までも衝撃が来ない。

落ちる！と思って瞑ってしまった瞼をそっと開く。

――――……ええっ？」

既に私は地面に着地しており、天を向く仰向けに倒れていた。

『倒れている』と自覚した途端に背中に地面の感触を覚える。

…訳が分からない。

とりあえず、身体に異常は無い。

が、普通に落ちたら命の保障など出来ないような高さから落ちて無傷、とはどういうことなの？

疑問は深まる。

けれど何時までもここに居てもしょうがない。

そう私は考えて動き始めた。

歩きながらも脳を回転させる。
考えるべき事は自分自身に起こった出来事とこれからについてだ。

自分は、『妖怪』。
これはすんなりと確信できた。
こうも簡単に自身が妖怪だと言うことを、信じれるのもおかしいような気もするが……。
こういうのが人間の精神の強さなのかな？
…いや、むしろ妖怪の精神？
『鎌鼬』が私の妖怪の種族みたいだ。
鎌鼬とはマイナーな……。

自分は、『幼女』。
……理不尽だよ。色々と…。
というか姿に引っ張られているのか、言動・思想が全てそっち方面になりかけている事が一番のショックだ。
…あれ？じゃああの自分の姿が無くて空に浮いていたの頃は？
まだあの頃（？）は口調は普通じゃなかったっけ？
ていうか浮けたんならわざわざ木の枝から墜ちなくても済んだじゃん……。

自分は……『生き物』を殺した。
人間の時、虫などを殺した事は誰でもあると思う。

けど、あれ程の大型の『生き物』を殺したことは無かった。
これも妖怪化のおかげなのか罪悪感はまったく無い。
人間の時だったら、すぐさま自殺していたかも知れない。
……生前は、ヘタレだったね。

自分は、『転生』した？
これだけ歩いて人どころか街、道路すら見えない。
先程の異形なんてＵＭＡ確定だろうし。
そして私ももう『妖怪』である。
某有名な宇宙人風に捕まるのかな？
……人がいたら、だけど。

自分は、先程どうやって『着地』したのか？
私が寝床にしていた大木は樹高約５０ｍという、『森の巨人たち百選』もびっくりの大木だ。
そういう木の枝から落下したのだ。死なないほうがおかしい。
何故無事に着地出来たのか？
妖怪…と言ってもあれ程の高さ。ダメージは物凄い筈なのに。

……あれなの？よくある『転生』ネタの一つの不思議な能力なの？
じゃあ、私の『能力』って？
そう考えると言葉が脳に浮かんでくる。

『衝撃を操る程度の能力』

衝撃…衝撃ねぇ……。
なるほど、それなら着地時の『衝撃』を全て操ったのか。
ていうか本当に転生したのね……。
いやまぁ、前世の人生は自分が言うのも何だけど酷かったよ？
……いや、ただ単にニートなだけです。スミマセン。

働きにも行かずゴロゴロしてましたよ…。

衝撃を操る、ねぇ……。
試しに近くの木を思い切り殴ってみる。
――――ベチッ！ボキィッ！
折れた。木の方じゃ無くて、私の手首が。

「……いだぁあぁぁ！！？」

…痛い…マジで激痛……。
しかし、すぐさま修復していくのが分かる。
なんていうか…ゲームで言う闇の力が集まっている感じ？
これが妖怪の力『妖力』かな？
イメージ的には黒い煙がいくつも私の手首に集まっていく感じ。
手首に吸い込まれて行くほど、痛みも感じなくなってくる。
妖怪の体はチートだね…人間の時では考えられないわ……。

あっという間に完治。
時間にして3時間ほどかな？時計が無いから解らないけど。
その間は普通に歩いていた。
骨が折れたら吐き気がするって話だけど、全くもってなし。
恐るべし妖怪スペック。

気を取り直してもう一度。
木じゃないよ？
……うまいダジャレも言えやしないし…。

…さっきは能力を使うってイメージしてなかったから発動しなかったのかな？
なら善は急げ。
イメージする。『衝撃を操る程度の能力』を。
『私の右手は衝撃を跳ね返す』
構えた右手の表面に透明の薄い膜が生じる。
そのまま、右手を木に当てる！！

――――バキィッ！ドォンッッ！！
予想通りに折れた。木だよ？私の手首がまた折れたわけじゃないよ？
右手部分にかかった衝撃が全て木に反射されたのだ。
作用・反作用の力で『反作用』の力が全て『作用』の力になったのだから、
単純計算で威力は二倍。
体は幼女、力は妖怪！それなんて名探偵？ハハハ。
…笑えないよ……。

さて、現実逃避してないで周りを見てみようか。
先程の木が倒れた時の轟音で、妖怪どもが集まってきた。
殆どがこの前殺したオオカミの『異形』。
鋭い歯や爪は体がある今となっては、かなりの重症の傷になってしまうだろう。
相手はかなりの数、１０～２０はいるだろう。
少なくとも逃げて助かるような真似はさせてくれないだろう。

だから、この能力を使う。生き残るために！

イメージする。『私は衝撃を跳ね返す』。
自分の身体が見えない膜で包まれていくのが分かる。
包み終わると同時に先頭にいたオオカミが突進をしてくる。
私は避けずに防御する。
オオカミが私に当たった瞬間、オオカミが走ってきたスピード以上の速さで吹き飛ぶ。
それをきっかけにオオカミが私を殺そうと飛び掛ってきた。

私は『鎌鼬』。
自身の爪や指を鎌として、オオカミを切り裂く。
手を広げ、風を集めて真空刃を造り、手足を切り刻む。

こうやって戦っている間に一つ分かったこともあった。
能力で『衝撃』から私の身を守っているが、それは本当に『衝撃』だけなのである。
つまり、切り裂く爪など『斬撃』からは身体を守れない。
…ま、斬られた『衝撃』はないから怯むなんてことは無いけど。
あれ？じゃあ、いつの間にか斬られていて、そのまま放って置いたら私死ぬじゃん！！
……痛みって重要だね。

とまぁ、こんなのんびり考えている間にも敵は来ている訳で。
…こんなこと考えながら戦える妖怪は、脳味噌も高スペックなのか……？

戦闘終了。

周囲は血だらけでよく分からないモノが散らばっている。
無論、私も真っ赤に染まっている。噛まれた跡が特に痛い。
オオカミは全員死亡、私も重症で暫くは動きたくも無い。
けれど血の臭い、というものもある。
早急に此処を離れなければ。
私はまた、当てもなく歩き始めた。

能力及びその他について（前書き）

饅頭怖い饅頭怖い。

……すいません、本編には多分関係無いです。

どぞ。

能力及びその他について

歩いている間に川を見つけて服や身体を洗い終えている頃には、もう傷は塞がりかけていた。
しみるけど菌とかも怖いし、身体を洗っておこう。

妖怪なんだから別に平気じゃない？と思いついたのは、すでに洗った後だよ！チクショウ！

…洗った服に着替えて、最後に顔を洗う。
すると、水面に自分の顔が反射して見える。
……顔はロリ確定。素直に可愛いと思った自分が悲しい。
髪は黒、長さは首ぐらいで、眼は暗い赤……というかどちらかと言うと…暗い緋色？
ああ…これも妖怪化の影響かな……。

閑話休題（かんわきゅうだい）。（一回言ってみたかった、けどこんな状況で使うとは思わなかった）

これからこの危険な時代（？）を生きていくためには自分の事を良く知った方が生き残れる…と思う。
よくある漫画みたいな？そんな感じで。
…まぁそういうわけで能力についての私の考察。

まず、『衝撃』とはそもそもどんな物なのか？
そう聞かれると私は、瞬間的に物体にかかる急激な圧力や、心のかかる負荷、風とかを想像する。
……最後のはゲームの話だけどね…。

そう考えると、『鎌鼬』に『衝撃を操る程度の能力』はかなり相性がいいのでは？
と言うわけで、実験。
そこらに落ちている小石を拾う。大きさは（小さな）私の握りこぶしほど。
普通に上に投げてみる。当然、地面に落ちる。
地面には小石よりも少し大きいぐらいの窪みが出来る。
もう一度、先程と同じ石を同じようにして上に投げる。
ここで能力を小石に発動させる。
『この石が物体に与える衝撃を増幅する』。
すると地面に落ちるまで、石には何も変化は無い。
なのに、地面には先程の2倍程の穴が出来た。
逆に地面に吸い付くように小石を着地させることにも成功した。

「…まぁ、これは木から落ちて実証済みだけどね！！」

…言ってみて虚しくなった。虚しくなっただけだった。

次に、ゲーム的な感じの能力を使ってみる。
イメージは竜巻・真空・暴風。

「『ガルダイン』！」

……何も起こらず。

「…『ガルーラ』」

……同じく、何も起こらず。

「……『ガル』？」

竜巻が発生、かなり小さいが。

「……だめだこりゃ」

結論、能力の研鑽を自分に課す。
予想以上に自分の能力が弱い。
あの妖怪の大群に勝てたのは、運が良かったからか相手が弱かったからか。
どちらにせよ、自分を鍛えないとね。死にたくないし。
…そもそも、戦いたくもないけど。
後は心に対する衝撃は……今度出てきた妖怪にでも試してみよう。
強かったら逃げるけどね。そんなのは能力も効かないだろうし。

移動方法も考えてみた。
それは移動を能力を使って簡単にしてみる、というもの。
イメージは一方〇行。
ていうか『衝撃』ってほぼベクトルじゃない？
……まぁいいか。熱量とか電気量は操れないんだし…。

まぁ話がずれたけど、移動の話。
まずジャンプ。『足にかかる衝撃を全て任意の方向に跳ね返す』。
次に近くの木の幹を足場にして踏む。
某忍者の如く、木々を走り回れぇ！！

「はっはっはっはっはぎゃぽむっ！？」

と、スピードを出し過ぎて大木に体当たりしてしまった。
あまりの速さに状況が認識出来なかった。まさに自業自得。
けど勝手に発動した能力のおかげで私は無傷。
むしろ、音の衝撃で獣が来ないかの方が心配だったけど…大丈夫かな？

…もっとちゃんとしたイメージで、能力を発動させるのも今後の課題の一つだね。
ちょうど日も暮れてきたし、さっきの衝突で出来た木の洞で過ごすとしよう。
自分の突進でここまで大きな洞が出来るって…。
……妖怪スペック…あり得ない…。

年月が大分過ぎた。
転生してから今日で、ちょうど十年って所かな？
なんで今日で十年だと分かるかと言うと『鎌鼬』だからだと思う。
私『鎌鼬』は暦に関係ある妖怪。
鎌鼬による傷を負った際には、古い暦を黒焼きにして傷口につけると治る。
古い暦を塗ると何故治るかは解らないけど、そういう事なんだろうね。
他にも、暦を踏むと『鎌鼬』に遭う…とか。
…妖怪について何で詳しいかと言うと……ゲーム脳、乙！としか言えないね…。
まぁ、そんな事はどうでもいい。
この十年、何をしていたかと言うと、特に目的も無く山々に篭もって能力の研鑽・身体能力の向上。
よくある漫画の修行と言う奴をやっていた。
初めて倒した時の狼のような異形たちがわんさかと出る。
ＬＥＶＥＬ上げじゃぁぁ！！！
まぁ、そんな至極どうでもいい事も置いといて、
近くに村みたいなところもあった。
が、近付いただけで「妖怪だ！！」と襲われてしまったので、泣く泣くその場を後にした。
「妖怪に良い奴と悪い奴がいるんだぞぅ！！」と泣き言を叫んでも無視。だよねぇ。

仕方なく山に篭もってました。
腹が減った時は村からちょっと失敬するけどね！

次。色々と能力についても解ってきた……と思う。
まず『鎌鼬』としての能力。
相手を切り裂く手から延びる爪や刃。
切れ味は最高。銅剣なんて簡単に斬り裂ける。
物体に触れているときに、斬るか斬らないかのスイッチも自分で調節できる。
風を集めて、竜巻みたいなことも出来た。
これは『鎌鼬』＋『能力』でかなりの高威力になった。
某螺旋丸に近い様な事も頑張れば出来るかもしれない。
けどもし出来たら自分で制御できるか自信がない、のでパス。

さらに私自身が『風』みたいになる事も出来た。
というか『鎌鼬』の本当の姿はこちらだと思う。
私がこの世界に生まれた時に透明だった理由がこれなんだろう。
『風』状態の時は、何でもすり抜けられる。
けど、妖力とかが使われていると、すり抜けられないのが弱点かな？
風になると透明になる。けど透明になった後でも、妖怪には簡単に気付かれた。
透明の意味が無いなぁ…人間には簡単に通用したけど。

次に『衝撃を操る程度の能力』について。
『程度』の意味がよく分からないけど……まぁ、それはどうでもいい。
自身にかかる身体への瞬間的負荷、力は自由に操れる。

逆に、じわじわと締め付けるような力や、貫通・残撃には対抗できない。
打撃や風は、普通に操ることが出来る。
この辺りはまんまぺ○ソナ3みたいな感じだなぁ…。
ちなみに、自分以外に対して能力を掛ける事は出来るけど、簡単な命令しか出来ない。
例えば、人間の両足に『衝撃全反射』を掛けてみる。
人間がそれなりに高いところから飛び降りると、上に吹っ飛んで着地を一生出来なくなる。
足から着地すればまた飛び上がり、足以外で着地しようとすると全身打ち付けることになって死亡。
能力を操っている私だからこそ微妙な力加減が出来るが、私以外が対象になるとさじ加減が一切わからなくなる。
実験台になってくれた人間さんはちゃんと下ろしてあげた所、訳が解らず呆然としていた。まぁ、当たり前だよね。

私はいくら現妖怪だとしても元人間として、『人間』は殺したくない。
妖怪としての考え方としたら甘っちょろい考え方なんだろうけど。

そして『妖力』。
黒い煙みたいな感じの力。身に纏えば、色々と身体能力が向上する。
もっぱら私は回復にしか使わない。消費すれば精神的に疲れるからね。
妖怪は肉体を基本としないからかな？
この力『妖力』を消すことで人間には『妖怪』だとばれない。
……まぁ、この赤い眼で一発でばれるんだけどね…。
…前髪伸ばしたいなぁ……。

次、『霊力』。

人間が纏う白っぽい煙。人間ならば誰しもが持っている…と思う。
妖怪である私には使えない。そして人間でこの力に気付いている人は、集落に居なかった。
だから妖力と比べてどれだけ強いかはわからない。というか調べようが無い。
使える人がいないんだもん。

能力関係についてはこんな感じかな？
十年という月日は結構な長さになる。人間にしてみれば、の話だけど。
妖怪にとっては短い。人間みたいに短命じゃないし、長生きしようとすればいくらでも出来る。
まぁ、長命なのは解るけどさ……。

十年経っても身長が全然伸びないのは何で？
絶望した！！自分の肉体に絶望したっ！！

…次、行こ。
こういう風に簡単に考えが、切り替えられる点としても妖怪は凄いと思う。
服は和服。黒っぽい紺色の着物。和服は生前（？）から好きだから別に良しとしよう。
妖怪パワーか何か知らないが、破けても『妖力』を籠めてあげると修復していく、とんでもない自己修復作用付き。それ以前に破ろうとしなければ、めったに破れない。とても頑丈。この十年でなんだか物凄い愛着が湧く、不思議な一品。

疑問に思えば物凄い気味が悪いが、十年たった今になってはどうでもよくなった。

髪の毛が黒で長さは肩までである。
着物・赤い眼・ショートカットの髪・幼女…。
なんだこれ……。

そんな感じで十年間は山に篭もっていた。
十年経った記念日として、この山から出て私は旅に出た。

理由？無いよ、そんなの。単に記念日だから、としかいいようがないね。
人生なんてそんなものだよ。
まぁ、これは私の考え方だけどね。

旅って良いよね！！

十年過ごした山を出て、色々とお世話になった村から最後の別れを（略奪）して、歩き始める。

「また貴様か！いい加減にしろ！！」
「これが最後ですから！」
「そう言って何回繰り返したと思ってるんだ！！」
「…十年？」
「返せ！！」
「え、今から吐けと言うんですか！？」
「誰がそんな事を言った！？」
「んじゃこれで！！今までありがとうございます！！」
「おい！？」
「それでは～！」

さて、歩き始めたが現在地が分からない。
ていうかここは日本で合ってるのかな？
…そんな根本的な事を何故調べようとしなかった私……。
ま、いいか。歩けば分かるだろうし。

数週間が経った。
食糧が無くなれば近くの里から強奪、妖怪に逢えば無視、襲われたならば吹っ飛ばす。そんな旅をしていた。

閑話休題。
そしてそれはちょうどお昼頃だった。
元々私が住んでいた山とは違う、遠く離れた険しい山の中腹。
そんな人里離れて誰も来ないような森林の中で、

私は、囲まれている。

「……ハハハ…」

魑魅魍魎に私は囲まれているわけである。

こうなるともう笑うしかないね……。
戦うにしても、如何せん敵が多い。しかも見た事のない強そうな奴らばかり。
数の暴力という言葉があったけど、まさに現状がそうだね。
……笑い事じゃないね…。
話し合う…は無理かな……？
というか話し合うってそもそも話が通じるの？
物は試し、挑戦してみよう。
…喋るのが苦手だった私はいったいどこへ……。
まぁ、十年前から薄々気付いていたけどさ…。

「……あの～、話し合いません…か？」
「…何じゃ？」

……正直、言葉が通じるとは思ってなかった。
話に応じてくれたのは、一番でかい人型の妖怪。
よくよく見ると背中に大きい羽根が生えている。
山伏姿だし、妖怪としては最もポピュラーな天狗か？
…いいや、とりあえず生き延びる道を見つけないと。

「なんで、私を殺そうとするんですか？」
「……別に？暇つぶしじゃが？」

…ええ～、もっと他にやることないの…？

「…妖怪なら、人を襲ったらどうなんですか？」

『元人間』だけどね私。

「…人間は弱くてな……」

「…つまりもっと戦いたい、と？」
「…まぁ、そうじゃ」

ふぅん……。
要するに、戦闘を楽しみたいと。
じゃあ、なんで私を襲うのよ？

「なら、もう少し強い人……いや妖怪を探せばいいじゃないですか？」
「……探したぞ？」
「見つけたんですか？ならその人と「お主じゃ」……は？」

今、何て言ったこいつ？

「木を片手で折り、小妖怪を山の向こうへと吹っ飛ばす」

……まぁ、この能力はストレス解消としては最高だよね。

「……はぁ、いつの間に見張っていたんですか」
「ちょいとな。その力、鬼かと思ったがそうでもなさそうじゃな」
「…種族は鎌鼬です」
「鎌鼬か…面白い」

怖いよ！いつの間に見てたの！？ストーカー！？
鼻息荒いような気がするんですけど！！目線がなんかエロく感じるんだよぅ！？
…泣きたくなってきた。

「よし……決めたぞ」

勝手に何か決められても。
とりあえず後退りしながら曖昧に返事をしておく。

「…はぁ、何をですか？」
「お主、ワシの所に来んか？」
「は？」
「要はお主、ワシの妻にならんか？」

妻？夫妻？……結婚？
私と？…幼女の私と？って事は……。

「ロリコンだあぁぁぁーーー！！！？」

瞬時に膝を曲げて上に跳躍。
木々を蹴って、遠くに逃走！！
やばいやばい！！あの人マジやばい！！
転生して女になって妖怪に犯されるってなにそのバッドエンディング！？
そんな趣味は私にはない！！

「まぁ、待てい」
「ッツ！？」

流石は天狗、もう追いつかれた。
左手を捕まれ、逃げるに逃げられない。
そのまま地上に下ろされる。逃げようとはしているが、手の力が強すぎ。
思いっきり握りつぶそうとしてるんなら反射できるけど、単に握っているだけだから能力が発動しない。
くそぅ、肉弾戦ならかなりの能力の筈なのに……。

「…そこまで嫌か？それなりにワシもててるんだが…」
「知らないよっ！？」

女でも侍らせてるんですか、このエロ親父！？

「……わかったわかった、ならこれで妥協しよう」
「諦めて下さい！！」

心からの叫び、しかし無視される。
暴れまわっている私は、次の言葉で動きを止めた。いや、止めてしまった。

「お主がワシを倒せたら、見逃してやろう」

「……倒す？」
「つまり一対一の決闘じゃ」

そう言って、手を離す。

「強い者を探して、やっと見つけたんじゃ。実力を知らんでどうす

る？」

なんなんだこの天狗。
やけにかっこいい笑みを魅せやがって。
……しかし、この状況をよくよく考えてみると私は戦うしかないのだ。
周りに魑魅魍魎は居ない。が全速力で逃げたのにも関わらず、この天狗には簡単に捕まったのだから。
再び逃げても結果は変わらない。
…だからといって、ここで戦わずに妻となるのも嫌だ。
男と女の経験値で言ったらまだ男の方が上なんだよぅ！！
というか、どちらにしてもこんな爺が結婚相手は嫌だ！！

「……わかった。ていうか『戦う』ってしかないじゃん、私の選択肢」
「まぁ、そうじゃな！」

本当に腹が立ってきた。何なんだこの天狗は。
いいからそのニヤケ顔をやめろ、腹立つ。

「では、ワシは名は『天魔』…お主の名は？」

え？名前？私の？
私の名前は色々と弄られて、トラウマだから嫌いなんだよね。
なら、いっそのこと違う名前で過ごそうか。
ちょうどいいや、変えよ……えーと、名前……。
……簡単には思いつかないね。
いいや。めんどくさい。

「名前はない。生まれたばかりだから」

「ほう。ではワシの妻となったあかつきには、ワシが名前をつけてやろう」
「ごめん被るっ！！」
「はっはっは！いざ、勝負！！」

私はすぐさま後ろの木に向かって跳躍、さらに跳ね返ってスピードを上げていく。
天狗……いや、天魔は翼を広げるとかなりの大きさになる。
さながらどこかの鷲や鷹のような。
いや、あれでも随分小さく見えるね。元々大男みたいな体格だしさ。
それに比べて小柄な私は狭い木々の間も、通り抜けられる。
広いところだったらすぐに負けるだろうね。
あっちの方が通常は早いんだし。
『衝撃』を操り、速度をどんどん加速していく。
先ほど逃げた時よりも数倍速い速度に。
天魔もそれにあわせて移動しているが、なにぶん身体の大きさでうまく動けていない。
その隙を狙う！

「……喰らえっ！！」
「グッ！？」

加速分のエネルギー＋私の体重＋『衝撃全反射』のとび蹴りだ！！
キックを喰らい、思い切り吹っ飛んだ天魔は、木に当たって止まった。
無論、その木は折れた。あの巨体を受け止めただけでも凄いものだと私は思うけど…。

「ハハハ、流石じゃな…」
「…諦めてくれた？」

「何を。まだまだじゃよ！」

そう言って懐からよくある天狗の必需品、羽団扇を取り出した。
その羽団扇を私の方に思い切り振った。

「ふん！！」
「…？……ッ！？」

始めは何も起きなかったと思った。
何も起きなかったから攻撃の為に動こうとして気付いた。
右手の二の腕辺りががざっくりと斬られている事に。
少なくとも戦闘中にもう右手は使えない。
指先が既に痺れかかっているし。

「…随分とグロイ事をするね……」
「切り裂くは鎌鼬の専門、と言うわけでもなかろう？」

そのドヤ顔がむかつく…！

「ほれほれ！」
「うわっ！っと！！」

羽団扇をこっちに向けて楽しそうに振る天魔。
真空刃（？）か何か解らないけど、とりあえず避けないと真っ二つになる。
この見えない刃によって周りの木がどんどん伐採されて行く。
こうなると私の足場が無くなる。
邪魔者の木も無くなって、天魔にとってはいい事尽くめになっていく。
それを阻止する為に、私も風を操る。

「喰らえ！！」

起こしたのは小型の竜巻。
大きさとしてはちょうど大人一人が入るほど。中は風で巻き上げられた砂等で何も見えない。
入り込めば身体中を石や風圧・気圧等で切り裂かれて出血死する、私の今のお気に入り。
けど、いちいち発動に止まって集中しないと出来ないのが難点。
そんな私のお気に入りも真空刃が衝突すると分解される。
真空刃も消えるから、防御としてはいいんだけど……。

「流石は鎌鼬、かの？」
「なんで疑問符！！」

…追い込まれている。
団扇を振るだけで風が起こせる天魔に比べて、私はわざわざ『能力』を使って起こしているのだ。
消費が激しいのは当然こちらの方。精神が持たなくなるにつれ、肉体疲労も重なってくる。

「ハァ…ハァ……くっ！！」

「なんじゃ、もう終わりか」

精神はまだいける。けど精神疲労の影響で肉体が持たなかった。
私は膝をついて肩で息をしていた。
息をするたびに切り裂かれた右腕が痛む。

「ハハハ……体が動かないや…」
「そうか、まぁワシの屋敷でゆっくりと休め」
「……嫁はいやだって言ってるじゃん」
「負けたのはお主じゃろ、諦めよ」

…負けた？
これで終わっていたらそうかもしれない…。
けど！まだ終わってない…！！

近付いてきた天魔が手を伸ばす。
その身体は隙だらけだ。
思いっきり、息を吸い込む。
空気を吐き出そうとする肺が、心臓が痛い。
けれどこれでやめたら終わる。
そして吸い込んだ空気を、吐き出す。

私がこの世界に入ってきた時、私の身体は『風』の状態だった。
そしてその時、私は私自身に起きた現象が全くわからず錯乱していた。
その時に起きた現象として『大声で雲を吹き飛ばした』という事があった。
その能力を自覚して発動するなら、果たしてその威力はどれくらいになるだろう？

「■■■

視界が暗転。もうどうにでもなっちゃえ。

旅って良いよね！！（後書き）

連続更新終了。
作者の駄文がこのあとダラダラと続く事となります。

今後このペースが続くと…良いなぁ……。

天狗

天井が見える。
イコール、眼が覚めている。
しかしながらその天井は見た事が無い。
つまり『知らない天井だ』。
ん～…今までずっと木に登って寝ていたからなぁ……新鮮だ。
……いや、そんなのんびりしてる暇じゃないっての。

「あ～……ここは？」
「あら、起きられましたか」

声の方向へ顔を動かす。
若い女の天狗らしき妖怪が一人。
天狗、って事は――。

「…天魔の家？」
「あ、天魔様ですか？今お呼び致しますね。天魔様～！！」
「……行っちゃった…」

天魔が私の寝ている部屋に来て、色々と説明を始めた。
私が気絶した後、周りにいた魑魅魍魎たちがこの状況はどうしたものかと悩んだ結果、私達を天魔の家に運んだそうだ。
そこからは、天魔の妻たちが気を失っている私と天魔を介抱したそうで。

…妻たち、って……。
一夫多妻制ですか……夜道に気を付けろよ。

天魔の説明も一通り終わり、鼓膜は大丈夫なのかと聞くと治ったとの事。
妖怪パネェ。

「フム、ワシは良いとしてお主の身体の調子はどうなんじゃ？」
「あちこち体がまだ痛いね」

精神力を使い果たしたし普段よりも数倍早く木々を跳躍した。回復にすべて妖力をまわしているのに、この筋肉痛だもん。
いや、能力痛と言うべきかな？

「……こんなこと聞くのもあれだけどさ…私の勝ち、で良いんだよね？」
「ああ、お主の勝ちじゃ、ワシは負けて婚姻は無し……じゃがその身体では動けぬじゃろ？」
「…そうだね……今は身体を起こすのもきつい、かな？」
「しばらくは此処に厄介になるが良い」
「…有難う御座います」
「かまわんかまわん。ま、ゆっくりしてゆけ」

こういう時はそれなりにかっこいいのになぁ……。

なんやかんやでしばらくの間、天狗の集落にお世話になることになった。

集落だけに何百もの人（天狗？）がここに住んでいる。

普段なら天狗の一族か、信頼の置ける手下妖怪しか入れないのだが、私は天魔を倒した＋天魔が認めた客人ということもあって、現在ここに居れるそうだ。

天魔以外にも私の世話をしてくれる人や天魔の妻たちと話すこともあるのだが、ここである問題が発生した。

――私の名前である。

「約束では『妻になったら名付ける』という話じゃなかったかの？」
「んじゃ、あの勝負は引き分けで尚且つ私の判定勝ち、って事で私は妻にならない」
「なんじゃそれは！？ワシの得が何もありゃせんじゃないか！？」
「じゃあ、ここに家を建ててここに住もうか？」
「…随分とあっさり決めたが……実は？」
「しばらくしたらまた旅を再開するつもり」
「意味無いではないか！？」
「帰る居場所があるってことは幸せなんだよ？」
「む」
「旅で疲れたらここに帰ってくるから」

多分。大分。絶対とは言わない。いや、言えない。

「…むうぅ」
「…それともここで別れて二度と会えない…とか」
「……ええい、分かったわい！！」
「商談成立！って事で、本題に入りましょ」
「…商談成立、本題って……まぁ良い、お主の名前じゃな？」
「自分で決めるもんじゃないと思うんだよね。名前ってのは」
「フム…」

悩む天魔。
それを座って見守る私。すでに屋敷内を動けるぐらいには回復している。
流石に戦闘になると身体が思うようには動かないと思う。
というか回復に使う妖力事態が回復しきっていないんだよね。
なんというジレンマ。

「……なかなかに難しいのう」
「天魔さぁ…もしかして名付けた事とかって、無い？」
「あるわい！…じゃがお主の場合、すでに精神が子供ではないじゃろ？これで何か言われるとな…」
「……ああ、妖怪の自然発生じゃなくて、出産による妖怪の子供の名付けしかやったこと無いのね」
「…まぁ、そうなんじゃが…何故わかる……」

ゲーム脳のお陰さ！

「…まぁ長にもなると色々とあってな」
「ふ～ん？」

ま、私には関係ないだろうからどうでもいい。
族長なんて私にとっちゃ重っ苦しいものでしかないと思うんだよね。
……私にリーダーシップが執れるような器が無いからかな…？

「…すぐには決めれん。ワシの妻たちと相談する時間をくれぬか？」
「……ボソッ（おのれリア充）」
「？……すまんがもう一度言ってくれぬか？」
「ハァ……ちゃんと決めてよ？」
「それは無論じゃ」

その日の夜。
妖力というものはなかなか集まらないものなんだね。
ここまで消費して初めて知ったよ。

閑話休題。

ついに私の名前が決まった。

「シナ？」

「当て字じゃが『詩菜』、息が長い……お主、能力使う時に息を止める癖があるじゃろ？」

「え？そうだった？」

「……」

「…ごめん、ぜんぜん気が付かなかった…ハハハ……」

うぅん、自覚してなかったけどそんな癖があったなんて…。

けど『詩菜』か…しな、シナ、詩菜……。

うん、いいんじゃないかな？

そう思うとなにやら体が温かくなった。

「体調良くなって来たんだけど…これは？」

「名は体を顕すと言うじゃろ？その効果じゃろ」

「ほ～……はい、はい…」

けど、逆になんか眠くなってきた。

身体が温まったからかな……？

……いかん、堕ちそうだ。

「……眠い」

「ほう！さぁさワシの寝所に来「誰が行くか！！」ぐおっ！？」

セクハラをしようとした天狗の顔に私が水を飲んでいたお椀を投げて、私は自分の部屋へ帰った。

奥さんにでも刺されちゃえ。

次の日。
私の名前が決まり、『詩菜』と呼ばれる事になってから初めての朝を迎えた日。
……うん、なんか色々と清々しい気分。
名前をつける事によりそのモノの本性・本質・本能が決まるとかどうたら……。
まぁそれによって妖力及び体調が回復したので、そういうこと（？）なんだろう。
体調もバッチリだし、はてさてどうしたものかな……。
…まぁ、とりあえず意味もなく天狗の集落をぶらついてみるとしよう。
体力が回復したのを実感したいし、一応住むことになったんだから色々と見て回ろう。

なかなかに活気もあり、普通に空を駆ける天狗や剣や盾、羽団扇を持った天狗がいなければそれこそ人間と遜色変わらないんじゃないかと思う程の妖怪の往来。
…まぁそれを言った瞬間に皆して私を襲ってくるかな？『人間等と比べるな！』とか言ってね。
そんな馬鹿な事はしないけどさ……。

「お前、天魔に勝ったんだって？」
「へェ！こんなお嬢ちゃんに負けたのかい！天魔も終わりってか！？」
「おうおう！こんなガキ！俺が一捻りすれば終わるぜ！？」
「「「ガハハハハ！！」」」

こういう類いの馬鹿はどうしたもんかな…。
……こりゃ、天狗の長も色々と苦労してんのかな…。
大男が三人、私を囲むようにして上から見下ろしている。
天狗の中でもこの三人は強いのか、誰もが見ない振りをして足早に此所から立ち去っていく。
…よくあるイジメ現場だね……。

「お嬢ちゃん…よくよくみたら可愛いじゃねぇか……」
「ガハハ！どうだ、おっちゃんたちと良いことしないかい？」

…昔はさ？寿命が短かったから結婚も早くて、十何歳で子供を産んだっていう話だよね……。
だけどさぁ……。

「…イヤらしい目付きで見てんじゃないよこのバカァ！！」

私は（元）男だっ！！

パチンッ！
「■■■■■！！？」

目の前にいた天狗の金的を血脈が途絶えろ位の気持ちで蹴り潰す。
衝撃を操っていないのは本気で潰そうと思っていないから。普通に蹴っても悶絶するぐらいなんだし。
元男としてね？…あの感覚はヤバイよね。
あぁなんて優しい私……そしてなんて生々しい感覚…能力使えば感じなかったものを……。

股間を押さえて蹲った所を顎を狙って思い切り殴る。
当然、脳天が思い切り揺れるように衝撃を操って。

顔が一瞬ブレ、その後白目と泡を噴いて倒れるチンピラ天狗A。
それを見て呆然とするチンピラBとC。
その隙にジャンプして天狗Bの頭を掴む。

「くらえ！『ショック！』」

天魔にやったときと同じ様に『心に衝撃を与えた』。
精神に多大な負荷をかけて気絶させる。
手を頭から離して地面に降り立つと同時に、後ろ向きに大の字で倒れる天狗B。
さて……残すは一人。

「君で最後の一人だよ？」
「はっ？……あ、あぁぁ！？ふざけやがって！！」

持っていた剣を出したよこの天狗…。
拳なら反射出来るけど斬撃は不可能だからなぁ……避けるしかないんだよね。
地面を蹴る衝撃を増幅して真横に身体を高速移動する、その着地の時に足にかかる衝撃を消し去り、もう一度地面を蹴る。尚且つ相手の剣を避けつつも近距離を保つ。
瞬間移動で剣を避ける。イメージ的にはどこぞの死神の瞬歩みたいな感じかな？

近くに居るのに当たらない事に怒った天狗の、大振りな剣が地面に刺さる。
まさに愚者の如く。特に早く抜こうと躍起になっているところがね、笑いを誘うよね。
…まぁ笑わないけど。

「ハイ、君の負け」
「ぺぶっ！？」

最後に頬を平手打ち（能力付き）して気絶で終了、っと！

はてさて、身体の怪我はほとんど完治しているのが、先程の喧嘩でわかった。
けど道端で大男が三人も転がっているのは、その…何？眼のやり場に困るていうか…なんていうか……。
…まぁ色々と迷惑なので、天魔にどうにかしてもらおうか。

「お主…身体は大丈夫なのか？」
「うん？まぁ大丈夫だね」
「…まぁ良い、身体が治ったのは良い事じゃし」

そう言うと倒れていた三人を運ぶよう手下の妖怪に命令した。
…能力が無いのに長になれたのは、身体能力が高いのと仲間が自然に付き従うオーラみたいなモノがあるからなんだろうなぁ……。
対峙した時のプレッシャーなんて凄かったし。
…よく勝てたな私……。

…そんなことを言うとこのエロ親爺は調子に乗りそうだから言わないけど。

手下にドナドナ運ばれていくチンピラ天狗ＡＢＣ。
哀愁漂うこの雰囲気はどうにかなんないかな……。

そうこうしている間に日も暮れ、宵闇が始まりかけている。
天魔の家に戻ろ。
戻ろうとしたところで天魔が空を駈けていくのを目撃する。
……そう言えば『鎌鼬』って空を飛べたよね？
風の状態ならまだしも、人間の時は飛べるのかな？
早速挑戦してみようか。夜まで時間もないし。

まずは『風』になる。
足から順に空気に溶けていく。身体は『体』の形を保ってはいないけど、意識すれば何かに触れることは出来る。
そのまま上昇……うん、感覚は多分覚えた。
空中で人化する。するとあらビックリ、人間が空中に浮いている！！

……人間の時で空を飛ぶのは無理なのかな…。
これ以上動いたら、空中の制御が出来ずに墜ちることが簡単に予想に出来る。
…風に戻って着地して歩いて帰ろ。
なんかもう違う意味で疲れた……。
これはもう…練習あるのみだね……。

天魔と出逢って一ヶ月。
天狗の集落からちょいと離れた場所にある林が、今現在私が住んでいる場所である。
どこかのアニメみたいな馬鹿でかい大木を能力を使って大穴を作り、そこから更に内側を削ってメルヘンチックな我が家を作った。
……訂正、作ってしまった。

…私自身が小さいから結構広く感じるけど、ここに天魔が来るともう狭くてとても窮屈になる。
…寂しいからってなんで来るのよ天魔……。
妻達がいるでしょ…。

閑話休題。
最近私は天狗に混じって『呪術』を習い始めた。
流石山伏の格好をしているからか修験道やらを習っている。
何の事はない単なる暇潰しと思って習い始めたんだけど、これがな

かなか面白い。
数学とか物理をもう一度習っている気分になる。いや、内容は物理法則なんてぶっちぎっているんだけどね。

「え～詩菜さん？ここの式はなんですかねぇ？」
「あ～、妖力を変換する式です」
「んじゃぁ、ここの次に火の式をいれると何の術が出来ますかねぇ？」
「えっと……『燐火（おにび）』？」
「そうですね～、まぁ要は発火の術と言われるモノになりますね～。んじゃ次は――」

…何処かで聴いた事のある独特な喋り方の先生の授業を受け、三日に一度は何故か寄る天魔と他愛もない話をし、のんびりと暮らす。
なんて平和な生活だ。

婿（？）と神々（前書き）

婿じゃないけど…婿じゃないんだけど！！

婿（？）と神々

「え～、これで最後の授業を終えますよ～。あとはあなた方の発想がぁ、新たな術を創っていくんですからねぇ～」

最後までこの喋り方を徹した先生だった。何なんだよ、その喋り方は。

さて、これで天狗と混じって生活をし始めて十年が経った。そしてこの十年の間に色々あった。

私が始めにブッ飛ばした天狗の三人が弟子にしてくれと頼みに来たり、天魔と天狗の集落を半壊させる程の喧嘩をしたり、始めて人間を殺しちゃったり、天魔にガチで襲われたり、反撃して天魔の妻達とボッコボコにしてやったり、酒を記憶がなくなるまで呑んでみたり、呪術及び能力と妖力・体術を鍛錬してみたり、他の妖怪をストレス解消につい吹っ飛ばしたりしていた。

……まさに縦横無尽の妖怪ライフ。

あれぇ？前世の私はもっと大人しい人間じゃなかったかなぁ？

…まぁ良いか、楽しいし。

「そろそろ行こうかねぇ……」

自宅で何の予定も無くごろごろしていた所を、これまた何の予定も無しに唐突に来た天魔とごくたまに会話を交わすぐらいのだらだらで何処か安心感があるような気がする時間。

この時代、娯楽など言葉すら生まれていないような状況みたいなので、単に私達は卓袱台を挟んで寝転がっているだけである。

…天魔の方は身体を曲げないと寝れないが。

閑話休題。

そんな時に私が唐突に言った言葉。要は私が旅をまた再開しようかな。という意味。

そんな聞いただけじゃ解らない言葉を、未だに私に対する熱が冷めないとの噂の天魔は、即座にどういった意図で私がその言葉を喋ったかを理解した。理解してくれた。

「……此処からまた旅に出るのか？」

「ん。色々見てみたいし」

「…そうか……」

「……私が言うのも何だけど、止めないの？」

「止めてもどうせ聞かぬじゃろ？」

「流石天魔、分かってるじゃん」

「何年付き合っておると思っとる」
「…まぁねぇ……」
「……」

暫しの沈黙。

私は十年も共にして、そして転生してからの始めての友人と断言出来るこの天魔には、とても感謝している。
もし私が転生前の記憶が無ければ、別にこいつと結婚も良いかな？とも想っている。
でも、ダメだ。
前の記憶が私を離さず、そして私もその記憶を忘れようとも思えない。
がんじがらめに縛られている『私』と『俺』は、どちらも優先出来ずに優柔不断という結果になり、結論の先送り・逃亡を繰り返している。
それでもこのままではいけない。というのはなんとなく分かっている、いや分かっている振りなだけかも知れない。
私は自分からも結論からも逃げて結局相手の決断に全て任せてる、卑怯者なんだ。

「…天魔ぁ」
「なんじゃ？」
「…私の事、どれだけ解る？」
「自由奔放唯我独尊、神出鬼没で一長一短が激しく、掴み所が無い、気分屋」
「……お見事」
「…それがどうかしたかの？」

「いやまぁ…その……私についての事」
「…お主について、とは？」
「……天魔ぁ」
「…なんじゃ？」
「まだ私に妻になって欲しい？」
「ゴホッゴホッ！？なんじゃいきなり！？」
「良いから、本音は？」
「……それは…まぁ、なって欲しいのう」
「年齢差凄いよ？」
「そんなもん関係ないじゃろ」
「私そもそも天狗じゃないよ？」
「知らんわそんなもん」
「……」
「…何なんじゃ先程から…？」
「…私元人間だよ？」
「……は？」
「更に言えば元男だよ？」
「…ちょっと待てぃ！？なんじゃそれは！？初耳じゃぞ！？」
「そりゃそうでしょ。私も始めて言うんだし」
「ええー……」
「ハハハ……さて、そんな事実を知った天魔君はそれでも私が好きでしょうか？」
「……お主はお主、前世は前世じゃろ。今のお主とは関係無い」
「……」
「…なんじゃその驚いた顔は…」
「……かっこいいね、天魔」
「フン！…で、何なんじゃいきなり？…もしかして本当に結婚してくれるのかの？」
「……どうしようかな…」
「え？本当？」

「…まだ『私』と『俺』は決断出来てない……だから…待ってて」
「……」
「本当に私達が納得出来る様な答えが見つかるまで」
「……そこまで言うのなら、ワシも納得出来る答えを見付けてこい。良いな？」
「…ん。わかった」

私は今、空をふよふよと飛んでいる。つまり天狗の集落を出て旅を再開したのだ。
風になり、風の吹く方向にそれこそ雲の如く流されている。
妖力を隠せば、よほど力のある妖怪でない限り滅多に見付からないし、簡単に人に近付けるって訳だ。
まぁ殺した事は有るけど、流石に人間を喰う訳にはいかない。
……とか言って結局人間を食べちゃったりしてね。
現に殺しちゃったし。

まぁなんやかんや言って私が人里に近付いて何をしているかというと、単に人助けである。
妖怪らしくないとは百も承知の事。その時の気分で私は動くからね～。

こうやってまぁ人里を襲おうとしている妖怪をぶん殴って吹っ飛ばしてる訳さ。

妖怪退治や陰陽師やらが人里を渡り歩き、路銀を貯めてまた次の村に渡る事が成立しているこの時代。その真似を私はしながら旅をしている。
妖怪の特徴（？）として私は真っ赤な眼を持ってるけどそこらは呪術で隠せば大丈夫だし。

「詩菜さん！村を困らす妖怪退治！ありがとぅごぜいやした！！」
「いえいえ、困った時は御互い様ですよ」
「へへへ……それで報酬なんですが…ほんとに食料品だけでよろしぃんですかい？お金は確かに辛いっちゃあ辛いんですがねぇ…」
「ええ、これだけあれば充分ですから」
「妖怪退治までさせて頂いたのに…本当にすまんのぅ……こんな小さいのに」
「ほんとになぁ、こんなめんこいのにあんだけの馬鹿力だもんなぁ」
「しかも一人で旅なんて……かわいさげに…」
「いやぁそれにしてもかわえぇ容姿じゃのぅ」

…うるせっ！！
気にしてんだから触らないでくれよぉ……。

閑話休題。

会話に出てきた金銭の問題は確かに旅には必要な物だ。宿とか食事代とかね。
お金は妖怪が意外と持っているんだよねぇ。
カラスの光り物を集める習性みたいなものなのかね？
まぁ妖怪なのに妖怪退治をしてるから悪評が出始めてるし（妖怪の間で）、そろそろここも潮時かね。

まぁ次の土地で妖怪退治は一旦止めてみるか。
これまた気分で、ね。

んで、移動した先で妖怪の奇襲に遭ったから逆に捕まえて事情聴取中。

……いや、そんな大したもんでも無いけど…。

「守矢の神社？」

「ああ、あそこにゃえれぇ神様が二柱もいんだよ」

「片方はミシャクジって言って呪ってくるんだ。もう片方は軍神でな、俺等みたいな妖怪なんて叶いっこないんだ」

「ふぅん…それはまた面白そうだね」

「……アンタでも気ぃつけた方が良いぜ？これまで人間を襲いに行こうとした妖怪が何匹も殺られてんだ。今じゃ境界に入らないで周りをぐるぐる囲ってる奴等ばっかりさ」

「…ま、そこらはなんとかするよ。ほら酒呑め酒を」

「おう、ありがとよ……」

「いやぁ人間かと思って近付いたら妖怪だしよぉ？しかもなんか奢られちゃって悪いねぇ！」

「あー、すまねぇ。こいつ酔ってやがる」

「いやいや、私も情報教えて貰ったし？持ちつ持たれつさ」

「……あそこに入るつもりか？」

「まぁね」

「…アンタなら大丈夫かもわからねぇが…今じゃ妖怪も滅多に境界内にはいんねぇし……案外簡単に襲えるかもな」

「ハハハ…まぁ自分の力が通用しなかったらすぐさま逃げるよ」
「あれだけおれらをボコった奴が良く言うよなぁ！？姿は可愛い人間の女の子の癖によぉ！？ヒック！」
「……あー、すまねぇ。こいつ話聞いてねぇな…今すぐ潰すから」
「いやいや、大丈夫。私が潰すから」
「…え？」
「おらおら呑めよ呑んでみろよぉ！え？無理？諦めんなよぉ！！どうしてそこで諦めるんだ！ダメダメダメ！！行けるって！諦めなければ妖怪も頑張れる！！今こそ！ネバーギブアップ！！オラ呑めさぁ呑めよし呑めイッキ！イッキ！ん、無いの？よし分かった待ってて、今から近くの人里から盗ってくる」
「……なんだこりゃ…イヤ、なんだこいつ」

さて、襲ってきた妖怪を逆に熱血させて情報をゲット。
え？修造？気にしないで欲しい。前世の友人の影響だよ。

妖怪も元は人間の心から生まれたような物だしね、仲良くなればこっちのもんって訳さ。
朝まで宴会みたいな真似をして、朝が来ると妖怪達は去ってった。
潰れた妖怪を背負って。
……アイツやけに酒に強いな。普通に走って帰ってったよ…。
私もちょっと頭がふらついて今日一日はあまり無理しないで行こうかと思っているのに…。
…酒に強いのは鬼だけじゃないのか？もしかして妖怪という種族全体が酒に強いとか？
潰れた横の奴はたまたま弱かっただけとか……ありえそうだなぁ。

まぁ、それはさておき。

いつもの如く、人助けしながら潜入と行きますかね。
まずは根を張って～…って待て私。
……いつからこんなどっかの詐欺師みたいな感じに私はなったんだ？あれぇ？
あんな枯れた木みたいにはなりたくないぞ。

《ｓｉｄｅ　神奈子》

それは普通に普通の日だった。
人々は私等の社に御詣りして、それが私等に出来ることなら願い事を叶えるという事を繰り返し信仰心を集めている。信仰心が私等神

の力の源だからね。

ここいらには既に私等の名前が広がっているから、妖怪が襲って来るなんてもうほとんど稀だった。
だからアイツが来たときも何処か緊張感が足りてなかったかね、と今でも思っている。
それは諏訪子とも仲良くなり始め、順風満帆とは言えないかも知れないけど、それなりに上手いことやってきた所だった。

「ねえ～、神奈子？」
「なんだい、いきなり？」
「最近人間と妖怪の間で全く同じ評判の『詩菜』って妖怪、知ってるでしょ？」
「詩菜…ねぇ……」

同じ評判。
人間を襲う妖怪を人間を護るように吹っ飛ばし人間の味方をするかと思えば、妖怪に効率の良い奇襲方法を教え今度は妖怪の一部として人間を襲う、謎の人物。
妖怪にしては人間を喰おうともしないし、人間にしては身体能力がずば抜け過ぎている。
しかもある程度働くとその土地から忽然と姿を消すという何がやりたいのか全く以て理解しがたい。
噂は人や妖怪・果てには土着神までがこの話を膨らませ、私等がいるこの諏訪湖まで噂が届いている程だ。
……こちとら神様だけど、そんな自分の事が知れ渡っちまうと妖怪として大丈夫なのかねぇ……？
っと、いけないいけない。諏訪子と話してたんだっけね。

「…ああ、人間も助けるし妖怪も助けるっていう変わった妖怪の事だろう？見たこと無いけど、可愛らしい女の子って話じゃなかったかい？」
「う～ん。そいつがさぁ……」
「……？…そいつが、どうかしたのかい？」
「…その詩菜っぽいのが人々と一緒に御詣りしに来てる」
「……はいぃ？」

言われて見てみれば社の入口付近に、境界の外に住んでいた筈の老夫婦が女の子と一緒に社を眺めている。
確か老夫婦は私等の庇護が得られる境界内に入りたがっていたが、途中の険しい山道や妖怪などを恐れ年老いた自分等の身体では到底無理だ、との事で仕方無く危険な山奥に住んでいた筈。
恐らく隣の見たことがない女の子が彼等を連れてきたのだろう。
成る程、確かにその子は可愛らしい女の子だ。身長は諏訪子とほとんど変わらないし、髪は黒くて首辺りで切られている。
異様なのは、眼が真っ赤な事だが……恐らく妖術かなにかで人を騙しているのだろう。
妖力も上手いこと抑えているのか、よーく注視しないと見えない。
上手いこと隠したもんだ。

「…どう思う？」
「……接触してみないとよく分からないねぇ…」
「だよね…じゃあ……」

初…弾幕？（前書き）

戦闘描写難しい…。

初…弾幕？

フワハハハハ！！あっさり入っちゃった！
あー……オーケー、ちょっと冷静になろう。

目の前には、此処等一帯の信仰を集めている守矢の神社。神々しい気配が物凄い。

神社を眺めてボーッとしていた私とその護衛をしていた老夫婦。その老夫婦が御礼を言ってきた。
一瞬何の事かわからなかったがすぐさま理解し、話を合わせる。

「詩菜さん、有り難う御座います」
「はい？……あ、いえ！私もここに来てみたかった訳ですし、そんな感謝されても」
「いえいえ、そんなに謙虚になされても私等を救ってくださったのは貴女ですから」
「は、はぁ」

「そうだね…人の感謝はいらなくても受け取った方が気が楽になるね」

老夫婦とは違う声が聴こえた。
新たな声の内容はのんびりしたものだったけど、その声が聴こえた瞬間、自分が消し潰されたかと思う程の重圧。
それでも瞬時に頭上から降ってきた柱を避けることが出来たのは、天魔との特訓（？）の賜物だろう。

驚いている老夫婦を抱えてすぐさまその場から逃れる。
避ける事に関しては私の得意分野だよ、多分。

「おお、オンバシラを避けるかい。それなりに速く打ったんだけどねえ」

馬鹿でかい柱……いや、声の言う通りにするなら、オンバシラ？が地面に着弾。巻き上がった砂ぼこりが酷い。
誰よ、こんなとんでもないの打ったのは……まぁ予想はついてるけどさ…。
砂ぼこりが晴れ、神々しい気配がする方へ向く。
空中に佇んでいたのはやはり予想通りの御方。

「『八坂　神奈子』…」

「おや、既に私の事も調べてあるのかい？じゃあ諏訪子の事も調べてあるのかい？」

諏訪子……『洩矢　諏訪子』。
この二柱がこの王国を護る神様という訳だ。
片方が何故来ないのか解らないけど、こっちとしては助かる。

さて、どうしたものかなぁ……。

戦闘はイヤなんだけど自分は妖怪だし…。
仲良くは、まぁ出来ないもんかねぇ……。

…ああ！その前に言うことあった。

「ねぇ、そこの神様？」
「なんだい？妖怪『詩菜』よ？」

ありゃ、名前がここまで伝わってるのか。
参ったな……まぁいいか。

「妖怪の私を神様が退治しようとするのは分かります。けどその傍に居ただけの人間を巻き込むのは、神様としてよろしいんですか？」
「……噂はどうやら本当みたいだね」

噂。って……。
…知らん、もう知らん！！（ヤケクソ）

「そうだね…それに関しては此方のやり方に問題があった、すまない」

……神様って意外と普通に謝るんだね…。
もっと人間とか、なめてると思ってたよ。

「だけど、神が治める地にウロウロ入ってきた妖怪。それを逃すのは神様としてもねえ……駄目なんだよ！！」
「ッと！！」

色とりどりの弾幕を私に向けて放ってきた。
神の力だから…単に『神力』か？神力で構成されたらしき弾幕はどれもこれもがかなりの威力を持っているのが分かる。
弾幕をこの眼で始めて見たよ。怖っ！！
なんかもう眼に優しくない！！痛い！チカチカする！
こんな泣き言を言っても弾幕は途絶えない訳であって、ね……くそぅ、泣きたくなってきたじゃないか…。

「ほらほら！どうしたんだい！？アンタの力はこんなもんかい！？」
「高評価どもっ！！っと！」

弾幕なんて撃ったことないし！被弾しないように自分の位置を考えながら、相手にどう被弾させるかなんて考えられる方がおかしいって！！

微妙に攻撃の手が緩くなったので、とりあえず天魔の（真似っこ）弾幕。
鎌鼬の爪を伸ばして空に単に振る。その際の衝撃波を刃にして増幅、射出！！

「おおっと！？」

避けられた。けれど刃の端にでも引っ掛かったのか服が裂けた。

「…面白い技を使うじゃないかい」
「ハハハ……それはどうもっ！！」

親方ぁ！！空からでっかいオンバシラが何十本も！？
いやいやいやいや！？無理でしょ！？

「押し潰されな！！」
「だが断る！！」

ジョジョってる場合じゃない！！
考えろ。動きながら考えろ。どうすれば良い？

降ってきたオンバシラは神力が通っている。地面に落ちた後なら弱くなって触れない事もない。
…手が大火傷するだろうけど、そんな暢気な事も言ってられないし。
私は一応天狗から貰った普通の下駄を履いているから、まぁ直に触れてる訳じゃないから足場にも出来る筈。
あのオンバシラは多分鎌鼬の爪では斬れない。寧ろ爪が神力で折れるね。
老夫婦はとっくの昔に逃げたし、いつの間にか辺りに人がいない拓けた場所まで移動しちゃってる。つまり人目は気にしなくて良い。
そして私は弾幕が撃てない！

さて、これらの条件を考えて……。
…考えて…。
……考えてって云うか……無理じゃね？
そもそも攻撃の弾幕モドキすら集中しないと出せない辺りが終わってる。

あ～……チクショウ、負けるのかぁ…。
ならせめて…突攻でもしますかねぇ！！

オンバシラを登る。天まで届こうとしているかのようなオンバシラも、必ず終わりがある、筈！
その間も弾幕は絶えず私を狙って降り注いでいる。
けれど足場なら充分にある。

「ちょこまかと逃げるんじゃないよ！」
「んな無茶な！？っと！」

ようやく到着。雲の上にまで来ちゃったし。
ありえん…普通ここまで来る？

「ここでやろうってのかい？」

八坂神奈子も飛んできた。
良いねぇ。人の形で飛べるの……。

神風特攻隊の前に、最終確認及び交渉だ。

「ハハ…私じゃ貴女に何をどうやっても勝てませんよ」
「…妖怪らしくないねえ」
「良く言われます。で、ですね？要は妖怪が入ってきてそれを退治しなかった。というのが貴女方の問題点なのでしょう？」
「…まあそうだね。こうやって民を護るのが私等の仕事だしね……
…なんだい？人は襲わないから助けてくれ、ってかい？」
「……まぁ、端的に言えばそうです」
「…ふうん？アンタはなかなか面白そうだから、私としてもそれな

りに興味があるんだけど……」

おっとぉ？

意外なところで恋愛フラグですかぃ？

「悪いね、神としてその願いは叶えられない」

「ハハハ、まぁ信仰している民どころかその民を襲う妖怪ですしねぇ」

「…そういう事なんだけど、言われると調子が狂うねぇ……アンタ、本当に妖怪かい？人間臭すぎるよ？」

「私は妖怪『鎌鼬』ですよ」

……情報屋でもないからね？

…なんでこんな時にイザヤ君思い出すかな……。

「へえ鎌鼬。さっきの刃がそうなのかい？」

「…まぁそうですね。こう爪を伸ばして」

「じゃあその爪でオンバシラを斬ったり出来るのかい？」

「……いやぁ、それは流石に教えませんよ」

……今、明らかに和やかムードだったよね……？

…この人本当に神様か？

「…そうだね。それもそうか」

……神様じゃなくね？

もう神奈子で呼び捨てでも良くない？

まぁお喋りはここまでして。
この戦いも終わらすとしよう。

向こうもやる気だし。

「アンタはさっき私に勝てないと言った。なのにまだ戦おうとしている」
「……起死回生の一手、というものですよ。これが巧く行けば逃がさせて貰いますよ？」
「…ふふ。ならその一手！見事撃ち破ってみせるよ！！」

一斉に頭上から落ちてくる数々のオンバシラ。それと同時に神奈子の手から放たれる綺麗な弾幕。
私が狙っていたのはその落ちてくる『オンバシラ』である。
オンバシラは私の爪では斬れないが元々の材質は『木材』の筈。木材なら集中して出した衝撃刃で『加工』が出来る。
幸いさっきの和やかムードの途中に術式は完成出来たし。

「行けっ！！『ガルーラ』！」

…パクったよ。ええパクりましたよ！！

閑話休題。にしとこう。
私が出せる最高の衝撃属性魔法がガルーラである。
ガルーラに直撃したオンバシラは私の想像した通りに木材を加工、見事なバットに早変わりした。
ジャンプして弾幕を避け、落ちてくるオンバシラを足場にして、未だに神力が残っているバットを持つ。
手のひらから肉の焼ける音がするがそれは今どうでもいい。

まずは一番近くにあったオンバシラ…！！

「いっけえぇーー！！」

ホームランバット。
スマッシュ攻撃によって相手をかなり吹っ飛ばす。カキーン！となると気分が良くなる。されると腹立つ。
…単なるバットで私が衝撃を操っているからこうなってるだけだけどね。
オラオラオラ！！弾幕も吹っ飛ばしてやるぜぇ！！
メジャーリーガーなんてなんぼのもんじゃー！！

幾つもあった弾幕やオンバシラも全て吹っ飛ばし、これが最後のオンバシラ。
見れば神奈子は唖然とした顔でこちらを見ている。
標的、神奈子！衝撃全反射のオンバシラを喰ら「ボキッ！」……
ボキッ？

……えっ？
バットをみれば途中で真っ二つに折れている。手のひらは妖力によって完治している。
フム、恐らく溜めてあった神力が無くなって、それに相対して耐久度も無くなってんだろう。
神力も無くなったから手のひらも焼けていない、と。

……あ～、ぶつけたオンバシラとかは衝撃で吹っ飛ばしたけど、こっちは衝撃無効にしてなかったっけ……。

「ありゃ～…やっぱ死んじゃうのかぁ…」

ピタリと脳天に止まったオンバシラ、落ちてくる衝撃は防いだけれどオンバシラからでる神力によって頭が痺れ、意識が暗転していく。神様にやられた妖怪はここで息絶えるって訳だ。

……私の転生人生も…ここで終了か…。

…総合で……結局４０年しか生きて…ないから…まぁ普通の人生…と変わらない…のか？ハハ……ハ…。

《ｓｉｄｅ　神奈子》

……なんだい、ありゃ？

私の目の前には、オンバシラや私が放った弾幕をバカスカ打ってい

る詩菜がいる。
オンバシラを鎌か何かで加工して筒状の木材を造り、その棒で攻撃を全て打ち返している。

私はその光景に唖然としてしまい、攻撃を止めてしまった。
少なくともこの光景に驚きはしても攻撃を止め、ましてや移動もしないというのは戦闘中ではありえない行為なのに。

最後のオンバシラ。他の弾幕等は全て吹っ飛ばされている。
私が呆然としている隙を狙ったのだろう。明らかに此方に向けて打とうとしていた。
少なくともオンバシラが私に直撃したとしても死にはしない。
が、如何せん距離が近いし打ち返した後の速度もかなりの速さになっているから、まぁ重傷にはなるだろうね。

ありゃ～…流石の起死回生の一手だ。負けたね。
詩菜の実力は本当だったって訳かい…。

…そんな諦めに似たような気持ちで、詩菜がオンバシラを打とうとしているのを見ていた。
それは、

ボキッ！
「「…えっ？」」

詩菜が持っていた棒が折れた事によって終わった。それはもう、見

事に真っ二つに。
こうなるともうオンバシラは打てない。
打とうとしたオンバシラはもう詩菜の頭上に迫っている。

本当に諦観していたのは、向こうの方だった。

「ありゃ～…やっぱ死んじゃうのかぁ…」

それなりの速度で落ちてきたオンバシラは詩菜の頭の上に落ち、そこで止まった。
潰されずにその場で静止したのだ。
私は、彼女が妖力か何かでオンバシラを止めたのだと思った。そしてこの妖怪はどれだけの力を持っているのか、とも思った。
これほどの妖怪が本当に人々の敵として、妖怪として活動すれば私達は人を護る存在として、それを止められるのだろうか？
いや、止めなければいけないのだ。私達が。
こいつが本当に人間の立場にも立っていて良かったよ、本当に…。

いや、それにしても何故アイツは動かない？
…神力が出ているオンバシラをそんな長時間頭に載せているのは何故だ？

「…おい……詩菜？」
「多分気絶してるよ？コイツ」

声に反応して後ろに振り向くと諏訪子が飛んできていた。

「…なんだ、諏訪子かい……って、え?気絶?」
「うん」

近付いて頭のオンバシラを消すとバッタリと倒れた。息も普通にしている。
……なんて人騒がせな奴。

「…さて、帰ろっか。世話は神奈子がしなよ~」
「はい?え?いや!なんで!?」
「ん?気に入ったんじゃないの?さっき見てた時、にやけてたけど」
「ッ!?」
「まぁ私は気にしないからね~?」
「ううるさいっ!!」

…まったくなんでこうなったんだか……。

妖怪と神様

目が覚める。
…『目が覚める』って何かおかしくない？
ちゃんと状況を言葉にするんなら『目蓋が開く』なんじゃないかな？

まぁどうでもいい事か…。
ていうかまたもや知らない天…井か？……いや、知ってる…かな？
見た事があるけど…何処だここ？天魔の家じゃないし私の家でもないし……戦っていた神奈子とかの気配もしない…。
…とりあえず動いてみるか。

かかっていた布団から出て、ベッドから身体を起こす。障子を通して日光が入ってくる。部屋の中央にある炬燵を避けて、襖を開き階段を降りる。急な階段を降りて、ガラス戸を開いて台所に直行。レバーを上げてコップに不味い水道水を注ぐ。不味い水を飲んでみたけど、やはり飲めたもんじゃないので、足元に置いてあったペットボトルの清涼飲料水を再度コップに注ぎ、口直しに飲み干す。重たいペットボトルを足元に戻してコップを机に置き、階段の前にある廊下を通って、洗面所にて顔を洗う。いつも通りに微妙に湿ったタオルで顔を拭き、そこでようやく鏡で自分の顔を見る。
可愛らしい女の子の顔。２０年付き合ってきた顔だ。そして今でも不意討ちだと『萌え！』とか思ってしまう、忌々しいっちゃあ忌々しい顔立ち。

……なんだ…転生先で死んだから戻ってきたのかなと思ったけど、夢か…。
この姿だったらこの鏡台に背丈が届く筈がないし…転生前のパジャ

マが着物の筈がないし。

ここが夢の中という事は分かった。私の生前の、とても懐かしい家だ。

転生してから殆ど思い出すこともあんまり無かったけど、俺の家だ。

って事は、私は生きているのか？夢を見るって事は。

そう思った所で視界が暗くなる。

…ああ……夢から目覚めるのか。懐かしの家から出ていくのか…。

今度こそ、『目が覚める』のか…な……？

今度こそ『知らない天井』だ。

付近に神力の気配……というか、枕元に神奈子が、

明らかに私の頭の濡れた布を変えようとしている神奈子が、いた。

「……」
「……」
「……えっと、おはよう…ございます……？」
「……え？あ、ああ！…おはよ…う……？」
「「……」」

気まずっ！？
なんだこの気まずさ！？
誰か！誰かこの雰囲気ぶち壊して！！

「…何止まっちゃってんだか……何処の新婚夫婦だよ」

そんなぶち壊し方は止めて欲しいなぁ！？

「うえっ！？諏訪子！いつからそこに！？」
「さっきから。朝御飯出来たから呼ぼうと来てみたらこれだもん…
……ま、詩菜も起きたみたいだし？キミも一緒に食べなよ？」
「……え！？私も！？」
「朝食は一日の基本ってね。それに大人数で食べた方が美味しいよ
？」
「は、はぁ…」
「ほら！立って立って！神奈子も！！」
「うわわっ分かった分かった！分かったから押すな！」

……どういうこっちゃ？
どういう事、って言うか……どういう事になってんの？
え？…じゃああの二柱がいるって事は…ここは守矢の神社？…妖怪連れ込んで、信仰に影響無いの？
いや、私が妖怪とバレなきゃ良いのか？
……なんでそんなわざわざ危ない橋を渡ろうとしてるのさ？

…解らない。
解らないけど、まぁ大人数で食べる食事というのは……まぁ、悪くないかな。

「「いただきます」」
「……いただきます」

眼前に広がる食卓。まぁ良くある風景だ。
……けどさ、そんな家庭に妖怪が混ざって良いの？
食べるけどさ。

……あ、うまい。
生で食べる野外の食事よりは格段に美味しいね。

二柱＋少女（？）食事中……。

「「「ごちそうさまでした」」」

あ～…久し振りにこんなに食べた気がするなぁ……。
…まぁ、こんなゆったりしている場合じゃないと思うし……なんでこうなったか訊きましょうかね。

「あの…なんで私を助けたんですか？」
「うん？」
「…ですから、何故こんな妖怪を神様は助けたのですか？本来ならばあそこで八坂様は「神奈子でいいよ」…神奈子様は私を殺すべきだったのでは？」
「…あ～……」

神奈子『様』は微妙に違和感があるなぁ…洩矢様？諏訪子様？は無いんだけど……あれか？神様らしく無いっていう印象がついちゃってるから？
まぁ……閑話休題。

「……いや、まぁ色々あ「神奈子がアンタの事を気に入ったんだよ」諏訪子！？」
「……ハイ？」

オイちょっと待てぇ！！
元男だからと言ってそれもどうかと思うぞ！？
…いや、でもあんな事を天魔に言っちゃったし……え？何！？約

束は守れとかって奴!?
そんなハイリスクな物事だったのあれ!?
誰だよ私を転生させてしかも幼女なんかにした奴!!
…ええ～…転生してまさかの同性愛?いやでも……あれ?結局どっちにしても同性愛……か?

「……（オーバーヒート中）」
「…止まっちゃった……なんか湯気出てない?」
「諏訪子があんな事を言うから……」
「いやぁ…こんなに衝撃受けるとは思わなくてさ……耳からも蒸気出てない?ねぇ?」
「んじゃ私は見回りに行ってくるから!あとよろしくっ!!」
「あ!こら!神奈子逃げるな!!…逃げちゃったし……って!なんかもう沸騰してない!?」
「ふぇ?」　ピューッ!!
「ふぇじゃないから!?頭冷やして!」
「いやいや、私は冷静だよ。ここはとりあえず神奈子の様子を見ていて、結果次第で洩矢様に報告して許可が出てから行動に移して…」
「駄目だコイツ!?ていうか私と神奈子で扱いの差が普通に言葉に出てるし!?私も諏訪子でいいから!!全然冷静になれてないじゃん!?」
「……え?」

「なんか凄い驚かれた顔になられた！？」

閑話休題。

落ち着こう私。もっとＣＯＯＬに行こう、ＣＯＯＬに……ふぅ。

「とりあえず私はここに住め……いや、住んでもよろしいんですか？」

「…さっきの口調が素なら、素の方で良いよ」

「あ、良いの？」

「変わり身早っ！？」

堅苦しい言葉は時に人生に於いては必要不可欠だけど、実際私はそんな飾りだけみたいな言葉は嫌いだ。

…まぁ飾りかどうかは本人によるだろうけどね。

「んまぁそんな事はどうでもいいのさ。要は神奈子が気に入ったからここに居て欲しい、と？」

…どう足掻いてもやっぱあっちの方に頭が流れていくんだけど……。

……うん。気にしない方が精神的に良いな。

「どうでもいい、って……まぁ神奈子が、ねぇ…」
「まぁ良いよ？暇だし？…何か面白い物があれば」
「面白い物？」
「例えば行事とかに使われる神力がこもった道具類とか、神力による術式とか」

研究してみたいんだよね。そういうのに触れる体質、というか妖怪にせっかくなれたんだし？

「……そういうのは下手に妖怪が触ると式が壊れるからなぁ」
「あ、そっか」
「まぁ術式位なら教える事も出来るけど……その神じゃないと…ねぇ？」
「神力が無いとダメ、って事かぁ……」

当たり前か。霊力の術式を使う妖怪退治屋が居たけど、妖力の術式で真似なんて出来なかったし。

「そりゃあ…ん？」
「？…どうかした？」

何？なんでそんな私を注視してるの？さっきの食事が頬っぺたに付いてるとか？
なんだよそれは、早く言ってよ……何処？いくら触っても何処にも無いけど？

「……詩菜」
「ねぇ何処にあるの？」
「え？…うーん、詩菜が通った集落沿いだと思うけど…」

「…え？顔じゃないの？」
「『カオ』？ってどこ？」
「……ごめん、何の話を今してるの？」
「…神力の話でしょ？」
「私の顔は？」
「え？……いや普通じゃない？」
「…普通なの？」
「……じゃあ、可愛らしい」
「じゃあ、って……あれ？容姿の話？」
「あれ？違うの？」
「いや、さっきから私の顔見てたから」
「ん。いや見てたのは確かだけど、私が見てたのは詩菜の神力の方」
「ああ、私の神力……へ？」

私の『神力』？
妖怪なのに？生まれて２０年の若造に？

「物凄くちっちゃいけどあるみたいだね」
「……妖怪だよ？私は？」
「信仰されれば何でも神になるよ？」

いくら何でもそれは暴論過ぎない？
まぁどうやら私に神力があるのは本当のようで、意識すればあっさりと見つかった。
……本当にちょびっとだけあった。

「…多分詩菜が今まで助けた人々の信仰じゃないかな」
「え？妖怪なのに信仰が力になるの？」
「そりゃなるよ。妖怪も生きてるんだし」

生きていると言ってもいいのか？妖怪は？
吸血鬼とかは生きてもないし、死んでもないんじゃなかったっけ？
……まぁ、今は生まれてすらないだろうけどね。

「ま、教えるにしたってこっちにも準備ってのがあるからね～。暫くはここの地理でも頭に詰め込めば？」
「…は～い」

こんな感じに（？）私は此処に住むことになったのだ。
……というか天魔の所に住み始めた時もそうだったけど、新しい土地に来ると初めて知る事が多くてビックリだね。
…展開もね。

ちょいのほほん気分でゆったり。

その日の夕食。
私がこの神社にお邪魔することを関係者に伝え『神奈子様諏訪子様が仰るのなら…』と警戒感バリバリだなぁと呑気に思いつつ、巫女的な役職の人から疑惑の眼差しと一緒に来る夕御飯を、神奈子・諏訪子と共にパクつく。
うむ、やはり美味い。料理もちゃんとやってみようかね？

「それでなんだい？詩菜も神でした、って訳かい？」

食事が終わり、私と話したことをその場に居なかった神奈子に話している諏訪子…様。
……あ～…慣れないなぁ…。

「物凄くちっちゃいけど神力があるから、まぁそうみたいだね」
「ふうん…妖怪なのにねえ……」
「それは私の台詞だよ……神力って…」
「……いつの間にこんな気さくになったんだい？」
「これが彼女の素の口調だから。同じ位置にいるんだし別にいいで

しょ？」

…位置、って……ああ『神様』っていう位か。
…随分と私はランクアップしたもんだ。

「…まあ楽に話せる相手は嬉しいねえ」
「でしょ？」

……いや、神様がそんなので良いの？
というか戻した方がいっそのこと楽なような……？

「……あの…慣れてないから戻しても良いですか？」
「「駄目だ」」
「声を揃えられて否定された！？」
「ハイハイ、就寝時間だよ。寝よ寝よ！」
「詩菜はあの部屋だからね？今日起きた時に居た部屋」
「は、はぁ…？分かりました……」

「さて、これより神力による術を教えるよ～」
「ワ～、パチパチ～」

数日後、とある神社の部屋内にて。
暇そうな諏訪子…を捕まえて神力の授業をお願いした所あっさりOKしてくれた。
いい人、もとい神様だ。

「まずは～、そうだねぇ……神力はどういう物だと思う？」
「神力はどういう物か、ですか？……え～と、信仰が集まって結晶化したような感じ？」
「まぁそんな感じかな？信仰が私たちの存在を保ってくれるし、力になってくれるのさ」
「ふむふむ」
「私たちは人々に信仰されて神力がついただけ。元々はそんな妖怪と変わらないのさ」
「ふむふ……え？」
「ただ元となった妖怪が人々から忘れられて、神力しか私たちを構成する物が無いだけ」
「……驚愕の事実なんですけど」
「ま～ね～、っと神力から離れちゃったか。話戻すよ」

……続きが聴いてみたい…。
けどまぁ、私が頼んだことが元々の話だし…訊こうとするのも野暮って物かな？

「神力の起源みたいな事が解った所でじゃあ実際に使ってみよう！って感じなんだけど……量が少なすぎなんだよねぇ…」

「言われてようやく気付くような量ですから……」
「また口調戻ってるよ？…まぁ私が教えてるから…良いか」

実験出来るような量でもないし、妖力とかと違ってまた信仰されないと神力は集まらないと来たもんだ。
そのぶん使用すれば妖力霊力等とは比べられない程の威力・効果を発揮する…らしい。

「諏訪子せんせー！なら術式を教えてくださぁーい！！」
「あ～、術式ね。ハイハイ、簡単に言うとね？…無い！！」

……ハァ！？
え、えええぇえぇぇ？！！

「…そ、それはどういう事なんで御座いませうか？」
「…だれ？……まぁつまり、信仰が神力の元って言うことを話したよね」
「じゃあその信仰とは何か？」
「人々が私たちに望んでいる事、願い事、御祈り、祈祷、願掛け、崇め敬い奉る」
「そういう願いが信仰となり、信仰対象である私たちに信仰、神力が供給される。『願う』ってことは『信用』してるってことだしね」
「信仰を供給された私たちはその神力を使い、人々の願いを叶える」
「叶えられた人々は信仰対象を更に敬い信ずる。そして更に新たな願い事をする」
「願い事が信仰に、信仰が神力に、神力が神様に」
「この世は上手いこと回転してるって訳さ」
「ちなみに妖怪からも信仰を集めることはできるけど、その場合は

尊敬…まぁ『畏怖』に近いのかな？畏怖を集めても神力にはならずに、妖力になる」

「人間の恐怖心から生まれた妖怪。その妖怪が何かに畏怖を覚えれば、その何かに従順してしまう」

「従順された何かは妖怪から力をもらい、さらに強大になる。困ったもんだよ……」

「……諏訪子せんせー、話がかなり離れてまーす」

「おっと…ええっと？術式が無い理由だっけ」

「神力及び信仰の元は人々が人間じゃ無いものに対して『願ったこと』」

「願い事を叶えるには、その人の思うことをそのまま現実に転写してやればいい」

「想像が力になったのなら、その力も想像力次第であらゆる物事に影響を与える事が出来る」

「……要はイメージって事？」

「いめーじ？ってなに？」

「あ、いや！！そのっえ～と……頭の中の景色？をそのまま現実に顕せばいい。って事なんですか？」

「んん～、まぁそんな感じかな？…願いなんて、みんな曖昧なものじゃん？」

「……いや、一概にそうは言えない、かと…？」

なんでそんないきなり暗い話（？）になるのさ……。

「…まっ、今は試すことができないけどさ。溜まったら使ってみよ？感覚、というか使い方は多分それが一番早く分かると思うし」

「はあ……まぁ頑張ってみます」

「諏訪子先生の授業、終わりっ！！」
「…なんやかんやでその呼び名、気に入ったの？」

まぁ……まずは神力を溜めないとね。
神力を溜めるには諏訪子先生の解説通り、信仰を集めなければならない。
信仰は対象の願いを叶えるか畏怖を集めなければならない。

……いつも通り妖怪と人間の中間で、頑張っていれば良いかな…？
あ、でも妖怪の立場に立とうとすると必然的に神奈子達と戦う事になるのか。
…それは、イヤだな。

んじゃ妖怪が人間を護っていきますか。

満月の夜。
妖怪になってから、という訳でも無いけど私は月を見るのが好きだ。
月の光で本を読もうとしたけど、やっぱり光が足りなくて眼を悪くした。というエピソードがある程だ。
…だから何という訳でも無いんだけどね。

まぁ要は、神社の屋根に登って『月見酒』…をしようとしている。

「晴れてるから綺麗だねー！」
「月光で星が見えない程だからねえ」
「……あれ？これ御神酒じゃない？普通に呑んじゃったけど…」
「身体に変化無いんだったら大丈夫だよー」
「……どうだい？」
「大丈夫だ。問題ない」
「そりゃ良かった。なら…ほら、呑んだ呑んだ！！」

ネタが通用しない！！
……当たり前か。

「うぃー…かーなーこー？」
「うわっどんだけ呑んだのさ！？」
「あたまがグールグル回るーアハハハ！！」
「ていっ」　当て身（衝撃操作＋）
「ん〝にゃ！？」

バタリ……ズルズルッ！

「諏訪子が屋根を滑り落ちていく！？」
「屋根でいきなり気絶させるんじゃないよっ！？ほいっ、と！！」

落下寸前の諏訪子をキャッチした神奈子。
……いやぁ、ここが屋根だって忘れてたよ。

「……降りて縁側で呑もうか」
「…そうだね…諏訪子も寝かせて、静かに呑み直そうかね……」

縁側にて。
諏訪子は後ろの部屋で既に就寝…という事になっている。
私と神奈子はのんびり月見酒を続行中。
諏訪子はペース配分が間違ってたんだよ……。

閑話休題。
月を見ながら、酒をちびちび呑む。風情だね～。

「そういえば詩菜はなんで私達の所に来たんだい？」
「ん～、別に理由は無いよ？単に旅の途中で来ただけだからねぇ」
「無いのかい！？」
「…そんなに驚く事？」
「……呆れた。アンタもしかしたら私らに殺されてたかも知れないんだよ？」
「うん。今回で自分は弱いって痛感したよ」
「……旅は止めないんだね」
「私の生きる目的みたいなものだからね」
「生きる目的？」
「…ん～何て言うか……『自分探し』？」

「アンタはここに居るじゃないか？」
「いや、そうじゃなくて……」
「？……まぁ探し物が見つかると良いね」
「ん、ありがと」
「……」
「…ん？もうそんなに酔ったの？赤いよ？」
「い、いや大丈夫！大丈夫だから！！」
「…まぁ、良いか…？……」

翌日の朝。

「うぅ～……頭痛い…」
「「飲み過ぎ」」
「ご、ごめんよ…」

妖怪という素性を隠し、最近ここで人助けを生業とする旅人……
という良く考えれば矛盾点がちらほら出てくるような自己紹介をし、
妖力を隠し紅い瞳を隠し物凄く微量の神力を発しながら人々の助け
を繰り返し、信仰を微妙に摂りつつ呑気に生きていく今日この頃。

しかして、私の大元は『妖怪』である。
妖怪の源『妖力』を確保しなければ、たったちょびっとの神力では、
存在する事すら厳しくなってくる。
ヒトを喰らうか、ヒトを脅し威し嚇さなければ妖怪でなくなってし
まう。
喰らうは気分的に無理。という事なので……。

レッツ！寝起きドッキリ！！
説明しよう！
まず私が諏訪子または神奈子の部屋に忍び込む、これで準備は万端。
残りは何かしらの『衝撃音』を増幅！逆に壁に触れて『衝撃音反射』
をセットし、外部に音が漏れないようにする！
後は私の『黄金の左手』とまで呼ばれた指パッチン（大嘘）を盛大
に鳴らすだけ！！

「……し～つ～れ～い～し～ま～す～ク～マ～」
「ＺＺＺ……」ｂｙ諏訪子
「おやおや、ぐっすりとお休みのようで……では、失礼をして」

…ッバァン！！！

「わぁぁぁぁぁぁァァ!?何々ィィ!?一体何事ォォ!?」

こりゃ凄い。見事なエコーがかかって物凄い耳障りな反響音がしてる。

妖力も一気に戻ってきてくれた。あれだけ驚いてくれると、逆にこっちが驚くわ。

まぁ目的は簡単に達成出来ちゃったので能力を解除、ネタバレと行きますか!!

「てれってってー、お早う御座いま～す!」

「詩菜!?何したのさ!?ていうかなんで居るの!?」

「いやぁごめんよ～?妖力回復するためには誰かを盛大に驚かさないといけなかったんだよ」

「だからってなんで私なの!?神奈子にしなよ!」

「して驚くと思う?私としては即座にオンバシラで吹っ飛ばされると思うけど」

「……だろうね」

即座に反応して音の根源に対して的確に攻撃をしてくるだろうなぁ……。

…とか考えている内に、諏訪子がだんだん面白いオモチャを見付けた子供のように笑顔が広がっていくのに気付く。

……なんか、ヤバイスイッチ押しちゃった?

「よし!詩菜!!神奈子の部屋に行くよ!!」

「ええ!?吹っ飛ばされるって話をしてたじゃん!?」

「ここまで来たら精一杯驚かしてやるよ!!」

「人の話を聞いてないし！？」
「え？キミは妖怪でしょ？」
「聞いてた！？」

当然の事ながら、私と諏訪子は吹っ飛ばされ満身創痍で朝の食卓を囲む事となった。
能力が通用しないでっかいツッコミ、オンバシラ。恐るべし。

?話?そんなものは知らん。（前書き）

痛い人、厨二病、そんなのが我慢出来ない人は、今すぐ『ブラウザ』の『戻る』か、『Ａｌｔ　＋　↑』か『Ａｌｔ　＋　Ｆ４』か『Ｂａｃｋ　ｓｐａｃｅ』でも何なりと押しちゃった方が宜しいかと思われる。

？話？そんなものは知らん。

《ｓｉｄｅ　誰か》

やぁや、皆さんこんにちは。
突然だが、語り部交代の時間だ。
これまでは詩菜が語り部、もしくは物語に関わっていた人物が語り部だったが、ここでは俺が解説させていただく。
…理由？ていうかお前は誰だって？

……あ～、一番目はまぁ、後で解るとだけ言っておこう。
二番目は…まぁ第三者視点でもよかったんだが、都合により俺になった。とだけ言っておく。

さてさて、今回の話を始めるとしよう。
たまに俺の考えが混ざったり、偏見が雑ざったりしておかしな部分が出てくるかもしれない。
ま、温かい目で見ててくれや。

きっかけは特に無かった。
神奈子が起きて、神社の巫女さんが起きて、諏訪子が起きて、詩菜が起きる。
いつも通りであれば朝食をいただき、朝から神奈子は参拝客の相手を、諏訪子は表には出ないけど神奈子のサポート、巫女さんは当然の如く神奈子・諏訪子の手伝い、詩菜は町に出て人助けか、または神社でごろごろしていた。
何気無い日常こそが一番の幸せとも言うが……まぁこれが彼女等の呑気な日常っていう訳だ。

さて、本編を続ける前に一つ話をしよう。
『詩菜』は壊れている。
いや、わざわざ『自分から』壊れている。
…何をいきなり厨二台詞を、とかって思っているかも知れんが……。
俺だって我慢してるんだぜ…？色々と…な。

彼女は…今は妖怪だが、人間なら誰しもが背徳的な想い、声に出して言えば即座にドン引きされるような気持ちというものがあると俺は思う。
……まぁ、俺が思っているだけかもしれないが。
その隠した想いを封じている感情が理性であると、俺は考えている。

で、詩菜はその理性がたまに物凄く弱まる事がある。
それが彼女にとっての『狂う』だ。
『全てを破壊しよう！』とかそんな大層な事は考えてはいない。
いくら狂うと言っても、理性が完璧に消えたわけではないんだし。
『こうすればアイツがこんな理由でこう怒る』なんてちゃんと考えているのだ。
ただ、その結論に『だから、何？』がつくだけ。
ヒトを殺した。捕まった。死刑確定。で？私が死ぬだけじゃん、そんなの？
とか、そんな結論になっちゃう訳だ。

さて、そんなきっかけも特に無し。今日が満月とか新月とか『ＦＵＬＬ』とかそういった事は全然関係無い普通に普通の日。
昼過ぎに詩菜が縁側に座り、左手をジッと見詰めていた。
そこをたまたま神奈子が通り掛かった。

「…詩菜？どうしたんだい？」
「……」
「？…お～い？」

聴こえて無かったのかと思い、もう少し近付きもう少し声量を強める。
詩菜にはその声が当然聴こえていた。が反応する事に意義を感じなかったので、単に反応していないだけ。
左手を見詰めたまま、返事も反応も返さない詩菜を疑問に思った神奈子は、近付いて肩を叩く。
当然それにも無視……と思いきや、いきなり立ち上がり縁側から

神社の裏山を目指して歩きだした。
裏山に登ろうとしている詩菜に声がかかる。

「詩菜！何処に行くんだい！？」

振り返ってしばらく…といっても数秒間考え、気持ちの良い笑顔でこう答えた。

「ちょっと壊(こわ)しに行ってくるよ」　バシュッ！！

音の出どころは、詩菜の左手首。
自分で自分の左手を指先で素早く撫でる。簡単にその状況を説明するならまさしくリストカット。
いくら人間型とはいえ、強度は人間以上の強靭な皮膚、しかして刃物は『衝撃』、その鋭さの前には強度なんて無いに等しい。

高く上がった綺麗な噴水。辺りに巻き散る真っ赤な液体。当然の如く真下に居る詩菜や近くに居た神奈子にもかかる。
詩菜の笑顔に血が降りかかり、神奈子は詩菜がした事に驚き服がどんどん朱に染まっていく。

「行って来まーす♪アハハッ！」

神菜子はそれを呆然と見送ることしか出来なかった。

森を山を駆け抜ける妖怪『鎌鼬』。
両手を左右に思いっきり伸ばし、身体に触れる木の幹や、指の先にあった草花が全て真っ二つに切り裂かれていく。

詩菜が走っていると目の前に人が十人、手を繋いでも囲みきれない程の大木が現れる。
それを見て、両手を身体の前で合わせ、

「ドリルぅー！！キャハ！」

木の幹を詩菜は、易々と貫通した。
…痛いなぁ……。

神社から一直線に出来た道、不自然に斬られた木や草花。
眼を真っ赤に染め、紺色の着物も所々が紅くなり、左手から血液が垂れながら、高速のスピードで山林を駆け抜ける。

既に諏訪子・神奈子のテリトリーからは随分と離れてしまっている。
そんな時に不幸にも出逢ってしまった一人の妖怪退治屋。

「ッッ！貴様何奴！？」

それなりに腕のたつ退治屋だったんじゃないかね？一瞬で相手との力量差を実感したのか汗だくになっている。
手に持っている槍をこちらに向けているけど、その先は安定せずプルプルと震えている。
そして退治屋なんていないとばかりに無頓着に進む詩菜。

「止まれ！止まらねばこ「五月蝿い」

高速で接近し退治屋を足払いで転がし槍を奪う。
地面に伏した退治屋は即座に立ち上がろうとするが、既に自分の腹の上には妖怪が乗っている。それが重すぎて動けない。
全身に血がついている妖怪はその状態で退治屋の顔を覗き、妖艶に笑った。
淫獣に襲われて俺は死ぬのか…とかって考えたかどうか解らんが、退治屋が抵抗するのを止め両手を両足を動かせる範囲で大の字に広げた。諦感って奴かね？
その手を、詩菜は躊躇いもなく槍で刺した。

「ぐあっァツツッ！！」

地面に縫い付けられた左手から槍を抜き取ろうと右手を伸ばす。
が、先に槍を途中で切り裂き、もう一本即席の槍で右手の真ん中を、詩菜が地面に縫い付けるのが圧倒的に速かった。

「ッッッッ！！！」
「フフフアハハハハッッ！！…ねぇ、痛い？」
「ッああ…！？酷い事をしてくれるな妖怪ッ…！」
「酷い？酷いってこういう事？」
「■■■■■■！！！」

更に切られて短くなった槍を両手に持ち、退治屋の腹の上を百八十度回転、両足首をまた地面に縫い付ける。
その痛みにもはやちゃんとした言語すら出てこない退治屋。おお怖。

「ねぇ答えてよ？これが酷い事？」

「■■■…」

返事をする気力も無いのか、口から出ているのは呻き声かそれとも抑えられた断末魔か。

少なくとも、退治屋に詩菜の声は届いていない。

「そんなに痛いの？返事も出来ない程痛いの？……ごめんね～『抜いてあげる』」

「■■■ッがあァガ！！？」

何かが肉体に刺さった時、抜いた時の方が出血が激しくなるという事を……まぁ皆さん御存知だと思う。

そして出血が激しいという事は、それなりに激痛が走るという事でもある。

……その痛みで言語が戻ってくるのも凄いと思うけどな。

詩菜は退治屋の両手から槍…じゃあもうないな、『杭』を抜いた。

両手が自由になるが、既に痛みで動かす余裕もある訳もない。

「追い剥ぎは妖怪しかした事無いからな～♪」

「…ッッ！」

服を指先でどんどん切り裂いていく詩菜。持ち物を切り裂かないように、慎重に。

そして袂に入れてあった財布らしき物を詩菜は抜き取り、それを返してもらおうと手を伸ばそうとする退治屋。

しかし痛みに勝てず、指を動かすのも出来ない状況。

「…まだ生きようとしてるの？足も手も使えないのに？」

「……うるッ……さいわぁ！」

「スゲー、人間スゲー。まぁそうだよね、ヒトって皆欲望に忠実だもんね。例えばさ…」

いきなりだが解説をいれよう。
今(現代)じゃあ幼女好きってのは…色々と言われそうな気もするが、一部しかいない。が昔は違うってのもまぁ、誰しもが知ってる事だと思う。

…あ～、また俺だけか？

まぁそんな事はどうでもいいんだ。簡単に言えば『昔は全員ロリコンだった』って事だ。無茶苦茶簡単に言えば。だが。

今とは逆の考え方が浸透していたって訳さ。逆に熟女好きが迫害されていたのかね？

…まぁ閑話休題。話が逸れすぎだな。

つまる所、この退治屋は妖怪を退治する単なる人って事だ。

妖怪はいきなり帯を緩め、自身の肉体を顕にする。

馬乗りで身体は退治屋の顔に見せながら、右手を退治屋の下半身の服を切り裂き、それを掴……めなかった。

が、それに驚愕を表す事なく更に手を伸ばす。

「ユリユリ～？男言葉を話す女の子～？しかも興奮中ー♪男の娘～？」

「うう五月蝿いわっ！痛ぅ……！」

「それともアレなのかな？逆に命の危機だからこそ、こんな反応しちゃうのかな？自分の種を残そうとしてさー」

べちゃべちゃと彼女を触る妖怪、見事に壊れて見える。

ああ、ちなみにそんな細かい所まで描写は無理だからな?
……訊いてねぇよって?
いや～……ホント何してんだろ、俺…。

「ほーら、出てくる出てくる!!凄い凄い!こんなに出るんだ♪」
「やっ、止めっ痛ッッ!!」
「興奮するからだよー?私が馬乗りになった時も変な事考えてたクセにー!アハハッ」

液で濡れた右手で自分の腹を破る。その勢いで退治屋の左腕、二の腕の真ん中を両断する。

傷口から血は出ず、退治屋を苦しめる痛みもない。
その答えは単純明快『鎌鼬の鎌で切り裂いた』から。
斬られたにも関わらず、他人に指摘されるまで気付かず、その傷口はとても深いのに痛みも出血もない。
これが、妖怪『鎌鼬』。
その事を退治屋は疑問に思うが、それを思い出す余裕はない。
破った妖怪の腹からはどんどん血が出ている。
鎌で斬ったのではなく、握力で引きちぎったのだから。
どちらかと言うと、先程のリストカットも指で抉った。と表記した方が正しかったな。

「今度は痛くないでしょ?痛い訳が無いもんね!アアハッ♪」
「……もう…良い…」
「ハハハ♪ハハ!ハ?」
「…喰らうのなら……ツッ!…殺すのなら、…さっさと殺ってくれ

……」

「私はヒトなんて食べないよ？それに殺して欲しいの？」

首を横に異常に曲げ、顔を退治屋から三センチもないぐらい近付ける。

眼はいつも以上に緋色に耀いている。

「…死にたくは…ない……が、このままッッ！！…いたぶられるのは、…嫌、だ」

「……」

「それに、職業…柄…。どうせ妖怪に殺されるのと。……わかってい、た……」

「……つまんないの。もっと愉しく生きなよ？欲望は貴方達の専売特許に近いんだよ？ハハ」

妖怪退治なんて職業は死ぬ覚悟が出来てないとやれないって奴かね？

追記。専売特許なんてこの時代に無い。という事をここに示しておく。無駄だと思うが。

「ん～殺す事を相手が望んでいるのなら殺したくないなぁ」

「……殺せ」

「イヤだ♪」

「なら、何処かに行ってくれ……どうせこの傷だ。…もうすぐッ痛！…死ぬわぃ……」

実際に妖怪退治屋の傷は酷い。

仮に腹が無事に治り、生き残る事が出来たとしても、既に左手が無く、利き手と両足に杭が貫通してしまっている人物、そのせいで働けない女などを誰が養うと言うのだ。

「死にたいクセにまだまだ濡れてくよ？フフフ」
「さわ…るなっァガァッ！？」
「ほーら動くからぁ♪で～もなぁ～殺したく無くなっちゃったなぁ～？こんなオモシロソウなヒト？」

言いながら服を切り裂く。巻いていたであろうさらしらしき物も空に飛んでいる。

「ちょっ！ヤメッ「イーヤ♪」「アハハッ！」「ハッハハハッ」「ハハッ♪」「ヒャハハハッ！」「アハハハ！！」「フフフハハハ」「ハハハハッッ！」「綺麗で見事な身体だねー」「アハッ♪」

狂っているかどうかは個人の感想で。
ついでに俺から見れば狂うには入っていない。
訊いてないって何回言わせんだって？そりゃ失礼。

閑話休題。
ここでちょいと現場を説明するとしよう。
理由は特に無い。強いて言うならば状況確認って奴だ。悪く言うなら字数稼ぎというものもある……メタい？んなもん知るか。

町や村から遠く離れた山の中。
あたりの樹林や草花は全て不揃いな長さに切り裂かれている。
その光景の中心部に着崩れした着物の女の子と、服が切り裂かれほぼ全裸の女がいる。
女の上に幼女が馬乗りに乗っており、見事におかしな雰囲気を醸し出している。

何も知らない人物が見たら…まぁソイツが男か女で変わると思うが、少なくとも異常な光景だと思うだろう。
女の方は大量出血と杭を刺された両手両足の痛みで意識が朦朧としている。
現代人とかもやしっこだと、もう死んでいてもおかしくはない。いや、むしろ死なない方が凄いと言えるな。うん。

「アハハッ♪」
「もう…頼む……ころ、てくれ……」
「だめだよー？これからオモシロクするのに？ホラ♪」

そういって妖怪は自分の左手の指を斬り落とす。
小指、薬指、中指、人指し指、親指の順に。

「契約だよ♪『喰え』」
「モガッもぅえ■■■■■！！？」
「ちゃんと噛んでいただくんだよー？」

骨は意外な程柔らかく、寧ろ爪の方が不愉快な感触を与える。肉は余分な贅肉等は無く全て筋肉質で出来ており、ブチブチと繊維が切れていくような音が口の中、というよりも頭に響いてそれがまた…
……美味しい。
――ゴクン。

退治屋は目の前に居る恐怖から、自分の身体の痛みから、意識が朦朧とする中、それらから逃れようとして、美味しい詩菜の肉体を食べてしまった。
それがどんな意味を持つかなどと考えれる筈もなく、喰ってしまっ

た。

飲んだのを確認して、退治屋の口から吐き出さないように封じていた右手を外す。

「良くできましたー♪」　ボンッ！

「！！？」

退治屋の顔の上で左手を斬り飛ばす。

斬られ過ぎて血に染まり、どこが皮膚なのか解らない物体が、鮮血をあたりに飛び散らせながら草むらに吹き飛ぶ。

当然、左手首からは血が止まっていない。

「妖怪ジュース♪♪」

「ッ…ッ！…キ、サマ私を…妖怪に。す…気か……！！」

「大正解だよ、名も知らない退治屋さん！キャハハハッ♪ホラホラ！どんどん呑まないと溺れ死んじゃうぞッ！！」

「ゴホッゲホッ！」

妖怪を喰らえば妖怪になる。

人魚の肉を食べれば不老になるのと同じように。八百比丘尼の如く。

「実ー験ー終ー了ー♪」

「キ…サマァ！！」

「およ？もう動ける程に回復したの？」

首ブリッジの姿勢で詩菜を持ち上げようとする退治屋。先程までは動く事すら出来なかった身体、詩菜を空に浮かす事も出来なかったのにな。

両足に刺さった杭は筋肉によりどんどん外側押し出され、左腕は元

の左腕とくっつければ再生するだろう。
だが、詩菜はまぁ妖怪としては２０年位のヒヨッコではあるが、
産まれて3分も経っていない妖怪に負ける程、ヒヨッコではない。

「またあそぼうねー♪」
「キサマは…！私がッ…退治、してやる。ッッ！！」
「女言葉使えばそれなりに可愛いのになー。あ！ねぇねぇ？『貴女の名前はなに』♪」
「ァ…！？『彩目（アヤメ）』…！！」
「ん♪契約も順調だね！って事で！！お土産ぷらすっ♪」

馬乗り状態から立ち上がり、退治屋の切り取られ吹っ飛んだ左手を回収した。優しいもんだ。
退治屋の左手を傷口に押し当て、微妙にくっついたのを見届けてから自分の左手を肩の先で切り取り、彩目の口に突っ込む。
そして身長差がかなりある筈の彩目の身体を頭を掴んで持ち上げる。

「ちゃんと私の左腕食べてねー？いっくよー♪…ドーン！！」
「■■■…！！……」

身体を上にぶん投げ、落ちてきた所を『衝撃強化』した残りの右手の掌で思いっきり吹っ飛ばす。
……内臓やら骨がぐちゃぐちゃになったんじゃないか？あれは。
…でも復活出来るんだよな…凄いもんだ……。

まぁ、そんな事よりも重要な事は掌で攻撃したっていう事で、吹っ飛ばしたって事だ。
律儀に左腕を口に含んだまま、物凄い速度で空を飛ぶ妖怪退治屋。
…いや、既に妖怪退治屋なのに妖怪。って言った方が正しいか。

人間を助けたりするのに妖怪、詩菜とは正反対な妖怪はあの勢いだと相当離れた場所に着地する事になるだろうな。また遭えるのはいつの日やら。どうでもいいけど。

「あー、愉しかった！ねぇ諏訪子♪」
「……キミは本当にあの詩菜なの？」

この近辺でたまたま斬られていない、ご都合主義で残った一本の木の蔭から、諏訪子が現れる。
呆然としていた神奈子に話を聞き、急いで追い掛け到着したのが彩目の腕を拾った時。
人間なのか妖怪なのか解らないが、腕をくっつける事自体は…まぁ善行に入るだろ？
しかし、自分の腕を相手に喰わせる。というのは些か諏訪子から見れば、狂っている様にしか見えない。
それは自分の仲間を増やすという事と同義。
妖怪を産む、という事。
人間を守る存在としては……見逃せない。

「キミは……やっぱり妖怪なの…？」
「知らない♪どうでもいいじゃんそんなの？私は私よ。それだけ♪」
「……」
「あの娘以外には何もしてないよ？それと、そうそうこれは言わないとね♪……諏訪子」
「……なに？」

会話で判断したのか、それとも決断したのか、諏訪子はこちらに向けて臨戦体勢をとった。

それは詩菜を倒すという意志の表れでもある。
それを見て詩菜は退治屋に魅せた妖艶な笑顔ではなく、悲しそうに笑い、

「ゴメン」

――気絶した。

「……へ？」

諏訪子がそーっと近付くも、起きる気配は無い。

「…ゴメンって、言われてもなぁ……」

左手は二の腕から先は綺麗に断絶しており、腹は破かれ、着ている和服は乱れ、特に上半身は真っ赤に染まっている。
人間で無い妖怪だとしても、瀕死だと一目で解る状態だ。
しかし、諏訪子は迷っていた。ここで詩菜を助けるか否かを。

「……」

先程見たのがこの子の本性ならば、ここで人間に害する者として放置すれば危機は去る。
それともちょっとおかしくなっただけで、だから先程は、意識が戻ったから私に謝ったのかも知れない。

守矢の神社に来る前の、人間も妖怪も助けていた時が一番詩菜にとって楽だったのか？

私たち神様が居たから人間を襲えず暴走したのか？
けれど、この子は私を襲おうとはしなかった。
けどあの人間を襲っていたのは妖怪だから？
じゃあなぜ妖怪を討つ神に敵対しようとしなかった？
知り合いだから？勝てないから？勝てないならなぜあそこで謝る必要があった？
謝らずに逃げれば、もしかすると生きて逃げ延びる事が出来たかも知れないのに。

……分からない。コイツはいつも分からない。
けど、ここでこの子を見捨てたら、倒したら、神奈子は…悲しむだろう。
敵だから、妖怪だから、とは言う事は出来るけど……それでも多少は一緒に過ごした間柄だから。

「…『ゴメン』の意味は後でじっくり訊かせてもらうよっ！！」

詩菜を担いで、森に出来た不揃いに切り揃えられた樹木の道を、諏訪子は戻っていった。友人を助けるために。

詩菜はなんとか一命をとりとめた。まぁ主人公が死んだら終わりだよな。

血だらけになりながらも詩菜を担いで来た諏訪子を見て、神奈子がどれだけ驚いたかは…まぁ今語るべき事じゃあ無いな。語らなくても想像はつくだろ？

……俺だけじゃないだろ？これは。

腹の傷は簡単に塞がった。が、左腕はある意味どうしようも無い。別の腕をくっつけるか、元の腕を返して繋げるか、いっその事傷口を外気にいつもさらし、地道に再生するのを待つか。

「…これぱかりは流石に本人に決めて貰わないとね……」

「……三日も寝てるんだけど」

「…いつになったら起きるのかね……」

この様に神奈子と諏訪子が暗い状態なので、神社の営業は滞りかけている。

巫女さんとかが詩菜の御世話をちゃんとしており『神奈子様諏訪子様は営業をちゃんとやっておいてください』等と言っているのだが、やはり心配なのだろう。

まぁそんなどうでもいい事は置いておいて、

――主人公のお目覚めだ。

「……働きなよ神様…」

「「詩菜！？」」

二人に対して働けと、随分とまぁのんびりとした言葉を放つ。

その言葉に反応して二人が同時に動いた。正反対に。

一人は詩菜に駆け寄り、調子はどうかと詰問する。

一人は妖怪から離れ、いつでも行動出来るように動く。

「いきなり叫ばないでよ…」

「アンタ！大丈夫なのかい！？」

「神奈子！離れて！！」

「なんで！？」

「まだ暴走してるかどうかわかんないんだよ！？」

「あ～…大丈夫だよ諏訪子」

「……大丈夫だって私が確信出来る証拠があるの？」

「諏訪子ッ！！」

「私が証拠を挙げても『私が言った』って事になって、結局安心出来ないでしょ？…まぁなんであんしたかは説明は出来ると思うけど……それで良い？」

「…内容によるね」

「だろうね、んじゃあとりあえず……起こしてくれない？」

――何故自分の左手首を切ったのか。

――なんとなく。強いて言うなら綺麗な噴水に出来るかなぁと。

――何故木や草花を斬りまくったのか。

――邪魔だから。

――何故人間を襲ったのか。
――…あのさぁ、妖怪にそれを訊くの？
――何故腹が破られ左腕が無いのか。
――腹は自分でやりました。理由は無い。左腕はあの人間…彩目っていうんだけど、彼女にに食べさせた。
――何故人間に自分の腕を喰わせたのか。
――話を聞いている間に殺したくなくなってきたから。あの傷だとどんな治療をしてもどうしようも無いから、妖怪化させて死なない様にした。
――何故あの娘を遠くに吹っ飛ばしたのか。
――…しばらく放っておこうかと思ったから？私が居てもどうしようも無いと思うし。
――何故…私に謝ったの？
――……謝らないといけないと思ったから…私が勝手に行動したせいで神奈子が混乱して、神社の営業が止まった。あの人間にした事も、神様からしたら罰しないといけない事……今ここに私が居るという事は『神様』じゃなくて私を『助けるべきヒト』として扱ってくれたって事。

「だから、ありがとう。そして、ごめんなさい」
「……」
「……傷が治ったらここから出ていって」
「ッ諏訪子！？」
「…これからも旅は続けるつもりでしょ？」
「……うん」
「ここに寄るとか挨拶する位なら良い。ただもうここに住むな。それで帳消しにする」
「……わかった」
「詩菜ッ！！」
「神奈子もそんな泣きそうな顔しないの。また逢えるんだし、ね？」

「…左腕はどうするの？」
「ん～……神力妖力全て注ぎ込むよ」
「そんな強引な治し方したら物凄い痛みが走るよ！？」
「自業自得って奴さ……ごめん、もうちょっと寝させて」
「…ゆっくり眠りな。神奈子、行こう」
「……わかったよ」

さて、怒涛の展開が続いているな。

……何、いきなり出てくんなって？そりゃ無理だってもんだ。
語り部の詩菜が解説出来ないだろ？まだあの様子じゃあさ？
まぁこういうのも、相も変わらずどうでもいいんだが。

最後に守矢の神社を離れるシーンを語って、俺の仕事は終わり……
…だよな？多分。
まぁそのあたりは後で八〇寺Ｐ（プロデューサー）にでも尋ねるとしよう。嘘だが。

「…さて、行くよ」
「……」
「詩菜も気を付けるんだよ？」
「分かってるよ。諏訪子も元気でね」
「……怨んでないの？」

あんな事を見て、キミを信じれなくなった私を。

「なんでそんな事が言うの？あそこで持ち帰ってくれたじゃん、私をさ」

大事だって思ってくれてる証拠じゃん。

「じゃ、行って来まーす！！」
「ハハッ、行ってらっしゃい！ほら諏訪子も！」
「……行ってらっしゃい…」

こうして詩菜は神社を後にしたって訳だ。
次の目的地も無く、前みたいに風来坊の如く。
ここで俺の出番も終了。
詩菜の出番に入れ替わり、だ。

まぁ、彼女の代弁みたいな感じで。コンゴトモヨロシク…ってか？

?話?そんなものは知らん。（後書き）

……この回に関しての批判等は受け付けない。
逆に『良かった』なんて送られたら、羞恥心でマッハで自殺するかも。

ｓｕｎ　ｆｌｏｗｅｒ（前書き）

はて、性格はこれで合っているのだろうか……。

守矢の神社を離れて、またもや放浪。まぁあれは私が起こした事だし？
仕方無いっちゃあ仕方無いんだけどねぇ…。

まぁこんな鬱な話はやめにして。

ただいま私は風に流されております……ていうか、いちいち歩くのがめんどくさくなってきた。左腕も治ってないし。
こうやって下界を見下ろす旅も良いもんだねぇ。
いやぁ、景色が綺麗だ。遠くまで見渡せるし。

のんびりだらだら進んで、進めなかったらその場で少し止まり、また道を見つけては、のんびりと進むのが私の指針だったはずだ。
なのに……。

「面白いわね貴女！」
「このッ！バトルジャンキー！！」
「あらどうも♪」
「誉めてないッ！！」

どうしてこうなったｏｒｚ
ｏｒｚなんてやる余裕なんて無いけども！

《詩菜がｏｒｚする少し前の話》

私が上空を浮かんでいると、一面に広がる『向日葵』の花畑を見つけた。

……そういえば私が初めて動物を殺したのもこんな感じの花畑だったな…うーわ、嫌な事思い出しちゃった。

しっかしまぁ、ここまで広い範囲に向日葵が『自然に』咲き誇るかね？これ、明らかに誰かが育ててるよね？

……気になって来た。
ちょいと降りて見てみようか。

「おお…」

降りてみると更に壮観。
風からヒト型に戻り、文字通り『向日葵のアーチ』をくぐる。
…ちっちゃいな、私……。

……フム…一通り廻ってみたけど、やっぱりこれは誰かが育ててるみたいだ。

土は明らかに他の土壌と違う。
昨日は雨なんて降らなかったのに、全体的に水が与えられている。
向日葵と向日葵の間隔もきちんとされていて、それぞれが巧いこと成長するようになっている。

いやー、素人目からみても凄いの一言。
こんな広範囲に広がった向日葵をきちんと育てている。現代の園芸家も真っ青だね。

けど……なんでこんな人里離れた所に？里が近ければ『向日葵の里』とかって感じで人も集まるだろうに。

「あ、人じゃないのが育ててるって可能性もあるのか」

「正解♪」

ゾワリ
背中にかかった声で一気に全身鳥肌になる。
それと同時に真後ろに位置を取られた事に気付く。
後頭部に違和感。恐らく何か棒状の物が突き付けられてる。

……全然気付けなかった…まだまだわたしゃ弱いようだ。
…まぁそんな後悔を次に使えるかどうかは、まず生き残らないとね……。

「…あの～……なんでそんな殺意を、私に向けていらっしゃるの

ですか？」
「ふぅん？左腕も無いようだしこれで気絶しない辺り、単なる人間って訳でもなさそうね？」
「いえいえ、私は妖怪ですから…左腕はまぁ……貴女も妖怪…ですよね？」

さっきからとんでもない程の量の妖力が出てるし。
声で女って判断したけど、どうやら随分と戦闘経験がありそうだ。
…殺気で気絶って、そりゃ普通の人間だったらそうだろうよ……
心筋梗塞でも起こすんじゃないか？

「へえ？…でも妖怪にしては妖力が随分と少ないわね？」
「ああ、隠しているんですよ」
「あら、何故かしら？」
「貴女みたいな『大妖怪』に襲われない為にですよッ！！」

妖力を解放、妖怪の証である緋色の眼を隠す術も解除してその場から一気に離れる。
すぐに反転、相手に向き合って警戒する。

が、呆気に取られてフリーズ。
緑色の髪の毛、洋風のスカート、何処か外国の貴婦人が使うような丸い傘。
どう見ても日本人、もとい日本文化じゃない…よね……？
……いや、まぁ、諏訪子も金髪だし神奈子もやけに青い髪色だったり、目の色が日本人っぽくなかったけど…。
神様だからアリなのかなとも思ったからスルーしたけどさ！
あの帽子の目玉も触れちゃいけない事だと思って無視したけどさ！！

流石にここまで来るとなんかおかしいだろ!?
私の転生先は日本の歴史が崩壊してるのか!?

「…なるほどね。妖怪っていうのは本当のようね」

…私の妖力隠蔽は随分と巧くなったようだ。
まぁそんな事はどうでもいい……この世界の歴史はどうでもよくないけど!

「……信じてなかったんですか…」
「敵の言う事をそんな簡単に信用してどうするのよ?」
「…いやまぁ、そうですけど……」

既に私は『敵』に認定されているのね…。

……どうしよう…色々とツッコむべきなのかな?あの格好……。
自ら地雷に突っ込むような気がするんだよね……『突っ込む』だけに。

「0点ね」
「辛口っ!…ていうかなんで分かった!?」
「分かりやすい顔してるもの」
「え……マジ?」
「嘘よ」
「嘘かい!?」

いやでも嘘ならなんでさっきあんな完璧なタイミングで点数を言えたの!?
そんな能力でも持ってるの!?

…なんて使いづらそうな能力……。

「…何よ、その哀れを見るような目は？……単に喋ったら当たっただけじゃない」

「……本当に？」

「…まぁ私の服装を見て何か思ったのでしょう？この国には合わないものね」

「……」

…なんだかいつぞやの神様の時のようにのんびりした会話になっているが、私はあの時のようにリラックスしてもないし、相手も先程から傘の向きは変わらずに、剣先のようにこちらに向いている。

妖力は明らかに私の何倍もあるし、気配を私に感じさせずに後ろを取られた事もどの技術でも、私では勝てそうに無い。

両手があったら、なんて気休めにもなりゃしない。

なんでこんな大妖怪に私は出逢っちゃったかなぁ……さっさと通り過ぎれば良かったのに…。

…まぁ、上手い事言ってなんとか逃げれば…良いなぁ……。

「ねぇ、貴女この子達を見てたみたいだけど『どう思うかしら？』」

『この子達』って……ああ、向日葵の事か。

「…そうですね。素晴らしいと思いますよ？この広い範囲にこんな立派な『向日葵』を育てるのは大変な事だと思いますし」

「…そうね、大変だったわ……『ヒマワリ』、ねぇ…」

「？…貴女が言った『この子達』とは、この花の事でしょう？」

「そうよ？…でも私は『ｓｕｎｆｌｏｗｅｒ』としか聴いた事が無いわ」

「えっ…」

サンフラワー…って、向日葵の英訳でしょ？《ｓｕｎｆｌｏｗｅｒ》……しかも凄く発音上手いし……。

その英訳しか聴いた事が無いって……？

「…もしかして……この花の原産地は、日本じゃ…無い？」

「二問目正解♪」

「ッ！？」

私はこの能力や妖怪化のお陰で、反射神経や動体視力とかには他の妖怪には、それなりに負けない自信がある。

けれどもこの妖怪が振りかぶった傘を、私は避けるどころか動く事も出来なかった。

……まぁ、

「……えっ…？」

傘で打つ事も、『衝撃を与える』事に入っちゃうんだけどね？

かなりの威力だった筈の傘は私の側頭部に直撃した……が『衝撃を操る』私にはその直撃の衝撃でダメージを受ける事はありえない。

せいぜい傘が触れた。位の感触しか残らず、顔が動く事すらない。
驚愕してる隙を突き、更に距離を取る。具体的にはさっきの三倍程。
多分恐らくこれでさっきみたいに不意をつかれる事もない…筈。

「…面白いわね。話は本当みたいだし……」
「……話？」

また噂かよ…。
ここ暫くは活動してなかったから噂は無いと思ってたけど……まだ残っているのね…。

「貴女、名前は？」
「…名前を訊くんだったら、自分から名乗るべきじゃない？」

ていうか、噂を知ってて肝心の名前を知らないの……？

「…それもそうね、私は『風見（かざみ）　幽香（ゆうか）』よ」

……この時代に名字を持ってるってあり得なくない…？
明らかに外人っぽい顔なのに、日本名なのもどうかと思うし…。
英語を知ってるし発音は完璧だし、なのに名前が日本名って……。

…まぁ名乗られたなら名乗り返さなくちゃね。騎士道精神なんて私は持ち合わせてないけど。

「…私は『詩菜（しな）』。名字は無い」
「そう。詩菜…私と勝負しなさい」

「……なんでッ！！？」

理解不能だ！！

何処からそんな結論が出てきたの！？

……とか言ってる間に襲ってきたー！！？

「…やっぱり打撃は効かないのね」

「……ハハハ」

攻撃を見ることは出来るけど、避けるのは厳しいな……速すぎるよ。

脇腹に入っている傘を掴んで……『風見』と呼ぶことにしようか。

風見を蹴る。

私がいま出来る技術で最高速の蹴りを放ったつもりなんだけど、あっさり片手でガードされる。

が、ガードしたにもかかわらず、風見は吹っ飛んだ。

攻撃をガードしても、脚が当たった時の衝撃は防げないでしょ？

まぁクッションみたいに受け止められたら駄目だけど……単に止めただけなら貫通させてやるよ。

……着地、お見事。隙も何もありゃしない…。

「…何をしたの？「ちゃんと受け止めた筈なのに。って？」…どうやら見くびり過ぎたようね」

もう勘弁してください……。

そんな大層な妖怪じゃ無いんです、私は…。

なんで挑発しちゃったんだ私！？

また風見が襲ってくる。

足払い、蹴り、拳、傘の殴打、の繰り返し。

「面白いわね貴女！」

「このッ！バトルジャンキー！！」

「あらどうも♪」

「誉めてないッ！！」

どうしてこうなったｏｒｚ

ｏｒｚなんてやる余裕なんて無いけども！

けど…一応全部打撃か。

なら大丈夫だけど……この人がカラクリに気付いたら、終わるな。

こっちも攻撃を繰り出してはいるんだけど『衝撃』を警戒してるの

か、全部避けられてる。
傘で左脇腹に殴打。無効化。
私の右ストレート。余裕で回避。
顎狙いの蹴り上げ。上半身を逸らす事で回避。
すぐさま反転した踵落とし。命中されど無効化。
その足を掴む。掴んだけれど身体を捻られ攻撃する間も無く抜けられる。
捻った身体の動きに合わせて逆の足で回し蹴り。私の右側頭部に当たるも、無効化。
掴んでも逃げられるので軸足狙いの蹴り。上空に逃げられ回避される。飛べるのかよ、どいつもこいつも……。
重力がプラスされた傘で叩き潰し。避けるも右肩に命中。でも無効化。
爪で衝撃波射出。掠りもしない。驚きはしたけど。
妖力で造られたと思われる弾幕が発射。能力による移動で回避しつつ、衝撃波射出。回避される。
風見が左拳で右顎を狙って撃つ。回避不可。でもやっぱり無効化。
こちらも右手で脇腹を狙う。受け流され衝撃失敗。
受け流しからの顔面に向かって裏拳。顔を逸らす事で回避。鼻が風圧でちりちり焼かれているような気がする。
裏拳を掴んで内蔵狙いの膝蹴り。そもそも掴ませてくれない。
逆に掴みにいった手を掴まれ腹に掌を撃たれる。その攻撃を無視して風見の左脇腹に右足を思いっきり当てる。
…ようやく攻撃を二回当てられたよ……。
衝撃に吹っ飛び、掴んでいた私の右手を離してしまう。

…あー、左腕が無いと色々不便すぎるなぁ…。
……治すか。
むしろなんで私は今まで治そうとしなかったのだろうか…？

足で地面を蹴り、爆発的な威力で風見から距離を取る。
向日葵が咲いている広場の端まで下がり、妖力神力を左腕に集中させる。

「何をしてるの？」
「……立ち直り早すぎない？」
「貴女とはレベルが違うのよ…いいから質問に答えなさい」
「…修復さ」

神力が空になった。
これで私は『妖怪兼神様』ではなくなった訳だ。まぁ再度集めりゃ良いんだけどさ？
…ていうか再生中の痛みが物凄いんですけど。
汗が眼に入りそうだ、ってイタタタ！！現在進行形で入ってきた！？

「……無茶な力の使い方をするわね。いつか自爆するわよ？」
「…まぁね」

腕（及び眼の）痛みを声には出さずに返事をする。
無論、風見の警戒も怠らずに。

おっし！左腕復活！！

「で、左腕を回復したにも関わらず、妖力神力切れの貴女はどうやって私に勝つつもりなのかしら？」

あ。

「…大量に冷や汗を出してる所を見ると、どうやら私に体術だけで勝とうしていたのかしら？」

勝てる訳無いじゃん！
只でさえ回復に精神力使ってるのに、攻撃を無効化しつつ両手で風見を圧倒しろと！？
無理無理ムリムリむりむり！！！

「……呆れた」
「……ハハハ…スミマセン…」
「……」
「……」

……うわぁ。
うわぁーッ！恥ずかしッ！
痛いなぁ私！！顔がマッハで赤くなってるのが分かる！！
向こうも明らかに戦闘意欲無くなっちゃってるもん！！
テンション駄々下がりだよ畜生！

…いや！でも戦闘回避を出来たのは成功の部類に入るんじゃないか

なぁ！！
ていうかそうでもして納得しないと私の羞恥心がががががが！！

「……はぁ…貴女は中々面白いけど、どこか抜けちゃってるのかしらねぇ……」
「…そんな事を言われましても」
「…天然バカ？」
「……最悪ですね、我ながら」
「そうね…やる気も無くなっちゃったし、せっかくだしお茶でもいかが？」
「……ハイ？」

駄目だ！この人かなりの自己チューで着いて行けない！！

「ハーブティーでもご馳走するわ」
「は、はぁ…ありがとうございます？」
「ふふふ」

あれぇ？
さっきのどSはどこ行ったの？

お茶と追いかけっこ（前書き）

遅れましたが、その分2話投稿。
では、どうぞ。

お茶と追いかけっこ

「まぁ、ゆっくりしていきなさいな」
「はぁ……お邪魔します」

普通に綺麗で掃除も行き届いている明るい家。
性格が自宅に反映されるとしたら、とてつもない家なんだろうなぁ…という予想はあっさり外れた。

……まぁ本人からすりゃ、心外も甚だしいって感じになるのかな？どうでもいいけど。

「ハイ、Ｈｅｒｂａｌ（ハーブティー）　ｔｅａ」

「…あ、どうも」

…発音凄いなぁ……。

どうやってあの音を出してるんだろ？とは学生の時の記憶。

「……ん、美味しい…」

「ふふ、そう言ってくれると嬉しいわ」

……ん？…あれ？

「……妖力が回復してる？」

「混ぜ合わせたハーブの効力よ」

「ほぇ～、流石というかなんと言いますか…」

妖怪にも効くんだね。

…ハーブってもともと日本にあるんだっけ……？

……まぁどうせこの人が持ち込んだりしたんだろうな…。

「…ごちそうさまでした」

「どうかしら？身体の調子は？」

二口飲んだだけで自覚出来る程の量を回復したからなぁ……。

「ほぼ全快しましたよ。有り難うございます」
「そう、それは良かったわ」
「……？…」

……この人なら『回復したのならもう一回殺るわよ！』とか言いそうなのにな…？

等と考えながらじろじろと風見の顔を見ていると、苦笑しつつも答えてくれた。

「…そこまでＢａｔｔｌｅＪｕｎｋｉｅ（バトルジャンキー）じゃないわよ」
「だから人の心を読まないで下さい…」
「読みやす過ぎるからいけないのよ」
「ええー…私が駄目なんですか……？」

練習してみるか？『ポーカーフェイス』…やり方知らないけど。
……そんな解りやすいかな……？

「…（それに約束もあるし）」
「……ん？何か言いました？」
「いいえ……それにそんな固くならなくても良いわよ？呼ぶのも幽香で良いし」

…なんで私が貴女の事を『風見』と呼んでいる事がわかったし。一度も呼んでない筈なのに…。
……本当にそういう能力でも持っているのか…？

…って事は……妖怪『サトリ』？

「幽香…で良いんだよ、ね？…で幽香って何の妖怪？」

「妖怪の種族『妖怪』よ。貴女は？」

「私は『鎌鼬』だよ？…妖怪の『妖怪』？……つまりサトリとかじゃ無いの？」

「……貴女、もうちょっと自分の顔を意識しなさい…していればそんなバカみたいな発想は出ない筈よ」

「…す、すみません……？」

……なんで結局私が怒られてる感じになってるの…？

「んじゃ、ハーブティーも御馳走になっちゃったし、そろそろ行くとするよ」

「…ねぇ貴女。旅をしているのでしょう？」

「ん？うん。ちょいと放浪をね」

「そう……まぁもっと身体を鍛えて来なさい」

「……そしてまた勝負、って訳？」

「三問目正解♪」

あ、そのネタまだ引っ張ってるんだ……。

……ん？

今のは、幽香の声じゃ……無い？

「あら、出てこないつもりじゃなかったの？」

「フフ、端から見てるだけじゃ面白くないもの」

幽香がいきなり虚空に喋ったかと思うと、それに答える別の声が辺りに響く。

いきなり空間に線が走った。その線の両端に可愛らしいリボンみたいなのが結ばれている。

線が開き中から表れたのは、これまた日本文化じゃなさそうな服装を着込んだ日本人（妖怪？）じゃなさそうな人（妖怪！）。

金髪に大きな傘、紫色が強調された服装。その手には意外にも日本の扇子が１つ。

じろじろと視る必要も無かった。

駄目だ、この人にも勝てる気がしない。幽香かそれ以上の妖力？

神力妖力共に十分で身体が五体満足だとしても……。

今回の幽香も同情票みたいな感じで終わったんだし。

いくら何でも今日だけ大妖怪とのエンカウント率が高過ぎるぞ……！

思わず椅子から飛び降り臨戦態勢になった私を見てか、胡散臭げな微笑みを魅せる。

「そんな警戒しなくても平気よ？」

「……その人が信頼出来るかどうかは、自分が決めるので」

「…まぁそれが普通の選択かしらね？…まぁ自己紹介から始めましょうか。私は『八雲（やくも）　紫（ゆかり）』よ」

「……私は「『詩菜』ちゃんでしょう？」……貴女は一体何なんですか？」

いきなり出てきたと思えば私についてよく知っているようだし、家に勝手に侵入したのかと思えば家の持ち主である幽香は動かないし。

しかも『ちゃん』かよ……。

「最近貴女の噂を耳にしたのよ」

「…それが、何か？」

「妖怪と共に暴れたかと思えば、人間と共に妖怪を討つ。人間らし過ぎる妖怪『詩菜』」

「……」

…何が言いたいのか解らない。

取り敢えず、じりじりと後退する。

「解らないって顔ね」

「…いきなりそんな事をペラペラと仰有られても、私にはさっぱり……単刀直入に仰有って下さい」

「つまり、詩菜ちゃんに私の世界を創るのを手伝って欲しいのよ」

「……『私の世界』とは？」

ザ・ワールド！！的な……そんな訳が無いか。

……おちゃらけて無いで、真面目にやるか。

幽香が凄い睨んでくるし…。

「妖怪と人間が互いに共存する世界よ」

…なんじゃそら？
妖怪は人間を襲うものだし、人間は人間以外を淘汰してしまう生き物だよ？
今の世の中、丁度人間と妖怪の実力が拮抗しているから言えるかも知れないけど、未来では妖怪が居ないんだし？
…ていうか私が見たことがないだけかも知れないけど、それでも少ないという事の証明になる。
２１世紀で妖怪は人間の科学で殆ど解析され、恐れる現象では無くなったしまったのだから。

…まぁ、私がしている『人間と妖怪の中立』紛いの事はこの八雲とやらが言っている世界には、丁度ピッタリだろう。

「……その世界の創る為に、私に協力して欲しいと？」
「そう♪……ただそうね、一つ訂正して欲しい所があるわ」
「訂正とは？」

八雲は胡散臭い微笑みではなく、綺麗な笑顔を私に魅せて、言った。

「『協力して欲しい』じゃないわ……『協力しなさい』」
「っ！？」

八雲から発せられたのは明らかに私に対する悪意と、比べ物にならない程の妖力。

それらに恐怖を覚え、私は逃げ出した。
扉を蹴破るに近い状態で飛び出し、地面を踏む度に『衝撃』を操りどんどんスピードを上げる。
幸い幽香のハーブティーで妖力は十分にある。
けど逃げ切れる自信が全くもって無い。

天魔の時の追いかけっことは違って、私もあの頃より多少は場数は踏んでいる。
しかし、結論として明らかに、八雲には勝てない。戦えない。逃げられない。
けれどそれでも、逃げるしかない。

向日葵の花畑を越え、森林に入る。樹の幹でジグザグに跳ね飛ぶ。
方向は出来るだけ変えつつ、幽香の家から離れる。
遂に速度が音速の域にまで達したのか、人間状態でしかも爪を出している訳でも無いのに、通り過ぎた樹木に切り傷が出来ている。
それでもスピードを下げず、むしろ更に能力を使い跳ねる。

遂に一つの山を越える。
それでも八雲の気配は途絶えず、後ろから追ってくる気配がする。
幽香の気配など既に遠すぎて解らないというのに。
山を越えて人里に突っ込む。速度を落とす訳にはいかないので、台風のように家屋や樹木が弾き飛ばされるが、取り敢えず無視。
農作物が可哀想な事になっているが謝る時間も無いので、心の中で『ごめんなさ～い！！』と取り敢えず叫んでおく。

いや、ほんとに余裕なんて皆無なんだって。
ちゃらんぽらんな事を考えちゃってるけど！

「フフ！逃がしはしないわよ！！」
「諦めろよぅ！？どいつもこいつもよぉ！！」

ヤバッ！もう声が届くのかいっ！？
音速の衝撃波が出る程の速度なのにッ！！

…音速なのに声が届くってどういう事だよッ！！？
物理的な法則はこの世界には存在しないの！？
それとも何！？相も変わらずの妖怪スペック！？

遂に海に出る。
海岸線に沿って駆け抜ける。既に方向を変え過ぎてどっちの方向が元の幽香の家か解らなくなってしまっている。
衝撃を操っている私のせいで、砂が散弾の如く打ち出されている。
……八雲に当たれば良いのに。

「ハア…ハッ……やっとッ、追い付いたわよッ…！！」
「…ハッ…ハッ」

目の前にあの空間移動の術で表れる八雲。
追いかけっこは一時間にも及び、とうとう先を越されて八雲と相対する事になってしまった。
私も八雲も息を切らし、全身汗だくだ。向こうの方が疲労度は無いみたいだけどね…。

それにしても、全身傷だらけだな。
……ああ！私の衝撃とか木の枝とか弾き飛ばした砂とか石が当たったりかすったりしたのか。

…やーい！ざまーみろ。

「フゥ…もう逃がしはしないわよ！」
「ハッ、ハッ、ハッ…そこまで、して…私に何を…させたいん、ですか？」
「だから手伝いよ。簡単に言えば詩菜ちゃんには私の『式神』になってもらうわ」
「…貴女の、従者になれ…と…？」
「契約よ♪」

うげぇ…ちょっと前の事を思い出しちゃったじゃないか……。

「…なんで、私なんですか?…有名な妖怪で、力のある奴なら…ふぅ、話せば解ってくれるの、では?」

「……」

そこらにいる有名な妖怪の方が、明らかに私よりも力を持っているし。

小妖精、妖精、妖怪、中級妖怪、大妖怪、歴史的妖怪の順にレベルを着けるならば、せいぜい私は中級妖怪の妖怪よりの、平均の平均なのだ。

幾ら私のしている事が、八雲の考えている世界に対してピッタリだったとしても、彼女に協力出来る程の力を私は持っていない。

幽香に『鍛えろ』って言われても、そもそも【格】が違うってのに…。

…フゥ……ようやく呼吸が普通に戻ったか…。

「私は八雲さんのそういう世界、面白いとは思いますし見てみたいとも思います。ですが協力はしても束縛はされたくありません」

「…つまり式神は断るけど協力はする……という訳?」

「ええ…八雲さんの実力ならばもっと強いのを式神に出来るでしょうに…?」

幽香とかを式神にすればいいのに……。

「…彼女は強すぎるし、大事な友人よ。そんな事は出来ないし、したくないわよ」
「……また顔に出てたか…」
「幽香に見られていたら、殺られていたわね♪」
……あ～、無表情で能面とか言われてたあの頃に戻りたい！

「フフフ。まぁ今回は詩菜ちゃんのその詭弁に騙されておきましょう」
「あ、やっぱり駄目？」
「確かに詩菜ちゃんの今の実力はそれほど欲しいという訳でも無いわ」
…率直に言われると傷付くわぁ……。

「ただ…そうねぇ、何かの『原石』みたいなものを感じるのよ」
「はぁ…？」

なんじゃそら？
わたしゃキルアやゴンとかじゃないぞ。
八雲もビスケみたいな年齢にも見えな……ってあれは念で若くしてるんだっけ…。

なんだろう…この人の年齢を訊いたらとんでもない事になりそうな予感がする……。
……そっとしておこう…。

「幽香もそうよ?彼女は興味がない物には何もしないから」
「…随分とまぁ、期待をさせちゃってるようで……」
期待されても困るんだけどなぁ……。

「フフフ。じゃあまた、何処かで逢いましょう…」
そう言って八雲は能力か何か解らないけど、空間を扇子で斬り……
…何て言えば良いんだろ、『窓』?を開いて私の前から去っていった。

帰還。お土産は～？

「…うはぁ～……バッタリ」

自分で効果音を発しながら地面に倒れ込む。

精神的に今日は疲れたぞぉ…。

動きたくない…けどせめて現在地だけでも調べなくて、宿を確保せねば……。

顔だけを動かし、辺りを見回す。

幽香の家から…どれだけ移動した？

向日葵、山、集落、海岸、集落、草原、樹海、現在地の特に何もない広場。

……ん、んー？ここって……天狗の里の近くかな？

なんていう幸運。そしてなんていう御都合主義。

オッケー、ならここから叫べばあのエロ親爺は飛んで来てくれるな。

活用出来る物はちゃんと活用する、それが私！！

ハイ、息を吸って～！

天魔と戦った時の最後の技なんて目じゃない程吸って～！！

「『天魔』！！」

私を中心に声が衝撃となって草木を揺らす。
因みに残り少ない妖力も乗せて飛ばしたから、まぁ覚えてくれてるだろうし、来てくれるでしょ？
……来てくれる、よね…？

五分後。

「なんじゃ！？いきなりワシの事を大声で呼びよって！！大事な会合だったんじゃぞ！？」
「その割にはとても早く来てくれたよね…」
「そりゃお主、声に妖力を乗せてワシの名を呼ぶという事は、それだけ危ない事になっておったんじゃろ？」
「まぁね……天魔」
「なんじゃ？」
「私を家まで運んで頂戴♪」
「…何があったんじゃ……？」
「八雲っていう大妖怪に追われたんだよ……あ～、ゴメン。寝るから後任せた」
「そりゃまたとんでもない奴に目を付けられとるな…って寝てるし

……」

意識及び五感がフェードアウトォ～ォ……。

《ｓｉｄｅ　天魔》

眠ってしまった詩菜を抱え、天狗の里の近くにある詩菜の家に向かう。

寝顔は何処までも無防備だ。

全く、何処で何をしておるのかと心配してみればこのザマ。何がしたいのやら……。

家に到着した。

が、何かで封じたのか戸は開かない。
……起こすのは可哀想じゃが、致し方無い。

「オイ、詩菜」
「……んぅ、着いた？」
「…いや、戸が開かんのじゃが？」
「……ああ、りょーかい。解錠するからちょい降ろして……お姫様抱っこはもう結構だから」

言われて素直に降ろす。多少まだふらついているので支えながら。

……『オヒメサマダッコ』とは何なんじゃ？
単に両腕に抱える事を指す言葉なのかの？
……全くもってこいつはワケわからん。

「ホイ、開けたよ…って何笑ってんの？」
「いやいや、何もないわい」
「？……まぁどうでもいいか。ただいま～」

玄関を上がり、ワシにとっては狭い家にお邪魔させて頂く。

…埃が酷い。

「……詩菜よ、掃除せねばいかんのでは？」
「……そうだね…出来る？」
「フム…まぁ団扇で十分じゃろ」

懐から出した葉団扇を一閃。強烈な疾風が部屋の淀んだ空気を入れ

換え、積もった埃共を転がし野外へ追い出した。

「…お見事」

「ふん、これくらい出来て当然！」

「そしておやすみ」

「切り替え早すぎじゃろお主！？ってもう寝とる！？」

「五月蝿いぞ天魔～…お土産は無いけどお話なら明日にでもするから…今は妖力の回復及び精神的に休ま～……ｚｚｚ」

「話の途中なのに落ちよった！？」

「…ｚｚｚ…ｚｚｚ」

…まったく……面白い奴じゃ。

《ｓｉｄｅ　詩菜》

目……じゃないや、瞼を開く。
…うむ、天狗の里にある我が家だ。
時計は無いけど、切抜き窓から見える外の明るさ及び太陽の位置で
……恐らく朝…かな？

幽香との戦いで、無理矢理に治した左手を天井に伸ばし、グーパー
と動かしてみる。
…幽香の家でも動かしたり試したりしてみたけど……。

「……うし、大丈夫だな」
「お、起きたか」
「……天魔」
「うむ？」
「……いや、なんでもない。お早う」
「ウム」

…壁寄りかかってずっと見てたのかこのエロ親爺……。

身体を起こし自身の調子を確かめる。
身体的機能。筋肉痛等も無し、異常無し。
妖力。全快時の六割程の量。
神力。皆無。

……まぁ、それなりにそれなりの状態、かな？

「お主、大丈夫か？」
「ん。まあまあ…かな」
「……そういえば『八雲』に遭ったと言っておったな？」

「ああ。うん、協力しろだってさ」

まだ決着ついてないのがなぁ……。

「協力とは…例の人間と妖怪の……？」

「うん。まぁ…ね」

「…お主が勧誘されるという事は、噂は本当なのか……？」

噂…って、私が人間も妖怪も助けている事……？

…なんで知ってんの！？

「……どいつもこいつも噂、大好きなんだね…」

「…まぁワシは悪いとは言っておらんが…そんな事をしておるから、目を付けられるのじゃろう？」

「そうなんだろうだけどさぁ……」

天狗達の間でも色々と話が飛び交っているんだろうなぁ……情報収集だけは得意だからな、天狗っていう種族は。

「……まぁ、お主が嫌ならこの話は無しにするかの」

「流石てんちゃん」

「…誰がてんちゃんじゃ……そうじゃなぁ…お土産もとい旅のお話でも訊かせてくれ」

「ん、じゃ何処から話そうか「「「師匠！！」」」…コイツらが居たか」

戸を蹴破るようにして、私の家に入ってきた不埒者の三人組。いつ

ぞやのぶっ飛ばした天狗で…私の弟子を自称する三妖怪だ。

「師匠！「『八雲』という奴は一体ご無事「なんで旅に何なんですか！？」いきなりですか！？」出たのですか！？」「「それだ！！」」

「一気に喋るな！！ていうか何が『それだ！！』なのよ！？」

だからコイツら嫌なんだけど……せめてリーダー的な奴を決めてくれ…。

まぁ、簡単に紹介しようか。

顔が四角くゴツいのが『弥野（やの）』細長いのが『縞（しま）』丸っこくて一番のチビが『作久（さきゅう）』。

因みにＡＢＣ順にちゃんと説明したからね？

って誰に説明してんだ私……ハッ！？まさか電波！？

「オイ、そんなに入ろうとしてもこれ以上は入れぬぞ？」

「ハッ！？天魔様！？いつの間に！？これは失礼しました！！」

「……気付かれぬと言うものも何やら胸に来るものがあるな…」

「…御愁傷様？」

気付かれ無かった天魔は…まぁ置いといて。

確かにこれ以上、私の家に誰も入らない。

…というか、扉にぎゅうぎゅう詰めで……壊す気か？

私、天魔、あと入れて一人か二人が恐らく限度。

作久と縞なら入れると思うけど、縞と弥野だと無理だろうなぁ…。

「……いっその事、三人でリー…じゃないや、長みたいなのを決めれば良いのに…」
「いえ！！我々三人は全員が一番弟子！！」
「誰がなんと言おうと！！それは変わらず！！」
「我等は！！切磋琢磨しあい！！」
「「「師匠について行きま『ウルセェェ！！！！』「耳がァァ！！」」」」

あ、衝撃使って叫んだは良いけど天魔の耳を守るの、忘れてら。

「ん。最初からこうすれば良かったんじゃない？」
「自分の家に運べ、と言ったのは誰じゃ」
「ハイハイ。私が悪ぅ御座いました」

河岸を変えて、場所は天魔の家。
つまりは『天狗の長』の自宅。
ここなら私と天魔は人目とか（妖怪だけど）を気にせず話せる。

……が、天狗の社会での落ちこぼれ三人にとっては、緊張する場面のようでガッチガチに固まってしまっている。

「「「……」」」
「…天魔、コイツらが居る理由ってあるの？」
「ない」
「ん、了解……弥野・縞・作久、空中持久走しに行きな、太陽が頂点にいくまで」
「「「ヘイ！！」」」

……我先に飛び出していったな…。
よっぽどこの空間が辛かったのかね…？

「……なんやかんや言いおって、普通に面倒を見ておるようじゃな…」
「放っておくのも悪いかなって、ね……ふぅ、やっと落ち着けた…」
「…さて、旅の話を訊こうではないか」
「……落ち着けたって言ってるのに…まぁ、良いけどさ…」

「まずは…そうだね。知り合った神様の事を」
「……始めっからとんでもない話が聞こえたんじゃが…」
「彼処の神社の二柱は好い人、もとい好い神様でさー？」
「……妖怪と神様が仲良く暮らす。という物も凄い情景じゃな…」

「そういえば私も神様に昇格したんだよね～」
「ハァッ！？」
「人間助けてたらこうなったｗｗワロス」
「……」
「まぁ今は使っちゃったから、皆無なんだけどね」
「…人間だった妖怪で神様のお主が妖怪と人間を助ける。か……」
「まぁ…なんか凄い噂になっちゃったから、暫くはのんびりしようと思ってるけどね……」
「噂も四十九日。暫くすれば消えるわい」
「……だと良いんだけどねぇ…」
「…そういえば、その神力は何に使ったんじゃ？」
「ん、回復に使ったよ。片手丸々一本」
「…なんかもう…お主の話はどれもこれもが信じ難い話ばかりなんじゃが……？」
「いやいや、事実しか話してないから。お陰でこの通り左腕は生えております故に」
「いや無い状態を見ておらぬし……」
「んな事言ったら永久に証明出来ないよ…」
「…んじゃあ、そのお主の左腕を千切ったのは誰なんじゃ？」
「んあ～……聞いても怒らないで、ね？」
「ワシが怒るとは…どういう状況なんじゃ…？」
「…う～、あー……」
「……まさか、ワシの配下の天狗がやったとかじゃ「スミマセン！自分で千切りましたぁ！！」なんじゃそりゃあぁ！！？」
「ひやぁあ！すいません！！」
「お主は阿呆か！？なんで自力で自然治癒出来ぬ程の傷を自分につけとるんじゃ！？」
「…ハイ……心底後悔は微妙にしておりません」
「後悔をしろっ！！」
「いだぁ！？ちょ！刀でチクチク刺すなッ！？」

「……はぁ、全く…何がやりたいのやら」
「イテッ！だから刺すのをッッ！やめろッ！！溜め息つきながら楽し気に刺すなッ！？」

「フゥ……それで？わざわざ千切る程の何かがお主に起きたのか？」
「……ん～…ゴメン、その辺りは色々あるから言えない」

自分の血肉を人間に食べさせてみました。なんて言ったらコイツは何しでかすかわからん……。
……いや、これは向こうの台詞か…？

「……まぁ、お主がそこまで言うなら強制はせんよ。ちゃんと治っとるようじゃし」
「神力妖力殆ど注ぎ込んだからね。治らなかったら詐欺だよ」

誰がどう詐欺なのかは解らないし知らないけど。

「神力か……今は無いんじゃろ？」
「うん、妖力みたいには回復しないからね」
「……どういう事じゃ？」
「えーっとだね…神力はまぁ、人から貰い受けるような感じで溜まっていくんだよ」

詳細は違うけど、イメージとしては合ってる…筈。

「…何やら複雑じゃな。その内お主も妖力よりも神力の方が増すのかの？」

「わたしゃまだまだ新米の未熟神様さ…それに妖怪は妖怪だよ」

妖怪は妖怪。

人間との共存の望む八雲は、それをどう変えてみせるのか。

「……そういえばなんで天魔は八雲の事を知ってたの？」

「…どうやら実力のある妖怪に色々と接触しておるようじゃ。ワシの所にも来たんじゃよ」

「へぇ。それで？天魔は賛成？それとも反対？」

「……お主は人間だった時の性格から今は変わっておるか？」

「？多分変わってないと思うよ？…当時を知る人が居ないけどね」

「…フム。なら人間にも妖怪と仲良くしようとする奴は居るかも知れんな……」

「……結局、その時に出した結論は？」

「『嫁と相談するから時間を来れ』」

「…まさか私の名前を出してないよね？」

「それは無論」

「うん、良し。なら喰らえぇ！！」

「ふぎゃあ！！？」

「テメェ誰がお前の嫁じゃあぁ！！」

「ケブッ！？肉弾戦はお主卑怯じゃろ！？」

「問・答・無・用！！」

「のわぁー！！？」

決闘。ってなんか憧れる

ちょっとした広場に私と天魔が、相対して立っている。
……まぁ、どうでもいいあの三人組もいるんだけどね…。

さて、なんでこうなったかと反芻してみればなんの事はない。単なる私の修行みたいな物なのだ。

そもそも妖怪は自分から鍛練などをしようとはしない。
力が欲しければ人間を頂いて妖力を溜めるか、じっくりと年月が過ぎるのを待てば良いだけだからね。

じゃあなんで私は天魔を付き添ってこんな事をしているのか？
……幽香が怖いから「オイ、いつまで考え事をしておるのじゃ？」
「ん？ああ、ごめんごめん」

イカンイカン。集中せねば…。
幽香の言った『もっと身体を鍛えて来なさい』というのは『来なければ向かう』という意味もある……と思う。
…せめてその前に幽香の技を見切れて、出来れば反撃出来る程の実力が早急に欲しい。

方法としては、さっき挙げた三つ。

けど、『人間は食べない』が信条の私に、人間を食べる方法は無理。
年月が過ぎるのを待つのは、『早急に』と言ってる事に対して堂々と立ち向かっちゃうから無理。
とすると、短い期間で身体を鍛えるには人間のように特訓という物をしなければならない。
つまり天魔に無理言ってこの特訓、というか試合を頼んだのだ。

「……せっ！！」

瞬時に天魔の懐に飛び込み腹を掌で打つ。
が、天魔も高速で動く妖怪『天狗』の一員。私の動きなど簡単に見切る。

前回は木々があり、図体のでかい天魔には不利な状況だった。
今回はせいぜい周りに木々で出来た土俵があるだけ。
向こうも充分に動けるスペースがある。

背中に生えた巨大な羽根を動かし、私の掌を上空に逃げる事で避ける。
と同時に手に持った葉団扇で真空刃を放つ。
私も即座に地面を蹴り、横にダッシュする事で避ける。

…私の弱点は『相手が上空に居ると攻撃が出来ない』という物だ。
何分、相性があるのか、私は人化状態の時、空を駆ける事が出来ない。
私にとって空を駆けるとは、足場を踏み『衝撃』を使って、高速で地面すれすれを移動する事を言う。
足場が無ければ、私は空中では無力になる。それが弱点。

ちょこまかと移動しながら腕や脚を振り、此方も真空刃を放つ。
前に使った竜巻モドキは疲れるし、格上の妖怪には簡単に相殺されるから使うのを控えさせていただいた。

「どうやら単に旅をしていた訳でも無さそうじゃな！！」
「あったり前でしょっ！！」

次の新技（？）。
地面を思いっきり踏みつける。衝撃で石や砂、砂利等が空中に浮き上がる。ついでにクレーターも出来たけど気にしない。
八雲からの逃走で思い付いた技だ。
空中に浮かんだ『散弾』を纏めて蹴り撃つ！！

「ッ！？フン！！」
「…あらら、巧く行ったと思ったのにな…」

なかなか巧く物事は進まない物で、天魔は驚きはしたものの簡単に葉団扇の一振りで散弾を弾き飛ばしてしまった。

「考え方は良いかも知れんが、動作が大きいぞッ！！」
「おっと！りょーかい！！」

妖力の弾を避けつつ、次の手を考える。

……よし。纏まった。
上空には天魔。真空刃や妖力の弾幕を此方に次々と放っている。
地上には私。攻撃は全て避けきってるけど如何せん、攻撃手段が上空の相手には殆ど無い。

相手が上空に居て攻撃出来ないなら、同じ位置にすれば良いだけ。
けれど、私には足場が無ければ空に飛べない。

妖力を爪先に溜める。妖弾を爪先から発射…無駄に妖力使うなぁ…
……。
…まぁ、打てるから良いか…。

誘導弾とかは難しいけど、放つぐらいは出来るんだよ？

「何を見せてくれるんじゃ？」
「ハハッ、楽しく行こうじゃないッ！！」

弱点というのは、足場が無い所で私が全く身動き出来ないからだ。
なら、足場を作れば良いだけの事！

上空に飛び上がり、爪先から出た妖力の塊を足場にして、今度こそ天魔と相対する。
……ぴょんぴょんと何度も爪先から発射して飛ばないと高度を維持できない！！
ダサッ！！

「……ま、まぁ考え方は良いのじゃないかの？」
「…泣きたくなって来た」

……しかも妖力の総量で言えば、天魔が圧倒的に多いという部分だけど…まぁ、どうしようもない……。

…今はこの爪先から妖弾を出す感覚に慣れて無意識に出せるように特訓だ。

……いや、封印すべきかな…。

私から突進。右手の掌で左肩狙い。命中。バランスを崩しつつも腰から刀を居合いのように抜き、切り裂く。飛び退いて足場がある事を確認、両手の爪から真空刃を射出。刀で一閃、ガラス細工のように刃が砕ける。『ＡＲＭＳ』の最強お父さんかアンタ。とすると私は天魔の弟か？私殺されるじゃん。その刀を爪で受け止め、口から奇声を出して衝撃を与え、吹き飛ばす。うん、奇声出すのは止めよう。喉がものっそい痛い。もいっちょ突進。真正面から飛び蹴り。あっさり避けられる、当たり前か。右手に持った刀、左手に持った葉団扇で、無造作かつ的確に私を狙う大量の真空刃。ていうか刀からも発射出来るのか。左右上下に避けつつ前進。でも進めば進むほど弾幕の密度はどんどん増していく。避けきる事が無理に近くなったので此方も爪の真空刃で応戦。衝突した刃が真ん中で粉々になっていく。埒が明かないので、大音量の音を出す。私は無論耳を能力でガード。天魔の方は耳を抑えて後退している。再三突進！足場を小まめに作り、段階的にｋｓｋしていく。やっぱり耳は色々と重要なのか、微妙に反応が遅くなっている。背後からの回し蹴り！あっさり命中。むしろ此方がちょっとびっくりして、動きが止まっちゃった程。衝撃もプラスしていたからか面白い程吹っ飛んでいく。が、そこは天狗の長。空中で見事に体勢を整え、再三相対する。今度は天魔から、此方へ突進、やっぱりかなりの速さ。私に近付いて刀を

振る。斬撃は能力でガード出来ないから避ける。若しくは爪でガード。でもって単純な剣の実力だったら天魔がやっぱり上なので、当然、私の方が切り傷を受ける事になる…誰だよ肉弾戦が得意とか言った奴…私か。尚も振られ続ける刀。右上、左下、右、左、上…下！受け止め白刃取り！驚愕中の天魔の腹を蹴り、刀を奪う。けどまぁ私は刀の使い方など解らんので、あっさり天魔に返す。と言ってもぶん投げて返したんだけど、危険？知るか。けど、それが天魔の心に火を着けたのか（？）先程の速度は何？舐めてんの？みたいな速度で迫ってきた。刀を居合で振り抜き、私の服を切り裂く。この変態！！避けてなければ死んじゃう所じゃないか！？ならば私も最高速でお相手致すのみ！爪先からの妖弾ではあの速度に合わないので、慣れている『能力』で足裏に竜巻を造る。自分の進行方向に風が圧してくれる仕組み。とんでもなく疲れるから短期決戦向き。その分、加速減速が自由自在に出来るからやりやすいんだけどね。天魔も私も最高速だ。恐らく下の三人には、はっきり見えないだろう。刀で袈裟斬り、その刀の腹を掌で打ち、軌道をずらす。打ちながらその打つ手と同じ方の足を、天魔の脇腹に打つ。バックされて回避。回避された足の爪先から真空刃。下降する事で回避される。その下段からの斬り上げ。横回転しながら避けて裏拳。片手で受け止められるも『衝撃』で仰け反らす。吹き飛びながら葉団扇を振る。爪で刃を砕く。案外天魔の真似はやれば出来るもんだ。同時に相手へ突進。刀と爪のつばぜり合い。が、衝突で『衝撃』を操る私は、天魔に瞬時に押し勝った。体勢を崩した天魔、それも即座に建て直し此方を睨む…睨むなよ。私の攻撃、真空刃を撃ちつつ懐に入ろうとする。真空刃は砕かれるか避けられるかで、天魔に傷一つ付いてはいない。

次の新技、お手を拝借、某錬金術士じゃないけど、柏手をお一つ。両手に挟んだ物は『空間』。
衝撃の方向を操り、両手の中に空間を圧縮した。

それを妖力で簡単に封じる。
ラストの一押し、封印が破られた時に、空間が戻ろうとする衝撃を増幅させる、妖術と能力の連立式を埋める。
両手を開き、出来たのはビー玉位の暗い緋色の小さな玉。
私の眼の色は能力の色って訳か。

攻撃が止んだのを見て、此方へ攻撃をする天魔。真空刃、葉団扇の風圧、どれもが私を切り刻む軌道を描く。左手に玉を握り込み、右手で真空刃を砕く。天魔接近。私が左手に何かを隠してるのは既に気付いてる。ここら辺が年季の違いという奴なんだろうなぁ。けれど天魔はそれを何かしようとはせず、斬り会いに持ち込む。良い奴だ。しかしながら、両手対片手がどれだけキツいか、私は幽香でもう知っている。なら……さっさと終わらそうか？

刀が私の脳天に振り下ろされる所を、爪でガードする。能力で弾き返す事はせず、受け止めるように。
その事に疑問を持ったのか、天魔は攻撃を一時停止してくれた。

「天魔」
「なんじゃ」
「最後だ」
「……良いじゃろう」

同時に相手から距離を取る。離れる時に私は静かに左手から玉を離す。
天魔は気付かず、大技を放つつもりか葉団扇を仕舞い、両手で刀を持っている。
私もそれらしく大技の術式を組み立てる。

目指すは『万物流転』！！
パクリがどうとかはもう気にしない！

「おらぁあぁぁ！！」

天魔がなんか若返って月牙天衝っぽいのを撃とうとしてる！？

「ッッ『マハガルーラ』！！」

私と天魔の丁度中間に出来た巨大な竜巻（それでも中威力）それは天候も悪化させ、風が木々の枝をもぎ取り中へ巻き込み、更に巨大化しようとしている。
私も足の小型竜巻が無ければ、中へ巻き込まれそうだ。
……全体魔法にしなけりゃ良かったよ…。

「ゆけぇえぇ！！！」

それ目掛けて振り下ろされた天魔の刀。
天狗の疾風は巨大な斬撃になり……っていうか、あれ色違いなだけじゃね？
青とか黒じゃなくて緑色の月牙天衝？

「…ゲッ！？」

竜巻と斬撃は、最初は拮抗していた。
が、みるみる斬撃は竜巻を削り、竜巻を遂に消し飛ばした。
それどころかまだまだ威力は衰えず、私に直進してくる。

…ここで大どんでん返しと行こうか。

天魔の斬撃は竜巻と拮抗している間に形を変え、上下に細長くなっている。

上は雲に届こうかとしており、下は地面を削っている。

…そう、地面を。

……玉が落ちた、地面を。

封印は斬撃によりあっさり破られ、中にあった圧縮された空間が元に戻ろうとする。

…知ってる？空間が元に戻ろうとする力って、馬鹿みたいな威力だっていう事を。

「「「「「　　」」」」」

空間が戻る際の力。
プラス私の能力。
それは天魔のあの斬撃をあっさり消し飛ばし、
それを見て最高速で逃げようとした私と天魔をこれまたあっさり巻き込み、
それを見て呆然というか諦感（？）していた弥野・縞・作久を瀕死に追い込み、
遂には此処等一帯の地形を変えた。

次に私が目を覚ましたのは三日後。
枕元には全身傷だらけの天魔。どう見ても阿修羅ですありがとうございました。

「ド阿呆ぉ！！！！」
「ぅな～！？スミマセン！！」

決闘。ってなんか憧れる（後書き）

空間圧縮は『ＡＮＵＢＩＳ　ＺＯＮＥ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＥＮＤＥＲＳ』より。
火星の小衛星一つの圧縮範囲で太陽系全域を巻き込む、というお話。

閑話集（前書き）

パソコンが炎上したので遅れました。ごめんなさい。

閑話集

「お邪魔するわよ、詩菜ちゃん♪」
「……勧誘ならお断りだよ」
「つれないわねぇ」

太陽が頂点に昇り、さて何をしようかという時の自宅にて。
いきなり空間に線が引かれたかと思いきや、中から現れたのは八雲紫。
…無駄に人を驚かせるな……人じゃないけど。

まぁ、妖怪を家から無闇に追い出すような気分でも無いし、普通におもてなしをしますか。

「ホイ、水」
「…毒？」
「……アンタにだけは言われたくないよ」
「…いえ、普通におもてなしされちゃったから、どう反応していいかわからなかったのよ」
「その胡散臭い仕草を止めたら良いんじゃない？若しくはいっその事、性格を変えたり」
「……機嫌が良いのかと思ったら、普通に毒を吐いてきたわね…」
「毒水だけに。って訳？…ていうかいつも通りだよ？私は」

…前回、天魔にこっぴどく叱られてからちょっと自重してるだけさ……ハハハ…。

「……」
「…どうかしたのかしら？いきなり黙って？」
「ん。いや、普通にヒトの心配とかするんだなぁ。って」
「貴女は一体どんな眼で私を見てるのよ…」
おお、血管が浮き出てる。怖い怖い。
「もちつけ、この毒水でも飲むんだ」
「本当に毒なの！？」
「嘘だけど？」
「くっ！のらりくらりとかわしちゃって…！！」
閑話休題（本当に便利だこれ）。
「んで、結局は何をしに来たの？」
「…ハァ、良いわよ……もう諦めかけてるから」
「つまりは暇と」
「なんでそう繋がるのよ！？「多少はそうだけど！」って何私の真似をしてるのよ！？」
「……八雲さんの心の代弁、的な？」
「なんで疑問系！？」
「もちつけ、この普通の水を飲むんだ」
「やっと普通の水を出したわね…！」
椀に並々に注がれた水を豪快に一気のみしたよ。
……酒とか強そうだなぁ。

「……『中立妖怪　詩菜』…」
「…何それ」
「貴女の二つ名よ」

…『中立』……中立、ねぇ…。
まぁ人間を襲ったと思ったら妖怪を退治したり、果てには神様と仲良くしたかと思えば、里を暴風で荒らしたりしたからなぁ…。
合ってるっちゃあ…合ってるか。

「…いい二つ名じゃない？」
「あら、そう？我ながら良い出来だと思ったのよね♪」
「アンタがわざわざ作ったの！？」
「……暇な事の何が悪いのよッ！！」
「開き直った！？いや、悪いとは言ってないけどさ！？」
「じゃあ広めていきましょうか♪」
「うおいッ！何しようとしてんの！？」
「…宣伝、かしら？」
「何の！？」
「『私の式がどれだけ使えるか』の宣伝よ♪」
「外堀から埋めようとするなぁ！！」

結局。
『中立妖怪　詩菜』は広まってしまいましたとさ。

私が彼女を知ったのは、とある湖の近くを旅していた時だった。

再び家を飛び出し、今度は逆方向に行ってみるかと風に変体して流されている時。

「……！……！！」
「……んん？」

何やら争っているような声が聴こえる。
空を眺めていた視界を動かし、眼下に広がる草原に眼を凝らす。

「…妖怪と……妖精か？あれ？」

いつぞや皆殺しにしかけた狼の妖怪に妖精が囲まれている。
中央には青い髪に青いワンピースの妖精。

……もう時代錯誤な服装には気にしない事にしよう、うん。

…妖精らしくイタズラで、あの妖怪に喧嘩でも売ったのかね…？

よくよく見れば妖精の後ろの方に瀕死っぽい緑色の妖精が一体、倒れている。
妖怪に立ち向かっている妖精は能力を持っていて、それなりに強い妖精なのか周囲に冷気が漂い、妖怪を遠ざけている。

「くっ来るな！！」
「グルルルル……！」

…成る程、仲間を助けようとしてるのかな？

妖精は死んでもすぐに復活するから、別に今ここで殺されても大丈夫なんじゃないかな…と思う。
けど、後ろの仲間か友人を守ろうとする青い妖精の眼は、必死に生

き残ろうとしている眼だ。

……面白そうじゃない。

あの狼型妖怪は何処が弱点かどれくらいの実力かどの部位が肉として美味しいか、よ～く解っている。

あの数なら余裕と判断。地上に降りる。

「……ねぇねぇ、そこの妖精さん？」

「ッだれ！？」

正体を表せという声も、声に戸惑う狼も無視。

因みに私は妖力を隠し、風の状態。見抜ける妖怪なんて本当の大妖怪じゃないと無理…な筈。（ｂｙ幽香の話）

「貴女が後ろに庇っているのは誰？」

「ッッ！大ちゃんは殺させない！！絶対に！！」

「大ちゃんね……んじゃあ、なんで守ろうとしているの？」

「友だちを守るのはあたりまえのことでしょ！！」

あたりまえ…ね。

「んじゃ、その友達を助けるから貴女は死ね、って言われたら？」

「アンタもコイツらもみんな倒す！」

「…んん～？話が通じないなぁ……」

そうこうしている間に、声が出ている居場所を掴んだのか、私の居

る場所を的確に攻撃してきた一匹の妖怪。

まぁ、吹っ飛んでろ。

簡単に突風を私の周りに一発。ハイ吹き飛びさよなら。

「つまり、友人も自分も助けるっていう訳？実力の差なんてはっきりしてるのに？」

「…わかってるよ……でも！アタイは、仲間を見捨てたりはしない！！」

うーん、６０点。

でも、ま、合格？（何様だよ）

「オッケーオッケー。面白くなってきたッ！！」

「ギャンッ！！？」

姿を表し、妖精の盾になるように立つ。

一番近い妖怪に振り向き様に真空刃を発射し、残り四体。

飛び込んできた奴の鼻面にデコピンを１つ。顔面複雑骨折サヨウナラ。残り三体。

挟み撃ちで同時に突進してきた二匹を、両手の爪でさっくり切り裂く。残り一体。

怯えて逃げ出す最後の一体。逃がすかっつーの。

瞬時にダッシュし妖怪に追い付き、人差し指を滑らかに鼻先からお尻までなぞる。ハイ終わり。

スタスタと歩いて妖精の元に戻る。

「…なんで最後のやつ残したの？」
「ん？こういう事」

…ギャアッ！？
ちょっと離れた所から何かが真ん中から割けた音と、まるで身体が半分だけ転んだような音が、立て続けに二回。
目指せ北斗〇拳、目指せ斬〇剣。

「よし、威力も時間もピッタリ」
「……ハァ～…」

緊張が抜けたのか、腰から崩れ落ちた……誰だっけ？
瀕死なのが大ちゃんで…守ろうとしてたのは……あれ？名乗ってなかったっけ？

「ねぇねぇ、貴女の名前は？」
「…チルノよ。アンタは？」
「ん？私は詩「ってそんなことより大ちゃんがッ！！」ぉい、そんな事かよ」

そんな事かもしれないけどさ…。

回復用の術式を組み立て、大ちゃんに翳した手から妖力を元にした自然エネルギーを与える。
自然現象が具現化したものなら、これで回復すると思うんだけど…
……よし、成功。
みるみる傷が修復され、顔に血の気も戻ってきた。

「……ぅう」
「大ちゃん!!大丈夫!?」
「…あれ?…チルノちゃん…どうしたの…?」
「……良かった…!」

感動の再開。ってかね?
お邪魔虫らしき私は退散するとしよう。

…今度、またいつかこの湖に寄ってみようかな。

「……『太陽の畑』ね…」
「いらっしゃい。中立妖怪さん」
「……それは止めてよ、幽香」
「あら？素敵な二つ名じゃないかしら？…私は名乗りたく無いけど」
「だろうね……私もだよ…」

『太陽の畑』という看板が立てられ、それを眺めていると声をかけられた。
無論、風見幽香である。

「…さて、ここに来た。という事は準備は万端なのかしら？」

……そんな嬉しそうな顔をしなくても…。
…やっぱりどSなのか……？

「いや、万端からじゃないから、稽古をつけに」
「…私から教えを直接受ける、って事かしら？」
「……あ～、ダメ？」

痛い思い、どころか死ぬ気でやらなくちゃダメなんだろうけど……
…死なない為に特訓するんだったら、一番この人が合ってると思う

んだよね。

「今まで逢ったヒトの中で、一番体術が上手いのが幽香だったからね」

「……まぁ、とりあえず勝負ね」

あ、さいですか……。

「行くわよ」

「ふぅ……来いッ！」

傘を持たない幽香。ハンデだってさ。

一方、能力・妖力・ようやく回復しかけてる神力、どれも全開にして使って良い私。

……これでも私が負けてるんだぜ…どんだけなのよ……。

しかしながらも、動体視力及び身体機能も若干上昇しているので、前回みたいに何も出来ず、能力のよる自然回避が発生する事も少ない。

「でもッ！攻撃するッ隙がないッッ！！」

「ほらほら♪もっと行くわよ！」

「ぬわっ！？」

飛んできた右拳を両手で受け止める。衝撃を封じ無理矢理拳を止める形にして、幽香の肘に負担をかける形に持っていく。
けど両手を防御に使うという事は、その他から来る攻撃に対して防御が疎かになるという事。
右肘の関節に響く痛みを無視して、私の脇腹目掛けて蹴ってきた左足。よくやるよ。
……ほんと、能力無かったら何度死んでるやら……。

右に引いて思いっきり幽香の腹に目掛けて掌を当てる。それも上手い具合に身体を引いて、威力を殺される。
距離をとって、さぁ仕切り直しかと思ったら、幽香が声をかけてきた。

「…肉弾戦は貴女にとって最高の場」
「？」
「『衝撃を操る程度の能力』は打撃に対しては、最強の防御手段」
「…まぁ、そうなるだろうね」
「一方私は『花を操る程度の能力』を持ってる。これは戦闘においては、それほど使えるという訳でも無い」
「ハ、ハァ……？」

だから何なのさ…？

「衝撃を無効化する相手なら、衝撃以外で攻撃すれば良い訳よね」
「……何が言いたいのよ？」
「つまり、使い方次第では能力も上手い活用出来るって事よ♪」

「…？……ぐえっ！！？」

いきなり首にかかる圧迫感。

…く…『花を操る程度の能力』……ね…。

「…く、ぐ…操った蔓で……絞め技…か…！！」

「フフ『衝撃以外で攻撃すれば良い』…そして私の能力。どうやら相性は最悪なのかしらね？」

…いかん…！意識が遠退いてきた……！

なんとか意識を集中して爪を伸ばし、首に絡まった蔦を切り裂く。

「ゴホッゲホッ！…まぁ、植物なら切れば良いけどね…」

「じゃあこうしましょう♪」

「ムギュ…！！」

今度は腕、足も一緒にがんじがらめに縛られる。

「これでどうかしら？」

「…さっきよりも首が絞まってないし、なら…『ガル』！」

自身を中心に竜巻を発生させ、全身に絡み付く植物をぶつ切りにする。

「ホイ、っと！」

「…鎌鼬だから斬撃でも傷が付かないのか、貴女の言う『衝撃属性』だから傷付かないのか…分からないわね」

「まぁ能力なんて、どう認識するかによって変わってくると思うよ？」

喋ってる間にも、妖力を薄く円形に引き延ばしている。
回転しながら私の周りに浮かぶ幾つかの緑色の刃物は、私がイメージする技と寸分違わずに再現した。

「行けッ！『ザムト』！！」

私の命令に従い幽香に殺到する真空刃は、触れる物全てを切り裂く。
なかなかにホーミング能力も高い。

……これもネタ技、パクリですよ。ええ。

五つ位発射して、それを全部一気に幽香に向かわせたんだけど……。

「……もう終わり？」
「…この個数が私の限界です……」

あっさり全部避けられて終わり。
…いや、この人の身体能力が異常なんだって…。

「ねぇ？他に面白い技は無いの？」
「ええ～…？」

なんでそっちがワクワクしてんの……？

……あと…あと何がある…？パン○ラで面白い奴ぅ…？
ビクシオマ、フレイスカロス、ヴァダズム、ギリィク、エクストリーム…ってこれは公式チート銃か。

後はどれもこれもがレーザーか炎の技だしなぁ……せいぜいアバッツか…？

…いや……あるか？。

ん～…？威力だったら前に天魔にやった空間圧縮がヴァドに一番近いかな……？

でも太陽の畑でやったら咲いてる花は全滅するだろうし……何より威力の調整がまだ終わってないんだよねぇ…。

「…一個だけあるけど、威力の調整が出来ないし花が全滅するかも…？」

「……どのくらいの範囲を巻き込むのかしら？」

前回はビー球の大きさで辺りの地形が変わったからなぁ……。

最低威力は握り拳位？の大きさだから、ＢＢ弾程かな…？とすると…範囲は……直径５０ｍ位かな。

「…え～と……」

ｍ（メートル）って言われても、わかんないだろうなぁ……。

「……今の幽香と私の距離を五つ分位かな？」

「…結構な範囲ね。じゃあ上に投げてくれるかしら？」

「まぁ、良いけど……知らないよ？」

幽香が１００ｍ程の上空に浮上していくのを見ながら、右手に力を込めて思いっきり握り締める。

能力操作、能力操作に妖力封印。完成『緋色玉』。

初めてのオリジナル技だよやったね！！

……扱いづらいけど、ね……。

「行くよ～！！…うおりゃ」

緊張感の無い掛け声と共にぶん投げる小さな玉。
物凄い勢いで上昇し、幽香の居る高度を越え、上昇を止めた所で爆発。
真っ昼間から花火とはまた随分と虚しいものだなぁ……しかもたった一発って。

雲１つ無い青空に突如として現れた赤黒い球体。それなりの高度で爆発したにも関わらず、地上に居る私が爆風で圧されたのだから凄い。

…さーて……幽香は…何処だ？
上空に眼を凝らし探す。居ない。

「…あれ？」
「……あれ…じゃないわよ…」
「うおッ！？いつの間に隣に！？……うん？落とし穴ですか風見さん？」
「……私の着陸跡よ」

あちゃー……。

「…なんか、もう…色々とスミマセン……」
「本当よ…ハア」
ハハハ、ハ……笑えねぇ…。
禁止にしようかな…これ……？

空腹、及び演説（前書き）

さてさて、暑い夏がやってきた。
私の汗も止まらない。布団のシーツはまさに聖骸布。

空腹、及び演説

『お腹が空いた』。

原因は解ってる。ろくに食事をしてないからだ。
最近、人を助けてばかりで、しかも其処らの小さな鼠位しか食べていないからだ。
しかしそこは恒例の『妖怪スペック』がある。妖力で身体に力はいつも通りに入る。
のだが、その妖力とは別に何か妖怪の『源』となるような大事な栄養素が、マッハで足りていない状況。
故に『空腹』也。
誰か人間を脅かせば一発で治りそうな物だが、何分私の現在地が既に険しい山奥。
その場その場の気分で物事を決めちゃう私は、現在進行形で後悔すること山の如しだちくしょう。

しかし、
しかしだ、
しかしながらも今更だったりするが。
人間を喰えば、そんな悩みもあっさり溶けるだろうし、慣れればこっちのものでもあるのだろう。
更にしかし、いくら何でも私は人を喰らってまでは回復したくはない。それは私を私で亡くしてしまうような、そんな気がするから。

まぁ、これも何処かの吸血鬼みたく、一度食べてしまえばあっさりいけちゃうのかも知れないけど。

現に妖怪を生で頂く事に違和感は無いし。

閑話休題。

とか言ってみたりしているが、別に先程の話は前振りとかいう訳でも無く、本当の『閑話』というだけ。
なのだが、お腹が空いているというのは恥ずかしながら、事実である。

…グゥ～……

「…うが～……腹減ったぁ～…」

先程も宣った通り、現在私は人間も住まない妖怪の天下の、そして山奥の頂上近くという前人未到の地をうろちょろと、目的も無くただ歩いてみたらこうなっちゃったぜ的な状態な訳である。

コメ印、空腹の為、言語回路に一部問題が発生しております。ってか？

そしてそんな私を、傍目から見て私を『人間』と判断したのかも知れないが、私を襲おうとする辻斬りみたいな妖怪が次々と襲いに参り寄る。

なんかもやもやした感じの奴ら。
喋れないような小さな妖精達。
どこぞの四つ足獣。
大型肉食獣。

あ～……うぜぇ。
という訳であるので、即刻視界から立ち退いて頂きたいのだが、如何せん腹が減った現在の私はめんどくさがりやの頂点の如く、自分から動こうとしない。

誰かなんかぶっ飛ばしてくれないかなぁ…？
なんて妄想も光陰、矢のごとし。
つまりは私がここで動かねば、私は動かぬ死体と化しちゃってしまう訳だ。
後悔先に立たず。覆水盆に返らず。

「やれやれ……」
「グルルル…！」

威嚇されても何の事やら、私にはさっぱり。

つまりは今の状況は、私が自ら動かなくてはいけないという事なのだ。要するに。この場合は。

攻撃開始。

飛び掛かる獣を避け、もやもやしたのやら妖精らしき燐光が光る玉を撃ち、大型肉食獣は私を追って来た妖怪を、逆に美味しく頂こうとしている。味方じゃないのかよ。

獣の攻撃を避け、相手の後ろの襟首のぷよぷよした肉を掴み、そのまま私を狙うホーミング弾をガードするのに使わせて頂く。

まぁ盾として死んでくれた妖怪を私は喰うなんていう趣味なぞ持っておらぬので、とりあえず大型肉食獣にでもぶん投げておく。

あ、駄目だ…動くと余計に腹が減ってきた。

くたばっている獣を食べたい欲求を抑えて光弾を避ける。

回避出来そうに無い奴はガードしつつ、出来るだけ妖力の消費を抑え物理で相手を吹っ飛ばす。

大型肉食獣は未だにザコ妖怪に御執心なので、とりあえず……気絶でもさせとくか。

…んん～？……イヤ、もっと派手に行くか。

大型肉食獣に素早く近付き、頭の横にある…耳？らしき物の近くま

でよじ登る。
空腹に苛まれつつも、声を張れ。そう、もっと大きく！！

「さぁさお立ち会い！！ご用とお急ぎの無い方は、御覧あれ！これから魅せるは衝撃の魔法、摩訶不思議の顕れ也や！未熟な渡世を致す者。とは言え感心期待に合う演技であれば、釣り銭投げ銭を無下に断る必要も無し！まぁま御覧あれ！！」

頭を彷徨く小さな虫を振り払おうと頭部をぐるんぐるん揺らすも、大声に変化は無し。演説も最後まで止まる事無く、恙無しに無事終了致せり。

さぁて実演販売の時間である。

「未熟な料理人とは私の事！！外聞気にせず、羞恥も解らぬ田舎者故、摩訶不思議な下手物（ゲテモノ）をば…作らせて頂きたく候う！」
「先ずは解説をば、させて頂く！！」
「肉を斬らせて骨を断つは昔のお話！！今は肉も骨も全て丸ごと頂くがこの世の習わし也！」
「故に今時の料理人には道具が必要！！しかしなれどこの田舎者、そんな物を持たずに上京！周りからは白い目の白眼だらけ！！」
「さぁさこの大物相手に田舎者はどう立ち向かうかが今日の目玉也！！」
「周りに観客！！野次や座蒲団！果てには弾幕！！逃げる場所は何処にも無し！！」

「しかしながらもこの田舎者！単なる田舎者では無い！！」
「さぁさ私の手には何も無し！！我は小さき者！故の手の可愛さ！其処には健康的な指が。ア、一つ？二つ？三つ四つ五つと存在致す！！」
「包丁、刀に剣！刃に鉋、鑿！鋸、鉞、鑢に鎚等は何もありゃせぬは御覧の通り！！其れこそ周知の事実也！！」
「摩訶不思議な実験は此処からが本番！故に得と御覧あれ！！既に得物は我の手の内に在り！！コトワリ持たぬ料理人！刮目せよ！！」
「先ずは危険な部分を裂く作業！しかしながら危ない所にこそ、何かがある！！虎穴に入らずんば虎児を得ず！！能ある鷹は爪を隠すは今日の格言！爪や牙は大事に遺し、次なる機会に遺すも良し！！」
「今回の獲物は余分な肉無し筋肉型の大型！！大事な部分も大量販売！」
「脅威は早くに去るに越すことは無し！！腕や手、脚に足は脅威の権化！」
「血肉を喰らい、血肉と致せ！！骨も骨を骨と骨になされ！！」
「背骨こそ最大の難関！図体を支える物は精神、肉に骨と根性！！故に頑丈頑強強固に強力！！」
「五臓六腑に内臓逸物！肉体を肉体足らしめる物が臓物！！苦味旨味甘味に辛味に色んな思ひ出！！」
「田舎者には田舎者の理有り（コトワリ）！！郷に入れば郷に従え！料理は完成、脅威はさり驚異で無くなる！！」
「血みどろに染まる地に伏せ頂け血肉！！派手に如何や夢の国！！」

……フハァー……！
…やりきった…！
なんか途中からよく解んなくなったけど…気分は最高……！！

「……貴女、物凄く恥ずかしくなかった？」
「ぅおう！？八雲さんじゃあらしぇんか！」
「…口調が直ってないわよ。それとも噛んだのかしら？」
「おっと、こりゃ失礼致しやした……ん、良し。それで何か用事？式神はいつも通りお断りだよ」
「……まぁいいわ。たまたま妖怪をその場で『料理』する妖怪、を見つけて暇潰しに眺めてたのよ」
「…ふ～ん……」
「…ふ、ふーんって貴女…もうちょっと、その…さっきの調子は続かないのかしら？」
「…ムチャイウナヨ…ムリダヨ、モウ……」
「一体誰なのよ……」

ハイテンションで空腹を乗り越えられるかなと思ったけど……無理でした。

「…そういえば八雲さんの、その術?能力?って移動とか物置に使ったりしてるよね?」
「能力よ。『境界を操る程度の能力』。まぁ私はスキマと呼んでるわ」

だからなんで『~程度の能力』なの?
境界を操るってそれもう『程度』っていうレベルを越えちゃってるから!
ていうかスキマって……スキマ、か…。
言われてみれば……スキマにしか見えないな…あれは。

…まぁいいや。

「…頼みがあるんだけど…さ?」
「…?何よ?改まっちゃって」
「あ~……ご飯、おごってくれない?」
「……」

…おおっと、笑顔が凍り付いた~!!

「……もしもーし?」
「……ほんと、妖怪らしくないわね…貴女は……」

…自覚してますよ、ええ…。

「どうせ貴女の事だし、しばらく人間を襲ったりもしてないのでしょう?」

「…ハハ、大当たり……」
「……はぁ～…ま、良いわよ？一緒に幽香の家にでも行きましょう」
「あ、そこは幽香に頼るんだ…」
「なんで私が料理しなくちゃならないのよ。めんどくさい」
「……料理が出来るとモテますよ…」

21世紀の日本だけの兆候かも知れないけど。

「…誰に？」
「そりゃあ……料理の出来ない、大妖怪？」
「……良いヒトって何処かに居ないかしらね…」
「…ハハハ」

「ま、こんな話なんてしてないで幽香の家に行きましょうか」
「…いきなり行って、色々迷惑にならない？」
「もともと今日は幽香の所に行くつもりだったのよ。途中で貴女を見付けたのだけど、ね」
「ふぅん…」
「二名様、ご案内～♪」
「……ツアー？」
「『スキマツアー』よ♪」
「…なるほど」

不覚にも納得しちゃったよ、チクショー。

紫が扇子を縦に振り『スキマ』を開く。

外からスキマを見ると、何処と無く某錬金術師の『真理の扉』を彷彿と……いえ、なんでもないです。いきなり振り返らないで下さいよ八雲さん。

「何か変な気配を感じたのだけれど……？」

「…ちょっと、中身があれだなぁ……と、思いまして…」

目玉に何本も手がうにょうにょしてたら、そりゃあ……ねぇ？

「こんなのは慣れよ」

「…そりゃあ、その能力を持っている貴女からすりゃそうでしょうよ……」

「強制送還♪」

「いきなり足場に穴が！？でも浮けば無問題（モーマンタイ）！！」

静止だけなら（頑張って）浮けるんだぜ！！

「堕ちなさい♪」

「それ漢字ちゃうぅぅぅ……」

扇子で叩かれ落下中。

だから『静止するだけ』ならなのに……。

「着地成功！！」
「…代わりに地面がひび割れてるわよ？」

落ちてみると場所は幽香の自宅前。
……向日葵の上に落ちなくて良かった……。
前ちょっと、向日葵を折りかけたら物凄い怒られたからなぁ…くわばらくわばら。

「ん、能力の制御までおかしくなったかな？」
「……制御出来ない、ってどういう事よ？」
「お腹減ったからよ…この子は……」
「…ああ、納得ね」
「納得された！？」

そんな私って単純……だな…。
幽香にいつも見透かされてるからなぁ……。

グゥ…

「……テヘ」
「ハァ……ま、良いわ。早く入りなさい。詩菜も限界みたいだし」
「有難う御座います！！」
「お邪魔するわ♪」
「あ、詩菜は裏で身体洗ってきなさい。私の家を血だらけにしないで」
「……了解」

「「御馳走様♪」でした」
「御粗末様でした」
「いや～……こんなに食べたの久し振り」
「どんだけ食べていなかったのよ？」
「え～と…天魔の所を出てからずっと野宿だったから……二年弱位かな？」

年齢は……もう少しで４０歳か？
つまり人間の時と合わせたら６０前？
……ロリババァだな。うん。
まさか自分がなるとは……。

「それは…やり過ぎだわ」
「…うん。今回は自分でもかなり痛感して居ります…」

今度からは計画的に旅路を…！！

「……旅に出るのは止めないのね」
「一ヶ所に留まって何をしろと？」
「天魔とイチャイチャすれば良いんじゃないかしら？」
「ブッ！？ゴホッゲホッ！いきなり何を言うのさ！？」

おもいっきりむせこんだじゃないか！？
んがッ！！鼻がっ…！！

「へぇ……貴女にもそういった話があるのね…紫、本当？」
「相手はかなりの本気よ？」

女子会！？女子会のノリなの！？
ちくしょう！こんなキャッキャッウフフは男子の時に体験したかった！！

「なんでも詩菜ちゃんに勝負を吹っ掛けたら、良い感じになっちゃったのが切っ掛けだったそうよ」
「なんでそんな色々知ってるの！？ねぇ！？しかも細部が微妙に違

うし！」
「え？天魔本人から聞いたわよ？」
「てんまぁぁー！！？」

再来

はてさて、八雲や幽香に言われて無謀な断食の旅（？）を止めて、適度に妖力を養い、適度に神力を溜めていく生活。
バランスが大事なのはいつの時代でも同じって事だね、うん。

そして今回のお話。
無謀な断食を止めてから五年程、月日が流れた。

妖怪が揃いに揃って、とある場所を集団で襲うらしい、との事。
どうやら相手側に対する不満感が妖怪内で爆発したようで、血気盛んな連中がわらわらと集まっている。

私？私は今回辞退。
中立妖怪なんて来たらフルボッコにされちゃう。
という訳で、上空にていつものステルス迷彩で観察中です。

…仲間内でケンカ始まってるし……あ、でもすぐに終わっちゃった。
……目的達成の為に今は引いてやるよ…って感じかな？どんだけ相手嫌われてんだよ。

集団が動き始めた。
先頭に居るのはさして強くも無さそうな中型の妖怪。リーダーにしては、周りの奴等の方が強そうだ。
私も行進（？）に合わしながら、上空からの覗きを継続する。

何となくと観察していると、集団からちょいと離れた所から、会話が聴こえてきた。

「んでよ！アイツらでもこれだけいりゃあ無理だろうよ！」
「ガハハハ！！あの二人も尻尾巻いて逃げ出すんじゃねぇか！？」

相手は二人か。
……二人を相手にこれだけ必要って…。

「神だかなんだか知らねぇけどよ！ブッ飛ばしてやろうぜ！！」

神様か、相手は。
成る程ね。それでこの集団な訳か。
神妖大戦争ですか？

「…おらぁ、ミシャクジやオンバシラが怖ぇよ……大丈夫かなぁ？」

……ミシャクジ？オンバシラ？

「ハッハッハ！！そんなもん、俺が踏み砕いてやるよ！！」
「おうッ！！あのガキンチョを踏み潰してまえ！！ガハハ！」

……。

二人。神様。ミシャクジ。オンバシラ……幼児？
って完璧に守矢の神社が標的になってるじゃん！？

……どうする…知らせるか？
こんな大集団。気付かない方がおかしいと思うけど…妖力で丸わかりだし…。
…けどこれだけ集まられたら、彼女達に勝機はあるかな…？
多分こっちも対策か何かしてるだろうし…。
でも…諏訪子にはあれだけあった後で逢いにくい……。
ああー！もう！！…ええい！南無三！！

急いで伝えよ！
知ってたら知ってたで私にも何か出来る筈！！

「……ッあった！！」

いまいち守矢の場所を覚えていなかったので、集団を先回りする事で神社を見付けた。
暴風と化して大空を駈けていく。

とりあえず、彼女らのテリトリー外から中の様子を観察。
特段慌ててる様子もない……やっぱ知らないのか！？

神社に近付く。
と、神奈子が縁側を歩いている。

「神奈子ッ！！」
「うおっ！？詩菜じゃないかい！どうしたんだ！？」
「今から妖怪の集団が襲ってくる！！」
「……落ち着きな。頭は…なんか強くも無さそうな中型の奴かい？」
「うん！……ん？なんで知ってるの？」
「なんだ、奴等か？大丈夫だよ。アイツらは中に入ろうとすらしないからね」

「…え？」

フリーズ中。

「目的は分からないけど、ああやって集団で此方に向かっては途中でいつも内部分裂して消滅していくのさ」

……なんじゃそら。

「……マジ？じゃあ何、私の完璧な骨折り損…って訳？」
「…まぁ……そういう事になるね」

チクショー……。
何の為に…私はここまでやって来たというのだ……。

「そ、そんな落ち込まなくても……」
「かなこぉ～…酒を……酒を持ってこーい！！」
「やけ酒！？と、とりあえず中に入りな！」

久し振りの再会という物は、どんな時でも緊張するもんだ。
神奈子は私が必死になって勘違いを伝えようと頑張っていたのと、
神奈子自身が私に対して優しかった、という事もあった。
所が諏訪子は、別れ際があまり気持ちの良い物では無かった。あれ
では私も何となくギクシャクしてしまう。

だから、打ち解けるような何か切っ掛けが欲しい。
約束は守るけど、仲の良い状態を続けていきたかった。

閑話休題。
そんな事を願っちゃったりしていたけど。

「……」
「……」
「……」
「……誰か説明してよ…」
「…えーと、そこに座っているのが諏訪子」
「うん……で？」

諏訪子は分かるよ？そりゃあ。
私が言いたいのは……その諏訪子が抱えてる『子供』だ。

「……えー、諏訪子が抱いてるのが……娘」
「……」
「…私の娘だよ！悪いか！！」

「アンタ何しちゃってんの!?」
「ちょっと気に入っちゃっんだもん!!可愛くてさ!」
「しかも相手は女かい!?神奈子!どうしたらこうなった!?」
「あー……神力で相手に自分の子供を身籠らせるたのさ。ちゃんと事前に確認もとったそうだよ」
「当たり前じゃボケェ!!」
「おお…詩菜が常識を喋った……!」

何なんだよ!?この世界は!?
何でもありにしてもやりすぎだろ!!

……もう、いい。
転生先が理不尽な世界ってのは良くある話……そう、よくある…ハハハ…。

「…ハァ、まぁ良いや……で?結果、半人半神の子供だと?この子が?」
「そういう事だよ。ね!可愛いでしょ〜♪」
「……性格変わってない?」
「…気のせい、だと言いたいな……」

子供を産むと性格が変わる。っていうのはよく聴くけど……ここまで変わる物なの…?

と、久し振りの挨拶もなくギクシャクせずに何だかんだで普通に話せている事に安心している所に、いきなりの乱入者。

「諏訪子様！今の大声は！？よ、妖怪！？」

あ。妖力も隠してないし眼の色も変えてなかった。
怒鳴るのに必死で忘れてたや。

「ほい。どう神奈子？」
「うん？何が？」
「人間っぽい？」
「…あ～……人間と変わらないように見えるよ？多分」

妖力を抑えて微妙に神力出して、眼の色を黒にしただけなんだけどね。

「よし……ええっと、旅をしながら妖怪退治をやっております『詩菜』と申します。ここの二柱には以前お世話になったのでこうしてご挨拶に参りました」
「よくもまぁそんな白々しい嘘を並べ立てれますね！！」
「あれ、バレちゃった」
「何してんだか……あー、こちらの言っている事は概ね正しいから大丈夫だよ」
「……本当ですか？」

うーん、疑惑の目線。
それからさっきから構えてる御札を抑えてくれないかな？
いくら神力溜まってても、元は妖怪だからね？

「諏訪子からも何か言ってよ～？」
「…うーん、詩菜は妖怪だけど妖怪だからねぇ」
「……それ、助け船になってるの？」
「さぁ？」
「……」
「ま、まあ！こいつは大丈夫だから！ね？」
「…分かりました」

構えた御札を懐にしまい、この部屋から出ていく。

……はて？私がここに住んでいた時の人達の中に、あんな人は居なかったような？
私がここに住んでいたのはたった五年程前なので、人々の入れ換わりはほとんど無いと思うんだけど……。

それを隣で苦笑いしている神奈子に訊くと、

「ああ。彼女は最近入ったばっかりの新人さ……そこの神様のせいでね」
「……成る程」

彼女が、まぁ…その、母親（？）な訳だ。

「子を身籠ったせいか霊力が異常に高くなっちゃってね…」
「……あの御札か」

確かに私に向けられていた敵意と、それと共に見えた霊力は物凄い量だった。

もしかすると、今まで見た中で最大だったかも知れない。それほどまでに強大な力の持ち主。
絶対に戦いたくない……。

夕食にお呼ばれしたので、遠慮なく頂く。
諏訪子と結んだ約束は『守矢の神社に二度と住まない』という物。
食事ぐらいなら約束の許容範囲内、と認識をしている私と諏訪子。

けれど、此処の神社の巫女や風祝からしてみれば、神力を少なからず持つとはいえ、妖怪の私は討つべき存在な訳だ。
知り合いにはなれても、馴れ合うつもりはない。

まぁ、その知り合いである風祝とは普通に話したりはするんだけど、

「そういえばキミの名前を訊いて無かったね。何て言うの？」
「……」
……こんな訳なんだな～…。
「…諏訪子、誰か通訳ちょうだい」
「んあ～…詩菜は色々と規格外だからねぇ」
「どういう意味よ」
「ああ、妖怪らしくないっていう意味だよ」
「あ～……そっちね」
「……なんで、諏訪子様神奈子様はこんな妖怪を目の前にして、平然としていられるんですか？」
「こんな、って」
顔を見合わせて、同時に首を傾げる二柱。
「何でだろうね？」
「やっぱ妖怪らしくないからじゃない？初めて逢った時も噂通りだったし」
「うぅ、噂は勘弁してよ……」
「……その噂とは？」
「『妖怪なのに妖怪を倒し、人間を助ける』」
「『と思えば妖怪の手助けをする』」
「好き勝手やっただけなのに……」
「好きで人間を助けてる。って事が妖怪らしく無いって言われるんだよ」
「……」
「そうそう」
「…好きに生きる事の何が悪いと言うんだぁ…」
「そういう所は妖怪っぽいのにねえ」

ぼろくそ言われて卓袱台に頭を倒す私。
八雲の『中立妖怪』とかがここまで届いてなくて良かったよ……。

「…ま、そういう訳だよ。こいつは気に入ったら攻撃しない」
「……まぁ、気に入ったらね？」
「後は狂ったりしなきゃね」
「いや、あの時も攻撃しなかったじゃん！？」
「あの人間は？」
「あ、あああれは例外！！ちょっと黒歴史だからほっといてよ！？」
「ええ～？どうしよっかな～？」
「お願いします！！」
「ほら、諏訪子。もう涙目になってるから許してやりなよ」
「仕方ないなぁ～？」
「くそぅ…」
「……」

更に私の心身に多大なダメージちくしょう。
あれは……無いわ。

それを多少引きつつも、会話を聴いていた、未だに名前を訊けていない母親さん。

「……本当に危険は無さそうですね」
「…ようやく信頼してくれた？」
「信頼は出来ません。ただ『こんな妖怪』は訂正します」

「充分充分♪それで、キミの名は？」

そう訊くと苦笑いだけど、笑ってくれた。
おお、やっぱ笑ってくれた方が可愛いよね。

「東風谷。東風谷紗英（こちや　さえ）と言います」
「んじゃ、私も改めて。詩菜と言います。以後良しなに」

……うん、大人数で食べる夕食は美味。

さて、夕食も終わり、某旅番組になぞらえて言うならば『お別れの時』という奴だ。

「さて、行くとするかね……」

「ん、また放浪の旅かい？」

「まぁね。いつも通りに助けたり襲ったりするよ……あ、そうだ」

「？どうしたの？」

元はと言えば、私の勘違いで此処に来れた訳だ。

あんな不快な別れをした後だと、どうも自分からは近付きにくい。

勘違いだとはいえ、この早い内に間柄が戻った事は良い事なんだよ。

…でも、

「…私に恥ずかしい勘違いをさせた事を後悔させてやろうかとね♪」

後悔さえさせる気も無いけどね？

……幽香の性格、移ったかな？

「……ああ、あの連中かい。良いんだよ？別に無理しなくたって」
「私の気が済まないからダメ。んじゃ！行ってくるよ」
「行ってらっしゃい」
「気を付けなよ～！」

気まずい見送られ方なんて真っ平ゴメン。
やっぱこんな感じが一番だよね。

さぁて妖怪ども。私の速度に追い付いてこれるかな？

氷妖精

天狗の里がある山、の麓にある霧に包まれた湖。
山の川から水が流れ込んでいて、霧で視界が悪い為『霧の湖』と呼ばれている湖にブラリとよってみた。

理由はない。
ないのだが、強いて言うならば、この前に出逢った……何だっけ…サルノ？違うな……大ちゃんは覚えてるんだけど。
…まぁいいか。ともかく、彼女等をたまたま思い出して、んじゃ会ってみるかぁと思い立っただけだ。

彼女等は、妖精にしては精神年齢が高い。能力も使い方によっては妖怪にも勝てるかも知れぬ。との天魔の（ありがたくもない）お話。トップに立つと色々と力関係が大変なんだろうなぁ…と考えてみたり。

私が見た時のような瀕死の傷も、力を持つ彼女等のイタズラが過ぎた結果に起こってしまった事らしい。
一対一なら勝ててたかも知れないが複数だと、って訳だ。

閑話休題。
湖にやってきた。

いつも霧が立ち込めるこの湖は如何せん見通しが悪い。
私はいつもの如く『風』になって浮かんでいる訳だが、何分周りが

良く解らない。
晴れてりゃ少しは見えたりするんだけど、今日の天気は曇天だ。何も見えやしない。

自由に空を飛べない。
しかも私はカナヅチだ。
泳げない。うん。
守矢の湖で溺れちゃったという忌々しい記憶を持っちゃってたりする。

よって、湖の上では私は実体化出来ない状況だ。
此処に住む彼女等に会いに来たのに、なんてこったい。

仕方ない、っていうかどうしようもないので、湖の縁で実体化して歩いて探す事にした。

「よいしょっと」

実体化。地に足をつけ歩き出す。

と、いきなり私に目掛けて数々の弾幕が放たれている。

「ッ！！？」

いきなりの事で身体が硬直した私を、弾幕が無慈悲に襲う。
左肩、右脇腹、右肘。
三ヶ所を撃ち抜かれ、強烈な痛みが走る。

「…何してくれちゃってんだコノヤロォ！！」

キレた訳じゃあないよ？
ただ単にムカついただけです！

カラフルな色の弾幕を反復横跳びの要領で避けて、打ち続けている妖精に近付いてチョップ。
衝撃は付加してないけど妖力プラスだ。
これなら妖精は死にはしないけど気絶する。

妖精は自然を元にしてるから、そうそう死ぬ事は無いんだけどね。
…何はともあれ。

「ていっ」
「…！？…、……」

頭部を叩いたにも関わらず、有り得ない柔らかさに驚きつつ気絶を確認、更に周りを確認。
見通しが相変わらずだけど……おし、多分誰もいないかな？
撃ってきたのはこいつだけ。逃げたのかも知れないけど、まぁどうでもいい。

「ほら、起きな」

うりうり、と頬っぺたを指の腹で押しながら、先程倒した妖精を起こす。

柔らかいな～……。

…もちもちだな～…。

……このぷにぷに感から離れたくないな～。

なんだかマッタリしてしまった。

もう既に起きてて、キョトンとした眼で見られてるのに。

満足したから本題に入ろう。

……あの感触って妖精特有で、妖精なら誰でも持ってるのかな…？

まぁ、そんな事は後にして。

「妖精さん、此処等で一番強い妖精って誰かな？」

妖精は首を傾げている。

難しかったか。んじゃ、

「大ちゃん、は知ってる？」

大きく頷く。ああ、もう可愛いなこんちくしょー。

「案内をしてくれないかな？会いたいんだけど、この霧で良く解らないからさ？」

身振り手振りでこっちと説明してくれるようなので、まぁ、追っ掛けましょうかね。

「～♪」

やだ、この子可愛い！
遂に鼻歌まで歌い出しちゃってる！！

…私の影響か？

というか、３０分ぐらい経ったけど…なんか見覚えある所歩いてるんだけど……あの二人は何処？

「ねぇねぇ妖精さん？二人は？」
「…？」
「……えっ？」

そのハテナマークは…何よ？

「……忘れて楽しんでた訳じゃ、ないでしょうねぇ…？」

「……。…？」

怒ってはいけない。妖精だもの、仕方無い……仕方無いけど、

「…ブッ飛ばしてやろうか……？」

「！？……！…！！」

言葉が微妙に伝わったのかそれともニュアンスだけ伝わったのか、怯えられ泣きそうになっている。

……。

いや、この気持ちは封印すべきだ。うん。

「…ハァ、今度はちゃんと案内してよ？」

「…！…！！」

ちゃんと案内する為か、それとも私から出来るだけ離れようとしてるのか。

解らないけど、先程より明らかにスピードが早いのは確かだ。

……後者だったら傷付くわぁ…。

湖からちょいと離れた、森の近く。結局ここかよ。一周したのは何の意味があったのやら。
ここで妖精が止まったって事は、案内は終わったのかな？

「ここにいるの？」
「…。……！」
「……言葉の壁、恐るべし」

全くもって解りません。

「…？」
「ん、いや。何でもないよ」

こういうのは肉体言語というか動作で解るんだけどなぁ…まぁ嘆いても仕方無いか。

ていうか、普通にさっきの事を忘れてるのか…？

「……妖精の気配、というか何かいるのは解るけど、特定の人物を捜すのはなぁ…そこまで覚えてる訳でもないし…」

彼女等と話した時間は１０分にも満たないし、姿・声は覚えてても

名前はあやふやだし、気配なんて覚えてる訳がない。

しらみ潰しに歩くしかないかな…。

隣の妖精ちゃんによれば、この近辺にいるのは確実なようだし。

……彼女、というか妖精は色々と不安だけどね。

「…まぁ、適当にぶらつきますかね」

「……。」

そして私、及び妖精ちゃんは二人に出逢う事が出来た。

…決して友好的な出会いでは無かったけど。

目の前には私を狙い飛んでくる氷の礫。打ち続けているのは、例の青い妖精。

「凍りなっ！！」

「御免被る、ねっ！」

何故にこうなったんだろうか？

出会い頭に妖怪と行動を共にする自分と同じ妖精を見て、何を思ったのか。
しかもその妖精ちゃんは戦闘が始まると直ぐ様逃げた。おのれ薄情者め。

青い妖精の（名前を未だに思い出せない）方は先程から私に狙いを定め、弾幕を打ち続けているけど、緑の妖精……つまり『大ちゃん』とやらはは少し離れた樹の影から此方を心配そうに見ている。
戦闘には参加していないけど、止めようともしていない辺り、完璧に私を敵と見なしているのだろうか？

このやろぅ、こっちはそっちを一度助けてやったんだぞー。
……覚えてないんだろうけど、さ。

じゃあ私は何をしているのかと言うと、特に何もしていないのだ。
弾幕を避ける位はしてるけどね。

私が一番得意としていて、最も自慢出来るのが『瞬発力』だ。
無駄に中学の時に頑張り、体力テスト等で瞬発力だけ満点を採ったのは、今でも私の自信の礎になっている。
故に、衝撃を操る程度の能力。瞬発力に対する自信。妖怪スペックの有り得ない動きという恩恵。これ等によって弾幕は私にとってはそれほど脅威、という訳でもない。

しかし、私は妖力の弾幕を撃つのが滅法苦手だ。
弾の速度。弾の操縦。誘導性能。数。大きさ。質。

何もかも、私がどんなに撃ってもこの青い妖精には見劣りしてしまう。
だからといって、どちらかというと得意な能力の弾幕は『鎌鼬の刃』、余程妖力でガードするか装甲が分厚い奴でないと、致命傷を与えてしまう。

しかし、このまま弾幕合戦を続けていても仕方がない。持久力も私の苦手分野だったりする。

どうしたものかなぁ……。

……ん？
弾幕が止んでる？

考えつつ避けている、と気が付けば青い妖精は顔を俯かせ両手を下げていた。

「……なんでよ」
「…何が？」
「なんでアンタは攻撃しないのよ」

声の調子は普通、というか寧ろ無理矢理抑えたような声。
抑えたのは怒りか憎しみか。
解らないけど、私の行動が彼女に何かの火をつけたようだ。

「妖精だから、弱いから戦わないの？妖怪と妖精だから意味なんかないっていうの？」
「……」

「妖怪が何よ、妖精が何よ。弱いのはみんな逃げ回れって言うの？そうやってアンタ達は私たちを見下ろして、私たちはアンタ達を見上げるしかないって言うの？」

昔は良い意味でも、悪い意味でも弱肉強食の世界。

彼女の言う通り基本的に妖怪は妖精をなめている。

イタズラしか能がない。能力があっても、それを活用出来る頭がない。等々。

「…ふざけないでよっ！！」

私の行動もそう見えたのだろう。

軽々と攻撃を避け、なめたように攻撃をせず、あまつさえは考え事をしながら避けている始末だ。

……本当に私は、嫌な奴になってしまっている。

「『パーフェクトフリーズ』！！」

「ッッ！？」

視界が白く染まっていく。いや、視界にはいる全ての物が『凍っていく』。

危険を感じて直ぐ様離れようとしても、既に足が地面と共に凍り動かせない。

衝撃を操って逃げ出す事も出来るけど、その場合足がもぎ取られ、地面に奇妙な両足のオブジェが出来るだろう。

その時、両足を即座に回復出来る程の妖力も神力も、既に無い。

「ハァ、ハァ…！どうよ！！」
「……いやはや、お見事」

『パーフェクトフリーズ』とか言う技は、既に時間が切れているのだろう。気温はだんだんと上昇しているのが蒸気で見てとれる。

だが、一度凍ってしまった物はなかなか溶けない。
樹木も、草木も、昆虫も……私自身も。

足から凍らせ腰までを覆った分厚い氷は、私の機動力と体力を急激に奪った。
掛け声から発動までの時間、効果範囲、追加効果のどれもがお見事。まさに『パーフェクト』。

彼女にも随分と負荷がかかったみたいだけど、まだまだ活動出来るだろう。
私の状況は変わらない。

「ハァ…！勝った…！！あたいの勝ちね…！」

どう声を掛けるべきか……。

「……まぁ、おめでとう…？」
「…なによ？アンタは敗者なんだから、そこでじっとしてなさい！」
「あ～、殺すの？」

私としては勝ち負け云々よりも、生きるか殺るか死ぬかが問題じゃ

ないかと思うんだけど？

「…うん、うん…そうね……アンタ！」

何か勝手に納得された様子。ヒトの話を聞けよ。

「アンタ！あたいの手下になりなさい！！」

ｗｈｙ？何故に？

「部下でもいいわ！負けたら敗者は勝者にふくじゅーするのよ！アンタはあたいの手下なの！！」

ハ○ヒかアンタは。

どうしたらそんな事を思い付くのよ…。

まぁ……殺されないだけまし。なのかな？

「部下、ねぇ……」

「なによ、イヤなの？」

「いんや。面白そうだし、やっても良いけど……」

「……良いけど。なに？」

八雲の式神を拒否して、こちらの『部下・手下』を受諾するのは何故か。とか後で八雲に文句をわーわー言われそうだなぁ。

という訳で、
ＣＨＡＯＳよりの平和主義者として、

「…ライバル、ってのはどう？」
「アンタ負けてるじゃない！」
「ほい」

早くからこうすりゃ良かったよ。

両手の爪を伸ばし、足の氷を彫刻するように削り取っていく。
同時に足元から竜巻を起こし、ガリガリヤスリをかける。
十秒程で解凍完了！
今度、彫刻でもやってみようかな？

まぁ、十秒も時間が掛かってたら、その間にやられちゃうと思うけどねぇ……。

「ライバル、ね……」
「…ん、ダメかな？」

ていうか、こんな停戦条約を結びに来た訳じゃないんだけど……
まぁ、良いか。

「…いいわ！今からあたいとアンタはライバルよ！！」
「ふふ、んじゃ改めて。名前を、教えてくれるかな？私は『詩菜』」
「あたいはさいきょーの『チルノ』よ！！」

そう！やっと思い出した！！チルノだ！！

いやー、結局自力で思い出せなかった……ｏｒｚ

「……ね、ねぇチルノちゃん…？このヒトは……誰なの？」
「あたいのライバルの詩菜よ！！」
「よろしくね、『大ちゃん』」
「あ、はい……って、なんで私の名前を…？」

……やっぱ覚えてないよねぇ…私すぐにその場を離れたし。

「一度逢った事があるんだよ？私はその時大ちゃんを助けたし」
「え？」
「あー！！アンタ、私が大ちゃん助けようとした時に来た妖怪！！」
「ご名答♪」

覚えててくれたよ、嬉しいねぇ。

「わ、私を助けてくださったのが、貴女だったんですか！？」
「すぐ立ち去っちゃったからね～」
「あ、ありがとうございます！！」

……うん、良かった良かった。

「さすがはあたいのライバルね！！」
「……！！」

ん？

何か聞き覚えのある『声』が聞こえたかなと思ったら、真横に、

「…♪」

なんか、妖精ちゃんが、居た。

「アンタ何処行ってた!?」
「?……。」
「詩菜を探してたって」
「え!?」
「…!……!!」
「えと、勝手に何処かに行くな。と…」
「…ええ?」
「……、…。」
「心配した、ってさ。好かれてるね～♪ヒューヒュー!」
「……なんでだよ!!?」

チルノとッ!大ちゃんをッ!探してただけなのにッ!!
なんでこうなったッッ!!?

風が生まれる所（前書き）

え～、『他の東方二次小説には無い設定を！！』と意気込み過ぎた様な気がしてなりません。
と、言いますか『小説に読もう！』や『にじファン』に投稿されてある全ての小説を読んだ訳でもないので、恐らくどこかと被っているだろうなぁ……。

まぁ、面白ければ良いのですよ。作者も、読者も。

それでは、この作品のコンセプトとも言える重要なターニングポイント編。
ある意味これにてプロローグは終了です。

どうぞ、ごゆるりと。

風が生まれる所

遂に、対に、終に、ついにやってきた。

《百寿》という大台、人間卒業の時が。

今日で、この世界に来て、人間の時の年齢を入れずに、１００歳になった。

弱小妖怪の目標、とも言われる到達点を五体満足で百歳超え。に私は辿り着いた。

妖怪ランク『付喪神』、『九十九神』である。嘘だけど。

「光陰、矢の如し。だね。まさしく」

「妖怪じゃからな」

「…それだけで説明になっちゃうもんねぇ」

「元人間じゃろうが今は妖怪じゃ。感覚は儂らと変わらんわい」

ほんと、なんてこったい。

まぁ……御目出度い事なのか解らないけど、少なくとも現在誕生日を祝う習慣は無いみたいだ。

それにしても１００歳だよ。１００歳で未だに身長が小学生レベルだよ。妖力もそれなりにあるようになったけど、それでも量・質共に平均だよ。

ていうか時代が解らないよ。江戸とか平安とか有名所って感じじゃないもの。
私はどうやらとんでもない存在になって、とんでもない世界に来てしまったようだと今更にして驚愕するよチクショウ。

「百歳おめでとう～。お祝いに来たわよ～♪」

訂正、この時代には誕生日をお祝いをする妖怪は、居るようだ。

ていうか、さ……。

「……今更だけど、八雲にこの家の事、教えたっけ？そして誕生日も」
「そこのてんちゃんから♪」

そっか。てんちゃんか。なら仕方無いね。

「おっけーてんちゃん、歯ァ食いしばりな。全力でぶん殴るよ」
「ちょっと待てぃ！？儂がそんな事を話すと思っておるのか！？これは其奴の嘘じゃ！！というかてんちゃん言うな！！」
「…や～く～も～さぁ～ん～？」
「まぁまぁ。今日はパーッと騒いじゃいましょ♪」

「……まぁ、いっか」
「良いのか！？」
「楽しけりゃ良いよ。ねぇ？八雲さん」
「そうそう。ふふふ」
「「ふふふふふ」」
「…お主ら、実は仲が良くないか…？」

気のせいだよ。全く誰がこんな奴と……多分。

「そうと決まれば移動しましょ！幽香の家に！」
「ええ～？…その事を幽香は知ってるの？」

誕生日にボコボコにされたくは無いぞ。

「料理を作ってくれてるわよ」
「ん……ん～、どうだろ」
「儂に訊くのか…？……何にせよ、お主を祝う話じゃ。無下にも出来ぬじゃろ？」
「いや、まぁ…そうだけど……」
「なら断る理由もあるまい？何をそんなに悩んでおるのじゃ？」
「…そっか。だよね」
「しかし儂はここを離れる訳にはいかぬのでな……フム、少々待っておれ」

そう言って天魔は私の家から出ていった。
私みたいな中級妖怪の為にわざわざ住処を空ける（しかも誕生祝いというふざけた理由）という事が長にあってはならない。

だから、何かお土産を取りにいったのかな？ｗｋｔｋ！

「ほれ、鬼の酒じゃ」
「へぇ、随分と凄いものを持っているわね？」
「ちょいとな。ま、これを持っていけ」
「や、祝い品どうもありがと」
「ふん」
「ほら、スキマを開くわよ」
「外で開きな。ほら、天魔も。家の鍵を閉めるから」
「フム、まぁ楽しんでこい」
「行って来まーす！！」

いつものスキマ（？）を通って幽香の『太陽の畑』の家にやってきた。

「いらっしゃい」

「お邪魔しまーす…」
「ほらほら、入った入った♪」

テーブルには大量の美味しそうな料理と温かいハーブティー。
例の妖力回復剤だ。
となると、料理も全部そんな感じなのかな？

……こんな量を三人で食いきれと？

「あらま…随分と用意したわね？」
「ええ。私も作り過ぎたと思ってるわ」
「……これ全部私の為に？」
「まぁそうね。兎も角おめでとう、ね」
「あ、はい、ありがとうございます」
「もっと嬉しそうな顔をしなさいよ…」

ここまで皆に祝われると、逆に『ドッキリでした』の方が納得しちゃうような気がする。

「ま、冷めない内に食べましょ」
「そうね……これ…食べて太る量だわよね」
「…ちょっと……言わないでよ」

太るとかそんなのはどうでもいいので、私はなんだか暗い二人を置いて、さっさといただくとしますか♪

「いただきまーす♪」
「「……」」

「…ん？なんでそんな睨むのさ？」
「…この前モテる云々の話を私にしたのは誰だったかしら…？」
「わたしゃ良いんですよ。旅をすれば痩せるどころか飢えるし」
それに身体は女でも、そういう事に興味はない。
前の身体の場合は…ちょっと違うと思うけど……。

「そういう問題じゃないわよね？しかも『飢える』って……」
「ちゃんと妖怪のお仕事もしてますって！！…あ、この山菜美味しい」
「それは嬉しいわ。…でも人間を守る仕事も、貴女はこなしているでしょう？」
「うっ、それも確かに継続してやってるけどさ…」
神力の為には必要不可欠な手順なんですよ……。

……おー？流石は幽香の料理、妖力がバンバンみなぎってくるよ。
「詩菜ちゃんもそれなりに可愛い容姿をしているから、人気は高いのに……もったいないわねぇ…」
「…え？……誰からの人気？」

人気？人気ってなんぞ？

「貴女が良く行っている神社があるじゃない？」
「…ハァ、貴女はまたそういう所に通ってるのね……」
「う…妖怪らしく無いですよ、どーせ……というか彼処からの人気ですかぁ…」

「後は助けられた妖怪たちから、かしらね？」

嬉しくはない…事もないかな？

まぁ……こんな私を嫌う奴等も絶対居るんだし。

好んでくれる連中が居る事は嬉しいよね。

はてさて、な～んか幽香の視線が厳しいぞ～？

「…貴女、本当に妖怪なの？」

「何で？って散々言われてるか……」

「貴女の行動、思想、全てが人間らしすぎる」

「……妖力あるじゃん。幽香のお茶で妖力は回復してるよ？」

「そんなの、人間が身に付けようとすればいくらでも付けれるわ」

「あ、そうなんですか……」

いかんな。幽香が私を疑い始めちゃった。

むぅ……折角のパーティーだって言うのに。

「言いなさい。貴女は本当に妖怪として生まれたの？」

この世界には妖怪として命を受けました。

「そりゃそうでしょ」

「……顔は、嘘をついてないわね」

「ポーカーフェイスさ」

「「……」」

一触即発の雰囲気。

私が嘘をついているかどうかを、幽香は神経を尖らせて見極めようとし、
幽香が出逢った時のように睨んでくるのを、私は素知らぬ顔で受け流しこちらからも笑みを返す。

そんな、食事会とかいう雰囲気じゃねーよ、という空気を少しだけ和ませてくれたのが、紫だった。

「ま、まぁ！幽香も落ち着きなさいよ！ほら、食べましょ？」
「いつになく慌ててるね～。どうしたの？」
「そうね。貴女らしくもないわよ？」
「だったら睨み合うのを止めなさい！私は友人たちが歪み合うのを見たくないのよ！！」

紫の切羽詰まったようか声。

まぁ、その気持ちは解るよ。
ただ、今は人間だったって事を貴女達に言う時じゃないと思ってるから。

ていうか、

「私は『友人』の部類に入ってるんだね？」

視線を幽香から離して、焦っている紫を見る事にする。
私が視線を外したからか、それとも紫の言葉尻を捉えたからか、何にせよ幽香も睨むのを止めてくれたみたいで、私にかかっていたチリチリした感触は消えた。

「そうねぇ。貴女は始めに彼女を式神にしようとしてなかったかしら？」
「え？…あっ！！いえ、そのッ！！」
「…私なんかよりこんなのの方が良いと思うんだけどねぇ。見ていて微笑ましい」

茹で蛸のように真っ赤になっていくのを見るのは……うん、とても愉快で面白い。

「そうね。可愛らしいわよ？紫」
「からかわないでよッ！！」
「おおぅ、なんて男を何人か落としそうな台詞と表情」
「ほんと。さしもの私でも少しドキッとしたわ」
「く、くうぅうぅ～！！」

はからずも紫の機転（？）で場は和んだ。
けれどいつか、幽香は私に色々と訊いてくるに違いない。それは紫もそうだと思う。
私は色々と妖怪にしてはおかしい部分がありすぎるのだ。

まぁ、閑話休題。
お楽しみはここからさ♪

「ご馳走様でした♪」
「…ふぃ～……もう、無理だ…」
「あんなに食べるからよ…」
「その量を作ったヒトは誰でしたかねぇ？」
「…ハイハイ、私が悪かったわよ」
「じゃあてんちゃんからのお土産のお酒を開けるわよ？」
「開けちゃって～」
「鬼の酒だったわよね。味はどうなのかしら？」
「ん…美味しいわ～」
「…ほんとね……詩菜は？」
「食い過ぎで腹がヤバイからちょっと待ってて……」

気持ち悪い……おのれ幽香、罠だったのか…。

「そんな訳ないじゃない…」
「……また読まれた」
「さっきのポーカーフェイスが崩れてるわよ、あれは見事だったわ」
「どうも……ううぅ…」
「…ちょっと大丈夫？」
「……幽香の料理で補った妖力が、限界を越えて苦しめてるのか

しら？」
「そんな事って、あるの？」
生まれながらにして大妖怪のアンタ等には解らないかもなぁオイ！？
「いやいや…むしろそれと、年をとる事による妖力の、増加を待ってたのさ……おぇ」
椅子から降りて、外に向かう。
「じゃあ歩けるような状態じゃないじゃない貴女！？」
無視無視。
さて、そろそろフィナーレといきますか。
あんな妖怪かどうかと云々の話をした後で、こういう事をやるから幽香に疑われてるのに……。
友人に晴れてなれた紫の機転が台無しだよ。全く……。
でも、まぁ私は一度自分が面白そう。って決めた事に妥協はしない！そう決めたのさ。
「妖力が貯まりすぎたのなら、妖力をウプ…使いまくれば良いんだよ…！」
「それは確かにそうかも知れないわ！でも貴女にそれほどの事が…！」
出来るとは思えない。って？舐められちゃったもんだね。
私は想像が大好きな、元人間の妄想野郎だったんだよ？
この計画は既に何十年も前から計画してたんだ。もう待てない。

家から飛び出し、風になって空に浮く。

思い出せ。自分が初めて生き物を殺した時の事を。

思い出せ。鎌鼬だと自分を認めた時を。

思い出せ。あの時の五月蝿い声を。

造り出せ。自分を。

《ｓｉｄｅ八雲紫》

詩菜ちゃん……いえ、詩菜は確かに幽香の言う通り、人間らしかった。らし過ぎた。

私が望んでいる世界は兎も角としてよ？

人間を心から助けようとしているのだもの。

私は周りから『心が読めない』『胡散臭い』と言われたりしているけれど、私にはあの子の方が理解不能だわ。

今だって、貴女が何を考え、何をしようとしているのか、見当もつかない。

貴女は幽香の料理で妖力が限界を越えるのを待っていた。それと１００歳という妖力が増大する機会を、待っていた。
そんな限界を突破した力を抑える為に、身体は今も悲鳴をあげて、普通は動けない筈なのに。
どうして、何をしようとしているの？

…考えるしか、今は出来そうにないわね。
既に詩菜は扉を開けて出ていこうとしている。

周りの時間が遅くなっていく。体感時間が縮まり、頭が活性化していく。

今日の会話中に、何か目印となるような物はあったか？
『何故私が幽香の家に誘いに来た時、行く事を悩んだのか』
『モテる云々の話をした時、詩菜は私は良い。と言ったのは何故か』
『幽香が詩菜に妖怪かどうか、訊いた時の詩菜の様子』
『あの料理をどうしてああなるまで食べたのか』

今日までの会話で何かヒントとなるような会話、仕草みたいなのはあったか？
『どうしてそんなに妖力と神力を、貯めようとしたのか』

『何故人間を護る為に妖怪と敵対したりしているのか』
『妖怪にも関わらず、どうして神と仲が良いのか』
『日毎に変わるテンションの差は一体何故か』
『どうして能力の制御が出来なくなる程、食事をとらなかったのか』
『私のスキマを見て、どうしてあそこまで驚いた顔をしたのか』
『相手を喰う訳でもないのに、どうしてあそこまでのパフォーマンスを入れて料理をしたのか』

出逢った時に遡ってみて、今の状況に助けとなるような点はないか？
『幽香の持ち込んだ花の名前を何故知っていたのか』
『私たちの服装を見て驚いたのは良いけど、どうして見慣れているような雰囲気なのか』
『日本にはここだけしかない筈なのに、どうして栽培方法を知っていたのか』
『あの時何故右腕がなかったのか』
『何故あの場面で、いきなりその腕を治したのか』
『私の途方もない夢物語を聞いて、どうしてあんなあっさりと賛成出来たのか』

……これ以上探すとなると、それこそ無限に出てきそうだわね。

考えている間も、少しずつ時は流れていく。

詩菜は空に跳び、風に溶けていく。こうなるともう視認は出来なくなる。
けど溢れ出ている妖力で位置は判るけど、それも妖力が無くなれば分からなくなってしまう。

だからその前に、早く思い付いて彼女を止めなければ……。

『止めなければ』……何をすると言うのだろう？
彼女を止めて、どうするの？
妖力の量が限界を突破しても身体に激痛が走るだけで、妖力が無くなれば別に悪影響はない筈よ。
それなのに、どうして私は焦っているの？別にこんなのよくある状況…じゃないけど、何も悪い事は起きない筈よ！

なんで…？
なんで貴女は…詩菜は私をこんなに不安にさせるの……？

考えが、止まる。
頭が動きを、やめる。
時間が、動き出す。

詩菜は空中のある程度の高さで上昇をやめ、空中に止まったようだ。

「詩菜！何をするつもりよ！？」

幽香が名前を呼ぶも、返事はない。
だけど、彼女の妖力は留まる所を知らず、更に溢れ流れ出ている。

先程までは晴れていた天気も、詩菜の妖力か能力の暴走か、雲が空

を覆い、強い風が花を揺らしている。
幽香が名付けた『太陽の畑』は荒れに荒れてしまっている。

「紫!!どうすればいいの!?」
「分からないわよ!?彼女が何をしようとしてるかも!!」
「くっ…!!」
「…あれは!?」

瞬間、今まで溢れ出て無駄に流されていた妖力が一気に凝集された。
高密度の妖力、それと共に一気に放出された神力。二つが混ざっていく。

あれは…初めて幽香と戦った時に見せた、肉体の超再生…?
いえ、使っている量が半端じゃない量になっているし、あの量だとそれこそ本当に、肉体を丸ごと再生するかの量……。

……まさか、それが初めからの目的だった…?
そういえばあの子が妖怪を『料理』とか言って切り刻んでいる時に、自分の肉体を儚んでいたような……まさか、それなの…!?
自身の肉体を基礎から変えるなんて、そんなの無茶な事よ!?
獣人や妖獣はただでさえ肉体に比重を置いてるのに、そんな事をしたら精神を保てずに消め…つ……。

…彼女は本当に妖獣や獣人なの…?

再び、時間が凝縮されたように重くなっていく。

詩菜は一度として、私たちに動物のような姿を見せた事がない。
妖怪『鎌鼬』なら、獣人や妖獣の部類に入る筈。
けれど私が見た事あるのは、今のような『風』の状態だけ。
本人が『風』と言っているのだし、彼女の嘘かも知れないけれど、
あの状態しか彼女は変化出来ないと考えると……彼女はやはり妖
獣等の部類には入らない…？

となると、詩菜は『種族としての妖怪』という訳なの？
それなら、今やっていると思われる肉体の改造は、比較的安全・大
丈夫だと思う。
私たち『一人一種族の妖怪』は、肉体より精神に比重が偏っている
為、たとえ身体がばらばらになっても、そう簡単に死んだりはしな
いし、悪く言えばなかなか死なない。
逆に言えば、精神が冒されると私たちはあっさりやられる。
……まぁ、そんな話は今は良いわ。要は詩菜は『種族としての妖
怪』の部類に入っているという事よ。
…けれど、そうすると妖怪の種族が『鎌鼬』ではおかしくなって来
る筈…。

…そもそも『鎌鼬』はつむじ風に乗って現れ、鎌のような両手の爪
で人に切りつける妖怪。主として『三人』で活動する筈よ…？
詩菜は一人で旅をしているし、詩菜のような鎌鼬も見たことがない
わ…。

ああ！もう何がなんだか、解らなくなってきたわよ！！

「紫！！あれ！」

「えっ？」

いきなりかけられた声で、私の周りの時間が再び加速する。
隣の幽香が指差すのは、空中にある深緋色を更に暗くした様な色の珠。
あれは…あそこに詩菜がいる！？

「……紫、突っ込んで詩菜を引っこ抜くべき…？」

幽香が訊いてきた。けれど私にはどうすればいいのかわからない。
下手に突っ込んで、詩菜の肉体の再生…は私の予想なんだけど、それを邪魔してしまえば彼女は止められるかも知れない。
けれど、それは……。

「…いえ、このまま様子を見ましょう……私たちに出来る事は…ないわ」
「……分かったわ。待ちましょう、彼女を」

私には、どうすることも出来ない。
そう。そういう事なのよ…。

私たちが見守る中、『珠』は更に凝縮していき、

最後には小さく萎み、小さな光になって、詩菜の胸元に吸い込まれて行った。
何かを吸収した詩菜は、フッと身体の支えを失い、地面に落ち始めた。

「ッッ！！」

後から考えてみれば、彼女の下にスキマを開いて安全な処にゆっくりと下ろせば良かったわね。
無我夢中で私は空を駆け、詩菜を受け止めようと必死だった。

危うくも受け止めた詩菜に、表面上は変化がなかった。
探ってみると、妖力・神力は既に空になっている。
けれど、妖力の質は明らかに、ついさっきまでの詩菜とは比べ物にならない程、上がっている。

「詩菜！大丈夫なの！？詩菜！！」
「落ち着いて紫、気絶しているだけよ」
「……」
「まず彼女を私の部屋に運びましょう。何が起きたのかは彼女に直接、聞きましょう」
「……そうね。ごめんなさい、取り乱しちゃって」
「いいわよ。…さ、運びましょう」
「ええ」

《ｓｉｄｅ詩菜》

別に対した事は考えてなかった。
せいぜいが肉体をちょいと弄くって、このロリコン体型からおさらばしよう、と思ってただけだった。
それが結果的に、八雲や幽香を心配させてしまいあまつさえ暫くの間、幽香の家に泊まる事となってしまった。

無論、次の日に目覚めてから、二人にこっぴどく叱られた。
そしてこの後、紫からの告げ口により天魔にもきっちり絞られると言う。ああ……なんて無情。

「で、何でこんな事をしようとしたのよ？」
「……その、ちょいと…肉体改造を…」
「…呆れた…本当に肉体の超再生の応用をしてたのね…」
「あれ？なんで紫分かったの？……ああ」
「前に見た事あるから。よ」
「あの時も私、言わなかったかしら？“無茶な力の使い方をすると、いつか自爆するわよ”？」

「…いや、むしろその言葉で思いついたとい「なんですって？」スミマセン！！」
「ハァ…全く、何がやりたかったのやら……」

何がやりたかったのかって？
フフン、妖力の質が上がったのは単なる副産物だったのさ！

「……ん～、一度見せたほうが良いかと」
「え？質を上げようとしただけじゃないの？」
「いんや。もっと別の理由があるよ？……で、それの発動の為にハーブティーを御願いしたいのですが…」
「……またがぶ飲みする気じゃ、ないでしょうねぇ…？」

こわぁぁ……。

「いえ、一杯だけで十分です。それぐらいの消費で済む様に、色々と配線を変えたので」

要は、某境界の魔術回路的な物を弄くったのだ。
肉体を一度完全に融かし、配線に邪魔な部分を取り除き、私が今からやろうとしている事のタネを仕込んでおく。回路の中にあった血栓的な物も取り除き、流通出来る速度も向上させた。
結果、質が向上、一度に操れる力の量も大幅に上がったという訳。

いや～…自分の肉体を自分で剥がして、精神力だけで弄くるなんて…もう痛いったらありゃしないの……。

「…一杯だけで十分なのね？」
「ええ」
「分かったわ」

暫くして、幽香は温かいハーブティーを持ってきてくれた。
……毎度思うんだけど、どうやって温めたりしてるんだろう…？
まぁ、今はどうでもいいか…。

「や、有難う御座います」
「…また暴走なんかしたりしないでよ…」
「ハハハ、まぁ狂わない限り大丈夫ですよ」
「…？…そう、ほら。早くしなさい」
「ん～、美味しい！」

狂う、ね……。
あの子どうしてんだろ？

「それで、教えてくれるのよね？あんな事をした理由を」
「ええ、勿論。……ただ、ですねぇ…」
「…何よ？」
「如何せん初めてな物で、上手くいくかどうか分かりません。なんでちょいと外でやろうかと」
「…私の部屋を汚さない様に…？」
「ちょっと…大量出血するかも、って事？」
「まぁ、ハイ。そうです」
「……分かったわ。もう一人で立てるわよね？」
「あ、はい…よっと」
「……不安だわね…」

多少身体に気だるさが残っているけど、こんなの旅の道中に比べれ

ばなんて事はない。
さぁ、やるか！！

【幽香の自宅裏】

「ここなら花に飛ぶ事も無いだろうし、大丈夫よ」
「やばかったらすぐに言うのよ？」
「……へへ」

なんだか二人見てると、なんだか笑えて来たよ。

「…何よ？いきなり笑い始めて」
「いやぁ…なんだか二人とも私のお姉ちゃんみたいだなぁ、って」
「「……」」
「…まぁ、私もなんだかそんな感じがするわね」
「…そうね、色々と手が掛かり過ぎる妹。って感じかしら」
「うぐっ…」

悪かったな、色々と迷惑を掛けて。

「ほら、さっさとしなさい。……看てて上げるから」
「うん、じゃ、掛け言葉は…『まずはそのふざけた幻想をぶち殺す

！！』」
「「……ハァ！？」」

肉体を風に戻し、消滅させる。
意識を『切り替え』肉体をイメージする。
自身の可能性の一つで、私が望んで掴んだ物。

『ガチン』

型に歯車が入って、いつもとは違う部分が動き始める。

……よし…目蓋を上げよう。多分成功。
視線の先には驚愕、どころか愕然、喫驚、驚倒、驚天動地の百面相を二人が見せてくれている。
うむ、実に面白い。

「あ、貴方…」
「どうかな？自分じゃいまいち良く分かんないんだけど？」
「なんで…」

「「なんで男になってるのよ！！？」」

え？駄目？
ようやく人間時代の格好に戻れたんだぜ？
わざわざ自分の脳みそに手刀突っ込んで弄くったかいがあったってもんだ。ハッハッハ。

『妹みたいな存在』という『ふざけた幻想』を『ぶち壊して』やったぜ。
略して『いげぶ』！！ハッハッハ…つまらねぇ……。

しかし、顔で一発で男と分かる顔になってるのか。そりゃ大成功。

「お～、よくよく見たら着物も体格に合ってるなぁ……流石、俺の妖力が混じってるだけあるわ」
「「……」」
「…なんだい、まだ絶句したまんまかい…お～い、戻って来い」
「……そっ、それが…貴方の肉体改造…？」
「そういう事♪どうだい？」

鏡が無いんだよねぇ。
後でチルノの居る湖で確認するとして、今は二人からどんな顔か感想を訊いて見よう。

「…顔は微妙ね、垂れ眼の細目……美顔って感じには、程遠いわ」
「体格も筋肉質というより……痩せ型ね。腕もひょろいわね～」
「うぐっ……」
「「二枚目（ハンサム）には到底見えない」」
「……いいんだよ！それで！！」

目立たない生活をこの二つの姿で過ごすんだい！！

「ま、何はともあれ貴方に何も無くて良かったわ」
「そうね」
「ん、良好良好……なら」

再度、風に戻ってイメージする。
流石に１００年過ごした姿。先程よりも数段早く終わった。

「…よっし！戻るのも大丈夫だね」
「……貴女にとって…」
「ん？何か言った？」
「…貴女にとって、どちらが本当に姿なの？」

なんだ、そんな事？
そんなの、即答してあげるよ。

「両方♪両方とも私。……まぁ、でも区別する為にも、もう一つ名前を付けるかなぁ？」
「…両方、って……それに名前…？」
「女の子は妖怪、男の子は人間。ってイメージかしら？」
「おっ、幽香分かってんじゃん」
「フフ、昨日の食事の話もこれに関連してると考えると、それしかないじゃない♪」

……あれはあれでまた違う話のつもりだったんだけど…まぁ、いいか。

昨日の険悪さも忘れ、幽香と談笑（？）しながら、家に入ろうとする。
そこへ紫が声をかけてきた。

「なんで幽香は平然としていられるのよ!?」
「……ん～、詩菜だから?」
「あ、それで片付けるんですか」
「もう何も驚かないわよ、こんな常識外の生命体」
「酷くない!?それ、いきなり!?」
「何よ、私に常識を捨てさせたのは貴女でしょう?」
「理不尽すぎるよ!!」

そんな言い合いをしてると、紫が近付いてきた。

「そうね。まぁ、この子だものね」
「この人もか!?」
「さ、三人で例のお酒。飲み明かしましょう」
「そうね。そういえばほっといたままだったわ」
「放置!?あ、ちょっと待ってよ!!」

【天狗の里】

「さて、八雲から何か『存分に叱ってやって』と言われたのじゃが…どういう事なのじゃ?」

はてさて、ここが一番の悩み所だ。
彼は『詩菜』を好いてくれている。
どう、返せば良いものか…。

「天魔『本当に私達が納得出来る様な答えが見つかるまで』って約束したよね？」
「……その様子は、見付かったのか…しかし、八雲が叱れとどう繋がるのじゃ？」

変化。男の子。

「お初にお目にかかる『私達が納得した答え』にして男の子ｖｅｒ『詩菜』であります」
「……」
「……あれ？天魔さん？…天魔？天魔！？てっ、てんまぁあぁぁー！！？くっ、口から何か魂のような白い物がッ！？オイッ！しっかりしろ！？死ぬなぁあぁーー！！」

風が生まれる所（後書き）

……批判が来ないか心配です。ハイ。

オリキャラ紹介（前書き）

一応、この時点までの紹介。

ネタバレはないようにしたつもりですが、
もしかしたらあるかも知れません。
あった場合はご連絡を、即時修正いたしますので。

オリキャラ紹介

《詩菜［しな］》

種族　『妖怪（鎌鼬）』
能力　『衝撃を操る程度の能力』
二つ名　『中立な妖怪』
身長　１２０センチ程

元人間にしてオタク・ゲーマーの元男（現男・女）
身長及び姿形を気にしてはいるが、さほど嫌ってはいない。
髪は肩まで乱暴に伸ばした黒髪。瞳は深緋色を暗くしたような色。
紺色の和服を着ている。
二つ名は、妖怪にも関わらず人間を助け、かと思えば一転して人間を襲ったりしている為。
行動に理由を伴わない為、八雲紫等に『理解できない』等と言われている。
空を飛ぶ事が苦手。
弾幕も苦手。
というか妖力を巧く外に出して扱えないという、妖怪にしては数々の致命的な弱点を持つ。
姿通りの言葉を使う。むしろ勝手に変換されるとの事。
性格としては自由奔放、気分屋。とりあえず何事も気に入れば良し。とする性格。

《志鳴徒［しなと］》

種族　『妖怪（鎌鼬）』
能力　『衝撃を操る程度の能力』
身長　１７０センチ程

詩菜が百歳の折に、肉体改造をして手にした姿。転生前の人間だった時の顔とほぼ変わってないに等しい。
髪はとりあえず伸ばしたような、ボサボサの黒髪。瞳は深緋色を暗くしたような色。紺色の和服を着ている。というか詩菜からあまり変わってはいない。モチーフは前世の姿。
普通に男言葉を使う。別に変換はされてない。
顔や背格好、言葉遣いが多少変化しただけで基本『詩菜』と変わらない。
自由奔放で気分屋。嫌な事は基本的にしたくない。

《天魔［てんま］》

種族　『天狗』
能力　なし
身長　２２０センチ以上

天狗の里のリーダー的存在。
自然と輪の中心人物になり輪を引っ張っていける人物。カリスマ…？
能力等は持っていないが、元々の体力妖力等がずば抜けている為、天狗を引っ張っていける。
女は侍らせてたりしているが誠実な性格。だからこそ集まる。

《弥野［やの］》

種族　『天狗』
身長　１８０センチ程

モブキャラその一。
顔が四角くて、とにかくゴツい。
ノリが良い芸人のような性格。

《縞［しま］》

種族　『天狗』
身長　２００センチ程

モブキャラその二。
細長い顔と体格が特徴。
やたらスケベな事を考えているが、行動は常識人。

《作久［さきゅう］》

種族　『天狗』
身長　１７０センチ程

モブキャラその三。

丸い顔付きで、モブキャラ三人の中で一番のチビ。
しつこ過ぎて時折どうしようもない程、ウザい。

《東風谷紗英［こちやさえ］》

種族　『人間』
身長　１６０センチ程

東風谷早苗の先祖。
性格は正反対に近い。
霊力を有り得ない程持っているが、自身が扱える事の出来る量は総量の４０％程。
詩菜が見て驚愕した紗英の霊力は総量の方。
子供を産む時に神力をかなり受け取ったが、既にほとんどが流れ切ってしまっている。

《妖精ちゃん》

種族　『妖精』
身長　３０センチ程

特に名前もない妖精。
『妖精ちゃん』というのは詩菜が単に呼んでるそうだけ。
そこらの雑魚妖精よりも、知能が少しばかり高いだけ。

親愛なる我が娘（？）　その１（前書き）

さぁさ、詩菜の愛娘みたいな人物の核心（？）とも言うべき人物。
あれ？ダブってる？
まぁどうぞ、その人物のお話をごゆっくり……。

親愛なる我が娘（？）　その１

『７１０（南都）大きな平城京』
『７９４（鳴くよ）ウグイス平安京』
世界史の語呂合わせで有名な二つの言葉。

眼下に広がる碁盤の目の形をした、大きな都。
私は空中に漂いながら、呆然と…ではないけど、ただこの都市を眺めていた。

私の年齢、１１３歳。
この都、恐らく平安。

つまり私は、かなり昔の日本に転生したという事。

まぁ、既に分かっていた事だし、それほど驚きもしない。
天魔にも未来から来た、みたいな事を言っちゃったし。
私の勘違いで終わるという事は無かったのだから、まぁこれはこれで良かったのかも知れない。

まぁ平安京か平城京か。
どちらでも結局変わらないと、私は思うけどね。（偏見かな？）
兎にも角にも、私はこの日本の首都に降り立った訳だ。

この時代、陰陽師というのは強大な権力を持っている。
陰陽師といえば、一般的なイメージとしては妖怪退治等をしているイメージがあるが、
実際には宮中等で吉兆を占い、天文観測や暦の管理等をしていたそうだ。

けど、私自身が既に『妖怪』であり、彼等にとって妖怪は討つべき存在。
この都にも、そういった陰陽師がうろちょろしており、私もそれなりに警戒をしなければならない。

だがしかし！！
私は……いいや、なんか。
テンション低い。

頑張って上げてみようかと思ったけど、無理だったよ…。
とりあえず……今日は宿か、ぼろい小屋でも見つけて寝よう…。
疲れた……。

翌朝。

陽が昇ると同時に起きて働くのは農民の仕事じゃないのか貴族共。

結局私は寝床を見付けられず、京に居るにも関わらずいつもの旅の如く、野宿をする事になった。
お陰でテンションも揚がりゃしない……。

さて、暫くの間人間の多い所で活動しようかと思い立ち、人の流れをつけて辿り着いたこの大都市。
いつも通り人間を助けるとなれば、まずは拠点。次に資金等が必要になってくる。
拠点は、流石に幽香の家にあるようなベッドが欲しいとは言わないが、柔らかい布団の所には行きたいなぁ……野宿した後だと余計にそう思うね。
資金は基本的に使っていない『今までの報酬』があるので、特段困

ってもいない。

要するに、

……。……あれ？

「…やる事、特にないじゃん」

特に無かった。

「有り難う御座いました！！」

「志鳴徒様！妖怪退治、有り難う御座います！」

「また困ったら呼んでくれよ～」

「「ハイ！！」」

「結構結構。ハハハハ」

特にやる事も無いので、いつも通りの生活をしてみた。

人妖共に助ける、いつもの生活。

「スマナイ…タスカッタゾ」
「気にしない気にしない！あ、でもまた私の前で人間を襲ってて陰陽師に逆襲されても、今回みたいに助けるとは思わないでよ？」
「ショウチシテイル……ヤハリウワサドウリダナ、シナヨ」
「うるせぇやい」

志鳴徒は陰陽師ではないが、人間では滅多におらず余りにも珍しい『能力持ち』の妖怪退治屋として有名に。
……まぁ、能力を持ってるってだけで『人外』と迫害されかける事も多々あるし、妖怪には恐れられ恨まれる日々。

詩菜は陰陽師に苦戦を強いられ、消滅させられかけた妖怪を救う、救世主的な存在として有名に。
……こっちも『助けられたら妖怪の恥』みたいな事を面と向かって言われたり、陰陽師には『逃げの大将』とか呼ばれて馬鹿にしているやら憎まれてるやら、まぁ～どうでもいいけどね。

二人が同一人物…ていうか同一妖怪？だと知っているのは、この都には誰一人として居ない。
そこまで仲の良いという友人がこの三年間、上手い事出来なかった。
いや作れなかった。
これはなんとも寂しい。
参った参った。

「しかしてそこまで深く考えてもないんだなぁ、これが」
「？…詩菜の姉貴、何言ってるんですかぃ？」
「ん、いや。どうでもいい事」
「……姉貴の口癖ですよね、『どうでもいい』」

「…とある人物の影響でね。ていうか姉貴って呼ぶなよ」
「いえ、姉貴は姉貴ですから」
意味分かんねぇ。

閑話休題。

人妖大戦勃発。
陰陽師が一気に妖怪を殲滅しようと、近隣の国々から『力のある妖怪退治屋・陰陽師達』を収集し、大軍勢を作った。
それに反応して、都に住む妖怪の内、血気盛んな妖怪共が集まり、それに対抗する為の妖怪軍。のような物を作り出した。

そして今回、私は妖怪側についた。
いつもの如く理由もへったくれもないけど。ないんだけど……。
…な～んか、嫌な予感がするんだよねぇ……。

ん～…、スキルコマンド『直感』ってか？
…そんなのあったらどれだけ生きていくのが楽になるやら…。

まぁそんなどうでも…よくないけど、とりあえず置いといて、

時刻は丑三つ時。既に真っ暗。
都の周りに陰陽師が集い、妖怪共は今こそ反乱の時、とむちゃくちゃ気合いが入っている。
私は当初の予定だと、上空にて観戦するつもりだったけど、たまた

ま仕事を受け取って解決させた妖怪達が一斉に仕事の依頼として持ち込んだので、こちら側にいる。
わたしゃ陰陽師とは不仲だしね。志鳴徒の方の話だけど。

ていうか、何時まで向かい合ってるつもりよ？
せっかく妖怪が一番力の出せる時間なんだから、さっさと行こうよ！
え？始まりの挨拶は私が！？
……じ、じゃあ…。

「んじゃまっ！行きますかァ！！」
「「「「「「「「ウオオオォォォォォ！！！！！」」」」」」」」」

…あれ、私リーダー？

とは言っても、私は攻撃に参加するつもりは毛頭ない。
せいぜいが救助の為の威嚇射撃位だ。
……私の力加減が巧くいかない弾幕は、迂闊に相手に当てると腕とか切り刻んじゃうからね…妖怪なら再生するかもだけど、人間相手には、ねぇ……？

御札が飛び交い、色鮮やか過ぎて眼が痛い妖怪の弾幕を避け、救助に走る。
『妖怪を助ける妖怪』として陰陽師さんに有名な私は集中砲火を浴びてるけど、そんなの幽香とか紫がキレかけた時に比べれば……
（苦笑）

のらりくらりと避けてる内に昔のゲームのとある場面を思い出した。
その名も…『荒野乱戦』。
救助ゲーだった。あれは、うん。
人間の時の記憶は思い出せなくなった部分もあるんだけど、何かの拍子にフッと思い出すんだよねぇ。
人妖共に命懸けって言うのに、なぁに考えちゃってんだか……。

戦争が始まって、既に一時間程。
数と技術の陰陽師軍に、圧倒的な体力と妖力を持つ少数精鋭の妖怪軍。
今のところ、妖怪軍が押しつつある。
人間には罠や策略という手段があるが、妖怪にはそれを超える回復力がある。
そして私が傷付き消滅しそうな妖怪を、攻撃が届かない安全な場所

に連れていき回復させるという役目を持っているから。
人間が死んだ数に対して、妖怪が死んだ数は圧倒的に少ない。

そんな回復役をしている私を必死に倒そうと、さっきからしつこい陰陽師がわらわらと追ってくるんだ、また…。
ああ、めんどくさい……。
大体、音速を人間が超える事がまず無理なんだって…。
そんなのはよくある最強な安倍晴明とか、霊力で完全にガードした紗英とか、そういう人ってレベルじゃないのしか出来ないって…。

……ん？
なんだろ、この気配？
物凄い速度で私に追い付いて来てるんだけど。
私に追い付いているって事は、音速に近いって事なんだけど？
猛烈に嫌な予感がするんだけど？

この雰囲気は…知ってるけど、さぁ……。

「シィィナァァァ！！」
「……やっほー？久しぶり、だね」
「…待ってたよ。私の元凶！！」

『彩目（アヤメ）』
私の黒歴史（？）の犠牲者。
槍からジョブチェンジしたのか、刀を私に振りかぶってきたので、

爪で難なく受け止める。

…いやいや、そんな事よりも。
なんでこんな所にいるのさ?

「…ここにいるって事は……陰陽師になったの?…よく周りが良しとしたね?」

「フン!」

つばぜり合いから突き飛ばされる。
ここでようやく彩目の全体像が視界に入った。

陰陽師と変わらない平凡な(?)服装。上が白で下が黒で動きにくそうな格好なのに、刀を正眼に構えているのはある意味何かの冗談に見えてくる。
黒髪は背中に垂らし、霊力が普通の白色ではなく微妙に赤い。

ていうか……足ながっ!!

「私を妖怪の身に落としてくれた時の怨み。今こそ晴らす!!」
「えー?私が肉をあげたから、妖怪を倒すのが楽になったんだよ?」
「それとこれとは話が別だッ!!」
「霊力しか出てないみたいだし、気に入っては……まぁくれないよねぇ…」

はてさて……参った。
こんな時に彩目と逢うとは思わなかったし、謝ろうにもこれだけの妖怪が居ると、両方から嫌われてしまう。それは勘弁。

んー……。

まぁ。なんとか…ならない、かなぁ？

「姉貴ッ！何やってんすか！？そいつを早くやっちまいましょうよ！？」

「ッ！！」

殺す？ふざけんな。

「ソイツは私の獲物だ。邪魔すんな、下がれ」

「ヒッ！…はっ、はい！！」

……いかんなぁ…精神安定。集中すべし。

「…それじゃあ、仕切り直しか？」

彩目が刀を構えなおす。

ハァ、いやだいやだ。

「……おっけ、やろうか」

「死ッ、ねえぇぇ！！」

的確かつ素早い動きで、私の身体を切断しようとする刀。

爪で受け止め、回避し、受け流す。

私は初めからこの人を殺すつもりも、傷付けるつもりもない。

いくら後悔しているとしても、見捨てたり自分から決着をつけたりするつもりもない。
甘いぼっちゃんだからな、私は。

「…何故攻撃してこない？」

そんな私に疑問を持った彩目。
けど、憎む相手に殺し合い中に話し掛けるのは色々とおかしいような……？

「色々とあってね。そんな気分じゃないしそんな時期でもない」
「ふざけるなッ！！私と戦え！！」
「やなこった。私の娘みたいなのを誰が殺すか」
「むす…！？なな、なんだそれはッ！？」
「え、私の血肉わけたじゃん」
「あれは強制でだろッ！？」
「言っておくけど、妖怪の上下関係は厳しいよ？」
「話を聞けッ！！」

聞いてるよ、五月蝿いなぁ。

「『上』である私の命令は絶対って訳でもないんだけど、強制権はあるのよ？《伏せ》」
「ッ、ぐっ！？」

命令が下り《地面に這いつくばった》彩目。
それでも右手に持った刀は、離さない。

「とは言っても、それじゃあ意味ないしね」

命令を解除。彩目にかかっていた重力は、跡形もなく消え去った。

「くっ…意味がないとは、どういう事だ？」

「……」

それに答えず、周りを見回す。

妖怪が押され始め、ちょうど均衡な具合に攻めぎ合っている。

……退き時、かな？

「…んじゃ、また逢お？彩目」

「！…逃げるのか」

「そうだね。『逃げの大将』だよ？私は」

「……逃がすと思うのか？」

ふふふ、私をなめちゃいかんぜよ？

「撤収！！」

「「「「「「了解！」」」」」」

「な…！？」

私の一声で妖怪の軍勢が、一挙に引き返し始めた。

救助をしている時に既にこのタネは植え込んでいたのだ。

私の言葉の一部に『衝撃』を受け、陰陽師を根絶やしにしようとしていたのを、急遽取り止めにして引き返してくれた。

無論、伝えれなかった妖怪も中にはいるけど、敵軍の中に一人取り残されるのは誰だって嫌でしょ？

「さて、しんがりを務めるわたくしでございますが、些か力加減が難しい。どうぞ皆さま、御注意を」
「貴様…ッ！！」
「アバヨ～とっつぁん！『ザムド』！！」

私の周りに馬鹿にでかいキュウリを薄く輪切りにしたような、緑色の円形のカッターが浮き始める。

1、2、3、4、5…6、7。
数を微妙に増えたけど、まだまだ『ザムクレート』には届かないな。
まぁいいや。

「行けッ！」

妖怪を後追いしようとした退治屋の足元をガリガリ削ってやる。
それより進んだら、自分が削られるよ？ていうか削るよ？まだまだ作り出せるし。
一度に出せる量の限界が七つで、複数回に分ければ幾らでも出来る。

「んじゃ、アディオス！！」
「…くそッ！！」

憎々しげでどこか楽しげな声を後ろから聴きながら、私と妖怪共はまんまと逃げ仰せたのだ。

親愛なる我が娘（？）　その２

《ｓｉｄｅ　彩目》

逃がした。逃がしてしまった。
私を畜生道に陥れた妖怪、詩菜を。

だけど今の、この気分はなんなのだろう？
憎しみを持って相対したハズなのに。
必ず殺してやる。と決意して、酷い目に遭いながらも決死の覚悟で陰陽道に踏み込んだハズなのに。

何故、私はこんなにまた詩菜と逢う事を楽しみに待とうとしているのだろう？

いや、こんな感情は捨てるべきなんだ。
アイツを殺して、最期を見届けてから私も死ぬ。
そう決めた。
二度と私のような人間が現れない為にも、詩菜を許す訳にはいかない。

戦が終わり夜が明けて、自宅に帰る事が出来た。
こちらは妖怪の手によって殺された人が、約半数にも登った。
帰る事が出来た人数は、生き残った人数だけだ。

私が生き残れたのは……明らかにアイツの、手抜きのせいだ…。

「……ハァ」

奴に一太刀も浴びせる事が出来ず、むざむざ逃がしてしまった。
何度も斬り合いを交わしたにも関わらず、すべてアイツの爪に防がれてしまった。
槍から刀に変え、アイツに追い付く為に身体を鍛え上げ、更に陰陽道を習い始め、
それでも、詩菜には追い付かないのか…？

「……ただいま」

誰も居ない家に響く、虚しい声。
親元を離れ、全国を回り妖怪退治をしていたのは、既に遠い昔の話。
今や私の陰陽術の師匠も亡くなり、老ける事のないこの体。
只でさえ妖力の影響で『濁った霊力』を扱う事で避けられているの

に、この妖怪の身体が皆に知れ渡れば……どんなに恐ろしい事が起きてしまうのだろうか…？
果たして、私はそれに対抗出来るだろうか……。

狭い部屋にひかれたボロい布団。それに飛び込んだ私。
疲れた…足が痛いし……何より徹夜でとにかく眠い…。

「…おやすみなさい……」

誰に言うでもなく、虚空に呟いたつもりだが。
おやすみなさい。と返事が返ってきた……ような気がした。

眼が覚めた。
戸を開くと、既に太陽は頂点を通り越している。

しかし、私が起きたのは眩しさからではない。
私が起きたのは、身近に感じる何かの気配からだ。

「…なんだ?」

昨日は着替える気も起きず、そのまま寝てしまったので、幸い武具は手元にあったりする。

……寝癖が酷いが、今は無視だ。
刀を鞘から抜き、部屋の前に立つ。

……明らかにこの部屋から物音がする。
左手で戸を掴み、右手はいつどんな時にでも刀を振り抜けれるように構える。

深呼吸。
……よし。

ガラッ!!

「…誰だ!!」
「ぬおっ!?」

部屋…『厨房』には見た事もない無愛想な若者が一人。
料理をしている。

……何故に…？

「…誰だ、貴様？」

とりあえず正体を探る。

見たところ、陰陽師という風には見えないし、妖怪退治屋にしても痩せすぎである。

「あ～…とりあえず、御早う御座います」

「え…あ、ああ、おはよう……いや、貴様は一体…」

「今、お昼のお食事を作っておりますので、今暫く御待ちください」

「あ、ああ。すまない……いや、だから貴様は……」

「あ、手伝っていただかなくてもよろしいですよ～？私、自炊には自信あると思いますので」

「『思う』なのか……いや、だから…」

「居間にて御待ちくださーい♪」

「……」

…ヒトの話を聞け。

……ここで折れる、私も私だが…。

「いただきます♪」
「…いただきます」

見知らぬ男が作った食事を見知らぬ男と共にいただく。なんなんだこの状況は…？

しかし、食卓に並ぶ皿には美味しそうな香りと湯気が立ち上っている。

『毒が入っている』
という事も考えたりはしたが、向こうはパクついているし、二人分に分けられた時から一目も離さず見ていたが、そんな隙は無かった。

「あれ、食べないの？」
「……」

催促されるがまま、食べてみる。

……うむ『普通』…だな。不味くもないがとりわけ物凄く美味しいという訳でもない。

「美味しい？」
「…あ～……まぁまぁ、じゃないか？」
「そっか。そりゃ良かった♪」

……。
…どうやら物事の感想に対する感覚が違うようだ。

いや…いやいや。いやいやいや！！
なんで私はこんな唯々諾々と食事を楽しんでいるのだ！？

「…オイ。なんでこんな事になっている？」
「えっ？味付け間違えた？」
「違うわ！貴様は一体誰なのかをハッキリしろ！！」
「ああ…それね」

おい、なんだその呆れた顔は？
やめろ、イラッとする。というか斬るぞ。刀は手元にあるからな？

「でわでわ、自己紹介をさせていただきます。私、嫌われ者の『志鳴徒』と申します」
「！！…貴様が噂の……」

霊力等に頼らず、能力で妖怪を倒す陰陽師。
陰陽術は使っていないそうなので、厳密には陰陽師ではなく妖怪退治屋なのだが、能力を使う所が陰陽師と似ているそうだ。

嫌われ者。というのはその能力しか扱わないにも関わらず、腕が良い。
お金が無い町民からは多額の料金を取らない。
貴族には無駄に冷たい。
など色んな噂がついて回っているのだ。

基本、陰陽師は貴族から仕事を貰う。その為懇意にしていただいている貴族様がいれば家族は勿論、貴族に成り上がる事も出来る。だから貴族に付き従う陰陽師は、長く付き合ったりすると貴族と同じような価値観を持ってしまう。
だから貴族に冷たい志鳴徒は、陰陽師にも嫌われている。

私は詩菜を殺す為に陰陽師になった。貴族になろうとも思わないしな。
だから市民に優しい庶民派の志鳴徒には好感を持っている。

まぁ……私は一度も会った事もなかったし、性格も知らなかった。

だから、こんなひねくれた奴だとは思わなかった」
「…心の声がおもっくそ出てますよ？傷付きますよ？傷付いきましたよ？」
「……で？結局、なんの用なんだ？」
「スルーですか、おい？」
「いきなり口調が悪くなったな」

まず、なんで私の家に居る？
次に、なんで御飯を作った？

「ん～？いやぁたまたま昨日の戦でし…あぁ～…詩菜ちゃん（この呼び方は嫌だけど）、と戦っているのを見たから。さ？」

詩菜……『ちゃん』だと？
…なんだ……なんなんだそれは…！？

「…貴様、詩菜と仲良くしているのか！？おいッ！？」
「ぅんがぁッ！？止めろォ！！首をヲ揺らすなぁあ！？」

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

志鳴徒と詩菜は同一であり、まさしく一心同体。

そして今、彩目の家にお邪魔している。
此処で出逢ったが数十年目。という訳でも無いが、些かほったらかしにしすぎたかなぁと、ちょいと懸念していたのだ。もともと。

「で？貴様と詩菜はどういう関係なんだ？」

けど、
なんだこの不倫について詰問されてるような状況は？

しかし、このまま説明する訳にもいかない。時期や時間というものは、とても大事な物である。うむ。

「えーとぉ……知り合い？」

「知り合いは解った。私が訊きたいのは『どういった状況』で『どういう風に出逢い』そして『どういう間柄か』という事だ」

間柄の中に知り合いも入ると思うんだが……。

「えー…仕事でたまたま知り合った（殺し）。まぁ酒を呑み交わす仲？…物事を躊躇なく言える間柄ともとれる」

「……随分と親しげだな…」

自分だもの。嘘はつけないさぁ。

「…まぁいい…それで、アイツは何処にいる？」

「……復讐？」

「ああ。悪いが、やめろと言われても止まる気はない」

「ふぅん？…まぁ知らないけどな」

嘘だけど。

目の前にいますよ～？

「なんだと？」

「昨日たまたま逢ってさ？暫く隠居するって」

こうもすらすら嘘が出てくる辺り、詩菜とは性格も変わったのかね？

ハッハッハ…笑えないなぁ…。

「……すると、なんだ？私を見た後にアイツを追っ掛けたのか？」

……墓穴掘った!?

「いや。町中で逢ったよ?ここに来る途中でな」

「…そんなバカな…私は……私が、見回って……」

まぁ、街中歩くのは志鳴徒の方なんだけどね。

……しっかし、見ていて飽きないなぁ…この子。

見事な百面相だ。

「……まぁ、良い」

「あ。良いんだ」

「また遭った時に始末すれば良いだけだからな」

「おお、恐い恐い」

ちょいと鳥肌たったよ。

フム、どうやら血肉による強制的な友愛・主従関係は、本人が本人と認識しなければいけないようだな。

研究♪研究♪

夕方。

彩目からの誘導尋問……いや、尋問を誘導させていたから…尋問誘導か？

まぁ、どちらにせよ変わるまい。

とりあえず質疑応答タイムも一段落つき、水を一服。特段美味くもない。

「まぁでもゆっくりする事は大事なのだ。善きかな善きかな♪」

「ヒトの家で何をのんびりしてんだ貴様は…」

「…宿、ないんだよねー…」

「知らん」

「…野宿はこりごりなんだよねー…」

「……うちに泊まる気か？」

「たの「断る」ぅぅ……」

これもまた嘘。

実際には、都の外れの外れ。むしろ妖怪のテリトリーの入り口に、今にも崩れかけているボロい家があり、そこに住んでいる。

無論、能力全開で補助をしているため台風が来ようが妖怪が押し潰そうとしても、全て無効化するので留守もバッチリ！！

まぁ、至極どうでもいい事だが。

「金がないんじゃ～」

「働け。というか貴様は貴族から大量に奪っているだろ」

「あんなはした金、あっても無駄なんじゃよー」

「……おまえ、今かなりの数の庶民の敵になってるぞ」
「おろろ」
「……はぁ」

《ｓｉｄｅ　彩目》

「……はぁ」

何がしたいんだコイツは……。
私は…まぁ、口調はこんなのだが立派な女性だ。自分で言うのもなにやらおかしいような気もするが。
それをいきなり訳のわからん奴が来て、唐突に『泊めてください』とは…その……い、色々とおかしくないか？
「いやいや、大丈夫。そんな気は毛頭、毛ほどもない。寧ろあって

も困る」

……そこまで言われても、返答に困るのだが…ん…困る？

……男色？

「いきなり何を言うか！？そんな訳が…ぁ……」

いや…否定しろよ。

……ていうか、本気でそうなのか？だとしたらそれなりに安心は出来るのだが？

「いっ、いやいや！？違うからな！？ちょ、ちょっとイヤな夢想をしてしまっただけだ！！」

どもるなよ。不信感が全身から溢れ出ているぞ？

まぁそういう事ならば泊めてやろう。私もアイツ以外で鬼になる必要はないのだし。

「忍び込んだのならば間取は解るだろう？居間で寝てくれ。そこしかないからな」

「……何か凄い間違いを犯したような気がする」

自業自得だろ。

さて、今日は結局、コイツに起こされ中途半端にしか寝ていない。男色のコイツならば襲ってはくるまい。安心して寝る事にしよう。

「ちげぇよ！？」

うっさい。安眠の邪魔をするな。

「理不尽な……」

親愛なる我が娘（？）　その２（後書き）

《オマケ　あの瞬間、志鳴徒が夢想した事》

１８話にて。

変化。男の子。

「お初にお目にかかる『私達が納得した答え』にして男の子ｖｅｒ『詩菜』であります」

「……素晴らしい……！」

……は？

はぁぁぁぁ！！？

ちょっ、待て！？

「天魔！！貴様ロリコンじゃなくてゲイだったのか！？」

「両方いけるのぅ」

「退避ィー！！！」

「逃がすかぁ！！」

「追ってくんな変態！！？」

「その言葉も良いなッ！！」

「なんでもありかキサマはッ！？（泣）」

うん、やらなくて良かった…かな？
面白展開、若しくは腐女子的にはおｋかな？ｗｗ

まぁ、あんまりそんな事を書いたら侮辱行為に近くなるのでやりませんが。

親愛なる我が娘（？）　その３（前書き）

色々と矛盾している…かな？

親愛なる我が娘（？）　その3

「仕事行って来まーす」
「仕事より自宅を探せよ……行ってらっしゃい」

ツンデレｋｔｋｒ！！

はてさて、なんやかんやで一月も彩目邸に居着いちゃっているわたくし、志鳴徒で御座いますが……。
……ここまで仲良くなると、俺が詩菜だと教えた時とかが、無茶苦茶恐い。

だがしかし、言わねばなるまい。結論の先送りは、いけない事なのだから。

彩目の家から続く小道を歩き、角を曲がった先にある大通りを通り、そのまま羅生門らしき物を通り抜けて、妖怪のテリトリーとも言える奥山に入る。

変化、詩菜。

一ヶ月も話して、更には同じ家に住んでいれば誰だってそのヒトの性格やどんな奴か分かってくる。

彩目は良いヒトだ。

私のやった事で人では無くなってしまったけれども、優しい心を持っている。

私がした事は人道的には許されない事で、妖怪にしてみれば普通に邪道だと言われ、

全く、自分でも何がやりたいのか、何を言いたいのかさっぱり分かんない。

だから、私が今からやろうとしている事は、

彩目と真っ正面から対決して、両方が幸せになれる道を探す。

私は、そんな有り得ないグッドエンディングを目指している、バカ者なのだ。

諏訪子や神奈子の時は誰もが不幸で、

それでも仲直りはしたけど、まだ全てが終わってない。

バッドエンディング？そんなの、私の目の前ではさせてたまるか。

「あらあら……もしかして、お邪魔かしら？」

……こんな時に厄介者はぞろぞろ現れちゃったりするんだよねぇ……。

スキマから現れたのは『妖怪の賢者』八雲紫。スキマなら彼女しかいないようなものなんだけどね。

…八雲なら、こんな問題はあっさり解決しちゃうのだろう。だけど、

「…そうだね。八雲、これは私の問題だよ。手出しはいらない」

「フフ、貴女がこんなに焦っているのを見るのは初めてね」

うっさい。

私だって、こんな戦いはいやだよ。

「でも、貴女なら楽しくしてくれるでしょう？」

「……御期待に添えれるかな？」

「頑張りなさい♪私たちの妹分」

そう言って、八雲はスキマと共に笑いながら姿を消した。が、どうせ高みの見物と洒落込んでいる筈。利用できたらボロ雑巾のように使ってやる。ああ、使ってやるよ。

いもうとを、ナメんなよ。

それはそれで面白そうね。

大通りを堂々と歩く。
妖力を撒き散らし、紅い瞳を惜し気もなく晒して。

「ッ妖怪よ！！陰陽師様ぁ！？」
「ヒィィ！！お、お助けをぉぉぉぉ…！！」
「たっ、退治屋はまだかッ！？こっ、殺される！！？」

……あ～、うるせ。
誰がそんなタプンタプンの腹を持った奴を美味しく頂くのよ？

そして復讐か貴族を守る為か、分からんが陰陽師もだまらっしゃい。

「詩菜ッ！死ねィ！！」
「だが断るッ！！」

死ぬ訳にゃいかないんだよ。まだ、バッドエンディングのまんまだぜ？
とりあえず、デコピンで吹っ飛べ。

「ぷぎゃー」

……聞こえなかった事にしよう。うん。
あんな事を言えるって事は、死にそうって訳でもなさそうだし。
とか考えているとあっさり陰陽師に囲まれた。オイオイ、前座にしちゃ酷しすぎじゃない？

「堂々と歩いて来るとは……何のようだ、詩菜よ？速やかに立ち去れ」
「矛盾してない？それ……危害を与えるつもりは無いよ？ちょっと逢いたい奴がいるだけ」
「…そんな言葉は信じられぬな」

その言葉と同時に退治屋と陰陽師はそれぞれの武器を構える。

…だよねぇ。
そんな言葉を信じてくれれば手っ取り早いんだけどねぇ。

まぁ、京を守る立場からは向こうも逃げられないって事かな？

「もう一度勧告する。速やかに立ち去れ」
「やなこった」
「全員攻撃開始！！」

薙刀、長刀、くない、御札、霊弾、武術、弓矢、たまに能力、刀、ヤジ、陰陽術、農民からの大根、二刀流、大金槌、竹槍、野犬、煙玉、罠、手裏剣、その他色々。
お前らそんなに乱戦にしたら同士討ちが…あ～あ。
作戦でもたてるか、チームワークをしなさいよ…。

刀は爪で切り裂き、霊弾・御札は避け、武術は衝撃し、弓矢は風で吹っ飛ばす。
進路を曲げて、ヤジは無視して、陰陽術は妖術で打ち破り、大金槌は真っ向から打ち勝ち、大根は美味しくいただき、竹槍は真っ二つに割り、野犬は大声で威嚇し、能力は全力で避け、罠はむしろぶち壊す。
ちょうど広場か何かに出たので、中央に陣取る。
広場の入り口に野次馬。
円形を描くように妖怪退治の連中が並び、
その中央に私が立っている。

いやぁ、まさしく映画のワンシーンのようだなぁ。

「…どうした詩菜よ。降参か？」
「さっきまで私の方がどう見ても勝ってたでしょうが…」
「……これ以上被害者は出したくない。退け」
「私は一人として殺してないんだけど？被害者を出してるのは、あんたらだ」
「……」

それに私はヒトに会いに来たってのに……。
……八雲に任せてしまおうか…？

…おっ？主役登場かい、彩目？

「また逢ったね？彩目」
「…何をしにきた？」
「……うーん。彩目に会いに来た」
「…はい？」

さて、ここからどうやってグッドエンディングに持っていこうか？

「ま、その前にいらない観客にはご退場願おうかな？」

「ッ！全員退避ッ！！」

遅い遅い。

「《マハガル》！！」

「ふっ！？ぅ……」

全員吹き飛ばしてやったわ！

無論、死なないぐらいのダメージは負って貰ったけどね。

残るは中央にいる私と、そこから少し離れた所に彩目。私の能力を恐れて近付かない庶民。

「……何をした？」

「能力を使っただけだけど？」

「違う！それは…その能力は……」

「『志鳴徒の能力』って？そりゃそうでしょ」

「……キサマ！志鳴徒を喰ったのか！？」

「誰が喰うか。私は人は喰わないの」

「…なら、何故キサマがその能力を使う！？」

あーもー、ややこしい事になってきたよ。

うまく説得出来るかな……。

「…順番が逆だとしたら？私が志鳴徒の能力を持っているんじゃなくて『志鳴徒が私の能力を持っている』とか」

「なんだと！？」

「まぁ、そんな事はしないけどね…彩目でもう懲り懲りだ」
「…どういう意味だ？」
「ゴメン、彩目。私の勝手な行動で妖怪にしてしまって。申し訳無い」

私だってこの世界に生まれた時、何故私はこんな目に遭わないといけないのかと考えていた。
理不尽じゃないかって。未来の人間社会で安全な所に居たのに、どうしてこんなタイムスリップしてまで、命の危険を何度も遭わなくちゃいけないんだって。
でも、そんな気持ちも薄くなって、今では楽しく生きてやろうって思ってる。思えてる。

けれど、そんな思いをした私が人間を妖怪にするのはいけない事だったんだ。
私も人間から妖怪にされたのだったら、そうした神様とやらを盛大に恨んでいるだろうに。

「……ふ、ざけるな。何を今更…」
「…今更すぎるよね。ほんと」
「……」
「…彩目に殺されても文句は言っちゃいけない。けど彩目だろうと誰だろうと、殺されたくはないって思ってる……卑怯者だね、私は…」

……ハハハ…ほんと、無様なこった。

「…許すものか、絶対に……！」
「うん…許される訳がないのにね…」

彩目は泣きながら刀を構えて、こちらを睨んで、突っ込んできた。
無意識に刀を受け止め、能力で弾き飛ばそうとするのを必死に抑える。

「死ねッ！死んでくれッ！！」
「……」

ガード、受け流し、押し返し、避ける。
どうしようもない。既に結論は出てしまった。

私は、どうしようもない。

鍔迫り合いは終わらず、ぞろぞろと妖怪退治が集まってきた。
私はただ彩目の刀を受け止め、決して自分からは攻撃せず、
彩目は妖怪の証である妖力と、濁った色の霊力を出し散らしながら、
私に刀を不格好に振り回し続けている。周りなど確実に見ていない。

あまりにも、おかしい現場。
このままだと、二人まとめて殺そうとする輩が絶対に出てくる…！
そうなる前に、何か現状を変化させる何かが……！！

「紫！！」

このヒトがいたや。

叫んだ途端に頭上にスキマが現れ、八雲が顔を出してくれた。

「…残念、もうちょっと見ていたかったわ」
「私と彩目をここからどこか遠い所に運んでッ！」
「ハイハイ♪」

刀の刃を素手で握り、もう片方の腕を彩目の後ろに回して確保する。
彩目が暴れているから、刀を掴んでいる掌から血がボタボタ垂れている。

拘束すると、足下にスキマの前兆の一本の線が走った。

「まだまだね。詩菜ちゃん」
「御期待に添えなかったみたい。ゴメンよ」
「ふふ、まだ終わってないわ」

スキマが開き、落下。
八雲の笑顔に見送られながら。

着地。
辺りには人も妖怪も誰もいない、ただ草原が広がっている。

「はなっ、せぇッ！！」
「うぇっ！？ゴメン！」

素直に両手を解放して、彩目を離す。

……あ～、刀を掴んでた右手はもう駄目かな？なんせ妖力と霊力を混ぜられて斬られたに近いんだし。
…他に傷は……特にないかな？全部避けてた筈だし。

「彩目、大丈夫？」
「…うるっ…さい！」

暴れすぎて力尽きかけてる…のかな？
何にせよ妖力も霊力も、既に尽きている。

「刀も持てないのに、よくやるよ…」
「…ッ！」
「ほら、休める所に行くから。ちょいと飛ばすよ」
「やめッ！うわっ！？」

刀を奪い、彩目を背負い走り出す。
戦争の時に私に追い付ける程のスピードを出せるのなら、これぐらいは平気な速度だと思うけど…。

もう彩目は京には戻れない。戻ったとしても迫害されて、最悪退治される。
私が向かっているのは、天狗の里の自宅。
ちょいと天魔に迷惑をかけるかも知れないけれど、それには目をつ

ぶって頂いて貰おう。

道中。
声が聞こえてきた。

「……何故」
「…なに？」
「何故、私を妖怪にした？」
「……始めはさ？妖怪らしく普通に人間を襲って、妖力を回復しようと思ったんだと思うよ？」
「…『思う』な、のか…？」
「彩目の『職業柄、妖怪に殺されると分かっていた』とか『自分を殺せ』とかを聞いてるとさ、なんかこう……面白くないのよ」
「……な、んだ。それは…」
「何かを妥協するのは別に良いよ？けど、死ぬ事に対して妥協するのは許さないよ」

「……」
「他人に自身の審判を任せようとするのは、卑怯だよ」
「…変な、ヤツ……他人に、審判を勝手に…下すのは良い、のか…？」
「それは人道的には許されない。けど自然界では当然の事だよ。人間が間違ってる訳でもないと思うけどね」
「……次、何故…今更謝って、きた？」
「…私も人間だったんだよ。生前はね」
「なっ…！？」
「後から考えてみれば、立場はそんな変わらないんだよ…私と彩目はね。作為的か無作為かの違いだけで、ね」
「……そん、な…」
「私は気付けばこの有り様。誰が何の意味があって私をこんな目に遭わしたのか分かんないけど、そりゃムカつくよね」
「……」
「それを知ってる筈だったのに…ね。ゴメン」
「……」

到着。天狗の里に。
ブレーキ。自宅前に誰かいる。
誰か、じゃないな。あれは天魔だ。

「天狗の長として、ここを通させる訳にはいかぬ」
「……天魔」
「ソイツは人間じゃ」
「…うん。知ってるよ」
「…お主がここの妖怪から襲われる前に、とっとと失せよ」

コイツは…天魔は、優しいね。
種族の危機よりも、知り合いの危機を優先してくれるから。普通は種族を優先しなけりゃいけない筈なのに…。

「……北の麓に、これと同じぐらいの大木がある…そこなら許してやろう」
「…わかった」

「……すまぬ」
「…ありがとう」

これでほとぼりが冷めるまで、迂闊に動けなくなった。
天魔が目をつぶれば良い。なんて馬鹿にし過ぎなのにも程があるよ…。

太陽は西の方に沈みかけている。
そこで、ようやくお目当ての大木を見付けた。
……疲れた…！

「彩目！下ろすよ！？」
「…構わん」
運んでいる間に随分冷静になってくれたようだ。
っと！いけないいけない。集中集中！！
「《ガルダイン》！！」
加工。完成。
建築家なめてるなぁ……。
間取りも何もない、扉を開ければすぐに居間兼寝室なのは、昔と変わらない。
「彩目！」
振り替えって叫ぶ。
が、
「…うるさい、耳元で怒鳴るな。響くだろ」
「ッ！彩目！？身体は！？」
振り替えるまでもなく、彩目は『自分の足で』私の真横に立っていた。
「大丈夫、ではないな……眠い。寝させろ」
「なら早く入りなっ！」

既に太陽は完全に沈み、辺りは真っ暗だ。
それでも普通に物が見えるのは、例の妖怪スペックなんだろうなぁ…。

そして、私の血肉を食べた彩目もそれに近いのだろう。おが屑で汚い床を払い、腰を下ろした。無論私もだ。

「大丈夫…？」

そう訊いた私を手で制止させ、彩目は喋りだした。

「……私はお前を許しはしない。だが…最後に一つ、訊いておきたい事がある」
「…なに？」
「お前は私に謝って、何がしたいのだ？」
「……なんだろうね…嫌われたくないから『仲良くしたい』かな？」
「…ふん、志鳴徒らしい言葉だ…」
「……」
「……好きにしろ。だが私はお前を許さない」
「…私は……どうすれば良いの？」
「知るか……良いから、寝させろ…」

言うなり、身体を横に倒しすぐに寝息をたて始めた彩目。

私は…許されていない。
けれど、こうやってすぐ近くで寝始めるのは、
妖怪の眷族同士にある一定の親近感があったとしても、

私にとって凄く嬉しい……。

朝日が昇ると同時に、目蓋が開く。
目の前には彩目の安らかそうな寝顔。

…近くに強大な妖怪の気配。それも、私が知っている大妖怪の気配。

「八雲」
「…これが貴女の望んだ結末かしら？」
「…さぁ？少なくともバッドエンディングじゃあ、ないよ」
「そう…」
「……ありがと、お姉ちゃん」
「ッッ！？や、止めなさい！はっ恥ずかしいじゃない…」
「へへへ…」
「全く……その子、ちゃんと面倒みなさいよ？」
「…分かってるよ」

何処までも背負ってみせる覚悟だよ。
頼もしいわね、詩菜ちゃん。

この世界はまったくもってどうしようもない。（前書き）

原作キャラ、え～っと五人目？
まぁ、この人が出れば（言い方が悪いけど）芋づる式にキャラが出るので（苦笑）

ではでは、２３話。どうぞ。

この世界はまったくもってどうしようもない。

「まずは……掃除だね」
「……その前に、お前は志鳴徒と同じと言っていたな？」
「うん？そうだけど……ああ、呼び名？それはその時の姿にあわせりゃ良いんじゃないかな？…でも、まぁ力仕事は男の役割っしょ？……ホイ！どうだ！？」
「…あ～……あれは本当に、文字通り『一心同体』って事だったんだな……」
「ま、さっさと終わらせますか」
「……私も手伝うのか？」
「…命令してやろうか？」
「それじゃあ結局、変わらないじゃないか……」

さて、彩目とは不可侵条約というか、まぁ微妙な決着がついた。彩目は俺を許さない。けれどもそれは、俺等が歩み寄ってはならない理由には、ならない。
何ともまぁ、阿良々木をリスペクトしちゃったものだ。片方は元人間で、片方は半人間。笑えねぇ。

「……ああ、そうだ。言っておく事があった」
「…なんだ？」
「俺はまた都に行くから。その間何処に行こうが構わない」
「……どうせ、何処にいたって分かるような術式を私に寄越す気

だろ」
「おお、その案があったな」
「……はぁ…？」
「まぁ、元から渡す物はあったんだよ。ホイ」
「…これは？綺麗な紅玉にしか見えないけど……？」
「『緋色玉』ってんだけど、本当に緊急時って時に使いなさい」
「そんな危険なのか？これ」
「思い切り投げて、それでも逃げろよ？地形を変えるかもしれないからな」
「そんな危険物を渡すな！！」
「妖力で起動するようになってるからな？ちゃんと扱えるよう練習しておくように」
「ハイハイ……」
「んじゃ、またな」
「ああ……また」

閑話休題。そしてここからが本編。

この世界に転生してから、驚く事が多すぎて最早驚愕のレパートリーも尽きかけているというのは嘘なような気がするのだが、まぁ要は、俺が生きていた世界では有り得ない事やいない筈の妖怪が生きていたり、とにもかくにも、全くもっておかしな世界に俺は生まれたのだ。

そして、その『ありえない』物語が俺の目の前にあったりする。

【今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことひ使ひけり】

そう『竹取物語』が、目の前で進行している。

最初に気付いたのは、庶民がやけにざわついていた事で、それが端を発していた。

京に帰ってきて、適度に人を襲い適度に妖怪を討ち、それからしばらくの時間が過ぎた。

彩目は案の定、指名手配みたいなものをされ、詩菜は…まぁいつもの事だが『逃げの大将』がまたやったとか云々…。

ま、貴族からの依頼をすっぽかし、庶民の依頼を優先して今日も街に繰り出していた。

が、いつもの風景と違うのは牛車の殆んどがある方向へ向かっている事。
いつも井戸端会議ならぬ店先会議をしているおっちゃん達が、熱心に噂話をしている事。
陰陽師がやけに忙しそうに、それこそ誰かを守るように働きだしている事。

それだけなら、何か面白い事でもあったのか？とかで終わっていたのだが、
依頼をしてきた町民の依頼があまりにも、陰陽道とはかけ離れたものだった。

『輝夜（かぐや）姫を見てきて、どんな御方か教えて欲しい』
……絶望した。男の欲望に、絶望した。男だけど、絶望した！！

そんなこんなで、スニーキングミッションだ。気分はソリッド・ス○ーク。
意外とノリノリだったな、俺。

けどまぁ、初めからステルス迷彩を持ってて赤外線や地雷や、番犬も何もない場所を進んでも、詰まらないったらありゃしない。

かぐや姫の屋敷に到着した。場所は貴族についていけば、案の定どんぴしゃだった。

「さーてさて、カエル兵とか月光とかがいないかなーいる訳ないかーだよなー……」

「…お主は何を言うておるのじゃ？」

「いやぁ藤原どの、見張りがいないのは詰まらない。というだけの事ですよ」

「……相変わらずお主の言う事は分からぬ」

「ハッハッハ、やー藤原どのは話が分かる！！」

「何故にお主はそんなに高揚しておるのじゃ…」

貴族は偏見でロクデナシばかりだと決め付けていたが、そうでもないようだ。

この藤原の某とやらは思考が庶民的！

うーん、いい人だ。

「……ワシが聞いた事のある志鳴徒は、もっと貴族に冷たい。との事じゃったのじゃが…？」

「そんなの、ヒトによりけりですよ。気に入れば良しです」

「……まぁ、よい。お主も姫に求婚か？」

イッショニスンナ。

「似たようなものですよ。わたくしは依頼、ですがね」

「ふむ…？庶民か」

「……黙秘、という事で」

「フッ。それでは答えを言っておるようなものではないか」

「顧客は大事にするのでね」

「…ふむ、気に入った」

…あんたも天魔と似たような事を言うんじゃないだろうな?爺言葉は一人で充分だぜ。

「今度お主、ワシの家で酒盛りでもやろうではないか?ワシも気が合うような気がしてきたわ!」
「そりゃ有難い。是非とも今度」
「おう、いつでも来い!待っておるぞ!!」
「ハハハ。……ではわたくし、仕事があるので、これにて失礼つかまつる」
「頑張るのじゃな!」

いい人や……。
この世界で初めてあんな人間を見たかも…。

まぁ、それはそれでおいといて。
屋敷内に侵入、である。
無論、志鳴徒のままで行けば簡単に見付かってしまう。
ので、詩菜でも志鳴徒でもない『鎌鼬』の状態で、屋敷内を彷徨く。
霊力やら妖力を持ってたり陰陽師でもなければ、風の状態で人間をすり抜けても気付かれない。流石『鎌鼬』。

はいお婆ちゃんゴメンねすり抜けるよ~?
はいはい讃岐の造らしきお爺さんゴメンよ~通るからね~。

しかし、まぁ…どれだけ広いんだよ……?

かれこれ半時は彷徨いてないか？
使用人らしき人と何度擦れ違ったか…！？
その度にこっちはビクビクしなくちゃいけないんだよ！？

そんな愚痴を述べ回っていると、どうやら一番奥の部屋に辿り着く事が出来たようだ。やっとだよ。
さーてさて、ごたいめー……居ないし。

あ～…さては求婚に無理難題を吹っ掛けて、諦めさせてる時か？
とすると、どうせ護衛として陰陽師がいるだろうし…迂闊に近付けないな…。
……そういや、さっきから彷徨いてて俺に気付く奴が居なかった所を見ると、この屋敷には霊力やら陰陽術を持ってたり知ってたりする奴が居ないのか？
案外抜けている所があるのか、それとも俺が気付けないようなカラクリでも仕掛けてあるのか。

……ま、この部屋に面している庭でゆっくり気長に待つとしますか。
鬼が出るか蛇が出るか。
姫が出るか退治屋が出るか。ってか？

…待つのは、暇だな……。

……。

…えーと、これはどういう状況なんだ？

まず、俺は庭に出ており鎌鼬の状態で、上空から部屋内を覗ける位置に待機していた。

次に、恐らく彼女が姫様であろう、女性の方が部屋にいる。

…こちらを、明らかに睨んみながら。

無色透明で妖力と神力を上手く隠せば、余程の実力者でなければ感知出来ないと言われた…俺のステルス迷彩がっ……！？

「……そこにいるのは、誰かしら？」

「……」

「黙ってないで、何か喋りなさい。撃つわよ？」

黙秘…！

こういう時は、黙っているに限る…筈……！！

「……それっ」

「痛ぁ！？」

「さっさと正体を明かさないからよ」

バレた……だと…？

そんな…馬鹿な…！？

志鳴徒！どうしたんだ！？志鳴徒！しなとぉーっ！！

てーれって、ってー。スネークイーター……。

「…現実逃避している所悪いんだけど、貴方巷で有名な『志鳴徒』よね？」

「逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ……」

「…それ逃げてるわよ……ん？〇ヴァ？」

「……え？」

「はい？」

「「……」」

……何か猛烈に、嫌な予感がするんだが…？

「……えーと…何者なの？貴方…？」

「…あ～、例えばの話だが…ガン〇ムと言えば？」

「……エク〇ア、とかかしら？」

「…『人がゴミのようだ』」

「ム〇カでしょ。……『ただの人に興味はありません』は？」

「ハ〇ヒだろ？」

「……富〇」

「……仕事しろ」

「「……」」

なんで？

どういう事なの。
なんで月の姫様がこんなオタク、というかネットの話に通じてるんだ？

「…輝夜姫。だよな？」
「……貴方こそ、志鳴徒よね？」
「「なんでそんな事を知っている」のよ？」
「「……」」

話し合い。談義。意見交換会。ディスカッション。

「オッケー、話をまとめよう。輝夜は月から追放されてて、その月では今の文化なんて『はぁ？アンタばかぁ？』みたいなレベルにあると？」
「…まぁ、そうだけど……むしろ貴方の方が信じられないわよ。転生なんて」
「いやいや、現にこうして知識を持って存在してますので」

困惑していても、仕方がない。
だから、俺の知識と輝夜の知識を情報交換させていただいた。

輝夜は月から追放されて、月人いわく穢れた地である地上に降りて

きた。
月の人達は元は地上に住んでいたが、何かの理由により月に移り住み、そこで繁栄したそうな。
追放された理由は言おうとしなかった。が、まぁどうでもいい。

「ちょっと、どうでもいいって何よ？」

うっさい。語り部に入ってくるな。
俺が渡した情報は、未来から妖怪に転生したらしいという事。『竹取物語』というのがあって、かぐや姫がどんな風に生きていくのかを知っているという事。

「…ふぅん？この世界なのかどうかはわからないけれども、貴方の未来と私の住んでいた世界では共通部分があるという事？」
「……どういう事？」
「私に訊かれても知らないわよ…」

えーと？俺が人間だった世界にあった『文化』がこの世界では、月の『文化』にそっくりというかそのまんまで？
じゃあこのままこの世界が進んでも、あの世界の文化は独自の物という事で、再現されなくなると？
世界誕生→俺の過去の未来の世界（？）→月に移住、輝夜誕生？→地上崩壊→新世界誕生→俺がこの世界に転生？→輝夜追放→アニメ漫画座談会……という流れ、なのか？

「分からないわ……最後がどうかと思うけど」
「…だよなぁ。最後は譲らないが」
「なんでよ…」

夕暮れ時。

求婚者はほとんどが帰宅し、残っている者は輝夜とその家族と付き人、或いは覗きか夜這いぐらいだ。

まぁ、後半のほとんどが輝夜自身によって追い返されるか撃退されるか。

ていうか屋敷に陰陽師が居ない訳が分かったよ……輝夜が単に強いからだ。

誰から学んだか知らないけど、護身術どころじゃないレベルの格闘が出来るし、弾幕は全然避けれないような濃さで放ってくるし……

…月の文化はなんでもありですか？

「……まぁ、転生自体はどうにもならないし、バレたとしても迫害されるだけだし。どうでもいいか」

「気楽だわねぇ……」

フム、風来坊だしな。関係ないがな！！

…かぐや姫は月に帰り、後には不死になる薬が帝とお爺さんの所に残された。

不死の薬は近場で一番月に近い山で焼かれ、そこからは煙がいつまでも絶える事がなかったので不死の山『ふじさん』と呼ばれるようになった……とか。

不老不死になる薬、ねぇ…。

「最後に質問だが、月に『不老不死の薬』っていうのはあるのか？」
「……あるわよ」
「そこは忠実なんだな…まぁどうでもいいけどな。じゃあなおらぁ帰るので」
「…どうでもいいってどういう意味よ？」
「ん？そのままだけど？興味はない、という意味」

妖怪になっちまったし、これ以上人外の存在になりたいとも思わないし。

「……」
「まぁ俺の仕事はこれで終わり。帰ってさっさと寝よー。あ、報告どうしよ。明日でいっか」
「…そう。どうかと思うけど…」
「ん。じゃーな？せいぜい地上生活、楽しむこった」
「……また、逢えるかしら？」

……。
…フラグはもう御免なんだが。

「…仕事がまた入ればな。暇なら来るかも知れんが」
「フフ、そう。じゃあまたね？志鳴徒」
「…はぁ……おぅ、またな」

…あの笑い方。八雲と同じ『何かを企んでいる』笑い方だ……！

……（精神的な意味で）女って恐ろしい……！！

弟子と娘（前書き）

……今、思ってみれば随分と自分に無茶振りしたものですね……

…ハハ…。

弟子と娘

「はっはっはっ！！呑め呑めぇ！！」
「ハ、ハハハ……どうも」

藤原の某とやらは、どうやら酒癖が悪いようだ。すげぇしつこい。

はてさて今日は何の日かというと、藤原どのに酒盛りというか宴会というか二人だけの飲み会というか。
とりあえず、藤原氏が所有する屋敷にお邪魔させていただき、こうして晩酌を楽しんでいる訳である。

…とてもじゃないが、かぐや姫にご執心だった五人の貴公子には見えん。

「というか、輝夜の頼み事はよろしいのか？」
「うん？姫からの頼まれ事？それは何の事じゃ？」
「え？……聞いて、ないのか？」
「わしはそのような事は聞いておらぬが……なんじゃお主、求婚ではないと言っておった癖に今更狙い始めおったのか？」
「それはない。が…聞いてないか……」

…つまり『五つの難題』はまだ言われていない…？
確か五人の内の一人に『藤原なんちゃら』がいたような……気がしてたんだが…？

俺の記憶違いか、はたまた単に言われていないだけか。
最悪、人違いとか……あーいやだいやだ。

まぁ、輝夜が月に帰るのはまだまだ先の事なようだし。
久々というか、初めてこの世界で昔(アニメ)の話し相手が出来た訳だ。ハハ。

「ほれ！その件はわしの酔いが治まった時にじっくり聞き直すとしてな？呑め呑め！！」
「聞き直すのかよ…」

酔ってるのか酔ってないのか分からねぇ。
その赤い顔はペイントの類いじゃないよな？

数時間後。
結局酒をどんどん呑み、遂には潰れてしまった。藤原どのが。
人間と妖怪ではスペックが違うのだよ。

真っ昼間から呑むのもどうかと思ったんだよなぁ……。
わ～…夕焼けが綺麗……。

……現実逃避している場合じゃないよなぁ。

「おーい!!誰か居ないかー!?藤原どのが倒れたのだがー!?」

この屋敷は、下人のような滅私奉公をする者は居らず、都の中心部から比較的離れた所にひっそりと建っていた。
貴族が人目を憚らずにどんちゃん騒ぎを起こすには、確かに有効な場所だ。

だが、妖怪のスペックをなめんじゃねぇよ?
世話人は確かに居ない。
が、明らかに『誰かが居る』
そして、向こうも俺や藤原氏に逢おうとはせず隠れるように、屋敷を逃げ回っている。
その動き方もかなり慣れている。才能か、はたまた努力の結晶か。

……そう動かれると気になっちゃうんだなぁ。

何故こんな場所に居るのか?
何故ヒトが居るのに逃げないのか?
何故俺等から逃げているのか?
何故この屋敷の構造を熟知しているのか?
何故そのような技術を持っているのか?

ハハハ!やば。楽しくなってきた。
追い掛けっこと洒落込もうじゃないか?

この屋敷は普通の邸よりは狭い。だが、それでもかくれんぼには充分すぎる広さであり、ましてや一対一ならば到底見付ける事など出来そうにない。

けど俺には、靴音による衝撃音『タッピング』が聴こえてくるように、既に能力を発動させている。

『衝撃を操る程度の能力』を使い、俺の足が鳴らす衝撃は無音に。誰かの足が鳴らす衝撃は何処から聴こえてくるか分かるように。向こうも既に気付き始めている。

一つ目の角を曲がって、隣の連なっている部屋を通り抜けて、誰かは反対側に抜けたから、此方は四つ角を左に抜けて、右に合わせて…くそっ、構造が分かってないとキツいな。

左右前右右左左前左右左右前右左右前左右前前左左右右前前右前左右左前左前右前左前前右前右右左前前右前左右左前左前右前右右左前前右前左右左前左前右前右右左前前右前左右左前左前右前右右左前前右前左右左前左前右前右右左……ん？

この先は、宴会していた所で…藤原氏が寝てる……まさか、藤原氏の暗殺…！？

「ヤバッ！？」

相手が部屋に入って襖を閉めた丁度その時に俺は角を曲がり、閉じられた瞬間の襖を見た。

間に合え…ッ！！

襖なんて知るかッ！このまま飛び込む！！

「どりゃっ！！藤原ッ！？」
「おぅ、なんじゃ騒々しい。もっとゆっくり酔えんのか？」
「うるせぇ！それよりもッ！！……ああ？」

……見間違いか…？
目の前に藤原氏が居て、その徳利に酒を注ぐ少女が見えるんだが…？

「いやいや、わしの娘じゃよ」
「ああ、アンタの娘……はぁ？」

…ま、まぁ、確かに藤原氏は娘が居てもおかしくはない年齢だし、
少女の年齢も見た目は理に叶っているように見える。

だが、
じゃあ何故、隠れさせるような真似をさせた？

「一つはお主の腕試しじゃ。わしのお眼鏡に叶うような存在か、な」
「…まどろっこしい事を……」
「ふふ。二つ目はわしの娘の腕試しじゃ」
「……娘の腕試し？」
「…ふむ。順を追って説明しよう」

娘の名前は『藤原妹紅』
わしのちょいとした事情による隠し子。
この屋敷に一人で暮らしている。
世間に知れ渡ってしまえばわしはともかく、こやつにも何かとあってしまう。その為に護身術のような物を教えている。
この子には才能があり、わしにはこれ以上教える事が出来ない。だ

が、これではまだまだ不十分だ。
それにより、信頼できる陰陽師にでも頼もうかと思っていたが……。

「…たまたま出逢った俺に目を付けた、と？」
「うむ」

……。

「…この子の師匠になれと？」
「駄目か？」
「……こっちにもいろいろ事情がある」

妖怪とか、能力とか、変身とか、年齢とか。
挙げたらキリがない。

「いや、体術だけでも良いのじゃ。お主は妹紅を追跡出来ただけでもかなりの能力があるのじゃぞ？」
「…他にもやらせた陰陽師が居たのか？」
「実力者を二、三人ほどな。どいつも気付きはしておったようじゃが、追う事は出来ずに終わっていったわ」

そりゃ俺は能力を使っていたからなぁ……。
体術も能力頼りの付け焼き刃だし。

「能力も実力の内、じゃよ。まぁつぶれた振りをしていたのは悪かった、すまぬ…が、頼めるか？」
「……ハァ」

最近思ってはいたんだ。

自分の事をよく知っているつもりだったんだが、実は親しい奴から頼まれた事は余程の事じゃない限り、断れない性質なんじゃないかって…さ……。

「…良いよ。その依頼引き受けた」
「それは有難い。ほれ妹紅、挨拶せぬか」
「あ…！よろしくお願いします！！」

…初めて声を出したんじゃないか？

「そうだな……一年間の間だけだ。こっちにも都合があると言っただろ」

それぐらいならば、容姿が変わらない等の疑惑を持たれないだろうし。

「それで良い。出来れば陰陽術を覚えて欲しかったのじゃが…」
「生憎と専門外。習いたいとは思ってるけどな」

商談成立…か？
これで弟子は弥野・縞・作久に……彩目は微妙だけど、入れると計五人の弟子か？
……私はそんな上に立てるヒトじゃないっての…ハァ。

「……まぁ何にせよ、師弟か…よろしくな？妹紅とやら」
「師匠、よろしくお願いいたします！！」

…またその呼び方か…まぁ別に良いんだけどさ。

「…俺は能力ありのなんでもありの体術だから、教えてやれる事は少ないと思うぞ？」
「おいおい、請け負った後で何を言い出しておるのじゃ…」
「まぁそうだけど…一応な？」
「いえ、大丈夫です！」
……元気だけが取り柄、ってか？

まぁそんなこんなで、俺は五人目か四人目の弟子を持つ事になったのだった。
憂鬱だー……。

《ｓｉｄｅ　彩目》

……いきなり視点が変わったような…。
気のせい……なのか？分からん。

私はアイツの家を飛び出して、近隣諸国をまわっている。
アイツの居ない自宅にずっと居たってどうしようもないし仕方もない。

……詩菜を許すつもりは毛頭ないのだが、どうも以前にあった殺意や憎しみはさっぱり湧いてこない。
想いは許したくないのに、感情が許してしまう。
これもアイツのいう上下の関係か、それとも命令か。どちらにせよ困ったものだ。
……この『困った』も苦笑いで済ませてしまった。
本当に、困ったものだ。

近隣諸国をまわる理由は武者修行とでも言えば良いのだろうか？詩菜から結び付けられた妖力の操作である。
アイツが出掛けた時に寄越した『緋色玉』とやらは妖力で発動するそうだが、私の力ではどんな風に構成されているのかさっぱり分からない。
だが、妖力の操作を練習しておくに越した事はない。

…私も随分と変わってしまったものだ。
あれほど嫌っていた筈の妖力を扱えるように練習をして、アイツの言った事を信じて行動している。

一ヶ月かそこらの生活と本人からの謝罪で、私はここまで変わってしまった。

「ふふ……」
「なぁに笑ってんだてめぇ？」
「いや、すまない。ちょいとな？」
「ナメテんじゃねぇぞ！！オラァ！」

戦いの最中に笑ってしまうとは、些か相手に失礼だったな。
だからと言って、私は手加減はしない。

四本腕の妖怪は、巨体に似合わず中々に素早い動きで私を翻弄しようとしている。
後ろに回られ片手二本の腕で押し潰そうとしても、

「遅いな」
「なっ！？てめえ！！」

私はそれよりも速く動く事が出来る。

だが、私の手元にこの妖怪を倒せるような武具は、ない。持っていた刀は出会った当初に折られ、あるのは懐に入れていた短刀だけだ。
あの筋肉では突き立てようとしても、この短刀では直ぐ様折れてし

まう。斬ろうとしてもそれは同じだ。
打撃？こちらの骨が折れるだけだ。

「オラオラァ！！逃げてるだけか小娘ェ！？」
「五月蝿いな。考えてるよ」
「それを逃げてるってゆうんだよッ！ドラァ！！」

避ける事しか出来ないし……参ったな。どうしようもない。
逃げるのも一手か…？

と、私が逃げ出す算段を考えようかと思い始めた時に、

足が、樹の根に引っ掛かった。

「ッッ！？ガハッ！！」

勢いに任せて地面に倒れる。衝撃で肺から空気が全て吐き出される。
咳き込み空気を求める行為が、私の決定的な隙になってしまった。

「もらったぁぁ！！」

振り下ろされた巨大な拳。
反射で右手に持った短刀を拳に向けるが、そんなか弱い刃で抑えら
れる筈もなく短刀は折れ、そのまま鉄拳は……

「……なんだ…と……！？」

「へ……？」

私の短刀は折れて、地面に転がっている。刃も柄もだ。

なのに相手の拳を止めた、この私の手にあるクナイはなんだ！？

私はこんなものなど…持っている訳がない！

「…てめぇ、武器を隠し持っていやがったな……！！」

「ちょっ！ちょっと待て！！」

「今更てめぇの話なんざ聞くかぁ！！」

急いで立ち上がり、手にあるクナイを見る。

短刀よりも明らかに細く、あの巨大な手を止める事など出来そうにない程脆そうに見える。

攻撃を避けつつ、何故こんな事が起きたのか考える。

詩菜や志鳴徒が何かしらの術を私に掛けたのなら、こんな事が起きたのも分かる。

だが、アイツならこんな事をするのなら直接渡すだろうし、渡されたのは紅玉だけだ。

現に懐には『緋色玉』とやらが入っているのを確認した。こいつが何かの術で変化したのではない。

ならば、何故……？

「よそ見してんじゃねぇぇ！！」

「ッッ！？っと！」

危なかった。叫んでくれなければ、危うく吹き飛ぶ所だった。

手元にあるのは『緋色玉』と先程のクナイだけ。

…仕方ない。アイツが寄越したこの玉を使おう。

「おい。そこの木偶の坊」

「てめぇ！！今なんて言いやがった！？」

「今からこの『緋色玉』を使う。死にたくなければ、退け」

「ヘッ！そんな脅し文句、誰が引っ掛かるんだ？オイ？」

「…ふん」

アイツの言う通りならば、此処等一帯は焦土となるそうだが……

いくらなんでもそんな馬鹿げた威力が、こんな小さな玉に込められる筈がない。

しかし口調は本気だった。アイツはどうでもいい事で嘘をつくが、真面目な事で嘘はつかない。

まだ慣れていない妖力を身体から玉へ移す。

「…お前、妖怪だったのか！！？」

驚いてるようだが、どうでもいいので無視しよう。

妖力により封印が解かれたのか、カチッとする音がなった。

「まだ人間やめたつもりはない。ホラッ！喰らいなッ！！」

名も無き四本腕の妖怪に『緋色玉』を投げて、私は反対方向に逃げ出した。
志鳴徒に追い付けるとは到底思えないが、脚力だけは詩菜に追い付けるようかなりの鍛練をした。

「…何だこりゃ？…あっ！？待ちやが――――

音が、消えた。
私はまだ走っている。
蹴り抜いた地面が、巻き込まれていく。
私はまだ走れている。
背中が焼けつくように、熱い。
…駄目だ、逃げれない……！！

私は、遂に吹き飛ばされた。

妖怪を中心に広がった『何かの爆発』は、逃げる私を追い越し巻き込み撥ね飛ばした。
それでも死ななかったのは、妖怪に襲われる事など思慮の他にして、

一心不乱に走ったからだろう。
……まぁ、それでも吹っ飛ばされて、意識を失ったのだが。

気が付くと私は詩菜の家に寝ていて、傍らには詩菜が座り看病をしていた。

「やっ、起きた？大丈夫？」
「……そう見えるのか？…ならば眼の医者に行け」
「う…ごめん」

…どうやら玉が爆発した瞬間に、コイツは私の元に向かい助けに来たようだ。
普段ならばかなりの痛みがある筈なのに、自力で起き上がる事も出来る。

「……何なんだ、あの玉は？」
「…ん～、私の能力。知ってるよね？」

『衝撃を操る程度の能力』は確かに打撃や精神に影響出来る能力だが、あの爆発はそのような威力ではなかった。
……もっと…そうだな、空気が爆発したような……？

「似たような感じかな？衝撃で圧縮したものを、更にあの玉に詰め込んだの」

……本当にお前は妖怪か？

「失礼な。私の友人にはもっと凄い能力者がいるよ」

…妖怪だよな？

「彼女曰く、スキマだとか。まぁ能力なんて認識によって使えるかどうかも決まるし、ヒトそれぞれだよ…」

ふぅん、能力で何かあったのか？

…と、あの玉で思い出した。

「お前、私にクナイを渡したか？」

「いや？渡したのは『緋色玉』だけだよ？」

「だよな…」

「何かあったの？クナイって」

「……あ～、刀が折れたんだが、その後にいきなり私の手に出てきたんだ」

うまく説明できないが、いきなり出たとしか言えない。

「…ふむ……彩目、どんな形か思い出せる？」

「ああ、多分」

「じゃ、目を瞑って。右手を下に向けながら私に伸ばして、そこに『ある』って想像してみて」

「？…なんだそれは？」

「いいから。やってみて？」

訳が分からないが、とりあえずやってみよう。

今から思い出してみれば、あれはクナイというよりも、尖った三角の槍と言った方が正しかったのかも知れない。

まぁあんな形でも『刃物』ではあるだろうし…。

カラン
「……あ～…目を開けても良いよ？」
「なんだ、もう良いのか？ろくに想像して…な…」

私と詩菜の間に落ちているのは、明らかに先程の槍のようなクナイ。
私が伸ばした手の、丁度真下に。
それこそ、私の手から落ちたような位置に、転がっている。

「…な……！？」
「彩目。自分の『能力』は何か分かる？」
「…え…能力…？」
「考えて。答えは『自分』が知っている」

私の……？
…私の能力は……。
『刃物を扱う程度の能力』
能力についての事が、頭に浮かんできた。
それは自分の能力だと、理由もなく確信した。

「…『刃物を扱う程度の能力』」
「能力開花、だね」
「……私が…？」
「……まだ混乱してるか。まぁもう一眠りして、落ち着きな」

詩菜が私の頭に手を伸ばし目蓋を閉じさせた途端、私の頭の中をぐるぐる回っていた動揺や驚愕が、一瞬にして落ち着き、そして眠くなってきた。
詩菜が私の衝撃を取り除いたのだろう。巻き込まれた傷も、精神も。

「おやすみ」
「……」
返事は出来なかった。
だが、深い安心感に身を任して私は就寝する事が出来た。

娘と弟子

「ハァ～…」

疲れた……看病とはなんて疲れるものか……。

毎回毎回、変な事故にあう私を看病していた天魔や幽香は凄いもんだよ…ホント。

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

藤原氏の陰謀兼宴会。の翌日。

結局、流れに任せて酒をかっ込み酔い潰れた俺と藤原氏は、妹紅に後片付けから俺らの始末まで任せてしまう、そんなダメな調子で朝を迎えた。

「父上もしっかりしてください！」
「はいはい…」
「ハイは一回！」
「…はい……」

こうしてみると、どっちが親か分からないな…。
父親は二日酔いの頭痛で立場が弱くなっているし……。
俺？能力で吹き飛ばしてます。頭に響く衝撃を取り除く！！
これこそ能力の使い道だと思うんだ。うん。

「すまんが、わしは仕事があるのでな……あとは頼む」
「へいへい。りょーかーい」
「……不安じゃ」

俺だって同じだ。
天狗三人組は基本放置だったし、彩目も彩目で最近逢ったばっかだし……あれ？特に何もしてないな俺…？

ま、まぁ！妹紅で挽回すれば良いのだ！！うん！

……考えてもどうすりゃいいのか分からん。
ここはまず親睦（？）を深めて、それから考えるとしよう。

「さて妹紅や」
「なんでしょうか？」
「……どうしようか？」
「……はい？」
「今まで俺は弟子なんて基本放置しかしていなかったし、愛娘っぽいのはどっかに出掛けたし……ぶっちゃけ何かを教えた事なんてない」
「弟子を持ってた事も娘が居た事も初耳なんですが……」
「弟子というか舎弟だな、あれは。そして娘ではないが、まぁ養子という訳でもないな」
「…そこらは、まぁ私も似たような感じですね」
「俺もそこまで深くは聞かん。重い話なんて単に疲れるだけだ。で、だな？まずは俺は何をしたら良いと思うよ？」
「……それはやはり師匠が考えるべきなのでは…？」
「能力なかったら単なるヒトだよ、俺は」
「…師匠の能力は『衝撃を操る程度の能力』ですよね？」
「おお、会話が広がった。俺の能力か？そうだが」
「私を追う事が出来たのはその能力で追ったのですか？」
「ああ、床を叩く『衝撃』音を追った」
「では、私に気付いたのは何が切っ掛けでした？」
「ん？ん～……気配というか匂いというか勘というか…まぁそこら辺の第六感だな」
「そ、そんなので気付いたのですか……」
妖怪で人間の匂いに気付いたなんか言えるかバカヤロー。
「はい？何か言いましたか？」

「いや何も。それはそうと妹紅はどうなんだ？あれほどの技術はそうそう持てないと思うんだが？」
「…私もなんとなく。としか言えませんね…」
「そっか…才能かねぇ」
「……」
「……」
「……話、きれちまったなぁ」
「……そうですね。むしろ初対面では良い方かと思いますよ」
「…案外、冷静なんだな？」
「…まぁ、慣れてますから」
「大変そうだな、色々と…」
「貴方も大変そうですね…」
「「……」」

会話が続かん！！
いかん。この調子だと仲良くなれずに一年が経っちまう！

向こうも同じか、必死に頭を回転させて考えてるように見える。
ヤバいヤバい……マジヤバ……ッ！？

『緋色玉』が発動した…！？
彩目の一大事だ！
妹紅とのスキンシップを取ろうと思った時に……！！くそぅ！！

「悪い、用事が出来ちまった」
「え…？」
「俺の愛娘がどうやら危うい、らしい。……すまんな。一回目の授業すら師匠らしく振る舞えないとは…」

「…その娘さん。私と歳は近いですか？」
「ん？……まぁ、容姿は」
既に人間の平均寿命まで来ているがな。
「大切な方なのでしょう？そちらの方を優先してください」
「…良いのか？」
「ふふ、まだまだ一年後は先の話です。…帰ってきて、私に師匠のお話を聴かせてくださいな」
「…すまんッ！！」
良い子や……！！涙出てきた…！
屋敷を飛び出し『緋色玉』が爆裂した方へ向かう。
彩目の気配は掴めないが、爆発した所の近くにいる筈だ。
久々に全速力…！！
ジャンプして木に着地、足場にして木々を渡り抜ける。
……大きな身体だと、通り抜けづらいな…！
変化、詩菜。
身体はやっぱこっちの方がやりやすいんだよねぇ……まぁ良いんだけどさ。
狭い木と木の間を通り抜け、しなりやすい竹林の飛び抜け、草原は地面をなめるように飛び込み、目的地に向かう。

爆発跡が見えた…！
既に発動から一時間は経っている。通りすがりの野良妖怪に気絶した彩目が襲われている可能性もある。
やっぱ威力が強すぎたか……軒並み吹っ飛ばされてるし…。
ここまで来れば彩目の気配も分かる。
風になり、上空から探すと直ぐ様見付ける事が出来た。

「彩目ッ！！？」

外傷、深いものはないみたいだ。
骨・内臓、折れているのもないみたい。痣は酷いけど。
近くに脅威となるような妖怪もいない。
服装もめちゃくちゃだし、何度も転がったのか全身泥だらけだし…
……。

「何はともあれ、運ばないとね……よっと」

向かうは新居になった天狗の里近くの自宅。
安心して寝られる場所が必要だ。

「ハァ～…」

疲れた……看病とはなんて疲れるものか……。
毎回毎回、変な事故にあう私を看病していた天魔や幽香は凄いもんだよ…ホント。

彩目は既に眠っている。
さっきはちょいと起きたけど、能力で眠らせた。

それにしても『刃物を操る程度の能力』って……明らかに私の天敵じゃん！
刃物は斬撃で『衝撃』じゃないから司れないんだよぅ……。
…名前からすると何処かの使い魔みたいなガンダルーフかと思ったけど、見た感じは何処かのエミヤか金ぴか王か何処かのカミガカリのヘカトンケイルか？
なんにせよかなり使える能力になるね。
後は…彩目の能力に対する認識力が重要ってとこかな？
彩目も彩目で放っておくのもなぁ……ダメな気がするけど…。

まぁ安全の為にも京に呼べないから、無理なんどけどね…。
妹紅に見せる活躍話も、この調子じゃ出来なさそうだなぁ……。

私も寝るか……むしろ眠くなってきた…。
まだまだ陽は高いけど、全力ダッシュは久々だったしなぁ。…疲れた。

「んー……おやすみ」

ちょいと寝させていただこう…。

「オイ、起きろ。もう朝だぞ」
「…朝……ッうえっ！？」

飛び起きた。そりゃもう神速の勢いで。

「ありゃ…寝過ぎたかぁ……」
「…いつ寝たんだ…」
「彩目が寝た後に」
「……」

まぁいいや。
都に帰るのが遅くなるだけだし、やり方が分からない妹紅の修行も考える時間が出来たと考えるべきでしょ?うん。逃避とも言える。

「それはそうと、どうだい?傷は?」
「…いや、痛まないから分からないんだが?補助してるだろ?」
「…よく私が能力で補助をしてるのが分かったね……んじゃ解除するよ?」

気付かないだろ。って思ってたんだけど、どうやら少しばかり見くびりすぎたかな?

「…ツツ、流石に痛いな…」
「当たり前でしょ。私だって三日ぐらい寝たんだから」
「……誤爆でもしたのか?」
「初めて使った時にね…ハハハ」
「…そんな物を渡すなよ…」
「でも、助かったでしょ?……ああ、能力あったっけ」
「…自覚しないで使えるか、あんなもの……補助、してくれないか?痛い」
「りょーかい。ホレ」

衝撃を取り除く。

……私はまだ本当は頭痛がしているんだろうなぁ…二日酔い。

ん、そうだ。

「…ちょいと相談事なんだけど」
「……お前が？」
「……その認識ひどくない？」

悩み事なさそうに見えてたの？眼科いく？

「ちょっとした依頼でさ？師匠になって欲しい。っていうのを引き受けたんだけどさ」
「…ああ、志鳴徒にか」
「それで、どうも『教える』って事に慣れてない私は、その子にどうしたら良いと思う？」
「……いつも通りで良いんじゃないか？」
「いつも通りで、って……」
「お前が私に妖力の練習をしろと言ったのと同じだ。思った事を言えば良い」

はぁー、なるほどねぇ……。
あれは必要だと思ったから言ったんだけど、そういう風に妹紅に言えば良いのかな…？

……ん？

「もしかしてさ、彩目って弟子を持った事…あるの？」
「いや…私の妖怪退治の師匠が言っていた」
「そっか……ちょいと安心」

「…先を越された。とでも？」
「へっへっへ」
「オッサンだ」
「いきなり酷くない！？ねぇ！？変な笑い方した私が悪いのかも知れないけどさぁ！？」
「フフ……私は大丈夫だ。傷が治るまではしばらくここにいる。能力について考えてもみたいしな。師匠の依頼を頑張ってくれ。…その依頼を放っといてわざわざここに来たのだろう？」
「…なんで分かったし」
「表情に出るんだよ、貴様は」
「……まぁ、確かに一日目から投げ出して来たのはヤバいよね」
「（一日目からかよ…）…ま、まぁ。心配は有難いが私は大丈夫だ。依頼をしてこい」
「ん、補助の効果は多分一日が限度だから、夜には戻るよ」
「ああ、行ってらっしゃい」
「…ハハ」

行ってらっしゃい、ね。
彩目に詩菜の状態で言われたのは初めてだな…。
…うん、嬉しい。

「…なんだ、いきなり笑いだして？」
「いんや。行ってきます！」

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

「で？お主は依頼をほっぽりだしおって、何をしておったのじゃ？」

鬼だ。むしろ阿修羅が、屋敷に居た。

後ろの妹紅は『説明したけどわかってくれなかった。ごめんなさい！』という意味らしきのボディランゲージーをしている。

ていうかその意味じゃなかったら俺は泣く。

「い、いや！藤原殿！これには深い訳があってだな！？」

「ほぉう？初日から依頼よりも大切な事があったのか？」

「あ、ああ！！ちょいと娘が危機に直面してな！」

「ほぉう？娘が居たのか？その身形で娘とは…やるのぅ」

墓穴掘ったぁぁー！！？

ていうかアンタ等と一緒にすんな！

血は繋がっている可能性はあるが、最近まで憎しみの極地でしたよ！？

ていうかオイ！妹紅も何頬を赤くしてんだ！？説明しただろ！？

「ハ、ハハ…いえ、養子みたいなものですよ」

「何にせよ、お主の娘か見てみたいものじゃのう？…わしの娘よりも優先させる辺り、尚可愛いものと見える」

やめてくれーッ！！彩目いま指名手配中！！

「ま、まぁ…本人の怪我が治りましたら…ね？」

「言ったな？よし決定ぃ！！」

ｏｒｚ

はしゃぐ藤原に横で崩れ落ちた俺。

こ、こいつ！何とかせねば……！！

と、憎々しげに藤原を見る俺の肩に手を置いた妹紅は言いました。

「父上はこういう事には滅法記憶力が強いので…どうしようもないかと」

「……衝撃で記憶飛ばしても良い？」

「……出来るのなら」

やってみた。

「藤原ァ！！まずはテメェのその幻想をぶち壊す！！」

「はっはっは！かかってこい！！」

「テッメェ！なんで避ける！？」

「わしに不可能はない！！」

「どこの天魔だキサマはァ！！？」

「第六天魔王にわしはなる！！」

「今度は海賊王か!?オイ逃げんな!?」
「だが断る!!」
「なんでもありかキサマ!!?」
「わしは先程から思った事しか言っておらん!!」
「もはや能力か!?一回調査するから降りてこい!!」
「わしは新世界の神になる!!」
「させるかァァ!!喰らえ『衝撃刃』ァ!!」
「一般人に何をする!?」
「どの口がそんな事を言うんだテメェ!!」
「この口」
「妹紅、殺して良いかな?」
「…死ななそうにありませんけどね」
「もこうぅぅ!?」
「よっしゃ!!『ザムド』ォォ!!」
「キュウリか!?」
「なーにーがーキュウリ、っだァァ!!」
「むひょ!?キュウリが飛んで屋根を削りよっとる!?あぶなっ!」
「…『あぶなっ!』で避けただと……!?」
「ふわははは!!そんなものか志鳴徒ォ!?」
「うるせぇ!?『ツァスタバターン』なんてしてる奴に言われたくないわ!!」
「おーにさんこちら、手の鳴るほうへ♪」
「ぶっ殺す!!」
「おお、怖い怖い」

「……私はどうしたらいいのでしょうか…?」

娘と弟子（後書き）

私が爺言葉を喋らせるキャラは、大抵何かしら最強になる。
という恐ろしい法則があるような気がしてならない。

崩壊（前書き）

『キャラ』が、崩壊しましたｗｗ
次に出る時は通常モードに戻しますので、ご安心を。

ほぼ声だけです。
状況説明などは殆どキャラの喋りでしかわかりませんのでご注意を。

崩壊

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

彩目に言われた通りにしてみて、とりあえず殴りあってみた。
と言っても、武器なしで俺は避けるか能力でガードするだけ。
隙があったらせいぜい衝撃で吹き飛ばす。無論安全な威力で。

「せやっ！！」
「ほいなっ」
「…師匠、やる気あります？」
「ぶっちゃけ痛くもなんともないから、そんなにない！」
「……（敬語やめようかな）」
「…まぁ、別に言葉はどうでもいいが、行動は示せよ？」
「……聞こえてましたか…って、良いんですか！？」
「…そうだなぁ、藤原氏の前では止めとけ。アイツは絶対怒るだろうしな。大方『グレた！？』とか叫んで」
「だろうなぁ…」
「…それが、素…か？」
「ん？まぁな」
「……（妹紅、恐ろしい子…！）」
「師匠、いま何か呟かなかったか？」
「いや何も。ま、何か距離的なものが縮まったと考えて、再開だ」
「距離的なものってなんだ……おらよっ！！」
「……うーん、口調とかが…凄い似てきたんだが…」
「……私と、師匠の娘か？」

「ん、まだ妹紅の方が男っぽい。と思う」
「……それは凄い傷付くんだが」
「はっはっは」
「笑ってんじゃねぇ！！」
「おう、そういう所は父親譲りか？ホレホレ、当ててみんしゃい」
「どこの方言！？というか、師匠の方が父上に似てるよ！！」
「マジで！！？」
「なんでそんなに驚愕してるの！？」
「ノリで」
「くっ…！のらりくらりと……！！」
「…あー…今の台詞、友人に似てるな」
「…友人にもそんな事をしてたのか……」
「『くっ！のらりくらりとかわしちゃって…！！』だったかな？」
「誰かは知らないが…師匠、よくそんな高い声を出せるな」
「両声使いなんだよ。…色々な意味で」
「？…りゃっ！！」
「ほい、どーん！」
「がっ！？」
「ありゃりゃ、強すぎたか？もこー？大丈夫か？」
「……らっ！！」
「…不意討ちお見事、でもやるときは急所を狙いましょ《ズブリ》目がァァー！！」
「…師匠は打撃に自信持ちすぎなんじゃないか？抜き手とかされたら、負けちゃうだろ？」
「お前それ目潰し！！痛ってー……何しやがる！！」
「逆ギレ！？師匠大人気ないッ！？」
「ふんッ！！石つぶて！！」
「足元の石蹴ってるだけだろ！？」
「衝撃が付加された威力に逃げる隙などない！！」
「速すぎるだろッ！？いだアァ！？」

「…おぅ、見事に鼻に命中……」
「…師匠…じゃない。志鳴徒ォ！！」
「呼び捨て！？でも良し！！涙目もグッときた！！」
「このッ！変態がァァ！！」
「変態じゃないさー。紳士と呼んでくれ」
「……キモい」
「ギャァァァ！！？止めてそれ！！トラウマどころか死んじゃうから！！」
「…そ、そこまでの弱点なのか……？」
「……」
「あ、死んだ。おーい、師匠？」
「……呼び捨ては、キレた時だけか？」
「いや、そこまではな？師匠が許してもする気にはならないし」
「……あと『キモい』は禁止な」
「ええー？」
「……言ったら…そうだなぁ。娘と同じ目にあわせてやるよ…」
「まて、娘に何してる」
「（人間換算で）半年の自宅療養を必要とさせるケガ」
「逆に師匠が父上に殺されるぞ？」
「お前が言わなければな…」
「……どんだけ覚悟してんだよ…」
「…うー…今日はおしまい。わしゃもう帰る。妹紅は食って寝るなり修行するなり頑張れ。明日はいつも通りで」
「…あー、ごめんなさい師匠」
「……いや、俺も言い過ぎた。こっちこそ悪かった」
「…じゃあ、また明日」
「ああ、お疲れ…藤原氏によろしくな」
「…はーい」

…あー……もの凄い自己嫌悪。
ありゃあやり過ぎた。恐喝レベルだな。

「だから私の所に来るってのは、お門違いじゃない？」
「良いんだよ。相手に愚痴る事が出来るから」
「いや私。誰がどうしたのか、何で貴方が愚痴るのか知らないから分からないわよ？」
「プライバシーは大切だろ」
「…愚痴りにきたのよね？」
「……どうだろ？」
「何をしにきたのよ……」

あまりにも早くに妹紅の鍛練が終わったので、暇潰しに輝夜の邸に来てみた。

「やっぱり暇潰しなんじゃない……」
「だってやることないし」
「知らないわよ…」

特に話す事もなく、ただ二人してボーッと夕日が沈むのを見ているだけだが。

んー……羽根を伸ばしたい。

「ちょいと失礼」
「？何がよ？」

変化、詩菜。

「…うん、こっちの方が気分的に楽」
「…ッ貴女は…『詩菜』ッ！？」
「ん、あれ？言ってなかったっけ？」
「…私が聞いたのは妖怪って事だけよ……！！」
あれ～？伝えたような気がしてたけど……まぁ、いっか。
「膝、お借りしまーす」
「ちょっ、ちょっと…！！」
膝枕。十二単でやるには些かキツイが、寝間着に近い部屋着ならば出来る。
もっふー……。
「あ～……癒される～…」
「……どっちが本性なの？」
「本性って」
苦笑いしちゃうよ？
その質問は。
「転生する前は男、生まれ変わってから女、百年経ってから男になる事が出来たよ？」
「……どちらも自分…って言いたいのかしら？」
「そうだねぇ…敢えて言うなら、『詩菜は妖怪、志鳴徒は人間』かな？」
「…妖怪の姿を私に教えちゃっても良いの？誰かに言うかも知れないわよ？」

「……ん～、それは困る」
「…困る。って…」
「じゃあ頼もう。友人として私の秘密。誰にも言わないで」
「……ふふふ、友人ね」
「どうかな？」
「良いじゃない。分かったわ」
「良かった」

美しきは友情なりけり。かな？

右手に夕陽が沈み、左手から満月が昇る。
この庭園を造った人に、限りない賛美を贈ろうかな。
良い眺めだ。

「…満月ね」
「…そういえば、帰るのはいつだっけ？」
「……来年の八月十五日よ」
「…そっか」

ここもお話通りか。
ま、私は何もしないつもりだけどね。

…とか、考えていたけど、どうもそれも変わってきそうだった。

「……私、月に帰りたくないわ」
「……なんで？」

「…月は退屈なのよ。何も行う必要がなくて何不自由なく生活ができて…」
「……」
「それにどうせ『穢れた地上にいた姫』なんて言われて、ろくな扱いを受けないわよ」
「……大変そうだね」
「…もしかしたら、貴女の子孫が月にいるかも知れないわね」
「それはそれで嫌だなぁ……ひいお祖父様、とかって呼ばれたりしてるのかな？」
「ふふ…想像もつかないかしら？」
「…まぁね。それで、どうするの？」
「……貴女はどう思うの？」
「……辛辣な言葉だけど、知らない。自分で決める事だよ、それは」
「…そうね」
「……月は綺麗だねぇ」
「……そうね。『月は』綺麗よ」

また幾ばくか、沈黙が続いた。
そろそろ、帰る時分かな？

「よっと」

膝枕も長時間はキツいだろうに、輝夜は何かも言わずにさせてくれた。
どいつもこいつも、好い人すぎる。

「んじゃ、そろそろ帰るよ」

「あら、せっかく来たのに？夜通し阿〇々木さんについて語り合わないかしら？」

「…それは物凄く語りたいテーマだけどね……」

大体、するのならさっさと言ってくれれば良かったのに…。

「タイミング間違えちゃったようね」

「明日も忙しいんだから…おやすみ」

「そうは見えないわ……おやすみなさい」

ほっとけ。

「ただいまー……あ？」
「おかえりなさい♪」
「貴女、ちゃんと部屋の掃除してるの？この汚さは酷いわ」
「……あのさ。なんで紫と幽香がいるの？」
「貴女どうやら都で活躍しているそうじゃない？だからそのお祝いよ♪」
「……暇なの？」
「みたいね。あ、私は紫に誘われただけよ？」
「…その説明もどうかと思うけど……あー疲れたー」

ここしばらく会わなかった幽香。
……最初っから部屋の汚さを言う辺り、変わってないなぁ。

まぁ、妖怪がそんなコロコロ変わっちゃダメか。

「ねぇねぇ？あの彩目ちゃんは？」
「…名前までわざわざ調べたの？」

「貴女があれほど慌てた子よ？興味あるじゃない」
「そうね。妖怪らしくない貴女がどうやってその人間を『妖怪』にしたのか。興味があるわ」
「うげ、一番訊いて欲しくない事を……パスで」
「じゃあ、あの子は今何処に居るの？天狗の家にもこの家にもいないようなのだけど？」
「ああ、天狗の家にもいなかった？じゃ、何処かに出掛けてるんじゃないかな？」
「現在地が分からないの？」
「…なんでそんな幽香は怒ってるのさ」
「怒ってないわよ？」
「（どう思いますよ紫さん？）」
「（私には爆発寸前に見えるわ）」
「（ですよね！怒ってますよね！）」
「……全部聞こえてるわよ」
「だよね」
「でしょうね」
「貴女達は……本当、似てるわよね」
「だそうよ詩菜ちゃん？似ている者同士、『式神』の契約を交わさないかしら？」
「あれ？諦めたんじゃないの？やる気ないけど」
「…くぅ、つれないわねぇ……」
「はいはい、地面に『の』の字を書かないの」
「私はいつも通りだけど、幽香や紫の方は何かあったりした？」
「「特に無いわ」ね」
「……」
「貴女が居た時のあの無茶苦茶な生活が懐かしいわ…」
「…まぁ、確かに貴女がする事は驚きの連続よね」
「こっちはそんなつもり、ないんだけどなぁ……」
「それが貴女の面白さよねぇ？」

「面白さ…って……」
「詩菜は詩菜。志鳴徒は詩菜、詩菜は志鳴徒、志鳴徒は志鳴徒」
「ややこしいわね…貴女もなんでこんな事をしたのよ？」
「…ん～……まぁ、色々とね？思う事があったのさ」
「ふぅん…？」
「……まぁ今じゃ『人間を助ける詩菜』は聞かないけどね」
「京では『妖怪を助ける詩菜』に『人間を助ける志鳴徒』ですからねぇ」
「ま！世間話はここいらにしておいて、夜ご飯にしましょ♪」
「……やっぱり幽香が作ったの？」
「…ええ。紫はいつものごとく、待っていたわよ」
「……御愁傷様です？」
「……そうね。大変だわ」
「ちょっと！？二人してなに私を亡き者にしようとしているのよ！？」
「さ、いただきましょう？」
「そうだねー、いただきまーす」
「…美味しいかしら？」
「……都の料理なんか、幽香の料理に到底及ばないね」
「フフ、ありがとう」
「わたしをむしするなぁー！！」
「あらら、泣かないの」
「…紫が泣いたの始めてみた……！！ヤバい、これは…超可愛い…！！」
「でしょう？これは、フフフ…興奮しちゃうわ……」
「（Sだ！！どSの顔だ！！）」
「うわーん！！」
「ほら泣かないの、ね？」
「……母性愛なのか嗜虐心か…何にせよ、紫は可愛いねぇ～」
「いつもの飄々とした性格がねぇ？なければ紫じゃないけど、素は

寂しがりよねぇ」
「…ひぐっ」
「おおぅ……ッッ幽香さんストップ!?顔がっ!顔がヤバい!!」
「ハッ!?…危なかったわ……私は友人になんて事を…」
「…今の顔は、危なかったよ?ほんと……フゥ…」
「……ううぅ」
「……友人なら…許してくれるわよね…?」
「ストーップッ!!待った!?待て!落ち着け幽香!?紫を襲おうとするんじゃない!!」
「?何よ…友人は襲わないわよ?」
「そ、そう?…それなら良かっ「肉体的に、おいしく頂くのよ」良くない!?全然良くないよ!!」
「さぁ退きなさい。もう私は止まらないわよ?行き着く所までいってあげるわ」
「くそぅ!?ッ紫、ちゃんっ!?早く幼児退行から戻って!!」
「……ぐす……ほんと?」
「ぐほっ……これは、やば過ぎる……」
「ハァ、ハァ…紫……(ゴクリ)」
「い、いかん!眼が光って息が荒い…!?ここは、逃げるべし!!」
「うにゃぁ!?なにっ!?」
「ごめん紫ちゃん!!今は逃げるよッ!!」
「ッッ待ちなさい!!独り占めは許さないわよッ!?」
「誰がするかッ!!ていうか落ち着け!?」
「んくっ!落ち着ける訳ないじゃないッ!!」
「ヤバいから!!幽香さん、色々と規制に引っ掛かるからその顔!?」
「そんなの知らないわ!!」
「知ってて!お願いだから知ってて!!」
「…の…!待ち…さ……」
「反省してなさいッ!!」

「……私はなんで貴女に抱かれて、移動しているのかしら？」
「…やっと戻った、よね？」
「戻った、って何の事よ？確か私は京の貴女の家に、幽香と一緒に向かって……それから…あら？思い出せないわ……？」
「うん…思い出さない方が良いよ……」
「…何があったのよ？」
「言いたくない。……ああ、忠告はしておこうかな？」
「忠告？」
「…寂しいなら誰かにちゃんと言ってから、それからデレデレしなさい」
「だっ、誰が寂しがってデレデレしたって言うのよッ！？」
「紫が」
「……（／／／）」
「…ほら、それが破壊力を持ちすぎなんだって…」

後日談。

「…お邪魔するわ」
「…幽香……落ち着いた…？」
「……お願い、誰にも言わないで……後生だから…」
「……うん。あれは…言えないよ…」
「もう紫に会えないわ……」
「あ～……そこらは、まぁ…」
「……？」
「詩菜ー？誰が来たの？って幽香じゃない。どうしたの？」
「ッッ！！」
「大丈夫幽香！覚えてないから！！覚えてたら記憶消してあげるから！！」
「…ゆ、紫…？」
「…何？どうしたのよ二人とも？私をそんなに見詰めちゃって……
…ハッ！！まさか私に惚れちゃったとか…！」
「……（わ、笑えねぇ…）」
「…そうよね。私達は、友人よね？」
「……ちょっと、本当に大丈夫？何いきなりそんな当然の事を訊くのよ？」
「いいえ。…今からご飯の準備かしら？」
「ええ…詩菜ちゃんから作れるようになれって言われちゃってね」

「……」
「……（ごめんなさい…治ってなかったらどうしようかって……自立を…促そうと…）」
「……（…良いわよ。それに『治ってない』わよ？）」
「……え？…え！？」
「詩菜に教わるより、私が教えるわよ。間違って教えるわよ？彼女は」
「あら…今日は機嫌が良いのね？何かあったのかしら？」
「フフ、ちょっと自覚しただけよ…」
「何よそれ？」
「ほらほら、詩菜も早く来なさい？器具は貴女が教えてくれないと、何処にあるか分からないのよ？」
「……ええ～！！？」

鬼退治　その1（前書き）

久々の（？）シリアス回

鬼退治　その1

「依頼が来たから、明日明後日は自主練習な」
「…珍しいな。いつもなら断ってるのに」

今日も今日とて妹紅の鍛練だ。
しかしながら、今回はそうも行かない。

「お前がいるからな。だが依頼内容が『鬼退治』だったんでね」
「鬼退治!?そりゃまた……凄いのを受けたな」
「こりゃ面白いと思って討伐隊に入れさせてもらった。説得するの大変だったよ」

最近俺は何も活動してないと思われてるからな。
妹紅や藤原氏についての事は、ある意味極秘なので隠している事になっている。

「…ああ、師匠嫌われてるもんな。報酬は?隊なんて組まれるんだから、凄いだろ?」
「入れてくれる代わりに報酬は活躍次第。だとよ。…それから嫌われ言うな」
「へいへい。……まぁ師匠なら死にそうにはないよな」

へいへい等と弟子らしからぬ物言いだが、対して注意もしない為、最近更に深刻化している気がする。うん。

「なんでまた、死にそうにないと？」
「ある意味妖怪じみてるから」
「…よっしゃ休憩終わりな。俺から先行、耐久しろコノヤロゥ」
「……大人気ねぇ…」

ちょっとドキッとしちまったじゃねぇかチクショー。バレたかと思ったぜ。

《ｓｉｄｅ　第三者視点》

討伐決行。
侍やら妖怪退治を生業とする方が何十人か集まり、山の草木の根を分けて血眼で鬼を捜している。
その集団の後ろ側に位置する、術師のグループの中に志鳴徒がいた。
侍や武士ならまだしも、陰陽師の集団にいる彼は四方八方から軽蔑、嘲り、小馬鹿にした目線で見られていた。
が、当の志鳴徒は『これから鬼に逢える』という事でウキウキワクワクと、悪く言えば周りが見えなくなっていた。
いつもの紺色の和服に最近八雲から貰った扇子を片手に持ち、鼻歌を歌い出しそうな程に楽しげであった。
それもまた、志鳴徒が白い目で見られていた理由の１つでもあるが、

（鬼、かぁ。平安時代の鬼なら大江山の酒呑童子とか？あれは室町時代とかの話…だっけ？）

当の本人は、全くもって気付いていない。

「鬼だぁ！！鬼たちが出たぞぉ！！」
「「「「うおおぉおおおぉぉ！！！」」」」

鬼が出た。
者共は雄叫びをあげ、鬼を討伐し報奨を頂く為に、我先にと鬼たちに突っ込んでいく。

しかし鬼という種族は、妖怪の中でも絶対的な強者の部類に入る存在。
たかだか十数人の侍。鬼が四、五人居れば数分で片がつく。
残りの陰陽師も同じく、十人程度の陰陽師は逃げようとするも、直ぐ様追い付かれ、喰われ、消えていった。

討伐隊は一時間もたたずに、壊滅した。

ここで『全滅』を使わず『壊滅』と言ったのは、まだ一人が生きていたからである。

陰陽師が駆逐され、その最後の一人を殺す為に、鬼は腕を振り木々を薙ぎ倒し、強靭な脚は大地にひび割れを入れさせる。
が、そんな鬼が四人も集まり一人を殺そうとしているが、何故か倒せない。

御存知の通り、その一人が志鳴徒である。

「鬼さんこちら♪手の鳴るほーおへ♪」
「ウガガガアアアァァァ！！！」
「あらよっと！ふふん♪遅い遅い」

志鳴徒には、陰陽師や退治屋の使う霊力や神力等はない。
だが、妖力と『衝撃を操る程度の能力』、それに生まれ持った鎌鼬の性質、という物があった。
能力を使えば鬼の強固な拳は防ぐ事が出来る。
素早く動く事が出来る鎌鼬ならば、爪や牙・角は容易く避ける事が出来る。

しかし、ここまで志鳴徒が鬼を相手にする事が出来るのも、単にこの鬼達よりも年を重ねているだけではなく、元の人間的な考えによる特訓という妖怪らしからぬ行為を重ね、己を鍛えたからでもある。

故に、

「ほい、んじゃまた逢いま、しょ！！」
「んぐがああぁぁ！！？」
「日本語を喋りな、よっ！と」
「ギャァァァ！！」

圧倒する事が出来た。

地面には人間の死体。その上には鎌鼬を当てられ肉片となった鬼が転がり、まさに死屍累々の状況になっている。
鬼が斬られ、それを見た新たな鬼が詩菜を襲い。結局、詩菜が切り刻んだ鬼の数、１９。
そんな死体が撒き散る中央に立っているのは志鳴徒。その場から離れた所には鬼が覗くようにして此方を睨んでいる。

「おいおい？鬼ってのはこんなものなのか？」

詰まらないの。
その言葉が、鬼達の心に、再三火を着けた。

「……アンタ、本当に人間かい？」
「ん～…まぁ人間居ないから良いか。違うけど？」
「だよねぇ。……え？」
「自己紹介が遅れました。わたくし都で陰陽師のような事をしております、志鳴徒と申します。ですがこの身なりは仮の姿。妖怪として自己紹介するならば、この場は」

変化、詩菜。

「詩菜と申しましょう。どうも『鎌鼬』の詩菜と、申します。以後良しなに」

志鳴徒の姿が風に消えたと思うと、次の瞬間には詩菜が立っていた。
服装や持っていた扇子など、持ち物に変わりはないようだが詩菜と志鳴徒はあまりにも外見が違う。

だが、ここでの問題点はそれではなく、鬼が『人間だと思い込んでいた者』が実は『妖怪』だった、という事だ。

「お前ッ！！何故そこにいる！？」
「？…暇だから？」
「…はぁ？」
「良いじゃん、そんなどうでもいい事はさ？楽しもうよ？この戦いをさ？」

はっきり言えば、詩菜には鬼に似たような部分がある。
戦闘を好み、圧倒的な物理攻撃力をもつ。
違う所と言えば、鬼のように誠実ではなく、意味もなく嘘を重ねる所か。

「ここで死んでる鬼さんよりも強いのは居ないのかな？酒呑童子とか居ないの？」
「ほう、鬼の四天王とやり合おうってのかい？」
「貴方がその『酒呑童子』？」
「いや、アイツはまだ来てないね。それまでは、あたしの相手をして貰おうかッ！！」

その鬼の早さは先程の鬼とは比べ物にならない程であり、詩菜が避ける余裕もなかった。
だが、単に『衝撃』を与えて殴り殺すだけならば、詩菜には全く効

果がない。
真っ直ぐに伸ばされた鬼の拳を余裕綽々に片手で止めた。

「……鎌鼬にしては強すぎなんじゃないかい？自信なくすよ」
「能力無かったら死んでるよ。鬼さん、名前は？」
「『星熊勇儀（ほしぐまゆうぎ）』。能力は『怪力乱神を持つ程度の能力』だ」
「それじゃ私も。『詩菜』と申す。名前はない。能力は『衝撃を操る程度の能力』さ」
「良いねぇ。人間じゃないが、まっすぐあたし達に向かって来る奴は。久し振りに楽しめそうだよッ！！」
「お褒めに預かり光栄至極、ってね！！」

能力を明かす。という事は自身の弱点を教える。という事でもあるし、自身の特徴も教える。という事でもある。
詩菜の能力は衝撃以外は防げない。という事であるし、勇儀の能力は力に置いて右に出る者はいない。という事である。

「よっ、と！！」
「グッ！？…っおらあぁ！！」

二人とも、格闘が得意ではあるが些か勇儀の方が能力的には不利であった。
勇儀は力を操り相手に与えるが、詩菜はその力を跳ね返しまた弾き飛ばす力だった。
よって、勇儀は能力をそのまま返されたり力で吹き飛ばされボロボロに。

詩菜は爪等の引っ掻き傷で多少深い傷が出来ている。
誰が見ても、詩菜が優位に立っているのは一目瞭然である。

「…ハァ……ふぅ、流石だよ、その能力。『中立妖怪』は伊達じゃないみたいだね」
「なめて貰っちゃ困るね。私は打撃にだけは自信があるのさぁ」
「打撃だけじゃなくて、鎌鼬の刃も投げてきただろ？」
「そっちの方が種族的には正しいからね。でも、力で勝ってるっしょ？」
「ふん……鬼が力で負けるなんて、矜持が赦せないんだよッ！！」

再度、激突。

しかし幾ら力が有り余っていても、反射されてしまえば届きはしない。

吹き飛び木に激突してようやく止まった勇儀、だがそれでも諦めずに再び詩菜に向かう。
詩菜は詩菜で完全に迎え撃ちの体勢に入り、笑いながら勇儀と向かう。

「楽しいなッ！！ねぇ、そう思わない！？」
「残念だがそんな余裕はないッ！！ッツツ！！」
「なーんだ。詰まんないの」

再三距離が開き、その距離を縮めようと勇儀が接近しようとしたその時。

今まで迎え撃つだけだった詩菜が、何かをし始めた。
片手を前に出して何かを握り締め、明らかにその何かで物事を起こそうとしている。

「そろそろ終わりにしようよ？酒呑童子さんは来ちゃったみたいだし」
「何だって？」

詩菜に言われて勇儀が眼を向けた所には、確かに彼女らしき長くねじれた二本の角がこちらに歩いて来るのが見える。
顔は遠くてまだ見えないが、服装や身なりは確かに彼女である。

「行くよ、勇儀さんとやら。決着をつけよ♪」
「ふん。来な！あたしも見せてやるよ！！喰らいなッ！！」

一歩。勇儀が踏み出す。
その衝撃波が勇儀を中心にして周りに襲い掛かり、鬼が慌てて逃げ出す。

二歩。勇儀がまた踏み出す。
大地が割れ鬼の妖力や威圧感が木々を揺らす。詩菜は慌てず、ただ握った右手を前に出したまま。

「『三歩必殺』！！！」

詩菜は受け止めた。
右手を開き、中にあった玉を間に挟んで。

「『衝撃』ごちそうさまでした♪」
「チッ！おらあぁぁぁ！！」

だが、詩菜が受け止めれるのはあくまで『衝撃』だけなのだ。
故に既に触れた状態で押し込まれた力や妖力に対しては、なす術がない。

勇儀の絶叫と共に押し出された拳と妖力の勢いで弾き飛ばされた詩菜だが、最後に置き土産を残していった。
『緋色玉』を残し、拳の勢いを殺さずそのまま逃げる為に。
全力で攻撃したからか動けない勇儀は回避出来ず、幽香や天魔とは比べ物にならない程の近距離で、空間による衝撃を受けた。

幾ら圧縮した空間が狭くとも、距離が無いに等しければ威力も変わらない。
それでもまだ意識があり、立とうとするだけの意志があるのは、流石は『鬼』という所か。
だが、それも詩菜が頭の近くに立った事で、諦めたように止まった。

「凄いねぇ。鬼っていうのはさ？」
「……ハハッ。…その鬼の四天王を倒すアンタも…恐ろしいもんだよ」
「能力の相性があったからだよ。勝負はついた。よね？」
「……いや、まだだ。…アンタはあたしを、殺さなくちゃいけない」

鬼の矜持としては、負けたのにおめおめと生きていけない。
そして詩菜、志鳴徒が受けた依頼は『鬼退治』

ここで、勇儀を殺し何かしらの証拠を持って帰らねば、依頼達成とは言えない。
そこまで相手の事情を察し、負けた相手に合わせるのも鬼の誠実さか。

「わかった。じゃ首でも持っていこうかな？」
「…ふん。中立妖怪じゃなくて、むしろ『鬼殺し』なんじゃないかい？」
「それはそれで考えてみるよ。じゃあね♪」
「ああ。最期に面白く闘えたよ。詩菜」

勇儀の額から生えた赤い一本角を掴み、手刀を首に振り落とす為に腕を掲げる詩菜。
両者とも笑っている。

「勇儀ッ！！」
「…来るなよ萃香？」

叫ぶのは先程のねじれた角を持つ鬼、『伊吹萃香（いぶきすいか）』
彼女が酒呑童子と言われ、後に戦う予定だった鬼だが、

「ま、鬼の首一人分持っていけば良いんだから、別に酒呑童子は今じゃどうでもいいだけどね」
「なんだいそりゃ…随分といい加減だね？」
「これが私の性分さ♪」

振り落とす作業が萃香に中断されたが、それも一時の話。
止める隙を与える訳にもいかないので、直ぐに手刀を振り下ろす。

が、
それを再び停める者が居り、更に詩菜を吹き飛ばす者がいた。

「そこまでよ、詩菜」
「…なぁーんでいるのかなー？八雲紫さーん？」

鬼退治　その2

「…なぁーんでいるのかなー？八雲紫さーん？」
「前にも言ったじゃない。友人同士が歪み合うのなんて見てられないわ。それに…」
「それに？」
「貴女、色々とおかしいわよ。何があったの？」

瀕死の鬼、星熊勇儀。
それを守るようにして立つ妖怪、八雲紫。
そして瀕死の鬼を助ける為に肩を貸す鬼、伊吹萃香。
それに相対する妖怪、詩菜。

「単に気分が高揚してるだけだよ？ふふ」
「……気が狂ったの？」
「気が狂ったって表現はおかしいって思うんだよね。結局はさ？考えに従って行動してるんだからさ、思考の方向はおかしいのかも知れないけど、理知的とも言えるんじゃないかな？そこら辺はどう思うよ、妖怪の大賢者さん？」
「…今すぐ治してあげるわよ」
「その内元に戻るよ。今すぐいつもに戻るかも知れないし、いきなりテンションが上がったりするかもね♪まぁどうでもいいんだけどね」

彩目の時と同じ事が起きていた。

詩菜は楽しくなって、どうでもいいという心境で。
八雲は友人の変化に戦き怖れている。

「そういえばさ？紫と正面から戦った事ってないよねぇ？」
「……そうね。出逢った時は追い掛けあっていたわね」
「まぁ今でも紫や幽香には勝てないと思うけどさ♪いっちょ殺り合わない？」

それはお茶にでも誘うかのように、随分と楽しそうに訊いてきた。

「…戦いたくは、ないわね。でもこのまま貴女を見過ごせも出来ないわ」
「上等上等♪んじゃ、始めますか！！あ、勇儀はもう良いよ？私は戦えて満足だし」
「……あたしは負けて、更には、どうでもいい…だと？」

それは、それこそ、鬼のプライドを無視して踏み潰している。

「ふざけるなッ！！貴様は許さん！絶対にあたしが殺す！！」
「あっちゃあ。まーた恨まれちゃったよ。せっかく最近彩目とは仲直り出来たのに」
「…また？…彩目って貴女が……」
「さ、場外はどうでもいいから無視して。殺ろうか紫。せめてこの高揚を続かせてよ？」
「キサマ…ッ！！」
「……シッ！！」

八雲は友人の言葉に答えず、攻撃を開始した。
弾幕攻撃である。
弾幕は『衝撃反射』では跳ね返せない。

八雲の能力も『境界を操る程度の能力』で、これも詩菜とは相性が悪い。
更には、弾幕もろくに撃てない詩菜だ。既に不利なのは本人も分かっている。

だが、今の詩菜にとってそれこそどうでもいい事。

詩菜は接近して物理攻撃を、たまに衝撃刃を放っては竜巻を起こして八雲が行動出来る範囲を狭め、
八雲は弾幕を撃ちつつも、接近した詩菜をスキマや持っていた扇子等で流し距離を取り続け、
弾幕が上手く創れない詩菜は自然の物、つまり石や木の枝を衝撃で浮かし、衝撃で撃つ事で弾幕とし、
八雲は能力を使い通り過ぎた弾幕を、スキマに通して再利用する事で、トリッキーな弾幕を産み出した。

一進一退の攻防。
だがもともと妖力の少ない詩菜は、先程の勇儀の戦いも含めてかなりの長時間戦っている。
疲れは確実に詩菜の身体に溜まっていき、彼女の動きを鈍くしていった。
避ける事が得意な詩菜でも当たるものは当たるし、能力が衝撃を反射してもダメージは蓄積していく。

八雲は何も完全に詩菜という妖怪を消滅させようとは思っていない。
詩菜の理性と感情の境界を弄くり、正気に戻そうとしている。
だが、付き合いが長いのは詩菜も同じ。当然八雲がそのような事を企んでいるのは気付いている。

だから、わざとそのような事が出来るように、隙を見せた。

詩菜の移動速度は能力を使えば確かに速い。だがそれも言ってしまえば1つの線になってしまう。

そして八雲は違う。彼女の移動方法はスキマを使った瞬間移動であり、こちらは点と点を移動している。

詩菜がよろけ、八雲を視界から外した時にスキマを開けば、詩菜には移動した事も分からず、簡単に後ろを取る事が出来る。

そう八雲は考え、行動に移した。

いきなり自身の感情・想いがあやふやになれば当然心に負荷が掛かり、気絶する者やそこまではいかなくとも、動きが止まる。

だが、詩菜の頭に置かれた扇子とそれを伝って発動した筈の能力は、いつまで経っても八雲に実感を与えてはくれない。

詩菜の境界を操り気絶させ、成功したという実感が。

「残念でした。『私の心にかかる負荷・衝撃を無効化』させて頂いたよ」

「なっ!?」

「精神攻撃は効かないよ。紫」

「ッ…そう、そこまで予想済み。という訳ね…!」

「でも、ま。この姿勢から私は動けないし?私の負けかな?」

言われて詩菜をよく見れば、確かに全身汗だくで脚は痙攣しており、和服は勇儀や八雲の攻撃でボロボロとなっている。

それでも彼女の高揚はまだ終わってはいないようで、顔はまだ笑っている。

「……貴女、そこまでして何がやりたかったのよ？」
「別に何も？ハハ。強いて言うなら『面白くならないかなぁ』って」

八雲は思う。
この子はやはり、理解できない。
妖怪らしくないのは前から思っていたけど、人間どころじゃなくて何かもっと違う所で狂ってる。

「…貴女のそれが、本性だったの…？」
「…妖怪に裏表なんてあるの？私ならいざ知らず」
「……どういう事よ？」

その言葉は、詩菜が『自分は生粋の妖怪でない』という事を初めて八雲に吐露した。という意味。

「私はね。もともと人間だったんだよ？ああ、彩目とは色々と違うけどね」
「なッ！？貴女が…ッ！？」
「そこまで驚くような事じゃないでしょ？散々幽香と一緒に『人間臭い』とか言ってた癖にさ？」

確かに彼女達は詩菜を人間臭いと言っていたが、それは彼女が完璧な妖怪だからである。
彩目のように強制的に妖怪になったものや、自身から妖怪になったとしても必ず『人間的特徴』が残ってしまう。
彩目であれば、妖怪にも関わらず妖力霊力共に扱える所だ。

しかし、それが詩菜にはない。
神力も妖怪では珍しいとは言えるが、持つ者はちゃんといる。

故に詩菜が『元は人間』だという言葉は、八雲にとってまさに寝耳に水、という訳だった。
幽香もその事を知ってはいたが、あり得ない事も起こりうる可能性を考えて、あれほど詰問したのだ。

呆然とする八雲を押し退け、なんとか立つ詩菜。
視線に八雲は入っておらず、眼に見えているのは伊吹萃香に支えられた星熊勇儀だった。

「勇儀…さっきはごめん。鬼の矜持を考えてなかったね」
「……本気で謝っているのか？…嘘なら殺すよ」
「嘘だと言う証拠はないね、私にしか分からないから…代わりに何か腕とか捧げようか？」
「…いらん。そんなものは」
「そっか。じゃあ何か他に私に出来る事、ってあるかな？」
「……もう一度、あたしと勝負しな。今度こそあたしが勝って、アンタを喰らってやるよ」
「おお怖い。まぁ殺される気はないから、私も頑張らないとね」
「…皆、引き揚げるよ」

その言葉で鬼達は引き揚げ始めた。
ほとんどが詩菜を睨むか、勝負してみたそうな顔をしていたが、四天王の言葉に従い、山奥へ姿を消した。

最後に四天王の二人と、詩菜・八雲が残った。

「…詩菜。『鬼殺し』。あたしは確かにアンタに敗けたよ」
「うん？いきなり何かな？」
「依頼はあたし達の同胞の腕なり頭なり持っていきな」
「…ありがとう」
「……アンタはあたし『星熊勇儀』が直々にブチ殺す」
「幾ら来ても同じかもよ？まぁそれまで」
「「死ぬなよ？」」
「フフッ、じゃあな詩菜」
「じゃあね、勇儀」

鬼達は引き揚げた。
大将があの様子ならば、迂闊に山を降りては来ないし、都には鬼の四天王から『鬼殺し』と言われた詩菜・志鳴徒がいる。
鬼達は都まで来て『人攫い』をしようとはしないだろう。
志鳴徒が受けた依頼は達成された。
もうすぐ、日が昇る。

「さて、紫。どうするの？」

残ったのは、詩菜と八雲だけ。

八雲はほぼ無傷だが、詩菜はよれよれのボロボロの状態で、口調はしっかりしているが今にも倒れそうな程である。

「…どうする、って……」

「1つ、友人の勇儀には悪いが今すぐ私を友人ではないとして殺す。2つ、両者とも見過ごせないから何とかして和解して貰う。3つ、人間との共存の為には私はいらないと断ずる。4つ、絶交、もう詩菜には声も掛けない。完璧に無視する。5つ、勇儀を無視して彼女こそ要らない者、亡き者とする。6つ、いっその事今まで培ってきた友好関係を白紙にする。7つ、私みたいに狂って大妖怪の名を欲しいままにする。8つ、自害。全てから逃げる。9つ……はもう作れないかな?まぁ『その他』って事で」

「……何よ。その選択肢は…」

「ま、これは冗談だよ。でも、まぁあながち間違ってないと思うけどさ?」

八雲は優しい。友人には、だが。

そしてその友人同士が殺し合っている。優しい彼女はどうするのか?

今の詩菜は勇儀と戦うにしても、既に殺す気はない。答えは単純、勇儀を気に入ったからだ。

鬼退治の依頼達成に必要な物も揃い、既に詩菜はここに用はない。

だが、詩菜にとっても大切な『八雲紫』という存在がいる。

だが、ここでの八雲の返答で詩菜も八雲との付き合いを変えようかな。とも思っていた。

大切かどうかは、相手に委ねる。

なんともまぁ自分勝手な話である。

「それで?どうするのかな?」

「……貴女は、何者なの？」
「ん？うーん…志鳴徒に変化した時もそうだったけどさ、結局は私だよ？戻る戻らないとか、そんなの問題にすらならないからね？」
「……」
「まぁ確証が欲しいのなら、どうぞ私の境界を弄くって下さいな」
「…神妙な貴女も、なんだか新鮮ね……途中から演技でしょう？」
「…ありゃ…バレてた？」

舌を出す詩菜。つられてクスクス笑う八雲。

確かに詩菜の能力ならば『衝撃』は防ぐ事が出来る。
だが、それは衝撃だけであって『能力』までは範囲に入っていない。
心にかかる負荷は防げても、境界を弄られるのは防げなかったのだ。
それに八雲が気付いたのは、詩菜が勇儀に謝った時の事。
あれほどどうでもいいと断言し、果てには無視していたのが、あっさり謝り始めた。
何かの機転があった、としか考えられない。
そして口調も、顔は終始笑ってはいたが、楽しげではなくなった。
故に『この詩菜は正気に戻っている』という事になる。

「ま、正気なんてあってないような物だよ」
「……」
「さて…ゴメン、紫。ちょっと良いかな？」
「何かしら？…またご飯とかっていうのじゃ、無いわよね？」
「…ちょいと、幽香さんからハーブティーを御裾分けしてくれないか、訊いて欲しいなぁ……なんて」
「対価が『私の式神になる』なら受けるわよ？」

「なんてこったい……それはご依頼できないなぁ…」
「残念ね♪」
「まぁ、お昼まで寝ておけば変化出来るだけの妖力も溜まるでしょ」

地平線から太陽が出始めた。
鬼退治が始まる前は鬱蒼とした森であった筈が、詩菜の鎌鼬や勇儀の三歩必殺により斜面がかなり抉られ、都まで見通す事が出来る程の空地となっていた。

「紫、昼まで私、寝るから」
「それよりも鬼の身体、集めなくて良いのかしら？野犬に食べられちゃうわよ？」
「……寝る前の一仕事かぁ…八雲さ～ん？」
「手伝わないわよ」
「……ちくせう」

依頼『鬼の退治』
・討伐
討伐対象
・鬼。証拠として『鬼だと分かる肉片』を持ってくる事。

討伐隊人数
・三十七名（飛び入り一名）
・内訳、武士十五名・陰陽師十三名・民間退治師・九名。（飛び入り、民間退治師）
死傷者
・三十七名全員死亡。
生存者
・一名。志鳴徒。

鬼を退治した数
・志鳴徒が持ち帰った量によると『十三人分』。本人によれば、まだ落ちてたが持ち帰れなかった。との事。
報酬
・飛び入りの条件として『活躍次第』との約束であったので、貴族に値する位を授けようとしたが本人が拒否。本人の志望により『陰陽師』の位を授ける。

保留点
鬼の腕や足に『喰い千切った』痕が残っていた。
志鳴徒の能力では切断しか出来ないにも関わらず、このような痕が残っていた。
野犬や妖怪に喰われるような失態を、志鳴徒がおかすとは思えない。

……今後とも、彼を要注意人物とする事を提案する――――――。

だべり。

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

ただいま、モウレツ将棋中。

「ホイ……そうだ、陰陽師昇格おめでとう師匠」
「やや、妹紅よありがとう。…だが、ここはちょっと待ってくれないかな？」
「何回目だよ……ほらよ」
「や、忝ない。まぁ昇進って言われても、そんな変わらないって。ホイ」
「そうなのか？ん」
「…。本当に民間じゃなくなっただけさ。公式になっただけだって。んー」
「でも一応陰陽師になったからには、色々と特典みたいなのがあるんじゃないのか？とう」
「……。ま、まぁ資料とかは見れるぞ？俺は技術を持ってないがな…ホイ」
「師匠はやる気を出せばなんでも出来ると思うんだがなぁ…てい」
「なんだよ？俺が全てに置いてやる気がないと？」
「端から見てるとな。王手だぞ」
「ん？ああ……いや、…詰みじゃね？これ」
「そうとも言うな。これで…何勝したっけ？」
「…訊いてくる辺りが酷いよな……妹紅１４勝」
「師匠０勝１４敗…か」
「……将棋はどうも苦手だ」

先を読むトレーディングカードも苦手だったな、確か。

「苦手…っていうか、とことんそういうのが出来ないよな、師匠は」

「何をぅ…オセロならまだ……」

「…？なんだ『おせろ』って言うのは？」

やべ、口滑っちまった。

「……あ～…誰にも言うなよ？異国の遊びだ。白と黒を引っくり返して遊ぶんだが」

「ふーん？なんだ、意外と簡単そうだな。今すぐ出来るのか？」

「色のついた石さえあればな」

「やろうぜ！」

「……まっ、いっか」

未来の情報を教えると『リトル○ャンパー』とかならば法律違反を犯している所になるのだが、まぁ別に良いだろ？

……妹紅が誰にも言わなければ、こいつも５０かそこらで死ぬだろうし。

身近なヒトが死ぬのを見送るのは、確かに辛い。

だが、薄情な俺だ。思い出す事は出来るだろうが思い出そうともしなくなるだろう。

なんて酷い奴……。

「ハハハ…」

「…？どうしたんだ、師匠？いきなり笑い出して？師匠の番だぞ」

「いやいや、なんでもない。…角取りな」

「げっ！」
「いち、にぃ、さん、しぃ……ホイ、お次どうぞ？」
「くっ……ここは？」
「置けるぞ。…後先考えろよ？」
「……ん！どうだ！」
「裏返して……俺な。ホイ、ホイ、ホイ」
「……なぁ。師匠？」
「なんだー？」
「私の白が、盤の上に見当たらないんだが？」

何も置かれていないスペースがかなりあるがな。

「つまり妹紅は永久に出せない。よって、俺の勝ちとなる」
「はぁ、成る程な……ていうか、角に置いた時点で気付いていただろ？」
「そうなるようにしたからな」

四方八方が黒、中央に白が一つしかない状況は、白の『詰み』になるんだなー。

「…何が『後先考えろよ』だよ」
「ま、これから本番…って感じだが、藤原氏が帰ってきたな」

庭からは歩いてこちらに向かっている藤原氏が見える。

「お、父上か。……父上にこれを教えるのも、ダメか？」
「うー…出来ればやめて欲しいな」
「了解…じゃ片付けますか」
「そだな」
「で、将棋しようぜ」

「もううんざりなんだが……」

「帰ったぞー。……何をしとるんじゃ？」
「ん、遊戯」
「将棋か……負けとるのぉ志鳴徒」
「ハハハ……」

苦手なんだよ。後の事を考えるのはさ。
というか、一目見られただけで弱いって分かっちゃう俺って一体……。

「父上は何処に行っておられたのですか？」
「ん、輝夜姫の所にな」
「……」
「なんだ？本気だったのか？」

マジ惚れですか。
それはそれは……。

藤原氏が五人の内の１人、っていう予想は間違ってなかったかな？

「ふん、そういうお主はどうなんじゃ？儂と初めて逢ったも似たよ

うな場面じゃったろ？」
「ありゃ依頼だ。それに興味はない！筈！」
「筈？」
「向こうがな。俺は毛頭ない」

俺が輝夜の前で詩菜にならなかったら、そんな感じになりそうな雰囲気だったな。

「……いや、それはないわ」
「…ないですね」
「親子揃って否定された！？」
「お主の掴めぬ性分が有る限り、お主はモテんわ！！」
「断言しやがった！？」
「ふわははははは」
「…のぅ、妹紅よぉ…おらぁそんなモテぬか……？」
「まぁ」
「だよね～……あれ！？慰めてくれないの！？」

畜生！騙された！！

……ま、詩菜の姿で諦めてくれりゃ良いんだけどね。
今のところ、結婚も入籍も興味なし。気に入ったヒトもいないし。

「……ほぉう？」
「？なんだ藤原氏？」
「ん、いや。ちょいとな？」
「…？」
「…志鳴徒はこのまま朽ちていくのかのぅ。とな」

「なに考えてるのこの人!?妹紅!どうにかして!!」
「えっ!?私!?無理ですよ!!」
「父親の事なのに断言した!!」
「……」
「父親殿黙っちゃった!!涙目だ!?」
「ええっ!?ちょっ、父上!?」

…仕返しにしては、やりすぎたかな…はは。

……ていうか、凄ぇ慌てているのに、口調がぶれない妹紅。凄いな…。
何か因縁でもあるのかね?『空の○界』の式の織の口調みたいな物とか……ないか。

「ま、どうでもいいか。ほいな」
「……志鳴徒、盤を良く見る事が勝利の秘訣じゃよ」
「ん?そうなのか?成る程、心得ておこう。というか復活早いな」
「……もっとも、見てないお主の失態じゃな。これは。ざまーみろ」
「……ははは…」

なんだよ、二人して?苦笑いなんて浮かべちゃってよ?ていうか藤原氏ぶっ殺すぞ。

……あっ。

「……あの、師匠？…それは…」
「ああ……藤原氏の言う通りだな……『二歩』だ」
「漸く分かりおったか！フワッハッハッハッハ！！」

恥ずかしい！！幾らなんでもこんなミスをするなんて！？
ムカつく！！あの超笑顔がスッゴく腹立つ！！

「……」
「…師匠」
「……ああ、俺の負けだな…」
「弱いのぅ。どれ妹紅、儂と一手指さぬか？」
「はぁ、よろしいですが……途中で逃げたりしないで下さいよ？」
「失敬な。儂がいつそんな真似をしたかの？」
「私が勝ちそうになった時に何度もしたじゃないですか……」
「気のせいじゃよ」
「いや、でも…」
「気のせいじゃよ」
「……」

…どうやら藤原氏も弱いらしい。
ま、のんびり観戦して無様な姿を眺めますか。

「待て！待っておくれぇ！！これは何かの事故じゃ！陰謀じゃぁ！！」

「見苦しいですよ父上」

「そうだぞ藤原氏。明らかに詰んでる。ざまーみろ」

「『待った』も何十回してあげたと思ってるんですか？」

「ぐ……」

金銀飛車角桂馬も取られて、どう見ても完敗だろ。これ。

「…ちょうど時間もよろしいですし、ご飯にしますか？」

「お、誘って戴けるので？」

最近は何かと食事を共にいただいて帰る事が多い。

まぁ、俺も１００年を生きた妖怪。

簡単な自炊は出来るが、生粋の女（幽香や妹紅）が作る料理には到底及ばないね。

「おう、いただいてゆけぃ」

「…そんな事を言って、忘れようとしても無駄ですよ」

「……」

ざまぁｗｗｗ

「「「いただきます」」」

ちくせぅ……美味い…。

「…毎回思うんですが、どうしてそんなに悔しそうな顔を……？」
「いや……美味いなぁ。って」
「あれ、師匠も自炊をしてるんですか？」
「何じ……何年もしてるけど、なかなか上手くいかなくてね」

…あぶねぇ、うっかり何十年って言う所だった。
言っちまったら、折角の人間ＬＩＦＥが台無しだぜ。

「……今度、教えて差し上げましょうか？」
「…いんや、これは俺の味だ。一人で極めにゃ」
「くっくっくっ……お主が料理を極めるのか？」
「なんだ藤原氏。女っぽくて、似合わないってか？」

…じゃあ、詩菜の時に料理すれば似合うってか？

「いやいや、な？想像すると面白いからの…フフッ」
「……フン！まぁいいさ。そのうち妹紅も追い抜かしてやるさ」
「……（追い抜かされるのは、困りますね…）」

ん？

「何か言ったか？」
「いえ？…美味しいですか？」
「…美味しいです」

追い討ちか畜生！

「それは良かったです！」

笑顔が……！
笑顔が腹立つ…！！
なんなんだこの親子！？

だべり。（後書き）

書き溜めしているので、投稿する時に、
『あ～、こんな事を書いたな～』
とか思っちゃう訳ですが、

……なんだろう。コイツなんて事書きやがったんだって思う。

原点回帰（前書き）

デレるよ！！

原点回帰

《ｓｉｄｅ　彩目》

私は守矢の神社の近くまで来ていた。
迂闊に境内に入れば、私が半人半妖だとバレてしまい即座に風祝やら巫女に退治されるだろうから、入る気はさらさら無いのだが。

じゃあ何の用でここに来たかと言うと、特には無いのだが、因縁の、私と詩菜が出会い、そして私という妖怪の始まりを見てみよう。という気になったからだった。

守矢の神社の裏側から一本の獣道を辿る。
詩菜が切り刻んだ木々は全て切り株になり、歳月が全て土に変えてしまったようだ。
ここまでは…詩菜の言う通りだ。
草花は自前の再生力で以前のままのようだが、何百年と成長する樹はそんな簡単に復活しない。
詩菜の、爪痕…だな。

広場に出た。
私はここで、倒され刺され貫かれ犯され弄られ斬られ刻まれ、妖怪と変化した。
今でも嫌な思い出だし、事細かに思い出そうとすれば顔から火が出そうだ。

あの時、私は詩菜に吹っ飛ばされ空を飛んでいた。
肉体が常軌を逸した速度で回復するのを見て、奴が私にした事を理解して、私は私自身に恐怖した。
しかし既にアイツの血肉によって強制契約された私は、食べたくもない奴の左腕を更に喰い続けていた。

漸く着地した時には既に左腕は喰いきっていて、私の腕は完全にくっついていた。
半人半妖『彩目』が誕生してしまったのだ。
その着地も身体を巧く使い、受身を取って傷もなく着地したのも、私は恐ろしいと感じた。
だってそうだろう？普通、人は三階から飛び降りただけでも足が曲がるというのに、私に至っては山の崖から勢い良く飛び下り『着地成功』したようなものなのだから。

身体から湧き出てくる黒い妖力。今まで白かった筈の霊力は、黒が混ざり濁った白色になった。
今まで重い動きをしていた肉体は、恐ろしいまでの力と柔軟性を持っていた。

妖力を持っている人間など、人間ではない。
濁った霊力を持った人は、人間じゃあない。

忌まれ疎まれ憎まれ…人々は私をとことん、迫害した。
そりゃあ自分とは違う存在だ。怖くもなる。

初めは、即座に自殺しようと思った。
人間らしく、妖怪退治屋らしく、妖怪に殺されようと思った。

だが、死ねなかった。
理由は死ぬ勇気がなかっただとか、死ぬような機会がなかっただとか、そんなちゃちな物では無かった。
アイツが、私が死ぬのを、『命令』で止めていたのだ。

死ねなかった私は、今度は復讐を考えた。当然目標は『詩菜』だった。

妖怪のような私は、一つの場所に長期間居る事が出来ず、私は各地を転々とした。
詩菜の噂は、簡単に手に入った。
アイツ自身が目立つ事をしていたのだ。妖怪人助け屋などと。

じゃあ私はなんなのだ？
奴に襲われ、怪異に身を変えられた私は。私は奴の数知れない玩具なのか？
噂を聞けば聞く程、恨みは増していく。

成長が止まった私がたどり着いた平安京は、まだ優しい世界であった。
実力者が勝ち進んでいく陰陽師の世界は、異形の私を見ず退魔師の私を見てくれた。

その頃には幾分か妖力を操る事が出来たし、隠す事も出来たが。

そうやって国々を巡り巡って、ようやく詩菜に会えたというのに。
詩菜は反省し正気に戻っており、
私はアイツを見た途端に殺す気が雲散霧消する。
とんだ茶番だ。

「…ハハハハ。私を退治しに来たんですか？守矢の神様」

どうやらボーッとしてしまったようだ。神様がこんなに近くに来るまで気付かないなんて。
振り向けば金色の髪を持つ少女がいた。
見た目は子供だが、間違いない。かなり神力を持っている。守矢の神様だ。

私は不謹慎だが、臨戦態勢をとる。私は妖怪だ。退治されて然るべき存在なのだから。

だが、相手から聞こえてきた声の内容は、予想を遥かに越えていた。

「……いや、友人の気配がしたから来たんだけど…あれ？違ったかな？」
「…私から、ですか？」
「ん～？うん」

私と気配が似ている存在というのは、詩菜しかいない筈だ。
だが、アイツは妖怪。神々と仲良く出来る筈がない。のだが……？

「もしかして…その友人というのは……詩菜、では？」
「あれ？もしかして知り合い？……ははーん、って事は何処かに隠れているな！？」

こ…この御方は、本当に守矢の神様なのか…！？

「いや、アイツは今、都に居ますが…？」
「都か～……ん？あれ、もしかしてキミは……あの時の、彼女？」
「……あの時の。というのは、詩菜が人間を妖怪とさせた時の事ですか？」
「そう！って、本当に…キミなの？」

……はて、私はどう答えれば良いのだろうか？
肯定するにしても、なんだか詩菜を認めているようで癪なのだが……。

…とか考えている間に、向こうは結論に達したらしい。

「生きてたんだ！良かった～…あ！もしかして詩菜の気配もキミ？」
「…まぁ、恐らく」
「……あ～、もしかして……ゴメン、謝る」
「い、いえ！そんな謝られましても…！」

神様から謝られるなど、私は何もしていないぞ！？

「一応、その…本人曰く仲直りと言いますか…しましたけれど……」
「そっか。良かった」
…にっこり笑いかけられても、私にそんな資格は……。
「ねね！詩菜は都でどんな感じかな！訊いても良いかな？」
「あ！え、ええ…。まぁ良いと思いますけど…」
「立ち話もあれだし、神社においで」
「よろしいのですか…！？」
こんな、妖怪を……！？
「ふふ、それこそ詩菜はこう言うんじゃない？『どうでもいい』って？」
「ッ！」
「行こっ♪ねっ！」
確かにアイツなら、そう言うだろう。
……神様と友人って、どういう事だアイツは！？
そんな理解不能な事が頭の中を回りつつ、私はこの小さな神様に引っ張られて神社に連れていかれてしまった。

「私は諏訪子。洩矢諏訪子だよ♪」
「私は八坂神奈子だ」
「わ、私は、彩目と申します…」

何故だ？
何故私は守矢の神々の目の前で、自己紹介をしているのだ？

「……やっぱ詩菜みたいに喋ってくれないか～」
「当たり前だろ。や、すまないね。いきなり連れてきちゃって」
「い、いえ…」

だから…神様がそんなに簡単に謝ってよいのか？

「ん？ああ、そんな事気にしなくていいさ」
「そうだよ～？まぁ、詩菜も初めは堅かったけどねぇ。とある事から気楽に喋ってくれたよ」
「…まぁ、予想はつきますが……」

アイツの事だ。色々と重なってはっちゃけたに違いない。

「…ま、キミの事件があってからは彼女を追い出したんだけどね」
「え……？」

「それまで詩菜と私らは一緒に暮らしていたのさ」
「神と…妖怪がですか！？」
そんな事が…あって良いのか……！？
「……まぁね。私らも色々と言われたよ」
「でも、初めに気に入ったのは神奈子だよねぇ♪」
「バッ、バカ！何を…ッ！」
「倒した時、ニヤニヤしてた癖にぃ～？」
「あっ、あれは……その…」

漫才を繰り広げる神々を前にして、私はかなりの衝撃を受けていた。
私は詩菜・志鳴徒を憎んできた。
でも、アイツに好意を持って接している奴の前で陰口を言える程、
優しくない奴にはなれない。
そしてこんな心暖まる話を聞いたら、
もう、憎めないじゃないか。

「ちょっ、どうしたの！？いきなり！？」
「え？」

二柱に顔を覗き込まれる。
と、同時に頬を流れる熱い何かを感じる。

……ああ、そういえば、何十年も昔の私は泣き虫だったなぁ。

涙を流したのは、妖怪になってから初めてかな…？

「……詩菜が言っていたんですよ」
「…何を？」
「…妖怪も神様も人間も変わらない。って」

私の看病しに来ていた時に話した言葉だ。
私はアイツの話をただ聞いているだけだったし、その意味もよく考えていなかった。
そういう意味なのだろうな。

「私、ここに来て良かったです」
「…私達は何もしてないさ」
「そうだよ。したとすれば彩目ちゃんと詩菜なんだから」
「…ありがとうございました。もう一度、詩菜に逢いに行こうかと思います」

吹っ切れた。
ちゃんと話し合ってみよう。

「そうか。なら詩菜にたまには来い。って伝えときな」
「滅多に来ないんだもん！」
「いや、そりゃ誓約があるからねえ…」
「はい。ちゃんと連れてきます！」
「おっ！元気になったね？」
「頑張ってね～！！」
「ありがとうございましたッ！」

やってやろう。
まずは能力使って詩菜とトコトン喧嘩でもしてみよう。
私の気が済んだら、アイツの話もちゃんと聞いて、
アイツの娘として、半人半妖として、生きてみよう。

家族（前書き）

デレるよ！！　その２

家族

《ｓｉｄｅ　詩菜》

「イィィヤアッッフフゥゥウゥウ！！！」
「また奴が現れたぞ！」
「今度こそ退治してやる！！」
「かかってこいやぁ！てやんでぃ！！」

久々にはっちゃけてみた。妖怪『詩菜』のお通りだい。

ただいま午前零時。
もう正月なので雪がちらほら降っている。

冬と言えば、寒い。寒いと言えばチルノ。寧ろ冷凍。冷凍チルノ。
そういえばチルノは何をしてるかな？冬だし、力が出てきて楽しんでるのかね？

「そぉい！『雪玉』！！」

実際は積もった雪を蹴ってるだけだが、妖力能力により有り得ない威力になってる。

全身に命中すれば、雪崩と同等の感覚が味わえますよ～？

「ギャアアァ！？」
「田吾作ぅぅ！！？」

誰だよ田吾作。
まぁ殺傷能力は凍死以外に無いと思うし、大丈夫でしょ？

「たっ、田吾作ッ！！しっかりしろッ！まだ熱燗は暖かいぞ！！」

陰陽師じゃなかった！？一般人かよ！？ていうか、なんでいるんだよ！？なんで熱燗！？

「おっ、おっ母……ガクッ」
「たっ、田吾作ぅぅぅ～！！」

……。
ガクッ。って自分で言っている辺り、大丈夫そうだね。
なんともまぁ……面白そうな人種だ。

午前三時。
あ～、楽しかった。人を脅かすのは快感だね。

「さて！満足したし！帰るか！！」
「まてぇ…今日こそ、絶対に……」

そんな夜通し、私をずっと追い掛けてボロボロな検非違使に捕まりたくはないなぁ。

「もっと私に追い付けるよう努力するのだな！！ふわはははは」

「んじゃ、私が追い詰めてやろうか？」
「は？……って彩目！？」

なんでここに居るのさ！？
警戒態勢は解除されたかも知れないけど、まだ都に戻るべきじゃないでしょ！？

「ま、立ち話もあれだし。アンタの家に行こうよ」
「イヤ、だから警戒が……」
「……」
「警戒が……」
「……」

……いや、睨まれても…。

「……ハァ、分かったよ」
「ふふ…よし。行くか」

例の、都から付かず離れずの自宅にて。

「…なんか、彩目…変わった？」

「ん、分かるか？」

「……そうだね。色々と吹っ切れたように見えるよ？」

「…まぁ、確かにそうだな」

何かあったのかしらん？

まぁ、本人にとって良い方向に変わったのなら、それは良い事でしょ？多分。

「ほら、水」

「うん、ありがとう」

「……で、なんでまた都に来たのさ？」

私みたいに姿を変えられるならいざ知らず、彩目はそういう術や技も知らない筈だ。

それなのに危険をおかしてまで京にやってきたのは、やはり『吹っ切れた』事と関係してるのかな？

「数日前に、守矢の神社に行ってきた」
「……あそこに？」
「…お前と出逢った場所にもな」

木々はほとんど切り刻まれ、切り株すら残っていなかったそうだ。
……我ながらとんでもない事を仕出かした物だ。

「たまたまその場所で出逢った八坂様洩矢様の話も、聴いてきた」
「……あっ！神奈子と諏訪子か！」
「……予想はしていたが、まさか本当に名を忘れていたとは…」
「いや…ねぇ？あんな神様は……ねぇ？」
「…言いたい事も分かる、がそれとこれは別だ」

あんなフレンドリーな神様居ないよ？ほんと。
上の名前なんて使った事なんて殆どないし。

「で、だ」
「うん」
「今一度、私と戦え」
「なんで？」
「理由なんかいらない。私と戦え」
「せめてそうなった経緯を言いなさい」
「あの二柱の話を聞いてしまったら、そうするしかないではないか！？」
「なんでこっちがキレられてるの！？」

分からん！！理解不能だ！！

「良いから戦え。これで私もすっきり出来る」
「……明日も弟子の修行で大変なんだけど…」
「私も入れて貰うか？」
「分かった！分かったから！自分を人質に脅迫するな！！」
……なんてこったい。お手上げ侍だぜ。

午前四時。

……そろそろ日もあがるんだけど…。

裏庭、というか庭、というか何もない広場？
何にせよ、とりあえず広くて人目がない場所で、私と彩目は向かい合っている。

妖怪にとって、夜などあって無いような物。
真っ暗でも私は彩目を簡単に捕捉出来るし、向こうも半妖とはいえ出来るだろう。

…わざわざ彩目が私に会いに来てまでやろうとしている決闘だ。
絶対諏訪子辺りに唆されたに違いない。うん。
後でとっちめてみよう。覚えていれば。

「行くぞッ！！『展開』！」

言葉と同時に彩目の周りに何本もの刀が出現し始める。
イメージするには言葉に出すのが手っ取り早い。私が言った通りである。

対する私は自然体のまま。お手並み拝見だ。

……こうしたなめた真似をしてるから、いっつもヤバい事になるんだよねぇ…。

「行けッ！！」

刀が全て私狙いで迫ってくる。
ホーミング性能はそれほど高くはないが、兎に角もう速い！！
私が避けて通り過ぎた刀は消滅し、再び彩目の近くに発生して射出される。

「よっ！はっ！とおっ、っと！！」
「そらそらそらそらそら！！」
「おっしゃ！ならッ！近付けば良いんじゃないかな！？」

一応爪で刀は弾けるんだけど、痛いんだよねぇ…微妙に切れ込みが入って。割れる感じ。
風圧で刀の軌道を逸らす。

「『マハガル』！」
「チッ！…来いッ！」

ばかでかい斬魔刀っぽいのがキター！！
なんだあれ！？〇護か貴様は！？

流石にそれはッ、弾くしかないなぁ！！

「つばぜり合いなら、勝てるんだよッ！！」
「知ってるさ！！」

キン！キン！と弾いていく音が響く。
つばぜり合いになった瞬間に彩目の刀は手を離れすっ飛んでいくか折れていく。
だが手を離れた刀には目もくれず、即座に両手に刀を創造する。完璧にエ〇ヤじゃん。

「爪が痛いんだっつうの！！」
「知るかッ！」

剣術、誰かに習うかねぇ！？

こっちから打撃。
大剣の腹を打って砕く。
創造させてる間に回し蹴り。
距離を取られて刀を創造される。
大きな竜巻を起こして私と彩目を囲む。
雪と風で視界が悪い。けど……。

……いかん。高揚してきちゃったなぁ♪

「逃げ場はないよ。テンションアゲアゲで行くよッ！！」
「貴様の言葉は全く分からん！！」

暴風雪雨に刀が飛び回り、砕いた破片が私を傷付け、破片の嵐を抜けきって私は彩目をぶん殴る。

「おぉおらあぁぁ！！」

決めた。決めてやった。
鉄の破片の弾幕を避けて、彩目の振り回す大剣と刀を避けて、
腹に一発。ボディブロー。
踏み込み良し。距離感良し。能力良し。邪魔無し！！

吹っ飛んだ彩目は竜巻の内壁にぶつかり、私の方へと更に吹き飛ばされる。

真上に、蹴り、吹き飛ばすッ！！

「私の勝ち、だね」
「…私の負け、だな」
「……気が済んだ？」
「…ああ。満足だ」

私も彩目も、双方共に満身創痍だ。
私は全身に切り傷が、彩目は全身に打撲傷が、能力も完全に解除して、竜巻が消えると雪を降らせていた雲も消えた。
東の空には、既に太陽が昇ってる。

「……ハァ～、徹夜じゃん…」

「…妖怪だから大丈夫だろう？」
「元人間がその習性を直すのに、どれだけかかったと思ってるの？」
「……なんだ、やっぱり大丈夫なんじゃないか」
「いや、そりゃ百年ありゃ…ねぇ？」
「…私がその境地に届くまで後三十年か」
「……なんつうロリババァ」
「意味が分かるように話せ」
「幼い可愛いおばあちゃん」
「……最悪だな」
「……同感」

でも、ま。
気分は良いかな？テンション高いし、風景は綺麗だし！

「朝ですよッ！」
「うるさいぞ。…朝ご飯は？」
「正月名物お節料理」
「嘘だろ。お前にそんな腕があるとは思えん」
「どうせ、ないですよ…」
「家に戻るか？」
「あいさーッ！！」
「うるさい」
「このツンデレめ」
「だから……意味が分かるように話せ」
「好きだけど冷たくしちゃう、そんな属性の人」
「……」

無言カヨ。

ま、てけとーにちゃちゃっと料理を並べて、ハイいただきます。

「で？結局、何で戦おうとしたの？」

「…料理の腕、上げたな……」

「聞いてないし……」

でも誉められたよ！やったね！！

妹紅、良い手本だわー。

「……以前は色々とお前を認めるのが癪だったんだ」

「…うん」

「それも今回の私の負けで吹っ切れた。……いつぞやに言っていたな？」

「ん？何を？」

「私を、む…。……」

「む？」

「…む、娘…だとか……」

……うおっ。顔赤ッ！可愛ッ！！

「認める？認めちゃう？さぁどうぞこの母の胸元に飛び込んで来なさい！」

「…うにゃーッ！！」

？。…？？。……？？？、ッ！！

「ギャー！？」

「ムギュウ！！何をする！？」

「こっちの台詞だァ！！なにマジで飛び込んで来てるの！？」

「え……ダメ…？」

うぐっ…！なにこの可愛い生物……！

クッ…！母性本能…！？これが母性本能か……！？

……ぬぐわあぁぁぁあ！！！

「…なんてな？」

「……へ？」

「ま、これからもよろしくな？母親殿よ」

「……からかわれた……？」

母親……？母親殿？

じゃあ……。

変化、志鳴徒。

「これだと、どうなるんだ？」
「父親殿だろ」
「……」

変化、詩菜。

「あ、戻るのか？」
「……今度さ」

私が教えてる弟子の親が『お主の娘が見てみたい』って、言ってたんだよね……。

「……もしかして…貴様」
「傷が治ったら逢わす。って約束……しちゃった…」
「……」
「……」

どうしよっか？
知るかッ！？

憂鬱（前書き）

シリアス一直線。
寧ろ、鬱一直線。

憂鬱

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

徹夜したらそれだけ集中力も減るんだが、依頼はこなさねば。

彩目を置いて、藤原氏の隠れ家に向かう。

……だる～…。

「いらっしゃい師匠」

「おーう。今日はどうするよ？」

「いやだから…それは、師匠が決めるべきだろ……」

「いやぁ、そうなんだがな……欠点のない奴をどう鍛えろと？」

才能あって、努力家で、恵まれてはないかも知れないが、金持ちで、

「俺からすりゃあ、大したもんだよ。既に」

「…そうか？」
「だから言っただろ？俺は能力なかったら単なるヒトだって？」
「……」
ま、妖怪じゃなくて人間に生まれたとしても、退治屋になってどっかでくたばるだろうし。
「そんな強い訳でもないし」
「……じゃあ師匠が勝てない奴って、一体どんなのなんだ？」
「…（妖怪の）賢者とか、（天狗の）長とか、花妖怪とか、（酒呑童子の）鬼とか……」
「……後半は分かるが前半が分からん」
あ、花妖怪分かるんだ。
…都でも有名って。どんだけ人を虐めてるんだよ……。
まぁどうせ、花を荒らしたから激怒したんだろうなぁ……。
「ま、能力者が一番厄介者だな」
「能力、ねぇ…『衝撃を操る程度の能力』…か」
風を『衝撃』と認識して操り、打撃を『衝撃を与える』と認識して操作し、
心にかかる負荷を『衝撃』と思い司る。
「そこらは自分の想像力でなんとかしてるしな。…まぁ他の能力者は知らないが」
「ふーん」
「ま、適当だって。人生」
「……いや、流石にそれはどうかと思うが…」

……そういえば…。

「珍しく親父殿が見えないな？その口調って事は出掛けたのか？」
「ん？昨日『中立妖怪』が出たとかでなんか忙しいみたいだぞ」
「……」

ＯＨ…なんてこったい……。
まさかの弊害が…。

でも、まぁ、藤原氏が俺の娘云々を忘れていれば、問題ない筈。
…妹紅が『こういう事には滅法記憶力が強い』とか言ってたけど、
大丈夫！うん！！

「……ま、やりますか」
「おー♪」
「……普通そこは嫌な顔じゃないか？」
「それこそ師匠。どうでもいい」
「…さいで」

まぁ、やる事と言っても精々格闘か、俺の知ってる妖怪退治やらの知識ぐらいしか出来ないんだが。

「妖怪に一番効果的なのが、祓う事が出来るもの。つまり神器とか、神の伝承があって畏れられてる神々しい物。とかだな」

「お札とか霊力はどうなんだ？」

「お札はむしろ霊力によって発動してるような感じかな？その霊力自体は神からの授かり物…人間の生体力（エネルギー）かな？」

「？なんでそんな曖昧なんだ？」

「あ～、説明しにくいが……威力は無いんだけども、妖怪に既に怖れられているからあると信じてしまうするとその分怪我をしてしまう？」

「……信じてるから、怪我をする？」

「要約どうも。ま、俺が考えているだけなんだが……順番が逆なんだよ。あるから喰らうんじゃなくて、喰らうって思ってるからあるんだ」

「？？？」

「信じるから救われる。妖怪には信じてしまうから祟ってしまう、かな？」

「……分からないな」

「ま、俺の考え方だ。実際は違うかも知れないし、寧ろその可能性の方が高いな」

「なんだ。てっきりそこまで研究したかと思った」

「そもそも霊力を操る才能がないんだっての」

講義の一時休憩。

だが、実際はどうなんだろうか？
簡単に言うと、人々からの願い事のエネルギーが神力。人々からの恐怖のエネルギーが妖力。
魔力やらがこの世界にはあるかも知れないが、恐らくそれは生物が初めから持っている純粋なエネルギー…になるのかな？
て事は、霊力は…魔力と似たような物なのか？
なら何故、神力とは馴染み妖力とは反発するのか？
イメージでは魔力はプラスにもマイナスにもなるのに……いやまぁ実際に見た事はないけど。

……そういえば、妹紅に霊力はあるのだろうか？
人間誰しもが持つが、扱えるか、自覚出来るか、見えるか、察する事が出来るか等、出来る事が変わっている。
まぁ此処等も才能なんだけどな。

「妹紅」
「ん、なんだ？」

神力で目を覆い、妹紅の能力チェック。

「…な、何なんだよ？いきなり見詰め出して？」
「んん～…霊力あるかないかの確認。自分で何か思い当たる事ってあるか？」
「……いや、ない。…と思う」

だろうなぁ…。
見た感じ普通の人よりは、ない。
全身から漏れ出てる量も少ないし。

「…ついでに、俺の眼は何色に見える？」

神力で覆うと、普通の一般人にも金色に見えたりする。集中させるとな。
更に神力と妖力の術が打ち消し合って、赤い目がチラッと覗けたりするんだが、まぁ日頃から神力や能力で妖力を圧縮して妖怪とかバレないようにしてるから、まぁ気のせいとかで押し通す事は出来るだろ。

「…ん～、金色？」
「神力は見えるんだな。よいしょ」

振り替えって術をかけ直す。妖力がちょびっと出るが致し方無し。
神力で術を使っても良いんだが、如何せん燃費が悪すぎる。

「…ん？……。…」

アヤシマレタヨチクショウ。キヅキハシナカッタヨ、ヤッタヨ。
センス有りすぎだろ妹紅…一発で気付かれるとか……ないわぁ……。

「…ふぅ、よいしょ」
「お、黒目に戻った」

「そりゃあな」

戻らなかったら迫害されるぜ？人修羅じゃあるまいし。

「…そういえば、なんで師匠は神力なんて使えるんだ？神様なのかよ？」

…実際は優しい妖怪の噂が地方の弱小神様に引っ張り上げられて祭り上げられただけなんで。

……一部、守矢の神々が関わっているとの噂がある。

あの二柱ならやりかねないな、うん。

ま、妹紅には嘘をつかせてもらおうか。

「いんや。知り合いの神様に譲り受けた」

「…どういう状況！？」

…間違ってはないかも知れないんだぜ、これ…。

「まま、例えばこの扇子とかな？物に宿ったのを譲り受ければ、貰う事になるんだぜ」

この扇子、紫から頂きました～（笑）

「……凄いな。むちゃくちゃ綺麗だ」

「あ、そっち？……まぁ、アイツはセンスが良いからな」

「…ん？文法がおかしくないか？」

「ん？」

……ああ、扇子とセンスね。
期せずしてダジャレを言っちまった。

「そういう事で……え～と、何の話をしてたんだっけ？」
「扇子の話だろ。な？もう一回見せてくれないか？」
「違う、その前の話だ。ついでにこれは友人から貰った物だから駄目だ」
「忘れた、師匠の娘の話じゃないか？扇子を見せるだけで良いから！な？」
「いつの話だそれは。ていうかそんなに良いか？これ」

まさかそんな魅了出来るアイテムだったのか？これは？
袖から出すと一気に目を輝かしやがって…。

「……んじゃ、今度そいつから一本譲って貰うよ。それをお前にやろう」
「良いのか！？」
「……アイツ次第かな…？」

そもそも紫は扇子を何処から入手してるんだ？

「……そういえば」
「ん～？」

「師匠の娘に逢うとかいう約束はどうなったんだ？」
「……君も案外、人の傷痕ほじくるねぇ…」
「い、いや！その…私もちょっと、見てみたくて……な？」
「『な？』じゃねぇよ……」

この御都合主義め……チクショウ、こうなったらどうせ藤原も思い出すんだろうなぁ……。

「……いっその事地震か何か起こして気絶させて、それからゆっくり記憶を弄くって……」
「考えが口に出てるぞ、というかそんな恐ろしい事をしようとするな！！」
「でも……ねぇ？」
「……そんなにヤバいのか？」
「…だって今現在、追われてる身だぜ？」

流石に本人と特定出来る情報は言わないが。

「……それは…」
「お偉いさんの藤原氏だ。アイツが知れば地位も危うくなるし、バレれば俺も捕まっちまう」
「……」

……まぁ、藤原氏は妹紅という秘密を共有している間柄で、それなりに俺も二人を信頼してるし、教えてもいいかなとは思うが……。
でも彩目の事もあるし、自身の『妖怪』の事もある。
誰だって自分は可愛いさ。人間だって妖怪だって。

「…まぁ、居場所がバレたとしても、俺もアイツも逃げ切れるだろうけどな」
「……師匠は」
「ん？」

「師匠は…どうしたいんだ？」

「……！」
「初日から娘の話を私に話したり、私とその娘が似ているなどと話すのは分かる。自慢話かとも思っていたが、じゃあ逢ってみようという話になれば頑なに拒否をする。理由を訊けばあっさり教え、それも犯罪者と来た」
「……」
「師匠…いや、志鳴徒。何を考えている？」

……参ったねぇ、どうも……。

「……」
「…だんまりか？」
「…仲良くなるには互いに秘密を共有するのが一番だ」
「は？」
「俺の勝手な主張だがな。互いに相手に自身の秘密を教える。だが隠すべき所は隠せ」
「……」
「初めは相手と自分を互いの秘密で縛る。その内に秘密を普通に話す事が出来る友人の出来上がり。とか考えてたよ。まぁ上手く行くことはそんななかったがな」

「…それで？」
「結局はさ。喋りたがりの奴が、誰とも仲良くしたいだけなんだよ…俺は」
言うなれば、淋しがり屋の喋りたがり屋なんだ。
「…へへ。そうだよな、おかしいよな色々と」
「……」
気まずい沈黙。あぁ嫌だ嫌だ。
俺は壁に寄りかかり天井を凝視して、妹紅の視線を感じつつも、それを無視する。
肉体が妖怪になって強くなっても、精神は人間の時から成長しないなぁ……妖怪は精神力が要だってのに……。

「帰ったぞー。って何をしておるのじゃ、お主らは？」
藤原氏が帰ってきた。
正直、俺としてはありがたい事で、早くこの雰囲気をぶち壊して欲しい。

「……よぅ、藤原氏」
「……おかえり父上」
「何なんじゃ、この空気は…？」

俺は気だるそうな顔を向け、気だるそうな声で挨拶を交わして、妹紅は未だに俺を睨みつつ、父親に顔を向けず挨拶を交わした。

そんな事で怒らないのは、この険悪な雰囲気を感じ取っているからか。

「……師匠、行くよ」
「……は？」

行くって……俺の家に？彩目に逢いに？

「妹紅！？」
「父上、今日は帰らないから。ご飯はあるもので食べてください」
「そんな事を言われてもやった事もないんじゃぞ！？」
「師匠」
「無視か！？」

手を取られて立ち上がり、引っ張られるような形で屋敷を飛び出す。
太陽は沈んで、夕焼けも消えかけている。

妹紅は身長・体格は俺よりも小さい。詩菜の時よりは大きいかも知れないが。

その手が俺の手首を掴み、引っ張っていく。

「……妹紅が逢って、どうすんだ？」
「…わからない」
「オイ」
「ただ、自嘲してそれだけ。は卑怯だ」
「……」
「……どっちの方向だ？」
「…このまま、まっすぐだ」
「……なんだ。廃墟しか見当たらないぞ？」
「隠れるにはうってつけだろ？…こっちだ」

なんか……複雑な気分だ。
彩目も妹紅も、良い奴なんだよ。
だけど……いや、この考え方も逃げてるのか。

ハハハ、まぁ道案内の為に妹紅の手を引っ張っている辺り、自分も今のこの状況を悪くないと感じてるみたいだ。

さぁご対面。
…どうしよっかな？

弟…子？（前書き）

とりあえず、ごめんなさい。

弟…子？

…着いた。着いてしまった。
俺の住む家に。…彩目が待つ家に。

どないせっちゅねん！！

「師匠？」
「ん？」
「…今何か叫ばなかったか？」
「いや？」
「……？」

…これからどうなっちまうのかねぇ…。
目の前には既に明かりがついた我が家がある。

「……師匠から入ってくれるか？」
「……ちょっと、話す時間をくれないか？」
「…ああ。そうだな…ごめん、私も焦っていたみたいだな…連絡も取らずにいきなり来るなんて……」
「……まぁ、ちょっと待っててくれ」

焦っていた…って、何でだ？

「……ただいま」

「おかえり。ってどうしたんだ？」

……彩目の顔を見るのが物凄い久し振りなような気がする……。

…まぁ、そんな事より。能力発動『屋内から屋外に出る衝撃を無効』盗聴防止。壁に耳あり。障子は…無理だが。

「……今、表に弟子がいる。今日この家に泊まる気だ」

「…いきなりだな」

「俺が妖怪だとは知られてない。だがお前が追われている事は知っている」

「…また変な風にお話ししちゃったんだろ……」

「面目ありません…ハイ……」

「…私の事は知っているのか？」

「……いや名前とかまでは話してない」

「ふぅん……ま、逢うしかないんだろうな」

「スミマセン……」

「良いぞ？別に。私らならば簡単に逃げる事が出来るだろうし」

おお…！俺と同じ結論に辿り着くとは…！！

「…随分俺らしくなっちゃって……！」

「うおっ！？なんだいきなり！？」

「思考が似てきてるぞ。俺とお前が」

「…まぁいい。その弟子とやらは信頼出来るんだろ？」

…いま一番問題な部分を訊いてきたね……。

「…私は信頼してる。けどここに来るまでに色々とあってね…正直、分かんない」

「……詩菜になりかけてるぞ」

「えっ！？なんで！？」

口調が完璧に詩菜になってる！？肉体の方は変化してないのに！？

「思考が暗い方になると、妖怪化するのか？」

「……良し。そんな事いままでなかったぞ？」

「……そいつがいる間にそんな事を起こすなよ？」

「分かってるよ…」

「…良し。開けるぞ？能力解除しろ」

「…ふぅ！了解！」

「いや、そんな気張らなくても……」

ガラリ

「ようこそ。えーと……名前はなんだっけ？」

「ありゃ、言うの忘れてたか。藤原妹紅だよ」

「…まぁ訊くのを忘れた私も悪いか。兎に角ようこそ我が家へ」

…まぁ、彩目がフレンドリーな対応をしてくれて助かった。
あの屋敷と同じ雰囲気は、もう嫌だ。

「貴女は…！？……ッ彩目…！？」
「…一般庶民にまで私の名は伝わっているのか？」
「いや、親がそういう所だからな。そんな情報をよく聴くそうだ」

『オイ！？貴様はなんでそんな所で働いてるんだ！？』
『おお、これがかの念話か！！凄い！』

血の繋がり？で出来るテレパシーか。それは思い付かなかった。

……これからの話は、俺の大失敗の記録で、妹紅に対して酷い侮辱になってしまう話になってしまった。

…まぁ俺は様々な場面で親しい相手に甘い判定をして、それでいつも失敗をしているんだけど、今回もそういうオチ。そういう事なのだ。

『場合によれば即座に貴様と詩菜が結び付く状況じゃないか！？むしろ気付かない方がおかしいぞ！？私を紹介すれば嫌でも詩菜と結び付く！！そこへ貴様が親として来た！ただでさえ名前も似てたりしているんだぞ！？』

『……あー…』

『くぅ…このバカ親父！！』

『…ま、まぁバレなきゃ良いって！』

「……志鳴徒…が…？」

「…手遅れ、だな」

「……」

ここに来て、ようやく俺は自分が仕出かした事に気付いた。

…彩目は一時期世間ではかなりの有名人だった。

濁った霊力を使う事も、それで妖怪退治にはそれなりの評判があり、とある妖怪を憎んでいる事も、

そして…その妖怪と出逢った事で、当の本人も妖怪になってしまった。という事も。

事実、あの場面で彩目の妖力を見てしまった人はかなりの人数に上ってしまったし、噂を消そうにも当時は民間の陰陽師であった俺には無理な話だし、今の立ち位置でも不可能だ。

人間も執念が溜まれば鬼となる。
テレビやゲームもないこの時代。『噂話』は庶民・貴族共通の楽しみだ。

故に、
人間にしてはかなりの才能・頭脳を持っている妹紅には、簡単に結び付いたのだろう。
師匠が妖怪で噂の詩菜だという事に。

「……師、匠…？」
「…ハァ。だから貴様は……」
「……分かってるよ…お前の時と同じ、ロクデナシにまたなった訳だ。俺は…」
「…う、そだろ…？師匠……？」
「…悪い。すまん」

最悪だ。どうする…？
妹紅は、暴れまわれば殺さねばならなくなるかも知れない程の実力者だ。
頭に触れば気絶させる事は可能だが、そうそう簡単に触らせてくれるとは思わない。

『…志鳴徒。もし彼女が私らを誰かに話して私らが追われる事になるのなら、その前に私はコイツを殺すぞ』
『ッ！？』
『誰かよりも家族だ』
『それはッ…そうかも知れないが『甘い事を更に言うつもりなら、私がお前を倒してから殺す』！？』

……ああ、紫の言う事もたまには正しいんだな……。
《身内が戦うのは見たくない》
ハハ……なるほどね。

……決めた。

『……子が親を圧倒出来ると思ってんのか？』
『……ふふ、前回は負けたがな』

共に妹紅に向かって立っている筈なのに、俺と彩目の間に悪意が満ちていく。

が、それは今やるべき事じゃない。

「…ま、妹紅を止める方が先だがな」
「そうだな。親子喧嘩はその後だ」
「…あ、あ……？」

妹紅は座り込んで顔を両手で抑えて俯いている。

……しかし、師匠が妖怪だと知った事でここまで精神が揺らぐか？
…これじゃあ、自分が信じてた物が正反対に作用していたよ…う…
……な。

……まさか…。

「……嘘だろ。…師匠は陰陽師だろ…？なんで詩菜みたいな妖怪に、なってんだよ…？」
「……待て」
「…師匠みたいな…鬼にも引かずに戦える…そんな陰陽師を、目指してたのに…さ……？」
「…止まれ、妹紅」
「志鳴徒？」
「なんで…妖怪なんだよ……やっと確信出来たのに…！」
「喋るな妹紅！！」
「やっと好きだって分かったのに！何でだよ！？」

…ほーら、まーた俺は嫌な奴になっちまった。

妹紅は叫ぶと同時に俺に向かって攻撃を仕掛けた。
修行でも見た事がない、本気の攻撃。
手刀は俺の肩に目掛けて打ち出された。

……俺は、どうすればこんな事にならなかったのだろうと、飛んでくる手刀を無駄に冷静に見ながら考えていた。
妹紅に冷たくするとか？
人間相手には詩菜で妖怪相手には志鳴徒にするとか？
そもそも藤原氏の依頼を受けなければ良かったとか？
それとも初めから妖怪だと教えれば良かったとか？
男子でも女子でもあると言えば良かったとか？
もう少し慎重に行動すれば良かったとか？

人間に協力しなければ良かったとか？
詩菜のままで志鳴徒にならなければ良かったとか？
妹紅と出逢わなければ良かったとか？

けれど、もう既に彼女は暴走してしまっている。

「志鳴徒！！動け！！」
「ッッ！？」

左肩に刺さろうとしていた右手を払い除け、距離を取る。
だが距離を取らせようとしてくれない妹紅は直ぐ様近付き、蹴りを放ってくる。
いつもの普段着ではなく、修行で着る服のままこの家に来たのが災いした。
普段着ならば着物で蹴りなど放てる筈がないのだが。

狭い室内、瞬発力が得意な俺は狭い所じゃ能力を上手く発揮できない。
それにこの天才は打撃が効かない事を知っていて、わざわざ直撃じゃなく擦れるように爪先を飛ばしてくる。

「クッ、ソッ！！」
「うわぁぁぁぁぁぁ！！！」
「志鳴徒！！」
「彩目！戸を開けろ！！外に出る！！」
「ッ分かった！」

そこからは、ガキのケンカみたいなものだった。
妹紅はなりふり構わずに俺に突っ込んでくるし、俺は俺で申し訳無い気持ちで攻撃に踏み込めずにいた。

…泣いてる奴と戦うのは彩目とあわせて二回目。
まったく、どうしてこうなったのやら……。

とっくに陽は沈んで、辺りは妖怪でもない限り真っ暗にしか見えない。
それでも妹紅は俺に向かってくる。まだ叫び続けている。
妹紅も俺も、既に傷だらけだ。

『……いつまで戦うつもりだ？』
『彩目か！どこにいる！？』
『家に居る。そいつの狙いはお前だからな』
『そっか…ッと！？』
『…考え事をしながら、貴様の弟子は倒せる相手か？』
『…そうは言ってもッ！なら！？俺はどうすれば良かったんだ！？』

『知るか。私に訊くな』
『……だよな…スマン、お前に当たっても意味がない』
『…お前の相手は妹紅だ』
『ああ。そうだった』

…過ぎ去った事を考えてもしょうがない。今は妹紅の事を考えなければ。

妹紅は霊力も妖力も何も持たない。陰陽道も知らない。札や弾幕も知らない。
つまり遠隔攻撃を知らない。
あいつが出来るそういった技は、せいぜいが俺のような石や砂利を蹴飛ばす位だ。
威力も速度も俺とは段違いで、脅威となるようなものでもない。

なら妹紅が出来る事は、俺に接近してインファイトを仕掛ける事しかない。
…俺が使う技の流れや手足の動かし方が似ている。

こんな奴と一緒になったって、到底幸せになれねぇぜ?
それに、まだまだ自由で居たいなぁ。俺は。

『ようやくいつもの調子が戻ってきたようだな?』
『らしいな…』

やれやれだ。

『…死ぬなよ？』
『こんな処で死ぬつもりは毛頭ない。嫌でも逆に愛してくれる奴に殺されるのも…』
『おい』
『分かってるよ。俺は志鳴徒だ。誰しもが不幸な終わり方なんて許さねェ』
『……』

「妹紅」
「うらあぁぁぁぁ！！」
「お前の想いには答えられん。それに当分独り身で居るつもりだしな」
「あああああああ！！」
「…大体、妖怪と人間が釣り合う訳ねぇだろうが！！」
「グハッ！？」

伸ばされた右手を引き込み、もう片方の腕で鳩尾に肘を入れる。
空に浮いた所を更に蹴りを入れて弾き飛ばす。

「…ま、手加減してる辺りが俺の弱い所だな」
「ガハッ！……く…師、匠…！」
「今からお前の脳みそに《衝撃》を叩き込む。ここしばらくの記憶なんて吹っ飛ぶ奴をな」
「……ケホッ」
「…それで一からやり直せたら最高なんだがなぁ……」

一度聞いてしまったからには、もう取り返しはつかんな……。
…ん、これも妹紅からの逃げだな…はぁ。

「……そっか……ゴホッ」
「お、戻った」
「…容赦ないなぁ…師匠は…」
「ブチキレたのはお前からだろ」
「ハハ…げほ、そっか…そうだった」

ゆっくりと立ち上がる妹紅。
妹紅には俺の姿が見える筈が無い程の暗さなんだが、明らかにこちらを見据えている。

「…まぁ、いいや。コホ…この想いも忘れるんなら…いっその事告白した方が後々、師匠の枷になるからな……」
「オイオイ、まだ独身だし浮気もしてねぇが？」
「はは……《嫉妬》っていう呪いだよ。ふぅ…」

「私は、師匠が、志鳴徒を、一人の男性として好きだ」
「俺は妖怪だ。ちなみに女性でもある。ていうかぶっちゃけ結婚はしんどそうだから嫌だ」

「…へへ、風情もへったくれもない拒否の言葉……」
「俺にそんなのを求める方が間違ってるつうの」
「…あ～あ、ふられた……」

その場にバタリと仰向けに倒れる妹紅。
ゆっくりと近付き、横に座り頭に手を添える。

「……妖怪になって追いかけよっかな…ケホ」
「…そんなのは彩目で十分だ」
「え！？そんな間柄！？ゲホッゲホッ！！」
「ふざけんな！？誤解だ誤解！！」

「慌てると余計そう見えるぞ…ていうか何時の間にそんなに近くに来たんだ？」
「……ハァ。終わった様だからな…様子見だ」
「…さて、妹紅、他に呪いはあるかい？」

…いっその事、ここで詩菜に変化した方が妹紅の思いは粉微塵に砕けるとは思う。
だが……まぁ、俺が激甘だって事だな。
こうやって、言い残した事を訊いてる事もな…。

「…あ～、肋骨折れてる」
「まぁ何かしらの言い訳をお前に言って、何とかするさ」
「…父上にはなんて言うんだ？」
「『詩菜に襲われました』」
「……まぁ、間違ってはいないが…貴様はそれでいいのか？余計に警備が厳しくなるぞ？」
「いつもの事いつもの事♪」
「…ダメだ、この馬鹿親父……」
「…んじゃ、もし私が今回の事を思い出して、妖怪になって追って来たら？」
「……ん～、それでも断るかな？俺にゃ勿体無過ぎる」
「…なんだ、残念」
「ま、人間として幸せをまっとう出来りゃ、師匠としては鼻が高いね」
「…そっか」
「他に何かあるか？」
「……志鳴徒？」
「ん？」
「好きです」
「…諦め悪いなぁ、オイ」

「師匠譲りさ」
「……彩目、似てるか？」
「…まぁ、微妙に」
「マジか…」
「最後の足掻きだよ」
「ハァ……『どーでもいい』」
「ップ！ははははは！！いだだだだ！！」
「ほ～ら、無茶するから…」
「…師匠らしいな」
「俺だもの」
「なんだその返答……」
「…ああ、すっきりした…いいよ、やってくれ」

掴んだ右手に神経を集中させる。
物理的なダメージを与えずに、精神的ショックを与えるのは中々に疲れる。
……明らかに、物理の方に慣れてしまった証拠だな。

「《ショック》！！」

叫んでから、効果が発揮されるまでの数秒の間。
声なんて挿める筈がない時間の狭間。確かにそれは聞こえた。

「……すっきりしたけど…諦めるつもりは毛頭ないけどな♪」

「は！？」
「わっ！？な、なんだいきなり！？」

手の先には、既に気を失い、記憶を失った妹紅がいる。
寝ている。

「……彩目、聞こえた？」
「？…何がだ？」
「私がショックって言ってから、妹紅の声が」
「聞こえてない。大体、そんな時間無いだろ？」
「…だよね……？」

まぁ、私の幻聴かも知れないか……。

とは言え、妹紅ならありえるとも思えるな……。

「…うわぁ～……とんでもないもの、背負っちゃったよ…」
「……どうでもいいが、また詩菜になってるぞ」
「……なんで！！？」
「知るか」

弟…子？（後書き）

うん、ごめんなさい。

シリアスとまったりと、時々デレ

妹紅を担いで、藤原氏の家に戻る。
妹紅は肋骨が折れ、服もぼろぼろ、無論俺も泥だらけだし、切り傷や擦り傷が所々ある。
もうすぐ、夜が明ける。

しばらくは、妹紅に逢わないようにしよう。
少なくとも、コイツの肋骨が治るまでは。

「志鳴徒!?妹紅!?どうしたのじゃ!?」
演技の始まりだ。
幽香で鍛えたポーカーフェイス、出番だぜ。

「起きてたか…！良かった……フゥ…」
「何が起きたのじゃ！？おぬしがここまでの怪我を負うなど…！？」
「はぁ…詩菜に襲われてな……イテテ」
「なんと！？あの《中立妖怪》にか！？」

……ま、まぁ自分からも名乗った事があるし、広まってるのはどうこう言おうとは思わないが…。
流石に目の前で違うヒトとして言われると…恥ずかしいな……。

「なんとか逃げたが…妹紅が重傷だ。肋骨が折れてる」
「ッ！？」
「…すまん。守りきれなかった……」
「……生きておるよな？」
「ああ…頭を打って多少、記憶が混濁してるかも知れん……いつ起きるかもわからない」
「…そうか」

妹紅を布団に寝かせて、居間へ移動する。

妹紅は隠し子であり、迂闊に医者には見せられない。
その為に、色々と知識のある俺がレクチャーしてやる。

とは言っても、俺もそんな詳しい訳でもないがな。

「一ヶ月は家から出すな。庭に出すのも避けろ。激しい運動どころか、家庭内の仕事もさせるな」
「……わしは何を食えば？」
「自分で作れ。妹紅の為にも、お粥とかな」
「…わ、わかった。他には？」
「そうだな……俺はしばらくここに来ない。妹紅を動かしちゃ悪

いしな」
「…うむ」
「あとは多分、記憶が消えてる部分があると思う。そういった記憶は無理に思い出させようとするな」

安全策として、父親殿にお願いしておく。
いくら《衝撃》で記憶を飛ばしたとしても、それは確実に消すという意味ではない。
思い出そうとすれば出来る。思い出す事は簡単にはいかないが出来る。きっかけがあれば、だが。

「……わかった」
「……多分、それくらいだな」
「…おぬしらは何を慌てて飛び出していったのじゃ？」

失敗から学ぶ事を知らない奴を、人は愚者という。

とは言っても、嘘を喋るとしても辻褄が合わないとなぁ…。

ん。

「ちょいと妖怪退治に、な」
「なんじゃと！？」
「ああ、親の許可を取らずに行ったのは謝る。妹紅の実力はそれぐらいあるからな……だが…」
「…出遭ったのが『詩菜』じゃった、と…」
「……本当にすまない…」

色々な意味と想いを込めて、

「なんなら、この一年間の依頼……あと半年だが、それも無効にしたっていい」

「……既に半年じゃ。取り消す訳にもいかんじゃろ」

藤原氏の苦笑い。

…許してくれたのか？

……まぁ、いっそのこと、ここで縁を切られた方が俺としては気が楽だがな…。

「…じゃ、俺は行くよ」

「傷は大丈夫なのか？」

「ああ、それほど深い物もないしな…」

実際に防いでばっかりだったのだし。

「…一ヶ月、ちょいと故郷にでも帰ってみるよ」

「…そうか。まぁお主の娘にもよろしくのぅ」

……。

「いやぁ…そりゃ無理だな」
「何でじゃ！？」
「お前に逢わすとろくな事にならなそうだ」
「酷い！？」
「ハッハッハッ。じゃ、またな」
「……おぅ。気を付けて行け」

「さーて、里帰りしよう！」
「藪から棒にだな」
「久々に天魔に逢いに行こうと思ってね」

……ま、逃げたいから。ってのが本心だけどね。

ゆったり彩目と歩きながら、天狗の里に向かう。
雪道だし、現在も降っているけど、まぁ別に悪影響もでない妖怪の身体。いつものイキイキファッションさ！
詩菜に身を変え、志鳴徒としての変装もバッチリさ！！

「…そういえば、口調は何だったんだ？」
「ん～…私にも分からない。何かしらの電源が入ったと思うんだけど……ね…」
「分からないまま…か」
「…ハァ～、最近溜め息ばかりな気がしてならないよ……」
「ま、まぁ！その為に里帰りをしていると考えれば良いんじゃないか？」
「そーだねー。天魔に娘を紹介するのも、面白そうだし♪」
「……（私の心配は一体何処に…）」
「いやいや、してくれてるだけでもお母さん嬉しいよ～？」
「……母さんッ！」
「我が子よッ！」

……ヒソヒソ、ヒソヒソ…ヒソヒソ。…ヒソヒソヒソヒソ。

「止めよう。人目や妖怪がいる所でするべき事じゃないや」

「だな」

「……それにしても、彩目も変わったよね」

ネタが分かってくれる。

……いや、ノってくれるのが、ね。

「……ああ。自分もそう思う」

「…何があったらこうなるのさ？」

「こう…何て言えば良いのか……お前を見てると、何か湧いてくる物が…」

「……近親相姦！？」

「ちッ！違う！！断じて違うッ！！」

「うん。そう信じてる。よしんば何かの契約の悪影響だとしても、そんな深い感情が起こされてありませんようにっ！！」

「…ちょっとした心の病になってるな」

「…トラウマだね。妹紅の呪いかな」

魔物が現れた！

魔物は彩目に注目している…。

……彩目に襲い掛かってきた！！

「なんで私じゃねぇぇんだあぁぁ！！？」

「なんだその逆ギレは！？」

「…ま、ちょうどいいし。彩目の実力を見せて貰おうか」

場所はそれほど深くもない山の中。足場も悪いという訳でもない。
雪が多少積もってるだけ。
敵は野獣数体。名前を付けるのなら《サーベルタイガー》

…あれ？日本に虎なんていたっけ？
……まぁ、いっか。

私は樹の上から観戦しよっと。

「逃げる気か！？」
「大丈夫大丈夫。危なかったら援護するから」
「うわっ！？っと！」
「私なりの、教育術さ♪頑張ってね～」

彩目は霊力も妖力も使え、能力も持っている。
能力は《刃物を扱う程度の能力》だ。
刃物を自由自在に取り扱う姿は、曲芸師か何かに見えなくもない。

私が知っているネタ武器。
《心渡》とか《エクスカリバー》とか《アルテマウェポン》とか《斬鉄剣》とか《ライトセイバー》とかとか《ジャジャン拳のチー》とか、色々教えれば全部復元出来るんじゃない？
刃があれば良いんだから、私の《衝撃刃》も操れる訳だ。
ていうか、刃がついていれば槍だって手裏剣だって良いんだし……
…もう何でもありだな…。

手始めにル○ン三世に出てくる斬鉄剣を教えてみようかな…？

とか、考えてる内に終わったみたいだ。
どの猛獣もバラバラになってるし。
うーん、グロい！

「私の能力よりもえげつないよねぇ」
「…ああ。言われると思った」
「ま、斬れないなまくら刀を考えて創造するとか、やりようはいくらでもあるし？そんな気張らない気張らない」
「……フゥ、そうだな。……所で、貴様は何をしているんだ？」
「死体処理」
「……集めて風呂敷に入れてるようにしか見えないが？」
「…妖怪なりたての彩目には悪いけど、食糧がないので、妖怪の血肉を食べてこの先進みます」
「……正直いやなんだが…それを食べて妖怪に近付いたり、しないのか？」
「ん、ちゃんと調理して妖力が消えれば大丈夫。代わりに妖力は増えないけどね」

妖力が残っている生に近い妖怪を食べれば、その何割かが自身の妖力に変換される。妖力が増えるし腹も膨れる。
妖力が残っていない調理した妖怪を食べれば、腹は膨れる。妖力は増えない。

「……詳しいな…調べたのか？」
「…一時期、早急に妖力を増やさないといけない事があってね？…それに、元人間だって言ったでしょ？……初めては誰だってキツいさ」

「…元人間のわりには、詩菜には霊力が無さそうだが？」
「才能がなくてね。神力はあるんだけどね～？……ホラ、焼けた」
野宿。火を起こしてキャンプファイアー。
周囲に能力で警戒範囲を作って、ゆったりと落ち着けるスペースを。
「食べないと身が持たないよ？いくら彩目でも半分は人間なんだし」
「……ハグッ」
「おぉ、良い噛み付きっぷり」
「…うん。不味くはないな」
「素直に美味いって言えば良いのに…」
太陽が出ていた時に大量にいた通行人はいない。
何も抵抗の術を持たない商人は、野宿をすれば野獣に身体を捧げてるようなものだからだ。
抵抗出来る私達は良いのさ。
「……彩目。三時の方向。四足歩行の獣一体」
「衝撃音を聞き取れるのって便利だな…ホラよっ！！っと、どうだ？」
「お見事。脳天かな？彩目も気配を探れるようになってきたかな？」
「遠距離攻撃が出来なくて広い範囲を探れる詩菜と、遠距離攻撃が出来て近距離戦闘が得意な私か？」
「近距離が得意なのは両方でしょ？ただ遠距離が得意か不得意かだけだよ」
ちなみに槍もあっさり創れた彩目さん。親を越える日は近い。
私も遠距離は迎撃しようと思ったら出来るよ？

ただ、その分範囲が広くなって草木を無駄に薙ぎ倒しちゃうからね。
《マハ～》系統は使いずらいわ～…。

「……しかし」
「ん？」
「…普通は交代で見張りとか、するのが普通じゃないか？」
「……それもそうか」
「オイ」

仕方無いじゃん。ツレがいる状態での旅なんて初めてなんだし。
護衛任務も受けた事はあるけど、大半が一日間だけだったし？
見も知らずの退治屋に、長期間の護衛を頼むのもおかしいでしょ？
知り合いならいざ知らず。

「つまり貴様は知り合いとも言える人物が居ない訳だ」
「……」
「……オ、オイ。黙るなよ」
「……」（涙目プレッシャー攻撃）
「……悪かったから。わかった。スマン！ええい！泣くな！？」
「……くそぅ」
「……ああ、もう。可愛いなクソッ」

……。ハッ！！

「…ねぇ？百合っちゃう？」
「…やめろ、誘うな」
「だが断る！レッツパーリィィ！！」
「うわあぁぁぁぁぁ！！？」

それからは草木も眠らない爛れた二人の愛が――――

――――なんて事もなく、

「う～ん。こういう身体にベタベタくっ付ける環境！最高！！」
「ちょ！あっ！？ッッ！どこ触（さわ）ってるんだ！？」
「違う。触（ふ）れてるんだよ」
「同じだ！馬鹿！！」

すまん。前言撤回の前言撤回だわ。
ある意味、デロデロしてる。

「もっふ～……あ～、女の子の香り～」
「……ほんっとうに、オッサンだな…」
「でも、彩目も拒絶しないよね～？」
「……フン！…その姿ならまだしも、志鳴徒になってみろ。その場でそれを叩き斬る」
「イ、イェスマイロード！しないしない！絶対にしない！！」

流石にそれはないわ……。いやぁないわ…。
ないわぁ……。

「あぁ～、でも結構温かいな～…」

ちょっとした寝袋みたいなものに、二人で入っている状況。
彩目は身長は高いが少し痩せた体型だし、私なんて言わずもがななので、寝袋にぎゅうぎゅう詰めになって入ってます。
周りには結界を張り終えてる。天気が変わって雨や雪が降っても私達に当たりはしない、頑丈な奴をね。

そしてそれは私の神力も使ってある。
この天国を邪魔した奴は、誰が誰だろうと、ブチ殺す。

「……今が冬で良かったな。夏だったら…」
「夏でも私が望んだら、彩目は拒否はしないと思うけどねぇ？」
「……そうかも」
「このツンデレめ。むしろツンドロめ」
「……ハァ、予想はするが……意味は何だ？」

「最初は仲が悪くてキツいのに、仲良くなるとベタ惚れしたり、皆の前では冷たいのに、二人きりになるとベッタリ」
「それは聞いた…ちょっと自覚もした。……が後半はなんだ？」
「ベッタリし過ぎてむしろドロドロな液体な程の状態。人目を憚らないかも知れない」
「いや、流石に目は…気にするなぁ」
「じゃあツンデレけってー♪」
「……ああ、もう。好きにしろ…」
「頬が赤いよ～？うりうり」
「……うっさい」

……彩目ちゃんまじ可愛い。

あれが夏の大三角形、ってね。
まぁ季節は逆なんだけどねー？『君の知らない物語』

「星が綺麗だねー」
「ん……晴れたのか」
「冬の方が星は綺麗に見えるんだよー？空気が澄みきってるからねー」
「ふぅん」
「大陸とかだと星の名前がちゃんと付けてあるんだー」
「……物知りだな」
「まぁねー。伊達に長く生きてないよー？」

長生きで説明出来ないのもあるけどねー？
というか妖怪で長生きって言ったらー、１０００歳は超えないと言えないと思うんだけどなー？

「……ちなみに、その語尾を伸ばすのはなんなんだ？」
「可愛いかなー？」
「……まぁ、志鳴徒の時にやられたら…吐くな」
「…いや、そりゃあ…ねぇ？私もやろうとは思わないけど……どう？」
「……可愛い」
「…えへへへへ」
「だっかっらっ！触るな！？」
「むにゅ、おやすみー♪」
「……ハァ、おやすみ」

帰郷。その1（前書き）

オリキャラしかでませんｗ

帰郷。その1

「さーて、埃だらけだなぁ…」
「…まぁ、私が最後にここを来たのが三ヶ月前だしな……」

無事に我が家に到着。
急げば一日もかからない距離を、のんびり三日もかけて来た。

「……無駄な事を」
「無駄じゃないでしょ？こう、彩目との友好を深めるという必要性があってだね…」
「ハイハイ。じゃまずは掃除だな」
「無視かチクショー」

まぁ、この大木をくりぬいただけのログハウス。
別に重要な物も置いてないし、置く気もないし。
なんか、紫みたいな隠せる倉庫があれば良いんだけどね…そんな技術もないし……。

「まー、ようやくのんびり出来るってこったー…」

ごろりとねころぐ事が出来る空間って大事だよね。

「…それで、ここに来てどうするんだ？」

「ん？私は友人共（ども）に挨拶しに」

「どもかよ」

「共（ども）だよ。そんなに居ないしね……言ってて悲しくなってきた」

「そうかい」

…あれぇ？こんなにこのヒト、キツかったっけ？

……まぁ、いっか。

「…さて、ちょうど来たようだし。酒ってあったっけ？」

「？…あるが、誰が来たんだ？」

「てんちゃん」

「……はぁ？」

「帰ってきたのか詩菜ッ！？」

「ほいなー♪久し振り～♪」

「おぉ、おぉ！帰ってきたんじゃなッ！？」

「また行くけどねー」

「……まぁ、いつもの事じゃな。とりあえずは」

「一杯。でしょ？」
「ハハハハハ、じゃな！」
コイツもなんか性格変わったような……？
「それで、そちらの方は誰なんじゃ？…この前にも見たような気がするが」
「ああ、この大木を教えてくれた時に背負ってたヒトと同じだよ」
「フム？そのわりには…妖怪なのか？」
「ほら、自己紹介しな」
「…彩目、と申します。…えーと」
その時、彩目の顔がニヤリ、と笑ったような気がした。
そして、その予感は見事に的中した。
「…どうやら『母親』が色々とご迷惑をお掛けしたようで…『娘』共々、謝罪致します」
「「ゴフッ！！」」
「彩目ぇぇ！！何を暴露してんだぁ！？それも嫌な感じに！？」
「え？だって元から言うつもりだったんだろう？」
「そうだけどさぁ！？」
『母親がご迷惑をお掛けしました』って！明らかに狙ってるだろ貴様！！

「ッ！？てっ、天魔！？天魔がまた口から何か白いものをッ！？」
「…うぉ、この酒強いな……」
「のんびり呑んでる場合じゃないからね！？」

仕切り直して。

「めんどくさがった私が悪かった。この子は『彩目』、半妖で能力持ち。…まぁ私の血が混ざってるだろうし契約も結んであるから、都合上『家族』になってる」
「……それでもかなり驚くような内容なのじゃが…」
「では、改めまして。彩目と申します」

はぁ……いきなり変な風に暴露するから、おかしくなったじゃないか…。

「…お主の血が混ざっとる。とは？」

「ん……ん～、私が強制的に半妖にさせた」
「あぁ、なるほ――――はぁ！！？」

……まぁ、驚くよね…普通。

妖怪っていう憎むべき存在に落としたのに、仲良くしてるんだから。
契約っていうシンパシーが働いてるとしても、仲が良すぎるもんね。

「ああ、それにつきましては既に清算しましたので、ご心配には及びません」
「……まったく、お主にはいつも驚かされてばかりじゃ……」
「ハハハ。ま、呑も呑も！」
「…いや、そちらの御方が誰なのか聞いてないのだが？」
「おぅ。そうじゃったな！儂は『天魔』天狗の長をやらさせて頂いておる」
「てっ、天狗の長ッ！？」

……なんだその『コイツの交友関係は何なんだ！？』的な視線は。

「まぁ、初めて逢ったのが天魔じゃ無かったら、今頃生きてないだろうねー」
「お主はあの時から既に強かったじゃろ？」
「いやいや、あれは能力と運だけだって。今でも妖力は追い付いてないんだし？」
「フフ。そう簡単に追い付いてもらっても困るからのぅ？」
「まぁねー」

彩目ポカーン。口開いてますよ。

「なら、今から試合でもしてみぬか？」

「めんどくさい」
「じゃろうな」
「…一体何者なんだ貴様は……」
「私は私さー」
「……はぁ」

溜め息つかれても、これが真実だっての。

「…そういや、三人組は？」
「おお、奴等もすっかり成長しての？今じゃかなり礼儀正しくなっておるぞ？実力も上がっておるし」
「……なんだ、また弟子か？」
「……まぁね。こっちはほとんど何も教えてないけど」
「教えてやれよ…」
「あんなにうざいとやる気が失せる」
「…そんなに五月蝿いのか？」
「初期はかなり酷かったのぅ」
「いきなり私の家に三人突っ込んで来るんだよ？」

無論、その後メッタメタにしてやったけどね。

「…あぁ……それはうざい」

「なんだと貴様！？」
「そうだぞ貴様！！」
「誰なんだ貴様！！」
「何故そんな所に座っている貴様！！」
「どうしてそんな姉御の近くに居るんだ貴様！！」
「羨ましいだろうが貴様！！」
「「「変わってくださいお願いします！！」」」
「ちなみに右端が弥野、真ん中が縞、左端が作久です。彩目の実力ならば勝てると思うので、お好きにどうぞ。殺すなよ？」
「はーはーうーえーにー、何近寄ってんだごらぁぁぁ！！」
「上等じゃ！！」
「かかってこいや！！」
「我らの実力を見せてやるわ！！」
「おい。そこの馬鹿弟子天狗共」
「「「はい！！」」」
「私の娘、泣かしたら……解るよね？」

ニッコリ。

幽香大先生、貴女のどSな笑顔は誰にも通用しますので、大変重宝致しますですぅ。

「「「「……は、はいィィ！！」」」」
「おーい、さっさと殺ろうぜー？変態共」
「「「貴様！！」」」
「…オイ？」
「「「解ってますから！！ね！？その神力しまってください師匠！？」」」

「よし。これで無問題」
「……鬼じゃな」
「二つ名は『鬼ごろし』だよ」
「…まあ八雲に付けられたのか？」
「いんや。鬼に付けられた」

そういう勇儀は何をしてるかなー？
……まぁ今度行ってみよっか。どうせまた喧嘩になるだろうけど。

「……まぁ、お主が常軌を逸しとるのはいつもの事じゃ…」
「何その非常識人みたいな物言い」
「え、違うのか？」
「……ハァ、はいはい。分かりましたよ非常識人ですよ私は…」
「それにしても、お主と娘御は仲が良いのぅ」

露骨に話変えやがったよコイツ。

…まぁ、ノッてやれ。

「…やっぱ、そう見えるよね」
「……むしろ近親そ…いやなんでもない」
「…いいよ、その話（ネタ）は。一昨日したしさ…」
「したのか！？」
「いや！？話としてね！？実際にした訳じゃないからね！？」
「……なんじゃ。詰まらん」

……コイツも修正が必要かな…？（怒）

「まぁそう怒るな」
「その話をしたのはアンタやろ」
「何故に方言。……いやな？仲良いのも考え物じゃぞ？」
「？」
「半人半妖。寿命は長く肉体は強靭かも知れぬが、半分は人間なんじゃぞ？老衰もあり得る」
「……」
「その時に、お主はどうするか。見送るか、更に血を与えるか…」
「……なるほどね」

半妖だとしても、老けてく訳だ。

「……ま、今はその時期ではないじゃろうし。お主が出すべき答えじゃ」
「…だね。でも、前もって知れて良かったよ」

……まぁ、初めて逢った時の彩目や、妹紅みたいな失敗はしないようにするよ。

「……ま、呑もうかの」
「…そだね。この勝負を酒の肴にしながら」
「……鬼め」

「フンッ！一昨日来やがれッ！！」
「…畜生！！」
「くそッ！！」
「…チッ！！」
「…ふむ、我等の敗けじゃな。お主等は里に戻れ。良いな？」
「「「……了解」」」

なかなかにボロボロな彩目に、互いに肩を貸しながら飛んでいく弟子天狗達。

「よーしよし、彩目よくやった次は花妖怪だ」
「いやッ、無理無理無理無理！？あんな妖怪は相手に出来ませんって！？」
「まぁ今度行くから、その時にねー？」
「アレも知り合いなのか！？」

彩目、アレって言ったら殺されるから。せめて風見さんか幽香と呼びなさい。

「…ま、まぁ分かったよ……」
「となると、すぐにここを出るのか？」
「いや、一ヶ月くらいはここを基点（ホーム）とするから、ここから移動する形になるかな」
「ほぅ」

……藤原氏とキャラ被るんだけど…。
被ってるんだけど？

主に口調が。特に口調が。というか口調が。

「まー、明日以降の予定は明日考えましょ」
「いや、それは何かおかしくないか？」
「儂もそう思うが…」
「今を楽しむべきなのさ。時は待たないからねー」
「……まぁ、考え方によればそうじゃが…」
「さぁ彩目！！布団は一つしかないよ！？」
「嬉しそうに見えるのは気のせいかなァ！？」
「天魔、ここからは女子だけの空間だよ。さっさと立ち退きたまえ」
「「いや、お前（お主）もだろ（じゃろ）」」

私はいいのさ～。

帰郷。その２　妖精の祭り

今日は彩目はお留守番ッ！！
いや、別にいいが…どうしたんだ急に？
んー、知り合いの妖精に逢ってくるー。
知り合いの…妖精…？
という訳で留守番頼むねー？まぁ別に何処かに行ってても良いんだけどね。
どっちだよ……まぁ、了解した。
行ってきまーす♪
ああ、行ってらっしゃい。

《ｓｉｄｅ　詩菜》

霧の湖。チルノと大妖精がいる場所だ。
最後に逢ったのはいつだっけな…？

「おーい！！チルノー！！」

虚しく声だけが、湖だから、反響しない。

今は晴れているけど、しばらくしたらまた曇って霧が出るだろうなぁ……。

参ったなぁ……ん？

「また弾幕かいッ！？っとぉ！！」

晴れてて良かったよ。気付くのが遅かったら、また直撃してた所だし。

発射した方向を確認。

ま、予想はついてるけどね。弾幕も似た感じの色彩や配置だったし。

「……。ハァ、ここは来る度に弾幕を撃つ習慣があるのかな？」

「…。…～♪」

「…ハハ、久し振り妖精ちゃん。私の事覚えててくれてる？」

「……！！」

「…ふふ、そんな怒らなくてもさ？」

いつぞやの妖精ちゃんだった。

どうやら妖精も記憶力が悪いとはいえ、大事な事は覚えてくれるの

かな？

「…チルノや大ちゃんは？」

「……。…？」

「また探さないといけないかな？」

「…、……♪」

「……またついてこい。って？」

また違う所を無駄にぐるぐる回るのはいやなんだけど……。

「ま、いっか。テキトーに歩こっか」

「♪」

それからしばらく歩いていると、

「ッッ！？」
「…！！」

足元から後ろの腰まで、凍らされた。

いや、

「……チルノ～？影から狙い撃ち、ってのは卑怯じゃないかな？」
「油断する方が悪い！」
「え、えと…チルノちゃん。それは……」

…まぁ、丈夫で私の妖力でカバーしてる着物だったから良かったものの……これが普通の服だったら、何処かの薬味みたいな事になってたじゃないか…。

「……ま、何はともあれ。久し振り～♪チルノ、大ちゃん♪」
「待ってたよ！ライバル！！」
「あ、お、お久しぶりですッ」

変わらないねぇ、二人とも。
まぁ妖精がそんな急に変わったら、それは環境の急激な変化が起きているという事で、それはそう、まさしく私が住んでいた現代の地球温暖化やオゾンホールや森林伐採による酸性雨とか、そういった事象にも関係ある話で、でもそういえばここは輝夜と志鳴徒との会談による、とある一つの予想によれば、ここは私の住んでいた世界の未来な訳で、とするとやっぱり第三次世界大戦とか核が世界中で爆発したとか神々と悪魔の大戦に巻き込まれたとか東京受胎したと

かノアで有名な大洪水が起きて全て流れたとかどこかの征服者が無理やり統治を初めて自滅したとか、まぁとにかく世界が滅亡したのかな？それで何千何万、いやいやもしかしたら何億年も経ってここまで地球は回復したのかな？そうしたらやはり人間は地球からすれば侵略者みたいな者で、となると自然に活きている妖怪や妖精がこう人間を管理すべきなのかな。あぁそういうゲームだったＡＺＥＬやりたいな。となるとここにいる妖精達は地球を救う救世主みたいな存在に、あれ？でも妖怪はどちらかと言うとＣＨＡＯＳなんだけど？あ、でも妖精はＮ－Ｎだっけ。ピクシーが一番有名じゃん。という訳でチルノや大ちゃんや妖精ちゃんは地球にとって大切な存在な訳で、でもまぁ結局は、

「私の持論なんだからどうでもいいんだけどね」
「アンタの言いたい事は分からなかったけど、最後のので台無しになったのは分かったわ」
「え、えぇ…と。つまり…？」
「戯言（ざれごと）ですので。まぁどうでもいい事です」
「は、はぁ……？」
「……。…？」
「妖精ちゃんも分からなかったかー」
「…アンタは分かってんの？」
「……どうだろ？」
「ええー……」

まぁそんなこんなで、お久し振りの挨拶は終了。

「…あれも、挨拶の内だったんですか……」
「なははは！！」

「そうそう。今日なんで逢いに来たかと言うとだね？」
「アタイと戦いに来たのね！！」
「いや、微妙に違う」
「……」

…黙ってしまった。
まぁ、チルノには関係あるんだけどね。

「でもって、チルノ？貴女って氷を自由に創れるかな？」
「へ？…うん、出来るよ？」
「じゃあ、ここに物凄い大きい氷って創れる？」
「ちょっと湖に水を取りに行かないと無理かな…」

ふぅん？能力で何もない所から創れないのかな？
……私も何かしら勢いがないと衝撃を創れないから、当たり前なのかな？

「じゃ。お願いしていいかな？」
「いいけど、何をするの？」
「……『札幌冬の氷祭り？』」
「…なにそれ？」
「まぁまぁいいから！最強なチルノちゃん、貴女の力を見せてよ！ねっ！？」
「見せてやる！！」

扱いやすッ！

そう言うなり、湖に向かって青くて透明な羽を動かして、湖上に飛んでいった。
……良いなぁ…。

「で、こんなので良いの？」
「……デカっ」

私の目の前には、高さ三メートルはあろうかという程の氷山が、出来ていた。

「アンタは何をしようとしてんの？」
「…まぁまぁ、とくとご覧あれ♪…そうだね、お題は『チルノ』にしよう」
「へ？アタイ？」
「『ガルダイン』！！」

氷山を取り込み、凄まじい速度で氷を削る。
ブリザードみたいだなぁ、融合技みたいな感じでやったら面白く出来そうじゃないかな？

後は、小出しに『ガル』で細かい所を削って……と！

「完成ッ！！どうよ！？」
「アタイだ！！」
「すごーい…大きなチルノちゃんの像だ～」
「…！！…！」

うん、我ながら良い出来だ。
ただまぁ、髪の毛がどうしてもフィギュアのようなベッタリした感じになるのがなぁ……。
まぁ、でも彫像で髪の毛を再現するのが無理なんだろうし……。

「まぁ、いっか」
「スゲー！さすがはアタイのライバルね！！」
「んじゃ次は…そこの妖精ちゃんと大ちゃんを一緒に作ろっか」
「ほ、ほんとにですか！？」
「…！！……♪」
「という訳で、チルノ。ヨロシクゥ♪」
「……またアタイが用意するのね…」
「いやぁ、私じゃ出来ないからさ～？それはその道のプロに頼まなきゃねぇ～？」
「待ってろ。今すぐ用意してやる！」

おぉおぉ、飛んでった。

「……扱いやすっ」
「…ええー！？」

大ちゃんが何か『今までの素晴らしい話は一体……』みたいな具体的な顔をしているけど、まぁどうでもいい事なんだよ。ウン。

「ゼェ、ハァ、つ…疲れた……」
「お疲れ～」
「だっ大丈夫チルノちゃん!?」
「へ、へへ。大丈夫だって……」

まぁ縦二メートル横三メートル幅二メートルの特大の氷を作るのはキツいだろうなぁ…。
……お願いしたの私だけど。

「さて、と……『マハガルーラ』!!」

範囲中級衝撃魔法『マハガルーラ』
…そろそろパクり技も止めようかな……？

まぁ何にせよ、大ちゃんと妖精ちゃんの氷像が完成した。
真ん中にでかいチルノ像を置いて、両側に二人の像を置けば、

「完成ッ!!」
「「おぉ～!!」」
「どうやら気に入ってくれたかな?」
「……!!」
「綺麗!だってさ」

いやはや、誠に嬉しい言葉だよ。

お、曇って来たからかな？また雪が降ってきたよ。
本当に『雪祭り』になった。

「…代わりに霧も出てきたけどね」
「詩菜…さん？」

……大ちゃんからの呼び名はそれなのね。ちょっと新鮮だよ。

「んじゃ。私は帰るよ」
「えっ、もう帰るの！？」
「霧が出たら私も迷っちゃうしね。また来るよ」
「ん～、分かった。次こそは勝ってみせるからね！！」
「あっ、また来て下さいね！」
「……！」
「アハハハ！んじゃーねー」

ま、その次がいつかは分かんないけど、これならあの三人は私の事を覚えててくれそうだな。
楽しみが増えた。善きかな善きかな。

《ｓｉｄｅ　彩目》

詩菜が出掛けていった。
知り合いの妖精達に逢いに行くんだとか。
……本当にアイツの交遊関係はどうなっているんだ？
花に害を与える者には容赦しない花妖怪とも知り合いなのだから、恐ろしいものだ。
何せあの花妖怪を討伐する為だけに隊が組まれる位で、そしてその百人を超える大軍を一人で蹴散らしたものだから、それは有名になって当然だ。

そんなの、能力を持っていても私に倒せる訳がないだろ……。
はぁ、憂鬱だ…。

「お邪魔するわよ詩菜～♪って彩目ちゃんだけかしら？」

その前に、このとんでもない妖力を持った大妖怪が先だ。

「ッッ…！？」

なんでこうアイツの知り合いは常識外な存在が多いんだ！？

「あらあら、そんなに警戒しなくても大丈夫よ？私は貴女に危害を与えるつもりもないわよ」

「……し、詩菜は妖精に、逢いに行った。ここには、居ない」

そしてその妖力で私を圧迫するのを止めてくれ。むしろ帰ってくれ。

「ふぅん？妖精に逢いに行ったねぇ。彼女らしいわね……はぁ」

「……？」

私はこの時、溜め息をついて悩ましげに眉を潜めた大妖怪に、ちょっとした共感を覚えた。
いや、それは天魔殿の時も感じた事だったのだが、
この二人とも、詩菜に振り回されたりしたのではないか？と。

「…まぁ、待ってたら来るわよね」

「……それまで、待つ。と？」
「ええ♪」
……なんてこった。
ああ…威圧感が……本人は出してないつもりかも知れないが…身体に重くのし掛かっていく……。
「貴女から見て、詩菜はどういった人柄かしら？」
「えっ……？」
唐突に問い掛けられた質問だった。
何せ私はずっとこの妖怪と机を挟み、無駄に謎を含んだ笑みを向けられて、困惑していた所だったのだから。
「…どんな人柄、ですか…？」
「そう♪妖怪だからこの場合は妖怪柄かしら」
知るか。
等とは口が裂けても言えないが…。
ふむ、アイツの人柄……か…。

「…お節介、ですかね…？」
「あら、どうしてかしら？」
「……誰彼構わず、救える奴なら救う奴。だからですかね…？」

『詩菜』『志鳴徒』は救えるならば救う。という奴ではない。
むしろ気に入った者しか救わないといった性格だ。

つまり、私は嘘を話した。
しかし、最近の私がアイツから受けた印象『お人好し』には、ピッタリと合致している。

アイツの弟子にしたってそうだ。
妖怪と人間が愛し合う話はよくある。
よくある話だが、オチはいつだって同じだ。
『妖怪』は生き残り『人間』は死んで消えていく。
妹紅とか名は言うそうだが、それを拒絶しておいてまだ近くに居ようとする。そこが志鳴徒の甘い所で『優しすぎる』所なのだ。

「…なるほど。御節介ね」

その言葉で急に世界に戻る。戻ってきたような気がする。
どうやら質問に答えを返し、その返した答えを自分で解釈している内に、私は自分の世界に没頭してしまったようだ。
……いかんな。実戦であれば即座に首や胴体がちょん斬らていれた所だ…この癖は治さねば。

「…そういう貴女は…どうなんですか？」

気が付けば、こういう返答を返していた。

喧嘩を売ったようなものだ。

我ながら、何をしているのやら…。

「うーん…私は……『理解不能』かしら？」

「…はい？」

「これは私が詩菜から受ける第一印象になっちゃうけど、どうもおかしいのよね。人間を助けて神と仲良くなって妖怪を討伐して、能力が無かったらいつ死んでてもおかしくなかったのに。これも能力がピタリと型に入ったからかしらね？貴女もそうよねぇ。眷族になると『嫌ってはいけない』『好いてしまう』という強制力が働くそうだけど、貴女達は仲良くなりすぎて家族以上の関係性になりそうよね。その辺りも私には到底、理解出来そうにないわ」

次々と放たれる言葉。

私が知っている詩菜にも結び付くような点が大量にあった。

予想外にこの妖怪は饒舌だったようだ。

だが、最後の部分。

それは……、

「眷族の心情。理解出来ないなら紫も作ってみたらわかるんじゃない？」

「あら、詩菜ちゃん。おかえりなさい」

「……ここは私の家なんだけど？」

「お邪魔してるわよ♪」

「「……」」

二人揃って沈黙。

なんだこの妖怪は。

帰郷。その3

《ｓｉｄｅ　詩菜》

「……で、なにか用なの？」
「里帰りしたのでしょ？じゃあ逢わなきゃ駄目じゃない♪」
「…はぁ…？」
なんのこっちゃ……？

とにもかくにも、紫と私、彩目と三人揃っている。
三人揃えば姦しい。とは言うけども、いくら私でも大妖怪を相手にはおふざけを自重するさ。

……場合によれば。

「ま、今日はもう遅いし。ご飯を頂いていけ～」
「あら？貴女が用意するの？」

「ん～まぁね。彩目～、手伝い頼みまーす」
「ん、分かった」

とは言え、この家は大木の内側を切り抜いただけの構造。台所もなければシンクもない。
まぁ近くに小川もあるし、元々が森林なんだし、果実や動物・妖怪なんてフツーに採れる。

…採れるって言ったらおかしいけど、まぁそれなりに実力がある筈の私達だ。飯の為の猟なら鬼にでもなるさ。

彩目は野菜・果実などを採りに。
私は肉を採りに。それぞれ出掛けた。

が、

「…別についてこなくても良かったんじゃない？」
「だって暇じゃない？」

……この寂しがり屋め…。

という訳（？）で、私の後ろから紫がついてきている。
スキマに肘をつき、優雅にのんびりと、こちらを楽し気に、眺めている。

「おしとやか、って感じじゃないんだけどさ……何か、底知れない優雅さがあるよね。紫は」
「あら。そう見えるかしら？」
「見える見える。寧ろ見せてるように見える」
「……それは…」
「誉め言葉だよ？多分」
「……貴女も、底知れないわよね」
「んー？底知れないって言われても。何が？」
「例えば人間臭い所。例えば妖力としては中堅なのに最強とも言われる鬼を圧倒出来る所。例えば家族を大切にする所。例えば行動に理由を伴わない所」
「……それらは…」
「誉め言葉よ？ちゃんとした、ね♪」

何か納得出来ないような気がする……。

ま、どうでもいいかな。

「私が帰ってくる前に彩目と話していたようだけど、眷族について

どう話していたの？」

帰ってきた時に聞こえてきた話は、ちょいと私の怒りに火を着けるような内容に聞こえたんだけど？

「他愛もない事よ。…まぁ、私も自分の手足となる式神は前々から欲しかったのよね……」

「私は断るからね。いつも言ってるけど」

「残念だわ」

「どうだか……」

さて、こんな無駄話（じゃないかも知れないけど）していても仕方がないし！

猟の時間と洒落込みますか！！

紫を無視して地面に伏せ耳を地につける。

能力発動。『地面に響くスタッピング（足音）』を拾う。

紫は足をつけてないから捜査の邪魔にはならないとして、

一体で居るのは…1、2…3、4、5、……6、7…8、9……10。

十番目に近い奴だね。

なら、さっさと片付けましょ～うね♪

大型肉食妖怪。
絶滅したと思われていた恐竜がいま目の前に！！

……んな馬鹿な。
ありえないありえない。
気のせい気のせい。幻想だって。

「ギィヤヤヤャャァァ！！！」

叫び声。

……いやいや。あり（ｒｙ

「そろそろ現実逃避から戻ってきなさい」
「……ハイ」

認めよう。この世界では私の習った日本史が通用しないという事を……。

「なんでこうなったかなぁ……」

「油断してる場合なのかしら？」

なんやかんやで手伝ってくれる紫も、私の事は言えないと思う。

爪を掻い潜り、巨大な腕や脚を振り回す暴風をかわし、強力な牙・頭突きを回避する。

私がいくら鎌鼬の爪で切り刻もうとしても、直ぐ様回復して肉が盛り上がってくる。紫も弾幕を叩き込んでいるが、致命的なダメージは与えられていないようだ。

「…参ったねェ、ッと！！」

「何よコイツ！ウザいわねっ！」

「……何て言うか、紫でも苦戦するんだね」

「大妖怪でも、相手によればよッ！」

「うわ、意地っ張りだねぇハハ」

一番細そうな手首を切断してもすぐに生えてきやがる。

同じく『ガルダイン』で肉を細切れにしても、集まってきて再生してるし…。

「……こんな不死の妖怪なんていたっけ？」

「さぁ！？」

おっと、何気に紫さんが奮闘してるし。
お客様に申し訳がないなぁ…。

……よし。
外傷が駄目なら、内側から爆散させてみよう。

大きさは片手握り拳よりちょい少なめ。能力発動、圧縮、封印。タイマー設定十秒後。

「紫ッ！離れて！！」
「ッッ！！」

顔に近付いた私を喰おうとして口を開く。その時を待っていたッ！！

ほ～ら、恐竜ちゃ～ん？ご飯でちゅよ～？

「ほれ、飲め！！」

右手の親指を使って某超電磁砲のように弾き撃つ。
口に突撃した空間の塊は、喉元の分厚い肉の壁に弾かれて刺さったりはしなかったものの、どうやら飲み込んでくれたようだ。

そして素早く距離をとる。爆発に巻き込まれない程度に。近付くには丁度良い程度に。
紫はスキマに潜ったのか、何処にも見当たらない。
まぁ、あの紫のスキマなら圧縮空間の戻る反動位なら無効化出来る……かな？無理かな？
でも、まぁ。紫の実力なら耐えれるだろうし、気にしない気にしな

い！！

「ギギィィヤ　　」

鳴き音や頭部が、文字通り消えた。
爆発で恐竜らしき妖怪は、自分の胸元から上がない。
巨大な腕も、肩から既に先がもがれている。

「……終わったの？」

おや。スキマに潜り込んでたと思ってたら、上空に退避してたのね。

「喰える部分がちょいと弾け飛んだけどね」

あ～あ。いくら身を守る為とは言え……勿体無いなぁ…。

「はぁ…ま、仕方無いか。……運べる？スキマで」
「……貴女もしかして、それを狙っていた訳？」
「何の事かな～？」

私が持って運ぶよりは断然効率が良いじゃん？
スキマに入れるだけで保管も移動も出来るんでしょ？最高じゃない！！

「…まぁ断る理由もないわね」
「でしょ？」

さぁ切り分けて詰め込み作業だ！

っていう時に、雨が降り始めた。
チルノと別れた時は昼過ぎだったから、冬の夕立かな？んな訳ないか。

どちらにしろ、さっさと帰ろう。
妖怪が風邪をひくか分からないけど、体調を崩すのも嫌だし。

「ただいま～。彩目は大丈夫だった？雨」
「私はなんとかな。詩菜は？」
「ん。スキマで移動したからへーき。肉は紫が保管してるよ。紫、食べる分だけ出してくれる？」

「…どれくらいなの？」
「……これだから自炊した事のない人は…」
「なによ。悪いっていうの？」
「別に～？んじゃスキマ、開けてくれる？私が中から出すから」
「はいはい」

うにょーん、と。

……まぁ、そんなにでかくなくてもいいよね。
少食一人に、食べるのが嫌一人に、出されたら出された分だけ食べるが一人だものね～。

「…よいしょ、っと」
「……貴女って、意外に腕力がないのね」
「能力頼りだからね。勇儀と戦った時だってそうだったよ？接した状態での押し合いだったら、あっさり負けるよ？私」

そう言うと予想通り、いい顔はしない八雲さん。
友人同士の本気の争い事が、余程気に食わないようで。

「彩目とかと刃物の斬り合いで、鍔迫り合いが起きた瞬間なら弾けるけどね」
「…ああ。その時ならぶつかる瞬間の『衝撃』があるからか」
「そうそう。しょーゆ事」
「古い」「酷いわ」
「いや…二人して突っ込み、いやなんでもないです。すみません」

気を取り直して、

「ほい出来たよ」

「……これを、貴女が？」

「なによ。出来ちゃ悪いっての？」

というか、肉を火で焼いて野菜を多少彩り良く切って盛り付けて後はご飯っていう料理の、何処が驚くところ？

「……（真面目にやってみようかしら…？）」

「……紫が私の事をどう見てたかはよーく分かったよ」

なめてんじゃねぇぞコノヤロー。

「ま、まぁそれよりも食べよう！な？」

「…ま、そうだね」

「「いただきます」」

…うーん。まだまだ…かな？

料理の腕前はそんなに上手くなる訳がないし、始めたのはつい最近だし。

気長に練習するとしましょうかね。

「……ねぇ詩菜？私に料理…教えて「だが断る！！」……理由

を訊いても？」

私は紫の肩に手をかけて、真理を教えてあげた。

「紫はね…紫がそうなると、紫の需要がなくなるからだよ……」

「じゅ、需要って何よ！？」

「具体的には、とある妖怪が吐血する…かな？」

「血を吐くの！？」

んー……？

あの妖怪は…頑張って紫が料理をしているのを見たら……鼻血を出して幸せに昇天するかな？

うん、有り得るかも？

帰郷。その４　花と喧嘩

《ｓｉｄｅ　詩菜》

結局、飯を食っておやすみーで別れた八雲だけど……何がしたかったのかねぇ？
寂しがり屋みたいな感じだけど、無駄な事はしない質（たち）だと思うんだけど……？

まぁ凡人みたいな頭の私が天才八雲の企みなんぞ見抜ける訳が無いだろうし、ゆったり流されてみますかね。
…でもま、私や彩目、もしくは大事な奴に本気で危害を与える。っていうんなら、殺り合うけどね？

「さて、出掛けようか？彩目」
「……またいきなりだな…何処へだ？」
私の一ヶ月の休暇も、およそ三分の一が過ぎ去ってしまった。
…まぁ既に知り合いには大方挨拶は終えたんだけどね。
「幽香の所」
「勘弁してくださいお願いします」
……そんなにいや？
しょーじきに言って、友人が恐れられているって家族に言われた気分だよ。
それって、かなりムカッって来るんだけどね？
「…分かったから。私から戦わせようなんてしないから。ね？」
「……本当だな？」
……。
…うん。ちょっと深呼吸させてね？怒りを抑える為に。
……ハアァー……。
「……怖れられてるのは分かったから、少なくとも言動に表すの、止めてくれない？」

あれ？怒りを抑えた筈なのにな。

「うっ！？分かった！悪かったからその殺気を向けないでくれ！！」

あらら。殺気まで出てるの？
いかんいかん。

はい、しんこきゅー。

「…スゥー…ハァー……」

落ち着いたかな私？

「大丈夫に見える？私」

「……いや、笑顔が顔に張り付いて見えて…正直、怖い」

……。

ふぅ……娘にまで恐れられるのは勘弁だね。

「……ちょっと待ってて」
「？」
部屋に彩目を残し、外に出る。雪が朝から降り始めてつもりだしている。

んん～……自分を疑うっていうのは、素晴らしい事だよね。
もしかしたら、自分でも無意識にやっていた事とか、意味なくやっていた筈の事が急に凄い意味のある事だったりとか。
それでなくとも、新たな発見は確実にあるだろうね～。

閑話休題。

今の私。おかしくなってない？
なんでこんな怒りっぽくなってるの？
あれか？月の日か？１１７歳まで生きて初めてだよんな訳あるかボケェ。
他は？狂ったか？

そうだったらもうちょっと笑えても良いんだけどねぇ？
……でも、あながち間違ってないような気もしてきたなぁ。
でもキャハ♪ってテンションじゃないなぁ……。

ああ、分かった。ウズウズして堪らないんだ。
そんなに幽香に逢うのが久し振りな訳じゃないんだけど、こう、何て言うか……興奮が止まらない、かな？
殺り合いたい。今すぐにでも、紫でも幽香でも天魔でも。とりあえず全身全霊を尽くして、バトってみたい。

ああぁぁぁ～……自覚したら余計戦いたくなってきたなぁ～……。

「……おい、大丈夫か…？」

そんな事を考えている内に、彩目が家から出てきた。

「…ははは、大丈夫じゃないね…」

今にも暴れたくて仕方無いもん。
死力を尽くして戦いたいもの。

「……ふぅ、とりあえず行こうか。幽香の家に」
「お、おい！本当に大丈夫なのか！？」
「…まぁ落ち着ければ大丈夫だよ」
「……『落ち着ければ大丈夫』？」

あ～、殴りたい。とりあえず何かを殴りたい。彩目は駄目だとして、
興味ない弱い奴か殴り合える程の実力者が欲しい。
ま、だから幽香の家に行こうとしてるんだろうけどね。

「行こう、彩目」
「…だ、だが…」
「行こう」
「……分かった」
「行くか」
「行こう」

『太陽の畑』に到着。
冬だからか向日葵は咲いていないし、地表にはうっすら雪が積もってる。
ついでにさっきからびくびくしてる彩目がちょいとウザい。
「幽香～？」
「……あら、詩菜じゃない」

幽香の家の玄関を押し、ノックもせずに開いて挨拶する。
それを幽香は特に慌てもせずに、普通に挨拶をする。クール過ぎる。

「お久し振り、って訳でもないかな？」
「そうね。最後に逢ってから一年経ってないもの。…そちらが例の？」
「あぁうん。彩目だよ」
「…はっ、初めまして…！」
「あら、そんなに緊張しなくても平気よ？弱いのを虐める気はないわ」
「……Sだねぇ」
「フフ」

そして『弱いの』と言われたにも関わらず、反抗や文句を言わない辺り、自分でも弱いと思ってるのか。戦えば負けると確信してるからか。単に性格か。
まぁ最後のは無いと思うけどねぇ？多分。

「さて、幽香。いきなりだけど勝負してくれないかな？」
「あら。その子と？」

喋りだして意味のある文章になった瞬間に、彩目の顔から血の気がサアッと引いていくのが見えた。

…勝負させないって言ったでしょうが……。

「いやいや、私と」

「「え？」」
「どーもさー？ここの所、溜まっててさー？」
いっちょ、爆発させてみたくてさ？
周りなんて気にしないで。純粋な殺し合いでさ。
「……ふふふ。見事な殺気ね」
「ありゃ、また出てる？殺りたくて殺りたくて仕方無いんだよね～♪」
「良いわよ。外に出ましょう」
「…はっ！しっ、詩菜！？」
「彩目、邪魔しないでよ？死にたくなければ」
「ッッ！？」
ん～、もう止まらない♪
ふふふふふ、テンションフルＭＡＸ～♪
「…それにしても、どうしていきなり私と戦いたいのかしら？」
「……私はさ？今まで何回も幽香と戦ってきたよね」
「？…そうね。それが何？」
「でもね、幽香はまだ知らないんだよ？私がブチキレたらどうなるか」
「……何が言いたいのよ？」
「狂気に染まった妖怪。彩目という存在の発端。鬼と紫との喧嘩の原因」
「殺さないでね？そして、死なないでね？無いと思うけど。ハハ」

《side 幽香》

笑った。彼女はそう言って、とても愉し気に笑ったわ。
今は冬で、もし花がこの辺りに咲いていたとしたら、初めの詩菜の
衝撃で全てが千切れ飛んでいたわね。
それほど、戦いは激しかった。

「殺さないでね？そして、死なないでね？無いと思うけど。ハハ」
「ッ！？」

喋り終えた途端に私に向けられた物凄い殺気。
今までかなりの相手とも戦った事のある私だったけど、
これほどの濃い殺気を笑顔で相手に向けてくる相手は初めてだった。

「ハハハハハハ！！」

紫と私が詩菜の家に行った時、紫を抱えた詩菜に私は追い付く事が
出来なかった。
それは今のこの状況でも、彼女に私が追い付けない。という事を示
していた。

彼女がありえない初動の速さで接近し、即座に反応した肉体を、後
退をしながらもガードをする。
それでも『衝撃』を殺せず、とんでもない程の重さの拳が両腕に当
たる。

「クッ…！」

動きは見える。反応も出来る。

けれど、いくらなんでも素早過ぎるのよ！！

傘を振るい牽制する。更に弾幕を放つ。
打撃も威力が高ければ貫通する。傘は妖力を重ね、素早く降り下ろせば切れ味が増す。
打撃・衝撃において私は詩菜には勝てない。全てを操ってしまうから。
能力も使う。暢気に応対すれば、私はこの中級妖怪に負けてしまう。

けれど、それは私のプライドが許さないッ！！

「喰らいなさいッ！！」

地面から蔓を伸ばし、弾幕を放つ砲台にする。威力は低くなるけど、潰されてもすぐに復活させる事が出来るし、視界を防ぐ程の弾幕をはる事も出来る。直接ムチに使う事も出来る。
接近戦は彼女の得意分野で私の得意分野でもある。弾幕は完全に私が上だ。

それでも詩菜は弾幕を潜り抜けてくる！！

「グゥッ！？」
「ハハハハハハ！！」

またすり抜けてきた。
詩菜が取っている戦法は完全な『ヒット・アンド・アウェイ』
かなりの速度と体術で私を撹乱してくる。不可避な量の壁・弾幕を叩き込んでも、一瞬で範囲の外に逃げていく。

なら……、

「喰らいなさいッ！」

私の弾幕で『道』を作ればいい！

「……ありゃま、刺されちまった」

彼女が私の弾幕を全てを見切って突っ込んで来るのならば、その先まで誘導して攻撃すればいい。
示した通りに突撃してきた彼女の左足の脛に、傘を突き刺した。

「まだ、やる気？」
「当然♪」
「ッッ！？」

詩菜の足から飛び散る血が、地面に染みをつくっていく。

この子…ッ！自分の爪で左足を引き千切った！？

「こうすりゃ自由になれる。痛いけどね」
「…貴女…！？」
「まだ終わっちゃいねェぜ？」

片足立ちで、打撃、衝撃を叩き込んできた。
詩菜の回避や速度で私を眩ます事は出来なくても、彼女の物理はそれだけで脅威…！！
弾幕用の花を咲かせようとしても、すぐさま刃を飛ばされ斬られてしまう。

……あら、『ヒット・アンド・アウェイ』はやめたのかしら？
すぐに下がらず、片足で攻撃を続けるの？

肉弾戦？…面白いじゃないッ！！

既に私も彼女も服はぼろぼろ、満身創痍だ。
脚を使わず、立ったまま双方が肉体での戦いを続けている。
草の蔓でクッションを作れば彼女の『衝撃』の威力は低くなった。
初めからこうすれば良かったのよ。

血だらけで、それでもまだ笑いながら私に向かってくる女の子。詩菜。
そうね……初めて逢った時よりも、格段に実力は上がっている。
それも私に追い付けるかも知れない程に。

けれど、まだまだ。

ダスッ！

「…『Ｃｈｅｃｋ（チェック）　Ｍａｔｅ（メイト）』よ」
「……みたいだね」

傘は彼女の右肩を貫き、私の右手は首に手刀を突き付け、彼女の左腕は蔦で固定した。
彼女の右手は、傘で鎖骨を貫いたせいでブラリと力なく垂れ下がっている。

私も五体満足という訳でもない。
髪の毛は幾度となく斬られ、私も肋骨が何本か折られている。骨が肺に刺さっているのか、口からは血が止まらない。

「……満足かしら？」
「そうだねぇ…紫よりは長く戦えたし、満足だよ」
「…そう……結局、貴女は何がしたかったの？」
「……さぁ？イライラを誰かにぶつけたかったんじゃないかな？」
「…迷惑な八つ当たりね」
「ハハハ♪」

肩から傘を引き抜き、辺りを見渡す。
私達を中心に、雪どころか土すら吹き飛ばされている。
詩菜のツレとかは……案外助けに入るかとも思ったのだけれど…
きっちり言われた通りに私の家の前で此方を見ていた。

「…因みに、今の瞬間に私が襲うとは思わなかったの？」
「殺気どころか妖力や神力すら感じない、何も残っていない貴女に、
何が出来るのかしら？」
「バレてたか」
「私をなめすぎよ」

……とは言え、
私も彼女をなめてたわね。これほど負傷したのも、紫と殺り合って
以来だわ。

「……ふぅ。やっぱお姉ちゃん達には勝てないかぁ…」
「生きてきた年数が違うわよ」
「ハハハ…なるほど。彩目～！」

はぁ……疲れたわ。ゆっくり休みましょう。

「……さて、勝ったのは私よね？」

しばらく、負傷した私のお世話でもやってもらおうかしら？

「え！？」

敗者は勝者の言う事を聞く。当たり前じゃない？

「ッ…この……どSめ…！！」

「ありがとう、最高の誉め言葉ね」

「オニ！！」

帰郷。その5　人神妖の祝杯（前書き）

わーい、気付いたら厨二タイトル。

帰郷。その５　人神妖の祝杯

結局、私は幽香の家に一週間の間、メイドか家政婦紛いの事をやらされた。
くそぅ……でもなんやかんやで楽しんでた自分がいた…ちくせぅ。

《ｓｉｄｅ　詩菜》

「ッつっは～！ようやく我が家に帰ってこれたよ……」
「……ハハ」

彩目が苦笑いしている。
…良いよね、彩目は幽香の家に泊まりに行っただけ何だし…。

彩目も幽香との戦闘が終わった時、色々と大変だった。

あの時、私の中のイライラや破壊衝動みたいなのは既になくなっていた。
戦闘で満足したし、身体中の応急措置を先にするべきな程に、私と幽香はぼろぼろだったからね。

それでも自分が私を苛つかせて、こんな大掛かりな事になった。というのは彩目でも解ってたみたいで、

「…すまんッ……！」

私達が幽香の家に着いて、つまり、彩目の目の前に着いた時に、いきなり謝ってきた。

……謝られても、ねぇ…？困るっての。

「…彩目が今回の事で謝ろうとしているのはどんな事なの？」
「えっ…それは……『ヒトの友人を侮辱した事』…？」
「残念ハズレ。私が怒ったのは『そいつの事を理解しようともせずに一方的に決め付けたから』だ」

まぁ……他人から見たヒト、なんてモノはヒトそれぞれなんだし。それが合っているか間違っているかなんて事も、当の本人すら決めるべき事じゃない。と私が考えているだけなんだけどね。

まぁ後は私と彩目の持論での口論みたいなのになったんだけど、言い負かして私の論が正論として通ったから割愛させて貰う。つーか覚えてないでゴワス。
言い負かしたのだが、そこに負の感情という物はない。彩目には理

解して貰ったのだから。双方が気持ち良く、ね。

私の休暇は残り半月。
さてさて……暇になってしまったかな？

ん。おぉ、そうだ。

「神奈子と諏訪子の所に行ってみよう」
「また唐突だな……訊いても無駄だと思うが、理由はなんだ？」
「なんとなく。強いて言うならば、ない」
「……それを強いてとは言わないと思うが？」
「んなこたぁどうでもいいんだよ。えーっと…あれだよ。『人を助けるのに、理由がいるのかい？』みたいな事なんだからさ」
「おお、かっこいい格言だな」
「因みに私の中の定義では『人間は人。人の形をした人間以外の生命体はヒト』だから、この言葉に妖怪は当てはまらないと思うんだ」
「格言を自分でぶっ壊した！？」

ジタンかっこよかったよねぇ。
……？自体、ファンは少ない方らしいけど。

「ま、行きましょうか」
「…やっぱり行くのか」
「……イヤ？」
「…そういう訳でもないんだが……その、私らが出逢った場所だろう？」
「……まぁ、あまり思い出したくはないねぇ」

私にとっては黒歴史だし、彩目にとっては（自分で言いたくもないけど）貞操の危機が起きた場所なんだし。
一人ならまだしも、二人で行きたくは…ないわな。

「ま、迂回して行こうか？」
「…そうだな。わざわざ彼処に近付く必要もない」
「そんな事を言ったら、守矢の神社に行く必要性もなくなるよ」
「揚げ足を取るなよ……」
「れっつらごー」
「……はぁ」

「私は妖怪になったんだって、つくづく思い知らされたよ」
「……ごめん」
「いや、それはもう良いんだ。良いんだが……」
顔のすぐ横を御札がすり抜けていく。
星の形をした弾幕が何重にも重なり、私と彩目に向かって飛んでくる。

つまり、
守矢の巫女やら風祝やらに、襲われた。

「襲われたって言うよりは、防衛されられてる。って感じかな？」
「私らは一切手を出していないしな」
「余裕で避けてどんどん突っ込む」
「了解」

まぁスピード狂の私と、そんな私に追い付く為の技術を持った彩目に、そうそう簡単に当たってたまるかっての。
てゆーか、迂闊に衝撃波を出して相手の受け身が不充分だったら、肋骨ぐらい簡単に逝くから私は弾幕を撃たないだけで、別に彩目は転倒するぐらいの威力の弾幕なら、撃っても平気だと思うんだけどねぇ。

まぁ、半人半妖元人間。
同じ人間を殺したくない。って感じなのかね。
私はなんかそういうのは何処かで焼ききれちゃったからなぁ。別に殺害で罪悪を感じないし。
彩目にはこのまま純粋無垢なままで…ってのは無理だろうけど。

まっ、なるようになるでしょ！

「…囲まれたけど、神社近くまで来れたね」
「……なぁ？わざわざ押し入る必要はあったのか？」
「ない」
「……だよなぁ…どう考えてもそうだよな……クソッ、なんでさっさと気付かなかった…」

「…地味に私の事、責めてるよね？」

彩目と背中を合わせ全方向に注意を向けつつ、弾幕を避けまくる。
呼吸を合わせ、動きを合わせる。背中から伝わる動きで同じ方向同じ速度同じタイミングで弾幕を回避する。

「以心伝心、一心同体」
「念話があるからな。ッと、いつまで続くんだ？これは」
「神奈子か諏訪子に話が通ればなんとかなる…かな？既にかなり近くまで来てるけど」
「もう鳥居の前だが？」
「…私に訊かないでよ」
「お前しか訊く相手がいないからな」

はぁ……。

あぁ、テンションが勇儀と戦った時みたいに狂ったように高かったらなぁ……。
……いや、そしたら皆殺しになるか。

『……で、どうするんだ？この状況？』
『…参ったなぁ。神奈子も諏訪子も見えないし……』

これほど暴れてるのに来ないって事は、他に何か大事な事が起きたか、お神酒でも呑みながら私達を観戦しているか、どっちかかなぁ…？

後者だったら……とりあえずブッ飛ばす。

『……しょうがない。中へ強行突破するよ』
『…はぁ、了解』
『最高速で行くから』

掴まらないと、落っこちまうぜ？

彩目を抱える形で、鳥居を通り抜け本殿へ向かう。
いわゆる『お姫様抱っこ』みたいな形で、はみ出た頭や足が危険だが…まぁしょうがないよね。

神社の構造は何年か住んでいたから覚えているし、迷わず一番近い神奈子の部屋に突入。

「…誰も居ないな」
「なんでさ！？」
「知るか」

くそぅ、気配を掴もうにも神力が満遍なく拡がってるから、位置が特定出来ない！

「……追い付いて来たぞ！」
「えぇい！次、諏訪子の部屋！！」

襖を蹴り飛ばし、後ろから飛んでくる弾幕を彩目の指示で避けて進む。

……考えるのもめんどくさくなってきた。
これなんて作業ゲー？

「どりゃあッ！！」

襖をぶっ壊し、

「うぇいっ！？妖怪！？」

叫ぶ風祝の隣をギリギリ突き進み、

「…あ～あ」

彩目は隣で呆れ果て、

「おや？詩菜じゃないか？…って奇襲してきた妖怪って……詩菜の事？」

……か～な～こ～？

「これだけ大暴れしたのに、その反応はないんじゃないかなぁ？」

「あ～…怒るのはそっちなのか？」
「理不尽過ぎやしないかい！？」
「八坂様！！下がって下さい！危険です！！」
「あ〝ん？さっきから民も巫女も風祝も攻撃してないんだけど？そっちが勝手に調子の良い解釈して妖怪を殺そうとしてるだけでしょ？」
「……まぁ妖力を出しながら突っ込んだからな」
「ダメじゃん！？」
「言い訳かコノヤロー！！」
「「言い訳してるのはそっちだ！！」」

ＮｏｗＬｏａｄｉｎｇ……。
詩菜が落ち着き、神奈子が事情を風祝に説明するまで、少々お待ちください……。

「……ふぅ」

落ち着こう。落ち着け。落ち着いた？落ち着けた。

「…それで結局、詩菜と彩目は何のようで来たんだい？」

場所は変わって神奈子の部屋。

諏訪子もいるし、敵意バリバリの巫女さんもいる。

良いねぇ、最悪の環境だよ。

「ちょいと観光に」

「「……はぁ？」」

「…誰も理解出来ないだろ、それは」

「訂正、彩目と仲直りしました。っていう報告」

「……まぁ、間違っては…ないか？」

「…あ～…私達はどう反応すれば良いんだい？」

「……祝福？」

「いや、私たちに訊かれても」

じゃあどうすれば良いと言うのだ！！

「逆ギレかよ…落ち着いたんじゃないのか」

「でした」

「……いつにもましておかしいなお前？」

「うん、自分でもそう思う」

「思ってるのかい…」

何故私はこんなにはしゃいじゃっているのか。

恐らく、自身の実力か何かが上がって、諏訪子神奈子の実力が実感

出来るようになったから。だと思っている。
実感した結果、神奈子と初めて逢って戦った時によく消し炭にならなかったと思う位だ。

「ん～、神力を手に入れたとしても…やっぱ本職の神様には敵わないか」
「？…いきなり何の話だい？」
「いやぁ、神奈子と戦った時によく死ななかったなぁ。って」
「ああ。そりゃ神奈子が手を抜いたからに決まってるじゃん」
「……だよねぇ…」

……どちらにせよ、なめられていた事に変わりはないようだよ。

「さて！そろそろ帰ろうか？」

完全に太陽は隠れ、半月が沈もうとしている。
つまりは真夜中ではないにせよ、既に真っ暗な状態。という事で。

ちなみに、神奈子と一戦して貰った。
当時とは比べ物にならない程のオンバシラが降ってきた事は言わずもがなである。無論負けた。神力を使えたから軽減出来たものの、妖力でガードしていたら粉微塵になっていたよ？責めるアレはないけどさ。
他には再会と仲直りを祝福してもらい、酔わない程に祝杯もしてもらった。冗談だったんだけどなー…。

閑話休題。

「そっか。まぁまた立ち寄ってってね」
「りょーかーい♪」

おっと。聞き忘れてた事があったよ。

「最近は私、人間として人を助けているからさ?神力が集まる訳ないと思うんだ」
「…へぇ。それで?」
「妖怪を助ける時は当然妖怪として助けるから、これも神力が集まる筈がないと思うんだよね」
「…だから、なんだ?」
「だけど最近、やけに神力が溜まってくる」

これについて、どう思うかな?

これはちょっとした質問だ。
実際、京に住み始めて数年が経ってから気付いた事だ。
妖怪『詩菜』も陰陽師『志鳴徒』の二つの姿を使って活動していたけど、どちらも神様ではない。
なのに神力は少量だけども集まって来ている。
私は京に来てからは、神様の地位を使った事は何もしていない。
それ以前ならば、初対面、なおかつ再度逢う予定なんて無い相手、等には神様と名乗る事は逢った。

なのにその名乗りを止めても、神力の供給が継続されている。

「どういう事なんですかね？」
「……何処かで信仰がまだ生きてるんじゃないか？」
「人の伝承っていうのは案外バカにならないよ？」
「ふーん……」

……この二柱が裏からやってるかと思ったけど、違うか。

「そっか」
「…ん？何、私たちがやったと思ってるの？」
「ええ、多少は疑惑に思っていました」
「『思って』か。今の問答で違うって確信したのかい？」
「確信、ではありませんが。嘘をついているようには見えませんでしたので」

ま、そんな嘘を簡単に見抜く心眼なんて私にあるとは思えないけどね。
ようは『勘』だって。

「…んじゃ、帰ろっか彩目」
「……毎度の事ながら、急に豹変するな？お前」
「ふぇ？」
「…そ、それも演技…かい……？」

ふっふっふっ♪

「ん、じゃあ、まったねぇ～♪神奈子に諏訪子やーい！！」
「……あ、ああ！また寄りな！」

「……逢う度に」
「……私たちを振り回すねぇ…詩菜は」
「…はは、はっはっは」
「ハハハハハハ」

「「…笑えない」」

帰ってきたなう

……憂鬱だ。

気分は……そう…夏休みが終わって答え丸写しの課題を担任に提出しようと思って学校に向かっていたら、課題を全て家に忘れていた事を思い出して、しかも今から取りに行ったら確実に学校に遅刻なのだが期限を守らなかったら零点の課題があるし、電話やメールをしようにも携帯はないし財布もなくて公衆電話もない時の半端無いアレだ。

要するに、休暇が終わって京に帰らなければいけない。

それは、いい。別にいいのだ。

問題は、

「…お前の弟子。妹紅、か」

「……それなんだよ」

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

休暇が終わる最終日。
向こうの家にも此方の家にも持ち物は特に無いので、実質俺には何も荷物がない。
だから、最終日でものんびりしたって良いのだ。そう、良いのだ。

「良くないだろ」
「……行きたくねぇ」

逢いたくない。特に妹紅に。というか妹紅に。妹紅だけに。

「お前がまいた種だろ…後片付けはお前にしか出来ないだろ？」

確かに俺がまいた種かも知れないけどさぁ？
恋してきたのは向こうだろ…そこまで俺の責任なのか？

「お前の責任だ」
「……言い切りやがった…」
「惚れられたのなら惚れられた分だけの責任を持ちなッ！！それが『男』ってもんだろが！！」

……誰だお前！？

「いや、こんな不甲斐ない父親だと思うと情けなくてな？」

…どうせヘタレだよ俺は……。

「良いから行ってこい！！記憶はちゃんと吹っ飛ばしたんだろ？」

「吹き飛ばしたがなぁ…いつ思い出すか分からないんだぞ？」

時限があるかどうかすら分からない時限爆弾だぜ？

…あぁ、なんであの場面で『一ヶ月、ちょいと故郷にでも帰ってみるよ』とか言ったんだろ……。

縁を切って京を離れりゃ良かったかな……。

「……捨てる気か？」

「まさか。契約の最後までは師匠と弟子だ」

ただその関係が、俺と逢う事で破綻するのがいやなんだよ。

「ふん」

「…ちなみに、俺が『見捨てる』と言ったらどうする気だったんだ？」

「ガチでぶん殴る。又は叩き斬る。というか半殺しにする」

「……ハハハ」

はぁ…。

「ま、逢うのはいやだが行かねば。依頼がどれだけ溜まってるやら……」

鬱になるわぁ……。

「ただいま…」

足取り重いまま、京にある我が家に帰ってきた。
彩目とは既に別れて旅をする事になっている。まぁ滅多な事がない限り京に来る事はないだろう。

……うむ、流石に一ヶ月も放置すればこれほどのホコリも溜まるか。
…掃除するか。

はい、時間稼ぎも虚しく終わり、藤原氏の自宅前で御座りまする。
時刻は既に夕暮れ時。

胃が痛い……。
どんな顔をして逢えば良いのだ？
自らを好んでいるという事を知っていて、しかも相手が告白したという事すら忘れている相手に一ヶ月ぶりに逢う時の表情？なんだそれは？
妖怪を退治する為に連れ出して重傷を負わせ、一ヶ月も治療の為に自宅に封じ込めた相手にどう話せと？

ああああぁぁぁー……。
見捨てるというかもう二度と逢わないのは契約に反するし俺のポリシーにも合わない。けれど逢うと色々とギクシャクするだろうからなぁ……。

ぬわぁ……。

「何してんだ師匠？」
「ッ！？って妹紅！？」
「よう、師匠。久し振りだな」

門の前で頭を抱えて座り込んでいた時に声をかけてきたのは、あろうことか本人妹紅であった。

なんてこったい。

「……お前、記憶とか体調は大丈夫なのか？」
「ああ、特に問題ない。…って言いたいけど、記憶はまっさらだ。私が師匠と出掛けたらしいけど全く覚えてない」

その日に何が起きたかすら思い出せないそうで、本人からすれば気が付いたら寝ていて、身に覚えのない傷を負っていたという訳だそうだ。

フム……まぁ、良かった良かった。かな？

とりあえず、俺の顔を見て思い出すような事がなくて良かったよ。

「藤原殿、お久し振りです」
「おぅ。また妹紅をよろしく頼むのぅ」
「では師匠。またよろしくお願い致します」
「はい、よろしくな」

なあなあで物事が進んでるけど…まぁ、今のところは平気かな？

はあ……。

「ま、今日の所はひとまずこれで帰りますので」
「……何かあったのか？お主」
「？」
「口調、もそうじゃが……儂等に何か隠しておらぬか？」

……。

「隠し事がない奴なんて、この世の中に居ると思う？」

おっと、詩菜の口調が出かけてる。ヤバイヤバイ。

「ちょっと久し振りに逢ったし……色々とあったからな。距離感が掴めないというか」

「はっ！何じゃ？その程度でお主はうじうじ悩んでおったのか？」

その程度、ってお前……。

「儂も妹紅もお主の事など恨みやせぬわい。お主の言葉を借りるならば、それこそ『どうでもいい』わ！！」

「……ハハハ」

どうでもいい、ね。

久し振りに使ったような気がするよ。

「なるほどね。了解」

「わかってくれたか？」

「ん。明日からは平常運転を志すよ」

いつもの調子で、いつも通りに生きてみよう。

そして願わくは、前のような事が起きませんように！！

【風雲の如く　４０．５】

《ｓｉｄｅ　詩菜》

京には藤原一家の他にも、一応は知り合いとも言える間柄の輩はいる。少ないけどね。
例えばそろそろ月に帰る予定の輝夜だってそうだし、近くの山にいる妖怪共には姉貴とか呼ばれているし、山の奥にいて滅多に逢わないけど勇儀とかもそうだし。

まぁ『友人』なんてぐらいになると、ぐっと少なくなるんだけどねぇ。

閑話休題。

「へぇ、アンタが『逃げの大将』かい？」
「へっ！大将だっていうから凄いのかと思ってたが、逃げってつくのも納得だなァ！？」

久々に山奥をうろちょろしてたら絡まれた。

「随分と可愛らしい身なりじゃねェかよ？」
「こんなのが本当に大将だったのか？」

こんなのとはなんだ、こんなのとは。
…まぁ、ちみっこいのは否定できないけど。

とまぁ、立ちはだかってきた妖怪を観察していると、そいつらの後ろから見覚えのある妖怪が私にすがり付いてきた。

「あ、姉貴ィ！！コイツらをやっちまってくだせぇ！！」
「ギャハッハッハ！！こいつ自分よりも小さい奴に助けてって言ってるぜェ！？」
「妖怪の風上にもおけねェ奴だな！あれほど俺らになついてたのは演技かァ！？」
「うるせぇ！！テメェらなんぞ姉貴にかかればひとたまりもないわ！！」

あ～……この状況からすると、つまり、

「私がいない間に君達は縄張り争いに負けた。って事？」
「へっ、へい！そうです！！」

ふーん……。

「するってーとアイツ等に負けて服従していた君は、私が帰ってきたから反旗を翻している訳？」
「へ、えっ？い、いやちげぇよ！？」
「ふーん？」

コイツの事はよーく覚えている。
いつも強者の後ろにくっついて、虎の威を借りている奴だ。
自分よりも強い奴の周りにいて、自身は努力もせずに美味しい部分を上手く頂く、調子の良い奴である。

「ま、そういう生き方に別にいちゃもんをのしつけるつもりなんて微塵もないんだけどさ？」

ウザいから、止めてくれない？

「ヒ、ヒイィッ！！？」

妖力全開で盛大に脅す。
たまたま弟子とか出来ちゃってるけど、私は自力でマイペースに生きてみたいのだ。
私の回りをうろちょろ嗅ぎ回るネズミや犬は邪魔だよ。

「つー訳で、縄張り争いとかに興味はないんでご自由にどうぞ？そいつ、虫に関しては処罰するなり追放するなり喰うなり煮るなり、好きにしちゃって下さい」

「……」

大将なんて言われてるけどわざわざ自分から助けるのは気に入った奴ぐらいだし、依頼とかがない限りは私も助けたりはしない。
言い換えれば、依頼されりゃあ誰でも助けるよ？って事にもなるんだけどね。

さて……。

「退いていただけませんかねぇ？」
「…俺らがこんな奴の為にお前に逢いに来たとでも思ってんのか？」
「つーか、わざわざ美味そうな肉を逃すと思うのかよ？」

……結局、戦闘か。

「はぁ……私が貴殿方を倒せば通してくれる。って訳ですか？」
「物分かりが早ぇじゃねぇか嬢ちゃん」
「逆にお前が負けたら、俺らの慰め物になってもらうぜェ？」

はぁ、男って悲しい生き物だこと。

「んじゃ、さっさと殺りましょうか。『逃げの大将』をなめないで貰いたいですねぇ？」
「ナメテンのはテメェだぜ嬢ちゃん！！」
「痛くしねェから安心して、負けやがれッ！！」

敵は三人。さっきの虫も含めて観戦しているのが五人くらい。
三人全員が私に目掛けて突っ込んでくる。見抜き安っ！

「『逃げの大将』にもちゃんと名前があるんですよ？詩菜、って名前が」
「ぐピャぁ！！？」

一人目、顔面複雑骨折にて気絶。リタイア。

「また詩菜には様々な二つ名があったりします。『中立妖怪』に『鬼殺し』などなど」
「あああぁぁぁぁあッッ！！？お、俺の、腕がぁぁぁ！？」

二人目、両腕が切り取られて失神。リタイア。

「ッ！？じゃあ…テメェがッ、あの鬼を引っ込めたッ……！？」
「まぁそんな事よりもですね？ヒトを見掛けで判断するなと」
「が、ボッ！？テ、テ――――――――――」

三人目、体内から空間圧縮による爆発。死亡。

ふぅ……。

「スッキリした♪」

いくらどうでもいい奴から罵倒されたとしてもさぁ？イラつくし殺したくもなるよねぇ？

さーてと、まだ生きてる二人組をてきとーに縛って……。

「やい、そこの捕虜だったらしき妖怪！」
「はっ、はいッ！！」

うん、虫とは大違いだ。礼儀正しいし、近付きたくないって思ってるのがバレバレだし。

「コイツらをどっか適当な所に置いてきなさい」
「…適当な所って…とは？例えば、そのどのような場所に置いてこれば？」
「貴方が死んで欲しいと願うならば人里近くに。どうでもいいなら別の山に。貴方がコイツらについていきたかったら、私が居ないような所で解放してあげちゃって」
「……はぁ、わかりました」
「要するに焼くなり炙るなり好きにしなさいな♪」

処刑しないのかって？
やぁよ。めんどくさい。

コメディぃ？違〜う、シリアスだッ！！（前書き）

ぶっちゃけ、批判が来そうで怖い。

コメディぃ？違〜う、シリアスだッ！！

詩菜　いい加減に話を進めますかね。『メイド・イン・ヘブン』！！
彩目　いや、それは時の加速だろ？
詩　え〜？じゃあ他に何があるのさ？
彩　『キングクリムゾン』でいいんじゃないのか？
詩　いやいや、あれはむしろ時を消し去って結果しか残らないってだけであってだね？無駄が大好きなわ
　たくし詩菜には当てはまり難いんだよ。
彩　どちらにせよ悪の帝王とは性格が正反対だよな。『ザ・ワールド』のヒトとか息子とかは無駄な事が
　嫌いだからな。
詩　まぁこんなメタ話はほっといて、『スタープラチナ　ザ・ワールド』！！時は動き出す。
彩　候補にすら出なかったのを言いやがった！？しかも五秒経過した時のセリフだし！？
詩　本編始まるよ〜♪
彩　無視か！？
詩　どうでもいい。
彩　最悪だ！！

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

「今日で俺が教える授業も終わりだ。一年間も早いもんだなぁオイ」

「…もう一年、か」

一年間の契約もこれにて終了だ。
……酷い考えだが、これで妹紅との因縁もきれて終わる。

「……さて、最後なんだし。いっちょ本気で戦闘してみるか？」
「…本気で？」
「ガチで」

妹紅が本気を出せば、俺もそれ相応に本気にならなければならない。
能力使わないと勝てる見込みもなくなる程な筈だ。

「ま、こんな市街地でやったら大騒ぎになるし。移動するか」
「……いいよ。分かった。…殺す気で来い、って訳か」
「殺す気じゃねぇと殺しちまうぜ？」

多分。

山のふもと、妖怪の領地と人間の領地が接する場。
ここなら滅多に人は来ない。妖怪なら近付くかも知れないが、まぁ吹っ飛ばすし。

「手を抜くのはなし、本気を出す。手段は問わない。罠もあり。騙しも禁じ手もあり」
「…終了の合図はどうするんだ?その規則じゃ参ったって言った後に、攻撃するのもありになっちゃうだろ?」
「んじゃ気絶または失神で終了。相手が確認して終了。気絶した振りもありだから、疑ってばっかりになるが…まぁより実戦風味になるだろ」

……全然関係無い話になるが、もし蝉が人間をも殺せるような知能や攻撃手段を持っていたら最強だよな。
死んだ振りをして近付いた瞬間ズバッ!とか、三日間しか生きられないなら神風でも特攻隊でもなんでもしてやるぜ!とか。

閑話休題。まさしくどうでもいい話だ。

「…戦闘前にそんな話をするのも、作戦か?」
「駆け引きは大事だぜ?強大な妖怪に遭った時に、どうすれば会話で隙を作って逃げれるか。どうすれば弱点を見抜けるか。特徴云々、どうすれば怒らせれるかとかな」
「なるほど。そして今もその駆け引き中ってか?」
「まぁな。弟子に手抜きなんかしないからな?」
「それはして欲しいなぁ…おらっ!!」

先攻妹紅。
右ストレート。左手で受け止めそのまま背負い投げ。

と、思ったら背中を蹴られて抜けられた。
背中をもろに見せたまんまというのは非常にまずいし、相手の姿を確認出来ないのも辛い。気配は分かるが。
しゃがみつつの脚払い。前蹴りで背中を思い切り蹴ろうとしたのかね？避けれて良かったよ。姿勢も崩せたし。
それでも即座に受身をとって即座に敬遠のキックをしてくる所がスゲェよ。
適度に距離をとって仕切り直し。互いにダメージも特になし。

「…お互い何度も戦ってるからなぁ」
「熟知に近いしね」
「まぁな。よっ！！」

今度は俺の先攻。
足で地面を叩き、衝撃により高速で妹紅に近付く。
ブレーキは妹紅に打ち込む肘打ち。ずらされて鳩尾には入らなかった。
が、ダメージは通っただろ。骨に当てた形になったからな。
吹き飛ばされながら、それでも小刀で斬ってきた。そもそも何処から出した。
二の腕バッサリ。浅いけど、まぁ俺にダメージを与えるならば、こういう刃物しかないよな。

「……なかなか死合の覚悟も出来てたみたいで」
「師匠も鳩尾に入れようとしただろ……というか牽制のつもりの刀だったんだけど…」
「はっはっは、良いぜ。殺しに来な！！」
「笑い事じゃ、ねぇよ！！」

妹紅からの地面を蹴って石礫。もうちょい筋力とか身体が頑丈なら

ば地面を殴って『破岩弾』とか出来そうだ。
…まぁ見掛けだけなら俺も『超破壊拳（ビックバンインパクト）』とかを撃てる気もするが。

おっと、妄想に耽っている場合じゃないか。

細かくステップしながら速度を落とさずに弾幕を避ける。
近付いて掌で押す、むしろ突っ張り。
外されて相手の左肩に命中。顎を狙ったんだけど、まぁ再度姿勢を崩したし、いっか。
右手の小刀から斬撃が飛んでくるのも予想の範囲。左足で蹴り飛ばす。
が、それも予想されていたのか今度は脚払いだよ。
見事に引っ掛けられて倒された所で、再三距離を取られ小刀を拾われる。

「ん～……なかなか決着が着かないねぇ」
「……もう嫌なんだけど、師匠を攻撃するのは……」

……。
はぁ、なに？運命だとか言うアレですか？

「…ん～。うまく行かないなぁ……」
「？何がだ？」
「いんや。気にするな《ガルーラ》！！」
「竜巻！？ッッ！！」
「俺の能力を全てを見せてやろう」

竜巻は妹紅と俺のちょうど中間に出来ている。

持続力がないから一時的な目隠しにしか出来ないが、まぁ幾らでも応用とかは出来る。

竜巻に踏み込み上空に飛び上がる。高度２０メートルって所か。まぁそりゃ見失うよな。

大気を吸い込み、肺に大量の空気を溜め込む。

目標妹紅。一気に吸い込んだ大気を吐き出す。大気圧縮砲を喰らいな！！

ダンッ！！

「っぐうぁっ！？ッ上か！！」

ありゃ弾き飛ばして気絶出来るかなと思ってたのに、ピンピンしてら。

まずいな、落下してて身体の自由がきかない。

まぁ幸運なのは妹紅が遠距離攻撃を持たない事だっ……うん？

うん？？

「…記憶が飛んでから、この力が見えたり使えるようになったんだ……あの日に何があったのか。父上や師匠は嘘を言うだけで何も教えてくれなかったけど、この感覚は……そうだな。『頭に妖力を縫い付けられた』感じだ」

……はあっ！？
なんで、妹紅が、妖力で作られた、弾幕を、撃って来てるんだ！？

「グフッがっ！！」

次々と弾幕が身体にめり込んでいく。
衝撃は和らげれるが、直接触れたダメージは喰らってしまう。
受身もままならず地面に直撃する。衝撃はないけどな。

「……師匠、この勝負。賭けないか？」
「げほっ…何をだ？」
「あの日、何があったかを喋る」
「……そんな事を言ってくる辺り、思い出しかけているんじゃないか？」

そうなると、再度衝撃をぶつける事になるがな。

…あぁ、成る程。
『頭に妖力を縫い付けられた感覚』ね。
妹紅に妖力を操るとびきりの才能があって、そしてそれを発掘するきっかけが、俺の妖力を伴った衝撃による記憶破壊って訳か…。

「全然思い出せてない。……でも、何か大事な事を忘れたような気がするんだ…」
「……へっ、大事な事ねぇ」
「…そう言うって事はやっぱり知ってるんだな。師匠は何があったか」
「そりゃ当事者だしな。……分かった。その賭け、受けて立つ」

全く、こんな才能ある奴を発掘するとは……。
…なんてこったい。

妖力を扱い始めて日が浅いからか、それとも弾幕をどういう風に撃てば効果的か知らないからか。
どちらにせよ妹紅の撃つ弾幕は穴ぼこだらけだし、威力も幽香や紫に比べりゃ弱すぎる。
接近するのは簡単には行かなくなったが、それでも近付いて近接攻撃を叩き込むしか攻撃手段はない。
俺が弾幕を撃ったとしても、妹紅とどっこいどっこいだし。
大妖怪同士の弾幕合戦みたいに綺麗にはならないしな。

それに俺も妖力を使うと妖怪だとバレちまうし。

「ほい、がら空き！！」
「ぐっ！？ッそらぁっ！！」

殴り殴られ。結局ガキの喧嘩に。
いや、でも両方とも正気だし搦め手フェイントとかも使うから、何かの試合には見えるかな？

でも、まぁ。

「がは…ッ……！」

「…殴り合いが始まった時点で、勝負は決まったようなもんだろ」

衝撃ならなんでも無効化してやるからな。

弾幕は無理だけど。

「ホイ、決着ってか？」

「…ゲホ、まだ…終わってない……！」

「んじゃ気絶させるか」

迂闊に近付くのは危ないが、確実に気絶させる為にも近付く。

「……喰らえッ！！」

「不意討ち抜き手も読んでるっての！」

鍛えられない人体の急所を不意討ちで突くのは良いさ。

けど、急所の中でも眼を突くのは悪手じゃないか？眼って事は攻撃が相手にはよく見えるって事だぜ？

「それでも前に一度引っ掛かっただろ…」

「うるせぇやい」

とにかく！とにかくだ！！

「俺の勝ちだ」

顎をデコピンで撃ち抜く。反動で脳ミソがぐらんぐらんに揺れるように、衝撃を追加して。

……ヨダレ汚なっ！

ま、まぁ！顎を打たれて脳震盪を起こしたんだし！仕方無いよね！！

誰に謝ってんだよ俺……。

「はっ！！？」
「お、ようやく起きたか？」

妹紅よ、ぐっともーにんぐ。
夜だがな。
約半日気絶していたがな。
内心すげぇ焦っていたがな！
どうしようかとオロオロしてたけどな！！

しかし……よくもまぁ、簡単に娘を師匠の家に泊める事を了承したな…藤原氏よ……。

「……えーっと…ここは何処だ？」
「俺の家。具体的にはボロイ納屋の中」
「……師匠の家？…って布団！？」
「ん、臭かったか？ついさっき洗って乾かしたんだがな…まぁすまん」

ま、オッサン臭はしないだろ？

体格的には志鳴徒は青年・少年と呼べるが、年齢的になると……
加齢臭どころか腐敗臭が……。

……い、いや。この考えは止めよう。ドツボにはまる気がする…。

「あ、あわわわ……」
「…ん？おい、顔が真っ赤だが大丈夫か？」
「いぇ！？だ、大丈夫れす！！」
「大丈夫じゃなさそうだが……」

……キャラちがくね？

「…落ち着いたか？」
「……あ、ああ」

縁側の障子を開いて月見酒。

呑んでるのは人間が造る庶民の酒。妖怪の酒は強すぎなんだよ。天狗とか鬼の酒なんてもっての他だ。
ん～、美味い。

「……あれ？」
「どうしたー？」
「…師匠の家に来たのって初めてだよな？」

……デジャブか。

「まぁそうだな。それが師弟の契約の最終日ってのは笑えるが」
「…笑えるか？」
「まぁ気にしない気にしない」

妹紅も隣に座り、並んで月見酒。なんか良い雰囲気になるのは嫌な予感しかしない。

「……しっかし、酒強いな妹紅」
「そうか？」
「…初めて呑むんだよな？」
「父上が呑ますと思うか？」
「まぁ確かにそうだが……あ、反抗期か？」
「いやいや、ちょっとした挑戦だって」

ふーん？

「ま、のんびり呑むとしましょうか」
「……師匠」
「んー？」
「話がある」
「内容によるな」
「…あの日、何が私に起きた？」
「賭けに勝ったのは俺だから答える義務はない」
「次、私は前にこの家に来た事があるのか？」
「あるぞ」
「…え？さっきは無いって…」
「ありゃ嘘だ」
「…嘘ついてたのかよ……あの日にか？」
「妖怪退治に行く前に、な」
「……ふぅん」
「…というか賭けに勝ったのに答えちゃってるよ、俺」

ま、記憶関係には触れないような話に持っていくがな。
……ん？普通に触れてないか？

あれ？
…まぁ…良くは無いけど……いや、どうでもいい。うん、そうしよう。

「……師匠」
「ん～？」
「…いや、その…だな」
……ん～…？
「……もう弟子じゃないなら…その、名前で呼んでも……いいか？」
……あ～。
「まぁ、気にしないが？そもそも敬語を気にしないって言っただろ」
「あ、まぁ、その時点では、その…な？」
……どうしたもんかなぁ……。
フラグたっちまったよ。
「……妹紅やい」
「な、なんだ？…し、志鳴徒…？」
だからさぁ……こういう事柄は苦手なんだって……。
「俺はとりあえず、とある仕事が終わったらこの平安京から出ていく」
「えっ…」
「まぁ後は全国でも旅するかな？つー事で」

「俺はお前を受け止めれない」

「……」

「…でぇーい！！だからこういうのは嫌なんだよ…イヤな気分に雰囲気になるからさぁ……」

「……つまり」

「お前が失った記憶は、お前が俺に告白してなおかつ俺について知りすぎたから」

「……記憶を吹っ飛ばしたのは…志鳴徒だったのか！？」

ところどころぼかしたが、まぁ概ね正解だ。

はぁ……可愛い子を騙すのは忍びないったらありゃしない……。ため息が止まらねぇぜ。

「ま、そういう事だ。……はぁ。二回もふるとか、ないわぁ…」

「……あ～あ、ふられた……」

「…その台詞も二回目だな」

「なんなら全部思い出させてくれ」

「無理。そんな能力を応用出来ないからな？」

まぁ、前回よりは良い雰囲気か？

「……し、志鳴徒が私の記憶を飛ばしたのか？」

…ん～？ああ、妖力か。
俺『志鳴徒』は人間側。私『詩菜』は妖怪側。

「いや、妖怪に頼んだ」
「よっ、妖怪！？」
「妖怪退治に出掛けたって言っただろ？その時に頼んだんだ」

我ながら矛盾した理論だ。
だが押し通る！！

「……妖怪に知り合いがいるのか？」
「いるぞ？ていうか、人も妖怪も神様も変わらないっての」
「……」

暫しの無言。
もうそろそろ、体内時計では真夜中になる。

「…私が志鳴徒についていっちゃ、ダメか？」
「駄目だ。これ以上『非凡』な奴等に関わるな。『普通』は普通に生きて死ぬ。それが定めだ」
「ッ…じゃ、じゃあ非凡になれば良いのか！？」
「そんな事をしたらさっきの戦闘なんて目じゃない程の力でブッ殺す。というか殺す」
「ッッ！？」

……常々、ヒトがどういった道を選ぶかはその本人に任せとけ。

って考えていたが。
どうも責任が絡みそうになると、俺は逃げちまうようだ。

「……はぁ」
「…まぁ、その…なんだ？俺みたいな浮浪者よりも、良い奴見付けて幸せになるこった」
「……卑怯者。惚れさせといて自分からふるなんて」
「いやいやいや、それはそっちが勝手に……」

……寄り掛かられても、困るんですけど……。
泣かれても、困るんですけど……。
膝枕とかもう、困っちゃうんですけど！？

「…最後なんだし、別に良いだろ…」
「……ハァ」

……だから俺は大甘なんだっての……。

戦争の前（前書き）

これからずっとシリアス・鬱な展開が続きます。
苦手な方、嫌いな方、キャラが違うから、なめてんの?氏ねよ、という方。
お早めに戻られた方がよろしいかと思われます。

ＯＫ？

戦争の前

さて、妹紅と藤原氏の縁も切った。
京に居る必要性もなくなった。
…まぁ、元からないんだけどね。
人の流れについて行ったのと、有名な妖怪に遭いやすいってだけだし？

藤原家と別れたのがつい一ヶ月前。
そして、今日は八月十四日。
明日は満月だ。
プラス、かぐや姫が月に帰る日の前日でもある。

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

「……おぅおぅ、殺気立ってるねぇ」

輝夜の屋敷には既に相当数の武士や術師やら陰陽師やらが集まっている。
大方、帝が集めたんだろうなぁ…。
……ん～、敵わないって事を知っているから、どうも憐憫の視線で見てしまう……。
いかんなぁ。慢心出来る実力って訳でもないのに。

「…なんじゃ志鳴徒？お主、京から離れるのではなかったのか？」
おう、藤原氏じゃあらせんか。
…妹紅の事もあって、逢いたくなかったんだが……。

「…この仕事が終わったらな。最後の大仕事って訳だ」
「……輝夜姫を守る、この仕事か？」
「まぁな」
「……ふん、儂の娘を断って姫様か？」
「……ここの防衛に来てるお前が、俺の事を言えるのか？」

…まぁ、藤原氏の意見も当たり前だよな。
あいもかわらずの、外道一直線な気がしてならねぇ……。

「…まぁ、確かに妹紅の事は悪かった」
「ふん、今更じゃ」

「……こっちからも、ひとつ質問。娘が大切なら、何故お前はここにいる？」
「……」
「ついでにもひとつ。好きな奴より娘が大事なら、明日はこの屋敷に来るな。死ぬぞ」

確か俺が覚えているかぐや姫の話は、月の使者が来た途端に兵どもは動けなくなって、更に動こうとすると次々と死んでいった。とかいう話だった筈。
知らない人間ならまぁどうでもいい範疇に入るが、藤原氏、テメーはダメだ。

「なっ…！？」
「無論、俺も介入したら無事で済む訳がないがな」
「……お主、そこまで考えて妹紅を…」
「いんや、今日はその話を輝夜としようと思ってここに来た」

あいつが本当に月に行くのなら止めはしないが、前に輝夜が行った通りに『月に帰らず地球に留まる』ならば、友人として手を貸さずには居られないだろ？

「まっ待て！部外者は屋敷に入ってはならん！今は入れるのは姫様とその家族と帝様だけじゃ！！」
「知るか♪」
「うぉいっ！？」

という訳で、塀を飛び越え走って物陰に隠れて『天誅』のように忍び隠れて、
お邪魔しまーす♪

…ふむ、陰陽師が中にもうろうろしてるから『鎌鼬』状態では近付けないなぁ…。
うっかり触れちゃえば絶対ばれるし……しかし、隠密には風の状態がピッタリなのになぁ…。

まぁ、こうやってそろりそろりと近付くのも面白　「なにしてるの？」　わきゃあ！？

「……って、輝夜か……脅かすなよ…」
「…人の屋敷に勝手に入って、その言い分はあんまりじゃない？」
「へいへい…」

……まぁ、見付かったのが輝夜で良かったと考えよう…。

「いよいよいよ明日なんだが」
「『いよ』が一つ多いわよ…」
「そんな事は置いといて、早速本題にだな？」
「居たぞ！！志鳴徒だ！！」

…ありゃま。

「ばれちった」

「緊張感ないわねぇ……」
「助けてーな」
「ええ～、どうしよっかしら？」

この女狐め！？
いや、冗談じゃないからね！？助けてよ！？

「姫様！！ご無事ですか！？」
「ええ…なんとか……」
「輝夜！？テメェ裏切りかチクショウ！！」
「な～んの事かしら？」
「いや、ホント助けて！！くそぅ！友人だろ！？」
「あら、それもそうだったわね。離していいわよ」
「「「…はい？」」」

…まぁ、嫌われ者の志鳴徒があの姫様とご友人なんて、夢にも思わないわな。

俺が喚いた話も、コイツの妄想だろ？みたいな気持ちで聞いてたに違いないチクショゥ。

「よ、よろしいんですか！？」
「ええ。じゃ志鳴徒、こっちよ」
「……おてんば姫様のお相手は大変だ。お疲れ様」
「え？あ、はい。どーも……」
「んじゃ、見張り頑張ってくれよ～？」
「…早く来なさいよ」
「へいへい」

「「「……ええ！？」」」

イン・ザ。輝夜の部屋。
意外にもここに来るのは五回にも満たなかったりする。
というか、逢って話した回数が十回にも満たないのに、友人というのはどうかと思うが…。
まぁ、気が合えば友人。

という事で、閑話休題。

「さて、輝夜やい。ご自身の気持ちは決まったかい？『ここに残るか、月に帰るか』」
「決まってるわ『地球に残る』よ」
「んじゃも一つ質問『妖怪・詩菜の手助けは必要かい』？」
「…欲しいわ。でも月の力は強大よ。妖怪を殲滅する事なんて簡単に出来るわ」

「それは後だ。今重要なのは、助けて欲しいか否か。だ」

……あ～、どっかでこういうシーンがあったなぁ…なんだったかは思い出せないが。

「……助けて欲しいわよ」

「了解♪」

さてさて、どうやって懲らしめてやろうかねぇ？

やっぱり、攻撃力でいったら空間圧縮『緋色玉』が一番高いんだよなぁ。

でも無差別攻撃に近いし、手加減もいまいち出来ないし。

とすると衝撃刃かな？何度も発生させてポンポン投げりゃあ殺傷力は空間圧縮の次に高いな。

でも妖力足りるかね？それと月の奴らが（ありえないとは思うが）ＡＴフィールドとか発生させてたりとかしたら、斬れないかもしれないし……。

「…作戦をたててる訳？」

「ん？ああ……輝夜も何かないか？」

「…何よその聞き方は…何かないか、って……」

「まぁ、そうだが……」

「……そうね、こんなのがあるわ」

あるのかよ。

と思って見ていたら、こいついきなり懐から出した小刀で自分の手首を切り裂きやがった。

「何してんだお前!?」
「何って…こういう事よ」
「……ッッ!?」

明らかに手首の頸動脈を切り裂いて血がだくだくと溢れていたにも関わらず、
輝夜が見せた手首には、一切傷が残っていない。

「……私が地球に飛ばされた理由は『不老不死になったから』」
「……なるほどね。だから不老不死の薬を持ってる訳だ」

帝と翁に渡した薬…ねぇ。
不老不死……フム。

「だから万が一、私が殺されるような傷を負ったとしても、それはすぐに治るわ」
「……一つ、今ので思い付いた案がある」
「何かしら?」
「その前に一つ確認だ。肉体が欠片も残さず吹き飛んでも平気か?」
「……分からないわ。でも…」
「…でも?」
「貴方が髪の毛一房でも持っていたら、そこから再生出来るかも知れないわ」
「よし、んじゃ切りまーす♪」

あ、チョッキンと。

「えっ!?ちょ、何するのよ!?」
「いや、持っていけって言ったから」

「可能性として提示しただけよ！！」
「まま、そんなどうでもいい事は置いといて」
「どうでも良くないわよ！！…ああ、私の髪が……」
「今の内に切り揃えるこった……さて」

陰陽師が近くにいるから、もしかしたらやばいかも知れないが……。

空間圧縮。範囲、頭一つ分。妖力もプラス。神力もプラス。

「ッッ！！貴方、そんな事したら！」

「妖力！？」

「神力も出てきたぞ！？」

「姫様を狙って妖怪まで出てきたか！！」

「いや、神様が守って下さるのかも！」

「場所は姫様の部屋からだ！！急ぐぞ！！」

「…やっぱりばれたか」

まぁ、予想の範囲内。

「輝夜、お前がこの『緋色玉』に何かしらの力を加えたら、辺り一面が壊滅する程の力を込めた。周りの人民に被害が出ない所まで来たら発動させろ」
「…！？これって、空間圧縮！？」
「どこまでの被害が出るか分からないが……まぁ、少なくとも発

動させたお前は消し飛ぶだろ？」
「……ハハ、ハ…」
「姫様！？って、あれ？」

輝夜が袖の中に隠したのを眼の端で捕らえつつ、手を上げて外に向かう。

「お騒がせしました～」
「待て、志鳴徒！！貴様何をした！！」
「明日の話でちょいと姫様に話がありまして」
「なんだそれは！？」
「ま、明日になれば分かりますって。ハハハハ」

さ～て、藤原氏の事も気になるが……タネは仕込み終わったぜ。

【八月十五日・午後十時・満月】

さぁて、やりますかね？

鏖殺（前書き）

鏖殺（オウサツ）

・・・《皆殺し・戦争で相手を一人残らず殺してしまう事》

鏖殺

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

ちょいと遡って、八月十五日の正午時。

俺は特に必要な準備も終わったので、慌ただしく動く武士や術師をのんびり眺め回っていた。
…たまに物凄いうざそうな視線が飛んでくるが、まぁ気にしない。

今日の夜には京中の兵士がこの屋敷に集い、月の兵力に立ち向かおうとするだろう。

……立ち向かえるのかねぇ？

「…ん？オイオイ…まだ居るのかよ藤原」
「遂に呼び捨てになりおったか……」
どーせこの身分も捨てるしな。せいぜい引っ掻き回すさ。

「……お主が姫様と友だというのは本当じゃったんじゃな」
「あたぼうよ。…まぁ依頼で知り合ったんだがな」
「ふぅむ……」

……あ～…気まずい雰囲気。いやだいやだ。

「……今更だが、本気で輝夜に命を賭けてるのか？」
「…惚れた弱味というのは、お主には分からんよ」
「……妹紅はどうすんだ」
「……儂が死んだら、お主が守れ」
「無理。そんな余裕も金も時間もない」
「金は払おう。儂の全財産を」
「金の問題じゃねぇよ。命の問題だっつってんだ」
「……お主、そこまで妹紅に肩入れしておるなら何故」
「友人が死ぬのは見たくない」
「…何、儂は死なんよ。陰陽師であるお主の攻撃を避けれる儂じゃぞ？月の軍勢なぞ、恐れるに足らぬわ！」

「そんな生温い攻撃じゃないから言ってるんだ！」
「…何故、お主はそこまで知っておる？」
「……」

……くそ。分からず屋め。

「…無言か。……ふん、前からお主は何かを隠しておるよな…」
「……頼む。何も訊かずに、この場から帰ってくれ」
「断る。お主に譲れぬ物があるように、儂にも譲れぬ物がある」
「……はぁ」

…平行線の話し合い。いや、話し合いにもならないか。
……ただの意見の押し付け合いかな…。

仕方ない。とは思いたくないが、睨み付ける藤原から離れるように俺は立ち去るしかなかった。

最悪だ。最悪な別れ方だ。そして最悪な気分だ。

「……そしていつまでついてくる気だ、妹紅」
「……バレてたか」
「当たり前だ」

藤原氏の目線が届かないように角を曲がり続けてたんだから。
後ろからずっと視線が突き刺さっていたら、気付くっての。多分。

「……無理だって。父上は頑固だから」
「ああ、馬鹿野郎だ」

アイツの事だ。妹紅がこの屋敷に忍び込んでいる事にも気付いているに違いない。
なのに自分を省みようともしない。
子供は親の背中を見て育つって知らないのかね？

「…志鳴徒も、輝夜の護衛か？」

……完璧に俺の呼び方が定着したようで……。

「友人を見捨てるってのは大嫌いなんでね。……まぁそれでも話を聞かない馬鹿が居るがな…」
「……」
「それに、お前もさっさと帰れ。数少ない友人を死なせたくねぇ」
「…友人か？」
「友人だ、それ以上でも以下でもない」

あ～あ、憎まれ役は辛いったらありゃしない。

「……はぁあ」
「…溜め息多いな」
「誰のせいだと……俺か」

「自分かよ」
「自分からまいた種が自分を無尽蔵に縛り付けて来やがる」
「まるで蛇だな」
「……はぁ、その蛇の一人でもあるんだぞ、輝夜」
「あら、ばれちゃった」
「っっ！？」

お転婆な姫様が屋敷の塀を乗り越えてきた。
兵共が見たら卒倒するな、間違いなく。

「…お前の護衛の為に兵がそこかしこにいる筈なんだがなぁ…」
「まだ日は高いわよ。月すら出てないわ」
「いや、満月だから当たり前だろ」
「それでその子は？」

スルーですかこのやろぅ。

……。

「…藤原の娘、元弟子」
「……そう、貴女が…」
「……」

輝夜を睨み付ける妹紅、それをどことなく申し訳なさげに受け止める輝夜。
……あ～あ、だから言わんこっちゃない。

「……ふん！」

「…ま、気ィ付けて帰れよ～？」

捨て台詞（？）的な言葉を残して去っていった妹紅。

「……そうよね、私は大切な父上を奪った女」

「…プラス好きな男を奪った女、かね」

「え？なに、貴方…」

「俺は人間」

「いや、妖「人間なの」……そう」

……さっさとあかせば良かった物を。

そして今からでも遅くはないかも知れないにも関わらず、打ち明ける自信がないというヘタレっぷり。

まったくもってどうしようもない。

「…んじゃ、色々準備に取り掛かるとしますかね」

「準備なんてあるの？」

「変身ぐらいしかない」

「……準備じゃないわよね？」

「……さぁ」

あ～……なんでこんなローテンションにならんといけんのだ。

【八月十五日・午後十時・満月】

《ｓｉｄｅ　詩菜》

もう知らない。藤原氏の事は。
たかが知り合って半年の人間なんだ。
……そんな『たかが半年の人間』で、ここまで考えないといけないって事も事実なんだけどね。

元人間。現妖怪。妖怪として生きた年数、一一七。
友人とも呼べる妖怪十人弱。家族一人。知り合いと呼べる人間数人。

人間っていうのは、どうも調子が合わなくなってきたよ。

現在、屋敷には数百人もの兵士、術師、退魔師が集まっている。
私は風、いわゆる鎌鼬の状態で遙か上空で待機中。
この戦、妖怪にも既に知れ渡っており、私のように遠く離れた所からじっくり観戦してやろうとしている連中がわんさかといる。それ以外にも居るけど。
…まぁ、近くで観戦しようとすれば流れ弾に当たるからねぇ。

上空に雲は一欠片もない。真っ新な夜のカーテン。
あるのは星の輝きと、眩しい程に光る大きな満月。

……ペルソナ3を思い出すなぁ。
あれはかっこよかったなぁ…歌詞も思い出せないけど、『一Ｌａｓｔ Ｂａｔｔｌｅ一』が最高に燃えたなぁ。
…何気に『緋色玉』がＮＹＸの『ＤＥＡＴＨ』に似てるような希ガス。

閑話休題。

月の使者の、到来だ。
牛車のような乗り物に、周りにいるお世話をする下人らしき女性たち。不思議な色をした雲に乗って、明らかに異常なスピードでこちらに向かってきている。本体と車輪の回転が一致してねぇぞ。
屋敷の敷地の外にはかなりの結界が張ってあったにも関わらず、あっさり突撃、崩壊、バリーン。
月の科学力パネェ。
兵士たちも弓を向け矢を発射しようとしても、手も足も動かず顔だけがキョロキョロと動き回る。

ん？あっさりと輝夜が出てきたねぇ。
おいおい、みんなお前の為に頑張ってるのに…。

……そうでもないみたいだな。
さっき明らかにこっちを見てたし。翁に薬を渡したのが見えたし。
帝にも既に薬を渡してあるのかな？

とすると、その…横の奇抜なファッションの付き人は、もしかしての仲間かい？
……ふむ、味方は地球人だけではなかったと。

ま、何にせよ。出番かな。

「輝夜に惚れてる妖怪共！！準備は良いかい！？」
「「「「「うおおぉおぉぉ！！！」」」」」

京で一番の美貌ってのは、そりゃまぁ妖怪にも通じる訳で、
『衝撃』を使えば、その恋心を刺激する事も挑発する事も乗せる事も、容易い容易い。

「妖怪を縛る結界は向こうが解いた！！人間は動けない！！動ける奴は敵だ！！」

さてさて、第二次人妖大戦勃発だ。

「行くぞテメエ等ァ！！！」
「「「「「「「「ウオオオォォォォォ！！！！」」」」」」」」

……なんやかんやでまた大将をやってるけど、そんな事は良いんだ。頼んだのはこっちだし。

「……来たわね」
「ッ姫様！？…あれはっ！？」
「そうね……地球の初めての親友、かしら？」

予想通り、月の科学力は物凄かった。
何そのガン〇ムみたいなビームライフル。いや、大型メガ粒子砲？
とりあえず、そのよくわからないプラズマ銃はかなりの威力も持っていた。
脳天に直撃した妖怪の一人が、その場で蒸発したぐらい。

……どんだけだよ。

まぁ、そんな弱音を吐く余裕もないし、吐く気もない。
周りの妖怪共に至っては、助ける勇者みたいなヒーローになれる事を願っているような奴らばかりだし、一つでもかっこいい所を輝夜

に見せようと頑張ってるからね。
死ぬなんてこれっぽっちも考えてない。頭にあるのは姫様だけ。格好良すぎるぞお前ら。

それでも的確に狙われて、妖怪は一人ずつ確実に減って行っている。
無論月の方もそうなんだけどね。

私も頑張らないといけないと思っていたけど、それ程でもないかな?

「やっほー、君が藤原氏だっけかな?初めまして、『詩菜』です♪」
「何じゃ何なんじゃこれは!?お主、何を始めよった!?」
「ん~?かぐや姫を拉致しに来たんだよ?月の人達も来るって聞いたからね~。漁夫の利美味いです」

サムズアップ!!

「月の人達が来る!?誰がそんな情報を漏らしよった!?庶民ですら知り得る筈がないのじゃぞ!?」
「そりゃ志鳴徒から。知ってる?アイツは妖怪と仲良くする非常識な馬鹿野郎なんだよ?」
「なっ!?」
「京で一番美しいと言われるかぐや姫、それを狙っていた私達だったんだけどねぇ。全然隙がないったらありゃしない。という訳で、情報と協力の為にアイツと組んだのさ♪」

無論、全部デタラメだよ?

「志鳴徒…!!貴様…!奴は何処におる!?」

「その動かない身体が動く頃には、遠くの方にでも行ってるんじゃないかな?あ、でも人間が止まっているのなら彼も止まっているのかな?」

目の前に居るけどね（笑）

「ま、使えない人間共はそこでおとなしくしてるんだねぇ♪」

「…ッ待て!!」

「まだ何か用?そろそろ助けないといけない奴が居るんだけど?」

「……志鳴徒に伝言じゃ。お主は絶対に許さぬ。妹紅の事も!この件でもな!!」

「…了解。必ず伝えとくよ」

そして、受け取りましたよチクショウ。

あれだけ藤原に啖呵を切ったのだから、勝たなければ。

そしてまぁ、この調子ならば妖怪がぎりぎりで勝てるかな?とか思ってたサ…。

月と妖怪の戦争は妖怪側に僅差で勝利があがると思っていたけど、どうやらそう上手くもいかなそうだ。
月から増援部隊がやってきた。
それも、完全に戦争をやるような重装備で。

クソッ!なんでこんなに早くに来られるんだよ!?
…このままじゃ、妖怪が全滅する…!!

……仕方ない…か…?
えぇい!!前言撤回!!

「お前ら!!敵は月の軍勢だ!!人間共と協力しなけりゃ勝てない!!」

次は、人間に。
走り回り、人間を倒すぐらいの押し込みむしろ突っ張りを加えながら、人の彫像をすり抜ける。

「人間共!!手伝え!!かぐや姫を取り戻したいなら協力しな!!目的は一緒でしょ!!」

どうやらこの人間がかかっている術式。外部から何かしらの物理を加えると術式が解けて行動出来るようになるらしく、私が触れて行く度にどんどん人間が動き始めていく。
案外、月の科学の手抜きだなと思いつつ、全員の封印解除完了。

この行動、問題は人間が協力するのか。という問題点がある。

妖怪は既に月の兵士と輝夜しか見えてないから、別に良いんだけどねぇ…。

まぁ、多少は私が声に含ませた『衝撃』の効果で共同戦線を張ってくれると良いんだけどね……。

…この能力、集団催眠に使えちゃったりするね…我ながら恐ろしいわ……。

形だけの共同戦線を張ってから、約半刻が過ぎた。
状況は、まさに乱戦状態。
こうなると、何処に藤原氏がいるのか何処に輝夜がいるのやら、さっぱり解らなくなってきたよ。

しかも、私の能力にあてられたにも関わらず、妖怪に攻撃を加えてる人間が居るし……。
どうしようもないなお前！
……あ、死んだ。

ま、そんな事はほっといて。

問題は輝夜だ。何処にも見当たらない。

仕方がないので、上空から探す事にする。無論『鎌鼬』状態で。
実はこの状態。何気に防御力がゼロなので、月の銃とかに当たれば即座に霧散し、死体が残らない無惨な姿になってしまう。無惨というか誰にも見付けてすら貰えなくなる。
という訳で、細心の注意を払いながら上空から輝夜を探す。

ん、いた。無茶苦茶遠くに。
奇抜なファッションで銀髪の人と一緒に逃げ回ってら。
それを追い掛ける月の兵士二人に、妖怪一人と人間二人。
嬉しい事に見事な連係プレーを……死んじまった。

……間に、合えっ！！

「ハァ…逃げ回りやがって、どうしてくれるんだよ?この穢れ」
「おい、姫の前だぞ」
「はぁ?これだけ穢れに塗れた姫様なんて月に入れると思うか?ぜってぇその前に処刑されるね」
「……まぁ、そうかも知れんが。…リーダーである貴女も裏切る

とは…」
「……」
「あ～あ、この穢れを落とすのにどれだけかかるやらなぁ……おら、姫さん行きますぜ」
「ちょっと！離しなさいよっ！！」

「…うむ、酷い。これは非道い」
「ッ誰だ！？」
「どうも初めまして。今回の妖怪の大将『詩菜』と申します」
「……お前が？」
「…まぁ、身なりはこれですが」
「「ハッハッハッハッ！！」」
「こっ、こんなロリがか！？おいおい、冗談はよせよ！！」
「あり得ないだろ！？ハッハッハ！！」
「まだしも、アイドルとして祭り上げられてるだけだろ！？」
…祭り上げてるのは、あるかもね。

……まぁ、そんな事はどうでもいい。
「カパッッ……」
「っおい！！？」
「てかまぁ、とりあえず、妖怪『鎌鼬』の刃を、なめないでよ？」
高速で動いて爪であっさり首をちょん切る。
…ハハハ、知り合いじゃなければこんな簡単に殺せるんだもんね。

「テメェ！穢れの癖に…なめた真似してんじゃねぇぞォ！！」
「穢れて何が悪いってんだこのヤロォ！！」

先程は相手がかなり油断してくれたから首を切断出来た。
けれども残りの一人は、既にスイッチが入っているのか、確実に私の姿を捉えている。
なんで音速の速度に近い私を完璧に銃で狙えるんだ！？
チィッ！直撃どころか、かすっても致命傷ってどういう事だよ！？
近付いたら、何でも切れる高速で振動しているナイフで斬られるちゃうし、
遠のいたら、それだけ輝夜から離れる事になるし……どうしようもないなこりゃ。

「…っ詩菜！！逃げてッ！！」
「えっ、ちょ！？」

アンタ、私がこんなにも頑張ってるのに見捨てろと言うのか！？

と、文句が口から出そうになった私は悪くない筈だ。
…輝夜が手に持っていた『緋色玉』を持っているのを見るまでは。

「ッ！！…良いの！？（隣の人は）大丈夫なの！？」
「ええ！大丈夫よ！！だから……（この場から）早く逃げて！！」
「……姫？」

オッケ、隣の人は何も解っていない様な気がするけど、そういうなら信頼するよ!?

……ちょいと確認。

「…ねぇねぇお兄さん?」
「なんだ嬢ちゃん?言っとくが見逃す訳にはいかねぇからな?全員抹殺命令が出ているからな」
「いやいや、お兄さんも不老不死の薬とか飲んでるの?」
「『蓬莱の薬』か?いやいや、こんな穢れた所に追放されたくないし元から不老だしな」

……随分とまぁ、口が軽いねぇ…。
まぁ、これで輝夜のように不老不死が他にも居るって可能性は無さそうだ。

「そっか、そりゃ良かった」
「良かったのか?俺から言わせりゃテメェは詰んでるぜ?後ろを見てみな」
「……げっ!?」

見た感じ、月のほぼ全軍勢が集結してる。
…こりゃ確かに詰んでる。かも。

「オイオイ、ここまで来てまだ諦めてねぇのかよ?」
「だって、そもそも救出が目的じゃないし」
「は?」

立ち位置が悪かったね。
アンタの向こう側に輝夜が居て、私の背後に軍勢が居るんだから。
アンタを通り越せば、簡単に抜けられる。

「ハッ！何だ！？この人数を三人守り抜こうってか！？」
「んな訳ないじゃん。言ったでしょ？『救出が目的じゃない』って」
「はぁ？意味わかんねぇよ。お前、行動と言ってる事が矛盾してるぞ？」
「してねぇよブワァカ！！ザマァ！　「テメッ！！」　…輝夜、頼んだよ」
「はいはい♪後これも」
「えっ！？なんで髪の毛切るんですか！？」
「永琳、付き合ってもらうわよ」
「確かに受け取りました、っと！！」

おっけ、この人も不老不死って訳だ。

救出が目的じゃないさ。
目的は『殲滅』だよ。

「待ちｙ　　」

……ていうか、逃げ切れるかな？

「無理無理無理無理！！？マジでぎりぎり！？死ぬ！！もう無理ィィィ！！」

結局、輝夜が爆発した位置が人里離れた位置だったのが幸いだった。
何時の間にそんな遠くに来てたっけ？まぁ、人的被害が出ないのは良い事だ。

……ハァ、疲れた……。

「…お、ほんとに再生が始まった」

……見ていて、気持ちが良いもんじゃないね。髪の毛から再生が始まるって。

…この調子なら、服でも取りに行く余裕もあるかな？
様子見プラス、屋敷でどれだけ人が死んでるかの確認もして来ようっと。

「……うわ」

殆ど死んでるじゃん。寧ろ原型を留めてる方が少ないし。
妖怪に至っては、妖気の欠片も残っちゃいやしない。

「…こりゃ、藤原も死んだな…」
「……まだ、生き…とるわ……」
「……よく生きてたね」
「…ふっ、この傷じゃ……もう、死ぬわい…」

……だから言ったのに……。

「……姫は…？」
「…無事だよ。月の奴等も死んだ。関係者はこれじゃあ誰一人とし

て残らないだろうね」
「……そう、か」

残るのは当事者の輝夜とその従者みたいな人。それと私。
これじゃあ『かぐや姫』っていう童話は残るのかね？
伝えれるような人が残っていないし。
……あ、翁とか？帝とか？

「…志鳴徒の、言う通りに…なってしまったの…」
「……全く、馬鹿な奴等ばかりだね」
「…ふん」
「……藤原、まだ生きたいか？生きたいなら妖怪になって生き延びれるよ？」
「…お主は、敵じゃ……」
「敵味方の話じゃない。アンタの命の問題だ……金とかまだ言わないでよ」
「…ふっ、なるほど……だが断る」
「……アンタ、本当に自重しないね」
「……ふん。ではな……『志鳴徒』…」
「…ああ、馬鹿藤原氏」

…随分とまぁ、あっさり死にやがったよ。クソッたれ。

……ああ、くそ。気分悪い。

乱暴に屋敷から服を強奪し、人の無残な死体と忽然と姿を消した輝夜とか妖怪で遂に失神した翁の横を素通り、誰にも知られずに移動する。

だけど……どうやら、誰にも知られずってのは、不可能みたいだった。

…ハァ……演技ってのは苦手なんだけど……。

……むしろ、嫌い、かな？

「……君が、藤原の娘？」

「ッッ！誰だ！！」

「どうも。君とも始めましてかな？『詩菜』と申します」

「ッ…お前がっ！？」

ふぅむ、意外と記憶は簡単に復活しないのかな？

もしかしたら私の姿で思い出しちゃうかも、って思ってたんだけど。

「…ああ、別に攻撃する意思はないよ。そんな暇もないし……」

「……そんな言葉が信じられると？」

「だろうね。まぁ、私が逃げれば済む事なんだし。どうでもいいよね」

「……待て、どこに行こうとしている？」

……。

…ごめん、輝夜。これ以上恨まれたら、耐えれる気がしない。

「…輝夜のとこ。爆発に巻き込まれてね。服が無いのさ」

「どこだ！？案内しろ！！」

「あのさぁ？依頼人の命を脅かすような真似を、すると思う？」

「知るか！ここで捕まえればいいだけの話！！」

勇猛果敢に突っ込んだつもりだろうけど……それは『蛮勇』って言うんだよ？

高速で動き、頭を掴んで地面に押し付ける。

「たかが十いくつの娘に捕まってたまりますかっての」

「ムゴッ！！」

「では。また運が良ければ逢いましょう。……いや、逢いたくはないかな？…あと、志鳴徒から伝言」

志鳴徒ならともかく、詩菜も復讐の範囲内に入ってるだろうなぁ……。

……胃が痛い…。

「藤原氏を救えなかった。スマン」

「……志鳴徒はどこだ」

「さぁ？生きてるか死んでるか。まぁ死んでる可能性の方が高いだろうね」

「…く、っそ……輝夜ぁ！！」

……。

漸く、到着。
ここまで来るのに何度、吐きそうになったか。

「……ほら、輝夜…服」
「有難う、ちゃんと二人分あるわね」
「…今度からやる時はちゃんと私に説明してくださいね？」
「ハイハイ」

……着替え終わったところで、どなたですか？

「…『蓬莱の薬』を開発した人よ」
「姫様！？」
「大丈夫よ。この妖怪は信頼出来る」

…その言葉でグッと来た涙を抑えつつ、言葉を喋る。
号泣の『衝動』。収まれ。

「ご紹介に預かりました。詩菜と申します」
「…私は『八意（やごころ）　永琳（えいりん）』よ」

……八意、って…『八意思金神（やごころおもいかねのみこと）？』

「……もしかして、天才。なんて呼ばれてません？」
「…ええ、なんでわかったのかしら？」
「『八意』なんて呼ばれているのでもしかしたらと、思いまして…」

その言葉で視線、というかようやく波長があったような気がする永琳さん。
…そんな見詰められても。

「……貴女、大丈夫なの？」

……はは、流石は天才。って訳ですか？
あっさり見抜かれちゃったよ。

…ぶっちゃけ、大丈夫じゃないです。

「誰も居なくなった所で、思い切り爆散させますので。大丈夫ですよ……」
「……今すぐ吐き出した方が良いわ。溜め込むと後々、辛くなるわよ」
「…それもそうですが、初対面の方に泣き顔を見せる訳にはいきませんって…」

恐らく、彩目に再会した途端に思いっきり泣きますよ。
見付からなかったら、紫か幽香か。
場合によっちゃ天魔もありえる。

「…医者としても人としても、恩人である貴女のＰＴＳＤを見逃す訳にもいかないわ」
「……あら、医者だったんですか」
「…転生する前、貴方は医者の前で泣いたりしなかった？」
「……いや、輝夜？それは誰だって子供の時があるんだし、誰でもあるでしょ……」

……でも、ま。どうせ詩菜は子供なんだし。
…いっかな……？

良いかな。って思った途端に能力が解除され、普通に立つ事を維持出来なくなった。
膝が崩れ、手で身体が倒れるのを支える。

藤原は死んだ。妹紅には恨まれた。友人とは言えないまでも知り合いだった妖怪は全滅した。
この世界を牛耳ろうとかは更々思わないけど、この文句は言わせてくれ。
どうして、この世界はここまでままならないんだ？

「……ぁぁぁぁあああああああアアアッッ！！！！！」

思いっきり、
右手を握り締め、

後ろに振りかぶって、
能力をここまでかと言う位に集中させて、
地面を叩き、砕き、貫く。

……しばらく、寝よう。
頭がスッキリするまで、『衝撃』が私を揺り起こすまで、
…フフ。そうだな…ちょっと疲れたよ……。

《ｓｉｄｅ　輝夜》

詩菜が叫びながら拳を地面に叩き付けた。
土は抉れ、ひび割れが縦横無尽に走り始める。

「って！これ大丈夫なの！？」
「姫様！離れましょう！！」
「ッ！詩菜っ！！」

急いで詩菜を抱え、空に飛び上がる。
どうやら拳を叩き付けた直後に失神したみたい。

…色々、迷惑をかけちゃったわね。

「……永琳」
「…恐らく、能力のリミッターがいきなり外れたショックで気絶したのだと思います。しばらくは寝かせておきましょう」
「…そうね」

……ごめんなさい詩菜。まさかそこまで追い詰められていたなんて…。

「……彼女が、地球で初めての友人。ですか？」
「…そうね。彼女は『詩菜』っていう名前で『志鳴徒』っていう名前でもあるわ。見掛けは少女だけど志鳴徒になると青年になるわ。……不老不死なんてどうでもいいって精神の持ち主よ」
「……すみません。何処から突っ込めばいいんですか？」
「本当よ。驚く事に前世の記憶を保持してるわ。なんでも前世は男で……月に人が移る前の時代に産まれたみたいだわ」
「……」

あ、永琳が弄くりたそうな目付きになった。

「……言っておくけど、その子に何かしたら怒るわよ」
「…姫様も変わりましたね」
「あら、そうかしら？」

……この子に影響されたのかしらね？フフ。

跡始末。

《ｓｉｄｅ　■■■■■》

気が付くと、俺は居間でテレビを見ていた。チャンネルは何処かの報道番組のようだ。
無論、こんな体験も二回目だ。既に俺は『これ』が夢だという事に気付いている。
…まぁ、気付いたからどうだという事も無いんだがな。

「おい、■■■■■」

すると、いつの間にか向かいの席にお兄ちゃんが座っている。
…何て呼んだか聞き取れなかったけど、多分俺の昔の名前だろう。

「……久し振り、で良いのかな？」
「んな事よりもだ。お前、一体何がしたいんだ？」
…うん、変わってないね。こっちの話を聞かない所も。
「……なんだろうね。昔も今も、分かんないよ」

「お前それじゃ駄目だって、いっつも言ってるだろが」
「…分かってるよ」
「お前のは分かってる振りだっつの」

……手厳しい所も。

「……」
「……オイ、黙んな。こっち見ろ」
「…じゃあ、どうすれば良かったんだよ」
「は？お前の人生だろが？」
「…そう言って『お前が決めろ』って言って…結局間違えたら怒ってさぁ……」

情緒不安定な今だからこそ出来るけど、昔だったら考えられない行動だ。
兄貴にブチキレるとは…。

「じゃあどうすりゃ良かったのか言ってくれよ！！勘違いだけで嫌われたくねぇよ！そんなんだったらいっその事なんでも命令してくれた方が楽だしマシだわ！！」
「テッ、メェ！！」

殴られた。理不尽な位にダメージが来た。マジ頬痛い。くそ、泣きたくなってきた。

「……クソ、時間切れだ」
「…？」
「もうすぐ『お前』が目覚めて夢が覚める。俺も消える」

…夢なのに、夢っていう自覚あるんだな。

「いいか？そろそろ覚悟決めろ。テメエで目標定め…やｇ……」

ノイズ音が頭に響き渡る。ついでに映像も古くなったビデオテープのように、すりきれたように砂嵐になっていく。

《ｓｉｄｅ　詩菜》

「……どうしろってんのさ兄ちゃん……」

「ッッ詩菜!?起きたの!?」

声がする方を見ると輝夜がこちらを心配そうに見ていた。

……ああ、衝撃を解除して倒れたんだっけ…。

…それであんな夢を見たのかな…？

「……どれくらい寝てた？」

私が倒れたのは夜明け直前だったから……今、見えてる星空は一日中気絶していたのかな？

「一週間位よ？貴女を庇いながら追手から逃げるのは大変だったんだからね!?」

「……そんなに寝てたのか。ありがと」

動く気が起きない……まだ寝足りないのか、私？

……立ち上がろうとするのもだるいなぁ……。

……ん？

「……何その顔」

「…いや、貴女が礼を言うなんて……」

…失敬な。

「…そういえば、八意さんは？」

「呼びにくいでしょ？永琳で良いわよ」

「……居たのか。しかもそんなに近くに」

…枕元に居たとは。

「……んじゃ永琳さん。……えーっと」
「…何かあったんじゃないの？」
「……忘れた」

何か言おうと思ったんだけど……。

「…何よそれ」
「……あっ、」
「「？」」

変化、鎌鼬。

一瞬にして肉体が消え、私にかかっていた布団のような物がパサリと落ちた。

「「！？」」
「ちょいと失礼」

一応声をかけておく。

「詩菜ッ！？どこにいるの！？」
「…いつもらしくないねぇ輝夜。前にあっさり見破ったでしょ？」
「ッあっ！風！？」

その返答には答えず、まっすぐに上昇する。
…どうして人間の姿というか実体化した時は、空をこんな風に飛べないのかね……？

木々を超え雲を超え、空を超えて大気圏ギリギリのつもりまで高度

を上げる。
気だるさはまだ残っているけど、この状態ならば力を入れなくても動ける。

あぁ、そういえば初めてこの世界に来た時もこんな感じだったなぁ……。
太陽の下、大空を駆けたのは快感だったなぁ……あの時は猛烈に喉が渇いてて…。
……その後すぐに生き物を殺したんだっけなぁ。
なんで殺したんだっけかな？……ああ、攻撃されたからか。
それで何でか女の子になって能力が開花して、解んない事ばっかだ。

お兄ちゃん、覚悟って何さ？
結局、目標も何がやりたいのかも解んないし…。
こんな愚かな弟（いや、妹？）を許してくれ。

でも、相変わらずのこんな世界だけど、
精一杯生きてみようと思ってます。うん。

変化、詩菜。

空気が無くても、案外妖怪は平気なのかね？それよりも寒いけど。
実体化すると、空中に固定されたような感じにしか浮遊出来ないんだよね。

さて……。

よし、爆散させよう！！

今までの経験上、私の『緋色玉』は十センチ圧縮すれば爆発範囲は一キロに拡大するから、

１０００ｍ＝（拡大倍率）×０．１ｍ
（拡大倍率）＝１０００ｍ÷０．１ｍ
（拡大倍率）＝１００００

つまり範囲は元の空間の約１００００倍になる。
そして私は既に地上の輝夜達が見えない程の上空……高さ何キロだこれ？

初めての時みたいな４０００ｍってレベルじゃねぇよ。
明らかにチョモランマとかエベレスト、超えてるよ。勘だけど。

……まっ！これなら全部はっちゃけれるか！！
エベレストが確か９０００ｍ無い位の高さだから…うん！圧縮する範囲は私位の大きさでいっか！

集中して、目の前の空間に手を添える。
能力発動。空間を指定。全方向からの衝撃。圧縮。
……ッッ！流石に…キツイ……！！

圧縮完了。流石に大きさはビー球位には納まり切れなかった。
……ハハハ。

「……な～に作ってんだか…」

ちょっとしたサッカーボール位の黒い緋色の玉を上に投げて、バランスを崩すのも無視して、

「…死～にさ～ら…せぇぇ！！！」

真上に蹴り上げた。
そのまま私は落下。重力に引かれて落ちていく。

あ～…身体が急速に凍り付いて行くのを無視すれば、中々に快感かも。
全てが私を追い越して行く様で、ちょっと悲しくもなるけど。

落下を初めて十秒後。
『緋色玉』が爆発。

空間が巻き込む範囲は私の身長の１００００倍だから、約十二キロ。
半径六キロの爆発。

うむ、流石の範囲。自由落下じゃ回避が間に合わなかった。
重度の火傷、全身複雑骨折、内臓破裂、全身打撲。

……永琳さんに怒られるかな？

「……姫から貴方に関する事を色々と聞いたわ。それに今回の行動で分かったわ」

目の前に手を素早く動かし治療をしながら私を見つめ、しかも目が完璧に笑っていない阿修羅が居る。

「貴女、馬鹿じゃないの？」
「永琳、違うわ」
「姫様……」
「彼女は馬鹿じゃないわ。変態よ」
「それは本当に傷付くから止めてくれない！？イタタタ……」
「…そうですね」

「納得された!?あだだだ」

衝撃反射で見事な着地をしても、そもそも瀕死どころか三途の川を渡ってもおかしくないレベルの傷を負いながらも、生きていた私ではあるが、如何せん治療しなければ即座に御陀仏である。妖怪だけど。

…それにしてもこの手際。永琳さんは医者っていうか、天才ドクター?

「応急処置は終わったわ。……よく死なないわね」
「妖怪ですんで」
「…妖怪でってだけじゃあ、これは説明出来ないわよ……」
「……ハハハ」
「…それで?見た感じ、スッキリ出来たの?」
「うん。まだ懸案事項は幾つかあるけど、大丈夫」
「そう、よかったわ」

何か…スカッとした。

さて、あれから一ヶ月。
傷も完治して、輝夜一行とは別れた。
私が付き添って援護、護衛すると言う案もあったけれど、
これは丁重に断った。
いつ終わるかすら分からない逃避行なんぞ御免である。
…う～む、これだけ言うと冷たくみえるな私。まぁ否定しないけど。
多分。

まだ見てない有名な妖怪がいるし、
それに人の流れと言うのは、流れに接してないと解らなくなるからだ。

……妹紅の事もあるし。
とりあえず、京に一度戻ってみる。まぁ様子見で。
その後は何時ぞやの様に天狗の家を拠点にして、全国をうろうろしようと考えているけどね。

などと、思って藤原氏の家を訪ねたのだが……。
そこは既に、廃墟になっていた。

……当主が死んだからって、この家がここまで寂れる？
幾ら何でも妹紅が住んでたでしょ？
…あ～、くそ！藤原氏がここに寄らない時にいた場所も調べとくんだった！
それならアイツの関係者を伝って、妹紅の場所が調べられたかも知れないのに！

……いや、あそこまで秘匿してたならもしかして誰も知らない可能性もあるのかな？
…どちらにせよ、手詰まりか……。

一応、帝と翁に与えた不老不死の薬『蓬莱の薬』も探ってみた。
結果、私が知っている物語とほとんど変わらなかった。
変わっていた部分は、富士山じゃなくて八ヶ岳に後で変更になったって事ぐらい。

……まぁ、逢ったって何を言えばいいのかも分からないし…。
このままの方が……良いのかな…。

あー！メンタルがどんどん弱くなってきてるぞ私！！しっかりしろ
私！！

一方、その頃…

《ｓｉｄｅ　彩目》

私は京で何が起きたか。そして詩菜に何があったか等は露知らず、退魔師として旅を続けていた。

なんやかんやで詩菜とも逢わずに５０年が過ぎ、そしてこの依頼をどうしようか必死に悩んでいた。

単に依頼内容は簡単に見えたのだ。

『あの村にいる妖怪を退治してくれ』という、至極簡単な物だと思っていた。

「…簡単だと思ったんだがなぁ……」

「ん？どうした？質問か？」

「いや…」

そして今、その妖怪が目の前にいる。

……普通に寺子屋で子供たちに様々な事を教えていた。

…参った。

この妖怪『上白沢慧音（かみしらさわ　けいね）』は、予想以上に人に好かれている。

同じ半人半妖みたいだとか、いきなり訪ねた私を快く泊めてくれたとか、本気で人間が好きだとか……なんか、もう、そういう所を見せられたら、斬れないじゃないか……。

私は自分の事を『情に弱い』性格だと思っていたが、ここまでとは！！

「……彩目さん。キミは授業中にいきなり机に頭を打ち付けて何がしたいんだ？」

「ハッ！？」

ゆっくり風呂に入りながら、今後の事について結論を出した。

……断ろう。
この依頼は果たさず、依頼人にも逢わず、何処かへ逃げよう。
三日間と少しの間、考えて決めた結論だ。後悔はない。

…この村からお暇する事を上白沢に話すか。
もう村長に近い尊厳を持っているのはどうかと思うが、あの方はそれをいやいや勤めているとの話だ。
半妖にしては人間が出来すぎている。駄洒落ではない。

「上白沢氏、ちょっと話が」
「……そうか。なら人目がない所へ行こうか。彩目さんもその方が良いだろう？」

…何故？
特段、私はそんなに重大な話をするつもりもないのだが？

が、何やら異様な迫力で私はそのまま頷いてしまった。

村から外れた森の中。

……何故、私は上白沢氏と一対一で向き合っているのだろう。

それも、かなりの険悪な雰囲気の中で。

「…そうだな。単刀直入に訊こうか。『キミは私を退治しに来た刺客だろう？』」

「は？いやっ、まぁ、そうでしたが……」

？？？

……あ～…もしかして、かなりの勘違いが起きてないか？

「そうか。やはりな…」

「……あ～、もしもし？」

「私はここで死ぬ訳にはいかない。頼む！見逃しては貰えないだろうか！？」

「おーい？」

「確かに私は半獣で獣人だ！！だが、寺子屋の子供達には関係無い！！」

「いや、人質を捕った覚えも無いんだが？」

「あの村の人達は皆いい人達ばかりだ！！彼等は関係無い筈だ！！」

あ～、上白沢氏の欠点はヒトの話を聴かない事か？

「いや、だからそれは勘違いであってだな」

「…何が勘違いなんだ?既に包囲しておいて…!」
「は?……ッッ!!」

……ふん。なるほどな。

森の中だった事もあってか、いつの間にかかなりの人数に囲まれている。
私以外にも、退魔師に討伐を依頼したという訳か。
…それも集団組織に。

上白沢氏が私と一緒に外に来たのは、戦闘で村に弊害が無いようにという訳か…。

「おぅ、彩目だったか。連れ出しご苦労だ」
「お前らは?話は聴いてないが?」
「テメェと同じだ。そこの妖怪の退治で来た」
「まぁ、女は下がれよ?退治は男の仕事だぜ」

……まぁ、詩菜に再開してから男装は止めたしな。女か。

「なんでもこいつ、かなりの実力だそうだ。お前ら下手こくなよ!!」
「「「「へい!!!」」」」
「くっ!!」

……はぁ。駄目だな私は。
これじゃあ母親殿に甘いなんて、言えないではないか。
…遺伝かな？それもいいな。

「いでぇ！！おっ、俺の腕がぁ、ねぇ！？」
「…なんだ彩目？裏切りか？」
「ッ彩目さん！？」
「裏切ってないぞ？元から私は」

妖力解放。霊力解放。能力展開。
ふふん、この辺りも母親譲りってか。

「半妖だ」

「ッッんならよ！テメェから退治してやるわァア！！」
「五月蝿いぞ。『人間』？」

あ～あ、これではまんま詩菜ではないか。

「上白沢氏。援護を頼むぞ」
「キミも半妖だったのか！？」
「それは、後だ！！来たぞ！」
「あ、ああっ！分かった！！」

私の能力は『刃物を操る程度の能力』
例えるなら、刃物ならば全て操れる。

だが逆に私は凄腕の剣術を持っている訳ではない。
名刀も素人が使えばただのカミソリだ。まぁ…素人のつもりもないが。
詩菜が言うには、
『刃物による能力ならば、それも再現できる』
『そしてそれを引き出すのは彩目のイメージ力、想像力で決まる』

「ッテメ!どっから刀を出した!?」

詩菜はどこからこんな物語を引き出したのだろうか…?
しかし、念話を通じて送られてきた映像(イメージ)はかなりはっきりしたものだったが……まぁいい。

腕を斬り飛ばした刀を放り捨てる。上白沢氏と相手が疑問の表情をするが無視しておく。

目の前に手を伸ばし、虚空から刀を掴む。
刀によくある装飾は一切なく、綺麗な木目だ。一目見た時は単なる

木刀かとも思ったが…。
腰に添え、目の前にいる人間を睨む。
……まぁ、五ヶ衛門とやらは凄い腕前だ。服だけを切り裂くとは。

バシュッ！！

「あ？あ……」

私には到底出来ないな。

しかしまぁ、流石は『斬鉄剣』。刀を刀で微塵切りに出来るとは。

「お、お前……あ、悪魔か……！？」
「ふん。私にとって悪魔とはキレた時の母親殿だ」
「に、逃げろォ！！」

……ふむ。

「上白沢氏、逃がすのか？後で村に迷惑がかかると思うが」
「へ？……あ、ああ！しかし、人を躊躇いもなく殺すのは……」

……予想以上に、このヒトも甘かった。

「……決断は早い方が良い。まだ後は追える」
「既に姿すら見えないのにか！？」
「これ位なら母親殿の方が……ふふふはは」
「……す、すまない」

「いや、大丈夫だ。それではどうする?貴殿に任せる」
「……村には迷惑をかけられない。…頼む」
「了解。早く村に戻れ。人質が出るかも知れない」
「ッ!わかったッ!!」

ふふん、遅い遅い。
鎌鼬どころか風よりも遅い貴様等に、私からは逃げられん。

依頼人め。とんずらしよって。

全員を斬ってから一目散に向かったのにも関わらず、既にもぬけの殻とは。

むぅ、何か監視でもついていたのか？

「……その様子では、終わってないのか？」

「分からん。が、とりあえずは安心だろう」

「…そうか」

上白沢氏の家に結局四日間も泊まる事になった。

血塗れになって帰ってきた私を見て顔がひきつってはいたが、いつものように迎え入れてくれた。

「……結局、彩目さんはどういう立場なんだ？」

「……そうだな、説明しなければな」

私は半人半妖だ。

今回は…まぁ人間として『村にいる妖怪討伐』を受け取り、この村にやってきた。

……後で気が変わったので、上白沢氏の味方をした。

「……上白沢氏に話があったのは、依頼を話して注意を促すのと、この村からお暇しようとしていたのだ」
「……わ、私の勘違いだったのか…」
……なるほど。これが詩菜の言う『おるぞ』とやらか。
…本当、何処からそういう話を取り入れてるんだ？アイツは？

「……人間よりも長く生きる私達が一ヶ所に留まるのは、危険だぞ」
「……分かってる」
ま、私はこれでここを出るがな。

「まぁ、上白沢氏が死なないつもりであるなら、また逢えるだろ」
「…ふふ、逢えるんなら上白沢ではなく慧音と呼んでくれ」
「…それもそうか。では慧音。私もさん付けではなく、呼び捨てでいい」
「わかった」
「……ふふふ」
「ははははははは」

夜遅くまで、友人となった私達は互いについて話し合った。互いの能力や、何が好みとかも。

『予定通り』とはいかなかったが、一日遅れで旅を再開する。

……が、ここで予想外の『仲間』が増えた。

「……しかし、良いのか？守るのではなかったのか？」
「…別れは確かに辛い。だが嫌われて別れるのは嫌だ」
慧音が私について来たのだ。
…まぁ、気軽に話す事が出来る仲間というのは、なんか、良いな…。

「…それに」
「それに？」

「ここで一網打尽に出来れば、守った事になるだろう？」

朝早くに村から出たにも関わらず、既に私達の周りには何十人もの武装した奴等がいる。
お前ら……まだ子供が寺子屋に行く時間よりも早いんだが？

「……なるほど。だが大丈夫か？私と違って戦闘に慣れてる訳ではないのだろう？」
「私も戦うさ。生きていく為にな」
「…わかった。私も尽力しよう」
「ありがたい。…まぁその前に」

「「この事を無かった事にしてやる！！」」

合流？

《ｓｉｄｅ　彩目》

私にとって、詩菜とは憎むべき相手であった者であり家族である。
それ以前にあった友人家族知り合い等の関係は、全て詩菜の手によって破壊された。

そして今、私の隣には隠すべき事がない程の友人がいる。

「……なんて言えないけどな」
「？何か言ったか？」
「いや。それよりも仕事だ」
「…ああ、気は進まないが…仕方ない」

今は旅の金の為に、仕事をしなければな。
妖力を隠す事に一度は生涯を賭けた私と、能力でその歴史を隠した慧音なら人里に近付く事は容易い。

そして今回、村長に頼まれた仕事が『妖怪退治』であった。
私はもともと陰陽師だったし、慧音も人を守ろうと努力をしている。
実際にこの村では私達が一番実力を持っている。

……まぁ、勝てる妖怪かどうかは分からないが、

「『最近現れた新手の妖怪。かなりの早さで襲う』…か」

「……どうなんだ？私たちで倒せるのか？」

「実力を見てから、だな…」

山の奥地にズンズン入っていく。途中に何度も猿のような妖怪が襲ってきたが、目当ての妖怪は子供の姿だとの話なので、違うような妖怪は一刀両断しながら進む。というかこんなに弱いならば依頼にならないだろ。

「……居ないな」

「…そうだな。気配を察知して逃げたか？」

……もうそろそろ暗くなってくる…これ以上、山にいるのは危険だ。

「…仕方ない…か。村長に話して明日まで待って貰おう」

「あの村長、変に妖怪に怯える癖に人間に対しては強いからな……

…」
「彩目、それは思っていても口にするんじゃない」
「高圧的な所が腹立つんだ」
「ははは……まぁ仕方ないんじゃないか？」
「そう言うって事は、少なからず多少は慧音も思っているのか？」
「ま、まぁ！とにかく戻ろう！な！？」

翌日。
朝から山登りというのは流石にキツイ。
キリキリ出発せんか！！とか言ってくるあのクソ爺を何度斬ろうと思ったか……。

「いや、駄目だからな？」
「…ハァ」
「……それより、昨日と比べてやけに妖怪が少なくないか？」

確かに少ない。昨日ならば既に十体以上は戦っている筈だ。
なのに出てくるのはかなり小さい奴等。それも遭った瞬間に逃げ出す腑抜けばかりだ。

「…確かにおかしい」
「……何かの罠か？」
「それもありえるな……警戒をしながら進むぞ」
「…ああ。ッと！？」
「ッてぇ！！決めた瞬間に一斉に襲い掛かるか普通！？」

罠だ何とか勘繰っている間に、包囲されていたって訳か！？
それでも脅威になりえる程の妖怪は出てこない。せいぜいが昨日の猿位だ。
討伐目標の妖怪は一向に姿を見せない。

「……見事ではないが、統率されていないか？」

背中合わせの慧音から聞こえてきた言葉は、私も先程からずっと思っていた事であった。

「…ああ。恐らく頭が居るんだな」
「……もしかして、それが依頼の…」
「…飛躍しているが、ありえなくもない」

まぁ、いくら統率されていたとしても私達の敵ではない。
そもそも一体一体の実力が足らないのである。

「コイツが最後だ」
「ひ、ひぃぃ！！？」
「…待て、彼に頭まで案内して貰おう」
「……まぁ、そういう事だ。死にたくなければ案内しろ」
「…わ、わかりゃした……こここっちです…」

特に傷も疲労もなく、あっさり壊滅したな。
…この調子で頭を倒して、それで討伐目標も倒せれば良いんだがな……。

案内されて着いた場所は、此処等で一番でかい大木だった。
百メートルはありそうな大木だ。中に誰か住んでるんじゃないか？
詩菜の家みたいに。

「あ姉御ぉー！！コイツらとっちめてやってくだせぇー！！」
「あっテメッこのやろ」
「まぁ落ち着け」

頭上から、確かに妖力を感じる。

…感じるが、この量は……それにこの妖力……？
……もしかして…。

「…あ～、姉御って呼ばれるような事してないでしょ…」
「でっでも、前に俺ら助けてくれたじゃねぇかぁ！？」
「助けただけでしょ……で？依頼？依頼なら受けるよ？」

……ハハハ、ハハ…。

「アイツらを倒してくだせぇよ！！」

「あ～？……あ～…どういう事なの？」
「…知らん」
「彩目！？知っている奴なのか！？」

…なるほどな。『早い』『子供』『新参者』
全国を回っているなら、新参者には違いない。
それに京以外なら、それほど有名という訳でもないしな。

――――――討伐対象が『詩菜』とは！！
…全くもって、討伐出来る気がしない。

「……まぁ、依頼なら仕方ないか。料金先払いね」
「ええぇ！？聞いてないッスよ！？」
「趣旨をちょいと変えたんだ♪依頼は『アイツらをどうにかしろ』でしょ？ちゃんと請け負うから」

『彩目、移動するよ。出来れば天狗の家に』
『…拠点作成の途中だったんだが？』
『あ、その依頼で私を討伐か。ごめんね～？』
『大丈夫だ。……依頼を完遂出来る気がしないしな』
『今度また殺り合おうか。さて、とりあえず二人を連れて高速で跳ぶよ？友達…だよね？』
『ああ。……まぁ、説明は後だ』
『うぃ。りょーかい♪』

「くぅ！これでなんとかしてくれぇ！！」
「安い！！」
「ふへぇ！？？」

「けどいーや。……さて、お二人とも準備はよろしいかしら？」

…ハッハッハ……見事な茶番だな。オイ。

「くっ！！」

「……（慧音落ち着け。アイツは敵じゃない）」

「……（…どういう事だ？）」

「……（後だ。アイツに私達を攻撃する気はない）」

「……（…本当だな？）」

「かかってきな。姉御やら何やら言われてるみたいだが、それも今日でお仕舞いだ」

「…へぇ？面白い事を言ってくれるね？」

ニヤリと笑い合う私達。

…まぁ慧音はおたおたしていたが。

「そこのお前は下がりな。巻き込まれて死ぬんじゃないよ」

「…姉御！！頼んますぜ！！」

「……よし、うざい奴は居なくなった」

「……はい？」

慧音がポカーンとしているが以下略。

「んま、とりあえず移動だね。方角わかる？」

「東の方だ。近くまで来たら分かるだろ」

「大雑把な……まぁいっか。そこのお嬢さん、こっちこっち！」

「……え！？」

慧音が狼狽えて以下略。

「……二人も担げるのか？」
「…彩目とそのヒトって、飛べる？」
「…まぁ、一応は」
「……おお、子は親を超えてしまった」
「……飛べなかったのか…」
「…飛べた姿、見せた事あった？」

いや、確かに見た事なかったが……浮くだけならそれほど難しくない筈なんだが…。

「才能ないんだよぅ！」
「あぁ、わかったわかった！！泣くな！！」
「……あ～…あ？」

慧音が以下略

「とりあえず重力を消してくれたら出来ると思う」
「わかった。出来るよな慧音？」
「へ？いやまぁ当然だが…」
「……くそぅ」
「…まぁ、急ごう。アイツが戻る前に」
「…ハァ、掴まっててよ？」

慧音が躊躇いつつもちゃんと詩菜に掴まったのを確認し、詩菜は走り出した。
無論、私達にかかる衝撃は能力で弾いているのだろうが、初めて音速を超える体験は中々に怖い。

「うあわわわあぁぁあ！！！！」

頑張れ、慧音。

「……し、死ぬかと…思っ、た……」
「またまた大袈裟なぁ」
「いや、それが普通の反応だからな？」
「…ええー？」
「なんであんなに速度が出せるんだ……」

さて、
双方、改めて自己紹介。

「何やら彩目が御世話になっているようで、一応母親の『詩菜』で御座います。娘共々よろしく御願い致します」
「はっ母親！！？あっいや！ごほん、失礼！……とても若く見えたので…」
「いえいえ、姿など単なる視覚情報でしかありませんから」

……コイツが言うと説得力がやけにあるような気がするのは、年齢どころか性別も変わるからか。

「は、はぁ…」
「まだまだ弱い妖怪ですよ。さて貴女は？」
「あ、私は『上白沢　慧音』と申します。そちらの娘さんとは…まぁ、もともと退治する方とされる側でして…」
「……それはそれは。ほぉ…とすると…」

睨み付けられ、思わずビクッとなってしまった。

「…彩目～？私にはさんざん甘いとか言っておきながらさぁ～？退治するべき相手を助けるってのは、どういう事かなぁ～？」
「い、いやいや！？」
「ふぅん？私としての予想としては……『半人半妖に親近感が湧いた』『礼儀正しく親切な所に惹かれた』って所かな？」
「……ハハハ」
「駄目だよー？彩目ちゃんは私の物ー♪」
「ギャーッ！！近付くな！？慧音！！助けてくれ！？おい！？なんでそんな顔を真っ赤にして目を逸らすんだ！？」
「いやー慧音さんとやらは話が分かるようで♪」
「止めろオッサン！！」

少々、お待ちください……。

「さて！仕切り直しをして」
「はぁ、はぁ、クソッ！なんで息が一つもきれてないんだ…」
なんで回避に徹されただけで、弾幕や刃物が一つもかすらないんだ……。

「はてさて、慧音さんとやら」
「は、ハイッ！！」
「……いや、敬語とかいいからね？そこまで緊張する必要もないし？」
「…わかりました」
「……何だろう、最近の女の子の口調は統一されているのかな……？」
「口調？」

……まぁ、確かに私と慧音は喋り方が似ているような気がするが……。
…私達以外にも似たような喋り方の奴がいるのか？

「まぁいいか。彩目？何か食べ物ある？」
「……ない。荷物はほとんど拠点に置いてきたからな」

まさかいきなりこっちに戻ってくるとは思わなかったし、妖怪退治に必要な物しか手元にない。

「あ～……取りに行きますか。紫に力を借りて」
「他人にやらせるのかよ…しかも大賢者に……」
「大賢者って……」

「紫、御人好しだし？」
「……あ～あ。私は知らないからな」
「荷物は彩目達のでしょうが…いってきまーす」
「はい、行ってらっしゃい」
「…ああ、行ってらっしゃい」

「……彩目？ほんっとうに彼女は母親なのか？」

…一番の疑問がそこか。
まぁ、わからないでもないが…。

「正確には私を半妖にした母親だ」
「……半妖に？ちょっと待て！それは…」
「アイツがいきなり私を襲って血を飲ませた。強制的に半妖にされたんだ、私はな」
「……」
「…まぁ、何を思っているか予想は着いているが…既にこの問題は解決した話だ」
「解決？」
「ああ、和解したとも言う」

問題は水に流すか否かだがな。

……既に流されている、か？

「まぁ私が言うべき事ではないが、アイツがやった事は外道だ」
「外道で畜生道で、人道上から見れば死罪か流罪か。まぁ真っ当に生きれなくなるよね」

そう言った直後に玄関から詩菜が帰って来た。
……恥ずかしいのを、聞かれたか？

「…帰ったか」
「ん、紫も渋ったけど口説き落としたから大丈夫」
「大丈夫なのか？それは……」
「食料は手に入れたから大丈夫。……ま、後悔してるよ」
「……だそうだ」
「……私はどうやら詩菜殿を勘違いしていたようだ」
「…いや、勘違いしてないかもよ♪」
「コイツの性格を推し測らない方がいいぞ。混乱するだけだからな」
「…まっ、食べよ？鍋だ今日は！！」

鍋か、それは良い。

……ん？私達の…食料…？

「…おい！？食材を全て無くす気か！？」
「私また全国を回ってるからね？また逢ったら声をかけてね？」
「無視か！？」
「えっ？あっ！？」
「ほいドボーン！！」

「「あああああ！！？」」

翌日。
見事にアイツは書き置きを残して逃げやがった。
能力使って足音から物音を全て消して行動をするとは…。
どれだけ悲しい能力の使い方だよ…。

「……なんて奴」
「…ふふ、彩目。にやけながら言っても逆効果だぞ？」
「…うるさい」

鬼と精神と境界

とある山の中腹。具体的には彩目と慧音の今日の野宿場。

「なぁんか忘れてるような気がするんだよねぇ……」
「…いや、いきなり現れて私達に言われてもだな…？」
「……相変わらず理解不能だな、君は……」
「あれ？慧音さんからの敬語及び尊敬の感じが消え失せてるように思うよ？」
「日頃の行いだろ」
「くっ！ツンデレめ！！」
「…？……つん…？」
「慧音は気にしなくて良いからな？コイツの妄言だからな？覚えなくても良いからな？」
「その内バレるから隠さなくても……」
「で！？用件は何なんだ！？」
「……。いや、忘れてる事があるような気がしたから来ただけだよ？」
「「……」」
「京で遣り残した事も無い筈なんだけどなぁ……」
「詩菜殿が分からない物を、私達が知る訳が無いだろう…」
「いやいや、別にそんな物知りって訳でも無いからね？……ん？」
「…どうした？ようやく思い出せたのか？」
「物知り…知識…記憶……ああ！酒呑童子！！『大江山の酒呑童子』だ！！」
「話題の鬼の頭じゃないか？それがどうかしたのか？」

「今年って何年!?」
「……え～っと、長徳(997年)2年だ」
「もう時間がない!?っていうか今年じゃん!?クソッ、なんで忘れてた私!!」
「お、おい!?どういう事だ!?」
「今すぐ大江山に戻らないと!!」
「ここは飛国だぞ!?どれだけ遠いと…!」
「……私等に出来る事は?」
「彩目!?」
「…大丈夫。うん」
「……危ない事をするなとは言わないが、気を付けろよ?」
「ありがと!!んじゃ!!」

「……忙しい方だな、いつも」
「むしろ周りが振り回されるがな……」
「…さて、私達は私達で進もうか?」
「ああ。アイツに振り回されずにな」
「…ふふ」
「……なんだよ」
「いや、何も?」

《ｓｉｄｅ　詩菜》

西暦９９７年。
大江山の酒呑童子（しゅてんどうじ）が討伐される。
酒呑童子、というか、伊吹萃香（いぶきすいか）が。
当然、その仲間である、星熊勇儀（ほしぐまゆうぎ）も討伐されてしまう。

オイオイ、ちょっと待てよ勇儀姐さんや。
確かにいろいろあって、ここ最近引き篭もっていたけどさ？
まだ勝負は着いてないでしょ？

日本三大悪妖怪の一つ、酒呑童子。
……まぁ、どちらかと言うと触れ合ったのはその部下の方なんだけどね。
『星熊童子』…星熊なんだから、星熊勇儀がその『星熊童子』なのだろう。

…伝承の通りだったら、男で目が何十個もあって、数メートルもの巨体の筈なんだけどねぇ…。
まぁ…この世界が、私の前の世界からすれば常軌を逸した世界なのは、もう当たり前なのだ、ウン。

さて、もし『運が悪く』酒点童子討伐が『この世界にも存在する』

としたならば、間違いなく彼女達『鬼』は、源頼光や渡辺綱を筆頭とする頼光四天王による討伐隊に鬼に対してのみ、毒となる『酒』を呑まされ、『鬼』が嫌う『誠実さ』の欠片も無い『だまし討ち』により『退治』されてしまうだろう。

それは嫌だ。

……紫も、もしかしたら動き始めてたりするかも知れない。

本当に『御人好し』ならば、だけど。

幾ら私の能力等で、音速に近いスピードが出せたとしても、私の持久力や、山や川、湖や人間と妖怪によってスピードが落ちてしまう。

もし直線距離だけだったなら、一日で辿り付けれるだろうに。

……輝夜、月、藤原、妹紅の一件から既に何十年も経っている。

確実に妹紅は人間の平均寿命に差し掛かっているだろう。

もう過去の話だけれど、この自分が未熟だと思ったこの気持ちは何があっても晴れやしない。

……そんな憂鬱な気分で助けられても、困るだろうに。

勇儀達と出会った場所に着いた。
あの時に切り開かれた更地は、既に木々が生え揃っていて、既に面影は無い。

「……やっぱり、大江山の方か」

妖力も何も感じない。
いや、鬼が持つような強力な妖力は全く感じない。
居るとしても、中・小妖怪ぐらいだ。

「…ふぅ……」

休んでる暇はない。
もしかしたらまだ時期が違ったりして、まだ討伐隊すら組まれてない事もあるかも知れない。
神奈子・諏訪子の時のように、私の勘違いで終わるかも知れない。

でも、私は走り続けている。
何でだろう？

……自分だけが楽しくても、別にいい。
でも、やっぱり皆が楽しくないと。ね。

…うぅん、何か……気持ち悪い。
どす黒い気分と、偽善心の塊。ああ、嫌だ嫌だ。

嫌な予感は、嫌な時に当たる。それも最高に最悪にばっちりのタイミングで。

山を見付けて、入った瞬間に感じた。
鬼の強烈な妖力。それも一箇所に集中した物が。

まだ……ッ！

「まだ勝負は終わってねぇぞ勇儀ィィィ！！！」
「ッ……詩ィ…菜…！？」

襖を切り飛ばし、邪魔な妖怪及び侍どもを蹴り飛ばして、奥の間に進む。
予想通り、毒を喰らった鬼達に混じって、勇儀や萃香も倒れているのが見える。

……ふん。

「新手か！？妖怪！？」
「こいつ『逃げの大将・詩菜』じゃ！！」
「ヘッ！なんだそのヘタレな二つ名はよぉ！！」

うるさいよ外野。

「やぁ、勇儀に萃香。久しぶりだね」
「…そう、だね…すまないが、…約束は」
「守れねぇってか？ふざけんな」

口調が志那徒っぽくなってる。
けど、気にしない。

「鬼なら最期まで誠実さを見せろボケ。幾ら騙されたからって簡単に死んでんじゃねぇよ」
「…ッッ！だから、って……」
「そこの人間達。大江山の酒呑童子の討伐隊か？」
「…『逃げの大将』とやら、鬼も逃がす気か？」
「何？こんな小さな妖怪に武士が五人も六人もかかって殺そうって？」
「そこの鬼は甚大な被害を出した。見逃す訳にはいかぬ」
「……」
「この人数に一人でどう立ちまわる？」
「…卑怯だねぇ、たかが鬼の為に毒まで飲まして騙すって、さ」
「……」
「ま、大切な人間様だもんね。仕方ないっちゃあ仕方ないよねぇ」
「……貴様、何が言いたい」

別に～？何も無いよ～？
ただちょっとブチギレたいきっかけが欲しいなって。

「…さて、私は二つ名に恥じない様に行動する。お前等は人間として鬼を退治する。ほら？結論は決まったよ？」
「……」
「…ああ、大丈夫。殺しはしないよ？骨は折れるかも知れないけど」
「ふっ、ふざけブフッ！？」
「…うるさい。とりあえず、気絶しな」
「ガぱっ……！！」
「ゴガッ！？」

脳みそとか内臓に衝撃を直接、ぶち込む。多少荒っぽくして。
はい、全員気絶。
殺さないだけその分、慈悲を与えてやってんだ。

結果、死屍累々。
死んでないけど。気絶してるだけだけど。前線にはもう出れないに近い傷が出来てると思うけど。

「……毒」
「…へ？」
「毒は大丈夫？けっこうキツイ奴だと思ってたんだけど」
「…ああ、まだちょっとふらつくが…大丈夫だ」
「なんでそんな勇儀は元気なの……？」
「…見た感じ、無事なのは勇儀だけみたいだけど？」
「……ま、まぁ誰も死ななかった訳だし、良かったじゃないか？」

…酒に入っていた毒薬で鬼達を動けなくし、その隙に鬼を皆殺しにするつもりだったんだろうね。
そして私は、その酒が効いて鬼達が倒れたと同時に突っ込んできた。って訳だ。
御都合主義かい。

「…そういえば、なんで私等が襲われたってわかったんだい？」
「……勘で」
「……うさんくさいねぇ。まるで」
「美しい八雲さんのよう…フフ♪」
「……紫、いつからそこに居た？」
「フフ、私も一報を聴いて即座に駆け付けたのだけれど、そこの詩菜ちゃんに追い越されたみたいね」

胡散臭いって自認してるんだね、紫……。

「…紫、この人間達、何処かに放り込んでくれない？」
「あら？せっかく美味しい人間が来たのに。って感じで鬼が見てるわよ？」
「……もう血とかグロイものを見たくないから、気分悪くなるから帰るよ。気が変わった。それら人間は鬼が好きにしていいよ」
「…いきなりどうしたのよ？やけに大人しいわね？」

テンション最底辺。
鬱だ。憂鬱だ。疲れた。だるい。死にたくなってくる。

「いんや。気分悪いだけ……」
「…さっきまでやけに激昂してなかった？勇儀に」

「……まだ毒が抜けてないの？萃香？」
「腰が抜けてるんだよ！！」
「……とりあえず、数日は平気じゃない？人間は当分来ないでしょ…」

これでもまだ来るようだったら、問答無用で皆殺しするけど。
……ま、一応これで避難する位の余裕は出来た。

……問題は、
鬼達が素直にここから引き下がるかどうか。

なんだけど……ありえないだろうなぁ……。

……駄目だ、今度は眠くなってきた…。
何処ぞの鬼達が摂取した毒でも飲んじゃったかな…？

「……勇儀ィ」
「ん～？」
「何処かに寝る場所、無い？」
「「「は？」」」
「…眠い……ふが…」

あ……堕ちる……。
…意識が…。

《ｓｉｄｅ　ｏｕｔ》

いきなり崩れ倒れる詩菜。
即座にその身体を支える八雲紫。

「ちょっと!?大丈夫なの!?」
「詩菜!?」

紫が額に手を伸ばして体温を測る……特に熱がある様にも思えない。

「…どうしたのよ、一体……？」
「とりあえず寝かせよう。こっちだ」

勇儀の案内でとある寝室に運ぶ。
特に装飾もない質素な部屋だ。

「……」
「…私は仲間を見てくるよ」
「ええ、わかったわ」
部屋には紫と、眠ったままの詩菜だけが残った。

「理解不能ね、貴女は。…正体不明でも合ってるかも知れないわね……」
紫がボソリと呟く。が詩菜には当然聞こえる筈も無い。

ここ最近、彼女はおかしいような気がする。
鬼退治としてここに派遣された時も、自分から狂っていると言うほどの状態。
前に幽香の所へ遊びに行った時には、詩菜と大規模な模擬試合をしたと聴いた。
その時もなにやら尋常じゃない雰囲気だったとの話だった。
その前に逢った時は、娘とその友人の為にその能力を貸してくれ等、まだまともな事を聴いたけれどもやはりどこかおかしいように感じた。

今回の騒動も、やけに詩菜が情報を掴むのが早すぎる。
スキマで多方面に網を張っている私が遅れてきたのだ。
幾ら鎌鼬でも……いや、妖怪の種族や能力という問題ではない。
異常なのだ。行動や理念が。

「……んぁ？…また倒れた？」
「ッ！大丈夫なの！？」

疑いはどんどん深まっていく。

《ｓｉｄｅ　詩菜》

「…んん、眠いけど大丈夫」
「…そう、良かった……」
「……紫、ちょっと頼みがあるんだけど」
「何かしら？」
「ちょいと私の境界を弄くってくれない？」
「……何の境界を？それによるわね」
「…最近、精神が不安定でね。それを治して欲しいんだ」
「…何があったのか、訊いても良いかしら？」
「……いんや、元が人間だったからかねぇ、怨まれるのに慣れてなかったんだよ」

恐らく、妹紅に父親の事で睨まれたのが原因では無いか。と。

今まで逢った事のある妖怪、人間達は皆仲良くしてきた。
神奈子と諏訪子はまだ良かった。仲直りもしたし、ちゃんと別れも

告げれた。
彩目は……仲直りと言うのもおかしいが、とりあえず水に流すまでがとても辛かった。
藤原は、最期は華々しく散ったかも知れないけど、あそこまで仲良くしていたのが死ぬと辛い。

薄情だって言えたし思えた、あの妹紅と将棋をしていた頃の志那徒を、問答無用でぶっ殺したくなってくる。

「…単に私は物事をウジウジと引き摺る性格だって事だよ」
「……」
「百五十云歳。妖力やら神力やら肉体が強くなっても、精神がこれだもの…」
「……そこまで生きれば、人間の精神じゃあ磨耗してしまうでしょうね」
「人間と妖怪、ね」
「…分かったわ。貴女の境界、曖昧にして差し上げましょう」
「……正直な所、このやり方は卑怯だと思ってるけど」
「……けど？」
「…いや、卑怯なのはいつもの事かな？」

まぁ、他人の力を借りてしか生きていけないってのは、人間だった頃と変わってないようで、

「…紫」
「はい、終わったわよ」

……。

「え！？もう！？」

実感が無い。が、何か変わったのだろうか？
…まぁいいや。

「紫」
「何かしら？実感は何かしら行動すれば分かると思うわよ」
「そう……いや、そうじゃなくて…」

……あ～……。
…ああ、もう！恥ずかしいな…。

「式神の話、やっても良いよ？」
「……え？」

式神と鬼

《ｓｉｄｅ　詩菜》

「……何故いきなりそんな事を言い出すの？」
「いや、前から考えてた事だったんだよ」

鬼の屋敷にて。
私は……寝ながらではあるが、紫と向かい合っていた。

紫と式神の契約を結ぶ。
当然、私から自由は少なくなるだろう。
もしかしたら無くなる可能性もある。まぁそれらは紫の采配によるけど。

私は妖怪だ。前世が人間なんて関係ない。重要なのは『今』なのだから。
にも関わらず、私は人間と触れ合いすぎた。だから精神が強くならなかったのだと思う。
肉体は制限なく成長していくというのに。

そして今回。
未だに実感は湧かないが、紫の能力によって私の境界は曖昧にされた。人間の精神と妖怪の精神が。

人間卒業。妖怪学へ進学。という訳だ。

「…まぁ、気が変わったんだよ」
「……後戻りは出来ないわよ？」
「うん。むしろその方が安心できる」
「……困ったわ。ずっと断られてきたから、どういった顔をすれば良いのかしら…？」

なんじゃその悩み。

「…紫はいつもみたいに私達を煙に巻いていれば良いんだよ」
「私以上に貴女の方が煙よ。…いえ、『風』かしら？」
「なるほど、そりゃ私らしい」

思わず笑ってしまう。

…うーん、心から笑えたのはいつ以来かな？

「おや、大丈夫なのかい？」
「お、勇儀に萃香。毒は平気？」
「鬼をなめないでよ？」
「あらあら、その毒を飲んでしまったのは誰なのかしら？」
「うっ…」
「ハハハ……んじゃあ紫。さっさと式、打っちゃおうか」

そう言って私は布団から抜け出し、紫に向かって正座をする。

紫も真面目な顔になり、雰囲気も引き締まったのを感じたのか、鬼の二人も黙った。

「……最後の確認よ。本ッ当に良いのね？貴女から志願した事だから、後悔なんてして貰いたくもないわ」
「…何か矛盾してるなぁ。式になるのは私なのに」
「初めに頼んだのは私でも、貴女は既に友人よ」
「フフ、良いよ。大丈夫。…あ、でも色々と条件は出したいかな？」
「……わかったわ。貴女との契約。きちっと決めましょう」

「……どうやら、私らはお邪魔みたいだね」
「…そうね。誰も入らないようにしてくれるかしら？」
「あいよ。ほら萃香、行くよ」
「はいはーい」

パンッと襖が閉じたのを確認して、能力を使って遮音効果を部屋全体に付け加える。なんとなくの用心。

「…で、貴女が示す条件は？」
「1つ、式になるのは私だけ。彩目は私の娘だけども式神には関係無い。2つ、私に紫の能力を一部使えるような権限が欲しい。3つ、式神の関係になったとしても、友人であって欲しい」
「…ぷっ、ははははは！！」

ありゃ、中々に外した？
ここまで腹から笑ってる紫も初めてだよ。

……なんだろう。急に恥ずかしくなってきた。
端から見たら私、相当恥ずかしい事を言ってないか？特に３つ目。

「ククッ……ええ、良いでしょう。その条件を飲みましょう」
「……そうなれば、私も『八雲』って名乗らないといけないのかな？」
「…そうねぇ。…名乗る名乗らないは別に関係はないと思うわよ？」
「……別の姓を名乗るのは？」
「……それは、不味いんじゃないかしら」

……まぁ、当たり前だよね。
微妙に八雲を変えて『東雲（しののめ）』とかって名乗ってみたかったけどさー。

「…関連しているような名前なら良いんじゃないかしら？」
「あれ？良いの？」
「眷族の縛り型に近い形になるわね。条件に沿うような契約なら名を縛る真似は出来ないわね」
「…ああ、３つ目ね」
「ふふふ、なら私も条件を出しましょうか」
「訊けるような条件ならば従いましょう。そうでなくとも善処致しましょう」
「ふふ……１つ、私の夢に邁進努力協力する事。２つ、私達の互いの能力を多少の権限委譲。３つ、私の命令に強制力はない」

……いやいや、それは……。

「…いくら何でも、それは私に有利すぎる条件じゃない？特に３つ

目」

「あら、友人に命令なんて…可愛い私にそんな恐ろしい事なんて出来ないわ……」

「…良く言うよ……」

少なくとも、私は自分で自分を可愛いと周りには言えないなぁ……。

……可愛いと思ってしまった事はあったけど。

…それも、アウトか……？

「では、契約といきましょう」

「僕と契約して魔法少女になってよ！」

「……なに、それ…」

「いや、戯言。気にしないで。そしてその吐きそうな顔を止めて」

地味に傷付くから。こんな時にネタを喋った私が悪かったから。

「気をとりなおして」

「誰のせいよ……」

「…ま、まぁやりましょうや！」

「ふふ…そうね」

これで、私は妖怪に成るのだ。

「新生『詩菜』であります。今後ともよろしく。我が汝の向かう先の礎とならん事を…」

「……何よそれは」
「いや、これは言っておかないといけません」
仲魔はやっぱ『コンゴトモヨロシク…』でしょ？
「終わったかーい？」
空気を読んだのか、勇儀が声をかけてきた。

……あ、遮断効果を壁に付加したまんまだった。

「ええ、良いわよ」
「…紫様、こちらからの音声を遮断しているので、そのお言葉は無駄かと」
「……敬語の貴女は、何か……気持ち悪いわね…」
「いや、そんな事を言われましても……」

勝手に変換されてる感じなんだけど？
私の口調のように、いつの間にか女言葉に変換されてるみたいな感じ。
…まぁ昔はとにかく、今じゃ違和感を感じるどころかしっくりくるもんだから凄い。

「…じゃあこうしましょう。『言語の自由』を許可するわ」
「へぇ、そんな感じに命令が下るんだ……お？」
「これで良いでしょう」

おお、違和感なく喋れるようになった。

『命令に強制力はない』っていう条件を付けたけど、こういう許可は普通に通るのかな？

「……妖力が格段に上昇しているわね。それでも……少ない方かしら？」

「…ん～。大妖怪の式神としての妖力と、私の年月分と努力値分の妖力の総合でも？」

まぁ同世代（？）から比べれば強い方。なのかな？

そこら辺はいまいち良く解らないけど。

神力は変わりなし。当たり前か。

能力は……も、変わりなしかな？

「あ、能力はどうなってるの？」

「そうね……」

そう言うと紫は妖力の弾をを一つ、手のひらに浮かべて、優雅に中指で適当に弾いて見せた。

「ぶっ！！？」

「あっ！？ご、ごめんなさい！大丈夫！？」

「い、いや大丈夫。平気。いきなり顔面に来たからビックリしただけ…」

見切る暇もなく、弾は私の顔面に直撃した。

紫は自身の弾を指で弾く事によって『衝撃』を加え、高速で吹き飛んだその弾に私は命中した。という訳である。

なんというチート。ただでさえ何処から来るか解らないというのに、更に早くなるとか。

「貴女はどうなのよ？」
「いや…どうも感覚が解らない……ん？これか？…」
紫を真似て指で空を斬ったりしてみても、何の実感も湧かない。
「んん～！？どうやれば良いの？」
「どう、って…じゃあこの結界を分解してみて」
「分解。分解ねぇ…」
天狗の里で妖術云々を習ってなかったら、ちんぷんかんぷんだな。
こりゃ。
あ～、習っておいて良かった。
「ここをちょん切って……ホイ、分解完了」
「……能力使ってないじゃない」
「あ」
いかんいかん。いつもの通りにやっちゃった。
「もう一度……ハイ」
「…結界を分解。境界。スキマ……」
う～ん、どうすれば良いのかな？
紫の能力は『境界を操る程度の能力』
結界を分解……何だっけ。『空の○界』でそんなのがあったなぁ…。
結界を結界足らしめるのは単なる障壁ってだけじゃなくて、内と外を別つのが結界だっていう話で、修験道とかだったら山に入った女は結界を越えてしまうと石になる云々……。

内と外を切り離す。
なら内と外をごちゃ混ぜにしてやれば良いのかな？
……いや、だからその発動の為の感覚が解らないんだから……
あれ？

今、紫はどうやって結界を創った？
一回目は妖力だった。けど今、目の前にあるこの結界は妖術で出来ている？
いや、妖術なら妖力を感じていい筈だし、妖力のケーブルみたいなのが見える筈。現に一回目は簡単に見付けれたし。
じっくり結界を見ればどんなに隠そうとしても、何処を隠そうとしてるか分かっちゃうものだから。

けどこの結界には、そのような物は一切見当たらない。
つまり、
この結界は紫の能力で創られている。

結界に触れてみる。ちょっとビリッと来たけど、問題なく触れる。

……ふむ。リバース。

「ホイ」

パンッ！

「お見事」
「いきなり難易度が高過ぎでしょ？気付かなかったらどうすんのさ

？」
「ちゃんと私は技量にあった結界を出したわよ？貴女も自力で解けたじゃない？」
後からならどうとでも言えるからね？それ。
「まっ、感覚は掴めたかな？……よいや」
スキマオープン。
自覚すればあっさりと開けた。
…あれー？
「ふぅん？私のスキマとは独立しているのかしら？いつもの目や手が見えないわね？」
「さぁ？多分繋ごうと思ったら簡単に繋げれると思うよ？」
コピー能力が本家本元に及ばない訳がないでしょ？
「おーい？返事はまだかー？」
「ねぇ勇儀？もう開いた方が早くない？」
「いや、そんな契約の真っ最中に飛び込むのは駄目じゃないか？」
「なら私が霧のようにスキマからススッ、っと」
「あ！おい！？」
「あれ？なんでだろ？能力か何かのせいで進めないよ」
「…まぁ、用心の為じゃないかい？」
「……そろそろ行きますか！」
「…そうね。行きましょうか」
「あ、じゃあ紫。この部屋全体に付け加えてる遮断効果、解除出来

る？」
「……はい、これで良いかしら？」
……流石大賢者。能力の飲み込みが早過ぎる…。
これが頭の違い？それとも才能？何にせよ、天才かチクショウ。

「お、おお！どうなったんだい？」
「契約終了したよ。体調もバッチリ！」
むしろ全身からみなぎって来てるよ。何でも出来そうな予感すらしてるもん。

「いやぁいきなり倒れるからビックリしたよ…」
「ごめんね、色々と頑張りすぎたみたい」
「頑張りすぎた、って……」
……まぁ、色々とね。

「さて、私達からあなた方鬼に少しばかり提案があるのよ」
「なんだい、藪から棒に？」

私達？
いやいや、私詳細どころか話も知らないんだけど？

『話を合わせなさい。鬼達を移住させるわ。ここに居たらいつ討伐されるかわからないもの』

念話というのはとても便利だね。
精神の会話だからか、一瞬で相手の言いたい事もわかるし、自分の言いたい事も伝えられる。

まぁ、距離という制限があるけどね…。

『なるほど、それは賛成。何処に移住させる気？』
『妖怪の山よ』

……それは、

『天狗の里にぶっ込む。って訳？』

ああ、何か面倒臭い事が起きそうな予感が……。

『大妖怪が大人数住めるような地は、ここぐらいしかなかったのよ…』
『……あー、もし天狗と鬼が喧嘩でもしたら、私は天狗を助けるよ？』

あっちは生まれた時からの友人で命の恩人だ。特に天魔には肩入れするよ。

『ええ、それは構わないわ。貴女はあっちとこちらの調停者、ふふ…境界を巧く操ってきなさい』
『おぉおぉ、まさかこんな大事になるとは。大妖怪の式神は大変だ』
ま、後悔はしない。好き勝手に生きてみせるぜ。

スタンd…げふんげふん、念話が終了。ちなみに一秒も経ってない。万能過ぎる。

「頼みというのは、あなた方に移住をしてもらいたいのよ」
「……」
「『妖怪の山』という場所があるわ。この大江山よりは地脈が弱いかも知れないけど、広さはここよりも大きいわ」
「…待ちな。それは私達に『人間から逃げろ』って言ってるのかい？」

まぁ、極端に言えばそうだよね。こんなタイミングに話すのもおかしいし。

「……それも入っているわ」
「ならその頼みは受け入れられないな。私達は『鬼』だからな」

『……さて、どうします？』
『…次に人間が襲ってきて、今回のような結果に終わるのなら、強制的に移住させるわ』
『りょーかい♪』

ま、その前に事前説明を天魔とかにしないとね。

「…そう……」

「まぁそこまで言うのなら、次に襲われた時に負けないでよ？人間に」

「今回は油断したが、次こそは絶対に喰ってみせるさ」

うん、それ死亡フラグ（笑）

諸事情の説明、プラス復帰

《ｓｉｄｅ　詩菜》

家族に説明中。

「はぁ…別に私は構わないが……」

「そりゃ良かった。……そういえば、慧音さんは？」

「辺りの警戒中。…まぁ、お前が決めた事だし、私は何も言わないさ」

「…ありがと」

…もしかしたら反対されるかな、とも思ってたけど。

「なんだ、随分と私への信頼度が低いんだな？」

「…いやぁ、自分の母親が誰かに従っているのって、何か嫌じゃない？」

「そうか？」

……生前の私は職場を密かに訪れて、軒並みならない程のショックを受けた物なんだけどなぁ…。

「まぁ、良かったよ」

「…まぁ大変なら、手伝おうか？」

「いやいや、彩目が巻き込まれない様に条件を付けたんだから」
「いや、仮にも私は娘だぞ?親の手伝いをしなければいけないだろう?」
「自信満々に『自分は娘である』って言って来るヒトを始めて見たよ……」

親孝行をそんなにしたい?
……う~ん、私は今となっちゃあ逢えないし、逢いたいとも思わないし。
正直、記憶も薄れ掛けてるし?覚えてるのは一部のネタとかだし。
……まぁ、私の事だし。彩目には関係ないだろう。転生なんて信じてすら貰えないだろうし。

……言い訳ばっかだな。

「…ま、本当にその時になったら真摯に真面目に頼むよ」
「是非そうしてくれ!!」

なんで、そんなに必死なの……?

「…おや、詩菜殿ではないか。鬼の件は大丈夫だったのか?」

そんな時に慧音さん、帰宅。家じゃないけど。

「ん、おかえり~。大丈夫だったよ~?いろいろ遭ったけど」
「…そうか、遭ったのか……」
「ていうか、さ?……別に全国回らなくても、私の家を別に使っ

ていいよ？これから私は忙しくなるしさ？」
「あ～……まぁ、今度寄った時にな」

…ふむ、何か寄りたくない理由でもあるのかな？
まぁ、そこら辺の追求は止しておこう。めんどくさいし。

「ま、そういう事だから。良いね？」
「ああ、何がどうなのかさっぱり解らないが。解った」
「……君等親子について、私は何も言うまい…好きにしてくれ……」

どうしてそんなに溜息を吐かれるのですか慧音殿。

天魔に説明。

「――という訳で、もしかしたら鬼がここに移住するかも」
「…お主等はいつも厄介事を持ち来むのぅ……」
う…今回は、その…仕方ないんだよぅ！
そもそも紫の提案を聞いた時には既に実行し掛けてるんだよ！？
「いや、ワシにキレられても……」
「……そうだね。まぁ、鬼と何かいざこざとかが在ったら、私は天魔に協力するから」
「む？普通は鬼に肩入れするのではないのか？お主の立場からすると」
…そうだよね。普通はそうすべきなんだよね。
紫が甘すぎるのか、それとも私がおかしいのか……。
「まぁ、何があろうと私はこちらに着くよ。よっぽどの事が無い限りね」
「…矛盾しておらんか？」
「気にしない気にしない」
要は私は味方でいるつもりなんだから。
さぁて、後伝えるべき人物は……。

『太陽の畑』にて、

「……何故、貴女が紫のスキマを使えるのかしら？」
「かくかくしかじかで」
「分かる訳ないでしょう？」
「紫と式神の契約を結んだから」
「理解する訳ないでしょう？」
「うえぃっ！？いきなり攻撃！？ちょ、落ち着け！！理解しろ！！」

少々お待ち下さい。

「『マススパーク』！！」
「ヒトのはなsぎゃあああああっ！！？」

もう少々お待ち下さい。

「ちょ、お願い！！もう止めて！？死んじゃうから！？」
「問答無用！！」
「にゃぁあああぁ！！？」

……。

「はぁ、はぁ……満足、した…？」
「ええ。納得はしてないけど」
「……はぁ…」

来なけりゃ良かった。
来るとしても、迂闊に便利だからってスキマで来なけりゃ良かったよ……。

しっかし、いつもなら能力を使っても一時間はかかるのになぁ……。

あっさり来れた私も、遂にチートになったのかしらん。

「そう。貴女が紫の式に……」
「契約内容は式神に程遠いような内容なんだけどねぇ」
「ふぅん？」

友人関係に乗っ取った契約、っていうのかね？
まぁ、陰陽師やらから見れば、自分の命を完全に自律した自分勝手な式神に魂ごと預けてるようなものじゃない？
いや…まぁ、そんな大層な物でもないと思うけど……。

「……で、私に何の用なの？」
「特にないけど？」
「……」

だって、伝えるべき彩目や天魔にはもう伝え終わったもの。

「まぁ、お茶でも飲もうよ」
「…ここは私の家なのだけれど？」
「気にしない気にしない♪ゆったりしよう。ね？」
「……はぁ……」

……うん、紅茶が美味い。
やっぱ幽香の淹れる紅茶は美味いね。
妖力回復ハーブティー。凄いよ、ホント。

さて、これで大方伝え終わった。
他に私の友人で話してないのはチルノ達と輝夜ぐらいかな？
妖精は兎も角、月から逃げ隠れてる輝夜達を、私が見付けれるとは到底思わないけどね。

「ご苦労様♪」
「……うぅん、スキマを繋げると紫の方のスキマになるのか」

繋がる感覚と共に、空中に目が現れるから物凄く怖い。
…オイ、なんでお前ら私を睨む？

「……まぁいいや。それで、他には？」
「そうねぇ……貴女は旅を続けたいかしら？」

……？
それは私は自由に旅しても良い、って事？

「…いや、式なら紫の世話とかしないといけないんじゃない？」

かの安倍晴明はご飯をつくらせるとか、扉を開ける事すら式神にやらせたとかいう話を聞いた事があるから、てっきり紫の家にでも住んでお世話するのかと思っていたんだけど？
…ああ、無論前世で聞いた話だけどね？

「…そうね。なら料理を教えて欲しいわ」
「それは断る！」
「なんでよ！？」
「紫……その大切なステータスは、失っちゃ…ダメだよ……」
「ス、ステータス！？」
「まっ、私が作って盛って来るまで、紫は子供のように両手に持った片方だけのお箸で茶碗を叩いてはしゃぎながら待っててください♪」
「わわっ、私はそんな下品な真似はしないわよッ！？」
「……ふぅ～ん？」

そうかそうか…。
でも、どもってる辺りが怪しいなぁ…？

「とっ！兎に角！！」

赤い顔でそんなに必死に話題を変えようとしても……。

――そんなの、私が許さねぇぜ！！

「でも……」
「ッ！！？」

いや、そんなビクッってされたら……。
……どんどん弄りたくなるじゃない？

「…前に幽香から聞いた…」
「ッ……そ、それは……」

お？
適当に言ったんだけど……もしかして、ビンゴ？
これは畳み掛けるべきチャンス！！

「…美味しい料理、それも幽香が作った御馳走を目の前に……紫が」
「たっ、楽しみにしてたのよ！？悪い！？」

あ～あ、案外早く認めちゃったなぁ…。

でも……。

「いやいや、可愛いなぁって」
「ッッ！？」

その真っ赤になった顔もね？グッド！！

「ふぅ……紫を満喫したし、本題に入ろっか」
「…満喫しないでよ……」

いやいや、可愛子ちゃんを弄らないでどうするのよさ？

「知らないわよ……。んっ、ゴホン。本題に入りましょうか」

という事で、閑話休題。
振りではない。惜しいけど。

「約束を交わしたじゃない？強制権はないって」
「…まぁ、そうだけど」
「だから私が貴女にする言葉は、全てお願いよ」
「……」

……この御人好し。

「で、私が貴女にするお願いは『強い者を探して、関係をつくって欲しい』のよ」
「……協力を募る。って訳？」
「ええ。…別に『幻想卿』の基となる考えは話さなくても良いわ。断られる可能性が高くなるだけよ」

……まぁ、人と妖怪が共に過ごす考えは、殆んどが反対だろうね。人から妖怪が生まれ、妖怪から人への一方的な攻撃。それに対しての人からの報復。それをあしらう強大な妖怪。味方を集め数で上回

る人。
怨み辛みが重なっているこの世の中。
２１世紀みたいな現代ならいざ知らず、退治屋とか退魔師がいるこの時代では無理でしょ。

「つー事は、何？完全なる自由行動で良いの？」
「…ええ。何かあったらすぐに連絡を取って欲しいけれど」
「へー、ほー」

……何か、物凄い意外だ。
てっきりこきつかわれたりするのかと思ってたよ。

「失礼ね。私は友人には寛容なのよ」

つまり、出逢った当初に式神になってたりしたらこきつかわれていたと。

あぶねー……逃げて本当に良かったかも。

「オッケー、なら私は全国で力がある奴とか考えが似ている奴とかちょいとイッチャッテる奴とか奇人変人変態を紫に誘えば良いのね？」
「した瞬間に貴女を殺すわ」
「嘘だって」

そんな妖力を充満して睨まれても。

ジョークですよ、ジョーク。

「……はぁ、貴女と居ると疲れるわよ…」
「大賢者ともあろう方が、情けない」
「式にこれだけ振り回される術者も居ないでしょうね……」

あらら、返事にも元気がなくなってきた。
…う～ん、ちょいとやり過ぎたかな？
どうも元気が有り余ってるなぁ。

……あ、これが私の境界をいじった作用とか？
……。

「…ま、何かあったり訊きたい事があれば、私に連絡を頂戴」
「ん？あ、うん。……どうやって？」
「……貴女に貸した能力とか念話とかは何に使うのかしら？」

あ、なるへそ。
でも彩目との念話は、距離が離れたら全く使えなくなったんだけど？

式神と血の契約はレベルが違うというのか！？
……まぁ、どうでもいいか。

「じゃあ、早速。何か私が面白いと思うような情報とか噂話ってない？」
「……」

……なんだよ。なんでそんな半目になって溜め息つくのさ。

「……そうねぇ。『妖怪寺』の噂を聞いた事があるかしら？」

「…妖怪寺？寺なのに、妖怪？」

それは何ともまぁ……矛盾してるね。

怪談とかなら兎も角。

「朝昼は立派なお寺だそうよ？そこに居られる方は物凄い力の持ち主で、訪れる人は日毎に増えているそうよ」

「それは凄い。……って事は、夜が？」

「ええ」

夜になると、人間とは正反対に妖怪が集まるって訳ね。

ほぅほぅ、それはそれは……。

「何ともまぁ、面白いじゃない……！」

ふふふふふふふ……。

「…貴女、凄い顔になってるわよ。いえ、酷い顔だわ」

「……それこそ、酷くない？」

「さっきのお返しよ？フフ…」

お返しかぁ…それは仕方無いね！！

「よしよしよし、俄然興味が湧いてきた！」
「そ、そう…それは良かったわ」
う～ん、紫が微妙に引いてるけど気にしない！！
「さぁて！んじゃ、行ってまいります！！」
「あ、あらあら……フフ、行ってらっしゃい♪」

…元気に飛び出したは良いけど。
その『妖怪寺』って……何処にあるの？

……うわぁ……今更、大見得きって飛び出したんだし、戻れない……。
……恥ずかし過ぎるッッ…！！？

駆け込み寺にて

ようやくやって来れた……妖怪寺…。
場所を人伝に訊きまくり、一ヶ月もかかってようやくだよ……。

……あー…疲れた……。

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

さて俺、という言葉遣いの通り、志鳴徒の格好になっている。
アレ以来、使う気が起きなかったんだが……まぁ、これも境界を弄ったからかね？

まぁ、そんなどうでもいい事はおいといて。

昼間からこの寺に訪れて、尚且つこの格好で来たのは、
当然『人間』として潜入する、という事である。

昼間の様子を見て観察し、そして夜になってからもう一度訪れるという。
なんて頭良いの俺！！

……まぁ、こんな恥ずかしいバカな考えは放っておいて。

フム、流石というかなんというか……。
かなりの参拝客がいる。

……『寺』で『参拝』は合っているのだろうか？違うだろうなぁ…。
まぁ、意味は通じるだろうから良しとして。

んー、中々に立派な建物である。
寺だから…金閣寺銀閣寺？並みのご立派さ。
…あれみたいなキラッキラはしてないけど。

敷地をうろちょろしながら、人ごみをすり抜け情報収集。
…聞けば妖怪退治を受けているとの事。

ふむ。
妖怪退治の受付は……アレかな。

「ちょいとそこのお姉さんやぃ」
「はい。何のご用でしょうか？」

……なんか、ナンパみたいだな、俺…。

「妖怪退治を請け負っているんですよね？ここは」
「はい。あ、妖怪の特徴や名前は分かりますでしょうか？」
「いえ、その妖怪を退治して欲しい人達がどれだけ居るかをみたいのです」
「は、はい？」

まぁ、客観的に見れば意味不明な客であろうが、それは気にしないで、どんどん突っ込む！

「その妖怪は『詩菜』と言うのですが……」
「えと、その……一応、他の人にも見られたくない部分がある、かと思うのですが……」
「ああ、でしたら何人依頼されているかだけでも結構ですので」
「はぁ……少々お待ちください」

勝った！第三部完ッ！！

とか、まぁそんな冗談は置いといて、
こんなあからさまな行動をすれば、先程のお姉さんよりも上の人物が出てくると思う。

さてさて、お姉さんという餌にかかるヒトは本命か否か。
うぅん、ｗｋｔｋ！

……なんか、普通に名簿を持って来られたんですけど…。

「お待たせしました。『詩菜』と同じと思われる妖怪、として他にも『逃げの大将』『ロリ姉御』の名前で登録されていま――――――――」
「ちょっと待てェェ！！」
――――――――はい？」

「…えぇと、登録されてる名前は…なんだって？」
「はぁ…？『詩菜』『逃げの大将』『ロリ姉御』ですが？」

なんだ何なんだ何故だ!?何故なんだ!?
『ロリ姉御』って、何だよ!!?
そんなの言われた事も聞いた事も無いわ!!
てゆーか誰だよそんな二つ名つけた奴は!?ぶっ殺してやる!!絶対に殺す!!
姉御とロリが打ち消し合って相乗効果で最悪な名前になってんじゃねぇか!?自分でも何を言ってるかワケわからんわ!!ふざけんな!!!?

「お、お客様……?」
「ハッ……失礼、ちょっと錯乱してました…」
「は、はぁ…?」

とりあえず、この案件が終わったら、
昔から今日に至るまで、私を一度でも『姉御』と呼んだ妖怪をぶち殺そう。よし。

「それでですね。その妖怪を退治してくれと望まれている方は５０名程居られます」

……ボウズ（?）かな。あっさり人数だけ教えてくれた。
まさかかからないとは。相手もそれ相応の警戒はしているってか。

それにしても多いなぁ…ハハハ。

「……あの、もしかすると貴方は退魔師でしょうか…？」
「…まぁ、似たような者ですね。陰陽師です」
京の時の位を振りかざすつもりはないけど、まぁ多少は使うかね。
同一人物にすると年齢とか見掛けとかがとんでもない事になるけどねぇ。

「そうですか……では、何のご用でしょうか？」
「……」
一気に警戒レベルが最大に引き上げられた。
オイオイ、俺の後ろにいる一般人が気付くような警戒心を出すなよ。
……まぁ、別に用も無いけどね。

「…いんや、単なる確認。詩菜がどれだけ恨まれてるかのね」
「……」
「…はぁ、警戒は緩まないのね」
気が付けばそこら中にから視線が。
一般人からは出てない。来ているのは林の奥やら寺の奥からだ。
……とすると、視線の気配は妖怪からか？住処を追い出されるとかって考えているのかね？

…手綱はちゃんと持っとけよ妖怪寺。これじゃあ、いつ襲われるかわからん。

「……あー、もうちょっと気配を隠すような努力をしろ。って伝えといて下さい」
「ッ……！？」
「んじゃ、妖怪退治ご苦労様です。ではー」
「……はい？」

振り向かずにさっさと立ち去る。長居はしない。面倒臭いし。
門から出る時にチラッと振り向くと、受付嬢は放心状態で固まっていた。
……目の前にいる人の相手をしろよ。こっちを見るなって。
となると、あの人も妖怪に組している人物なのかね？その割には妖力とかは感じなかったけど…。
…あ、俺みたいに隠してるのか。

さてさて、受付嬢はよろしいとして。
…追ってくるこいつらはどうしたものか……。
それも中々に強そうな気配。此方が向こうに気付いている事もバレてるのかね？
多分、俺が一人になった時に口封じでもしようとするだろう。

あー……めんどくせぇ。
一人で追ってきてるみたいだし、戦う気もさらさらない。
なので……曲がり角を曲がった瞬間に、相手から此方が見えなく

なった瞬間に、周りに妖怪も含め居ないのを確認して、『スキマ』で脱出。超便利。

あーばよー！とっつぁーん！！

《ｓｉｄｅ　詩菜》

さてさて、夜になった。

詩菜に変化して、隠していた妖力もいつも通りに晒してみる。
まぁ、妖力が中級妖怪と変わらないかそれよりも下の私は、見掛けやらからも格好の獲物であって、

「ウザいッ！！」
「ニゲンナヨォォォ！！？」
「さっさと成仏しろ！！むしろ地獄に堕ちろ！！」

亡霊（？）に追われてます。
いや、むしろウィルオウィスプ？実体化したらレギオンだね。

てゆーか、こんな冷静に考察を述べてる場合じゃないっての！！

「えぇい！！何で私に追い付けてるのさ！？」
「ナンノコトダアァァー！？」
「音速で追い付いてくるなっての！！」
「オンソクッテナンダァー！？」
「でぇい！！話が通じないなぁもう！！」

くそぅ！ゆったり寺に向かおうとしたら、これだよ！！

この有り様だよ！！？

……仕方無い。
成仏どころか昇天、むしろ消滅させてやんよ！！
みっｋ……ゴホン…。

「オオォォォ！！アキラメタカ！コワッパァァァ！？」
「……うーん、小童（こわっぱ）…まぁ良いけどさ」

知識が無いのか、言葉だけは達者なのか……。

「さて、そこの悪霊ども。私を追い掛けて何の用ですか？」
「ア！？アアアァァオオ！！」
「……デビルサマナーとかは、これでよく交渉出来たなぁ…」
「オマエ！！オマエノニクタイガ、ホッホシイィィ！！」

……。

「……あんまり聞きたくないけど、それって肉？それとも身体？」
「リョウホウダァァァ！！！」

……。

「……どうしたものかなぁ……」
「ヨコセェェェェ！！」

あー……予想してたけど、こういう輩は何処に行っても、どんな存在になっても居るわけね。

了解了解……つまり、アレだ。アンタは。
『ロリ姉御』って訳ね？

「誰が寄越すかボケェェ！！くたばれェ！！」
「グッバァァァァ！！？」

竜巻を起こして上空に吹き飛ばす。
乱気流に呑まれている間に、そこ等の木々を手頃な木刀に加工して造り、神力を充満させる。
私の神力と私の妖力なのだから、反発する心配もせずにギュッと握り締め、
上空に思い切りジャンプする。

「ア〝ア〝ア〝アァァァ！！！」
「そろそろ……神の身元にッ、逝きやがれェ！！」

カッキーン

ホームラン。
上空から神力の力で、バットを思い切り振り抜くべし。
いや、振り下ろす？
兎も角、成仏。

…あー……スッキリした♪

「フゥ……」
「……流石ですね」
「ん？おやおや…」

いつの間にやら本命が登場していたようで。
噂の超人、此処に来たれり。

「いつからそこに居たのかな？」
「貴女が交渉を始めた時からですね」
「ほぉー、それはそれは……それで、貴女は有名な寺の僧侶。で良いのかな？」
「ええ『詩菜』さん。私は『聖（ひじり）　白蓮（びゃくれん）』です」
「あらま、自己紹介は必要なかったようで」

……なんか、私の知っている妖怪はどいつもこいつも、かなりの強さばっかりだなぁ…。
この人も強そうだし……ん、人か？

ヒト…じゃないよね？
あれ？でもこの感覚は妖力、じゃない……なんだろ？少なくとも霊力や神力じゃない……。

「…まぁいいや。それでわざわざ迎えに来たのは何でかな？」
明らかに狙って来ないと無理なタイミングでしょ。さっきのは。

「立ち話も何ですし私の所へ来て話しませんか？」
「…そうだね。案内してくれる？」
「ええ。勿論」

……アレだな。
私の知り合いの女は全員が美人だな。
……まぁ、どうでも良いけどさ。

「……んで、何のご用でしょうか？」

昼間に来た寺に招待されているでござりまする。

「…そうですね。貴女が山に入ったのは今日の日が暮れた辺りでしたよね？」
「そうだよ？それが何かな？」
「お昼頃におかしな客が来たという話を聞いたのです。貴女がどれだけ恨まれているかを気にする方がここに来たそうです」

……うん、どうやら巧く行ってる様子だね。

詩菜と志鳴徒はあくまでも別人である。まる。

「……それで？」

「…その直後に貴女が来ました。…恐らく、近くにまだ居ると思われます」

そうだね。目の前に居るよ。

「だから？」

「…早くここから立ち去った方がよろしいかと思います。中々の手練れとの話でしたし」

まぁ、追跡を見事に撒いてみたからね。

スキマ、最高！！

……しっかし、

「……噂通りだねぇ。何でまた妖怪の心配なんかするの？」

妖怪寺の僧侶様は、なるほど『妖怪の駆け込み寺』の責任者という訳だ。

「ッ今はそれどころじゃない筈です！」

「良いんだよ。アイツは私に付きまとうだけなんだから」

「…はい？」

付きまとう、っていうか…寄り添う？
うーん、そんな夫婦関係でもないけど、それが一番しっくり来るな。

「……知り合い、だったのですか？」
「身長が結構高くて私と同じ服装だったでしょ？」
「あ、はい。話によれば確かに紺色の着物を着ていると……」
「そういう事」

一息入れてお茶を一服。

……うーん、お茶だ。
…まだ甘い紅茶の方が良いなぁ。
中国から取り寄せるかねぇ？

砂糖が欲しい。角砂糖が。

「……追っ掛け、ですか？」
「ブフゥ！？がはげほッ！！」

追っ掛けって何！？

「あ、違うんですか？」
「ごほごほっ……なんでそんな結論に辿り着いたかなぁ！？」
「男性妖怪の間で有名ですよ？詩菜さんは」

なん……だ、と……！？

「……じゃあ、あの二つ名も…？」
「…恐らく……」

……よし。

「ちょっと待ってて。ぬっ殺してくる」
「だっ、ダメです！！ダメですって！？」
「離せぇ聖ィ！私は妄想変態野郎どもをこの世から亡くしてやるんだ！！」
「ひゃあああぁっ！？」
「ぬがあああぁぁぁ！！！」

神聖なる妖怪たち

《ｓｉｄｅ　詩菜》

予想以上の聖さんの抵抗のせいで、満身創痍になった私。
オーバーキルで気絶したのである。
……なんであんな身体能力を持ってるのよ…。

「詩菜さん、大丈夫かい？」
「ん、んぅ…？」

かけられた声と朝日で目蓋が開く。
…どうやら座敷で布団を敷かれて寝させて貰ったようだ。
そしてかけられた声の方向を向く。

……んー…ネズミ。
ネズミ？

「…夢の国……」
「お、おい？本当に大丈夫かい？」
「あー。うん多分」
「た、多分って…」

……○ォ○○さんって、いつ産まれたんだろう？
まぁそんなどうでもいい事は置いといて、

「…もしかして介抱してくれたのって、君？」
「ああ。自己紹介がまだだったな、私は『ナズーリン』だ」

……横文字？っていうか、カタカナ？
いや、カタカナはもう生まれているからありだとして……外国名だよね？完全に。

「…私は、まぁ聖さんから聴いてるかも知れませんが『詩菜』と申します。介抱、ありがとうございました」
「……何か、聖と随分態度が違うような気がするが…」
「気のせいです」
「いや、でも……」
「気のせいです」
「……」

何か……雰囲気でね？判断しちゃったのさ。

「…うん、打撲傷は無いみたいだね」
「……」
「？どうしたんだい？」
「…いや、ちょっと……恥ずかしい。の…で……」
「同性に見られた位で何オドオドしてるんだ？それにこっちは傷を見てるだけなんだよ？」

……こりゃあ、迂闊に『志鳴徒』の名前を出せない……。
恥ずかしいんだもん！！幾ら相手が女性だとしても、胸や下腹部なんて見られたくないッ……！！

「…ん？顔真っ赤だけど、熱でもあるのかい？」
「……」

……くそぅ。

「……治り、早いね」
「そうですか？いつもの事なんですけど」
既に服は着ております。ハイ。

一番酷かった二の腕のかすり傷。
包帯を巻いていて真っ赤に染まっていたのだが、ほどいてみると何も傷痕がない。

……それにしても、聖は随分な攻撃力をお持ちのようだ。
皮膚が裂ける程の力って……。

「……いやはや、すまないね」
「いえ、大丈夫ですよ」

この痛みは、全て天魔に八つ当たりしますので♪

「…何か、急に君の笑顔が黒く見えたよ」
「あらら。大丈夫ですよ？全然関係ないヒトに当たりますので」
「それは八つ当たりって言うんじゃないかい！？」
「失礼な。純然たる『八つ当たり』です」
「変わってないじゃないか！？」

うむ、ナイスツッコミ。

「……はぁ…出逢って間もないが、君の相手は大変だと言う事はよぉく分かったよ…」
「あらら、大変ですね」
「……もう何も言うまい」

さて、身体の調子は……。

…うん、ちょいと筋肉痛みたいな痛みはあるけど、問題なし……かな？
回復に注ぎ込んだからか妖力は微妙に少なくなってるけど、神力はかなり貯まってるし大丈夫かな？

能力は……うん、変わらないね。スキマをちょいと開きにくいぐらい。

「……それが、君の能力かい？」

「いえ、このスキマは違いますよ？私の能力は『衝撃を操る程度の能力』ですから」

こうしてみると、二つの能力を持っている風に見えるのかな？

能力を持っている奴自体が少ないから、二つも持っている奴は早々居ないと思うけどね。

「……あー、訊いた私の方から言うのもあれだが……そんな簡単に喋って良いのかい？」

「能力にそれなりの自信があるので」

「ほぉ」

にも関わらず、聖にあっさり負けたけどね……。

「詩菜さん！大丈夫ですかッ！？」

「いやー、聖さんの攻撃は痛かった痛かった」

「はぅ…す、すみません……」

「……君も意地悪だね…」

「へへへ。いんや大丈夫だよ。介抱もあったし」

微妙に倦怠感が残っているが、それも気のせいと言い切れる位だし。
まぁまぁ、一日で良くもまぁここまで回復出来たもんだ。

「よかった……」
「…さて、と」

立ち上がって、柔軟体操にラジオ体操モドキを開始する。

おおー……バキバキ骨が鳴る……。

「……回復力が凄いね。普通は一週間もかかると思ったんだが」
「あれくらいなら昔から浴びてましたよ」

幽香とか、紫とか、幽香とか、輝夜とか、優儀とか、幽香とか。
マスタースパークは鬼畜過ぎる。何あの破壊力。土地がごっそり無くなるんだもの。

「……うし。五体満足！」
「…君は言動以外も常軌を逸してそうだ」
「失礼な。私は１７１歳の弱小妖怪です」
「「１７１！？」」
「うぇいっ！？何ですかいきなり！？」

１７１歳の弱小妖怪。種族・鎌鼬。『妖怪の大賢者』の式神ですが何か？

「……いや、妖力の量から生まれて百年も経ってないかと思ったんだが……」

「……」

……確かに私の妖力は少ないけどさぁ、百年経ってないかとって……酷くない？

百年レベルの妖力はあるわ！

今はちょっと使って減ってるだけなんだって…。

「……」

「……いや、申し訳無い」

「す、すみません…」

「…はぁ、いや謝らなくても良いですよ。聖さんもなんで謝ってるんですか……」

…むぅ、本題に入れないなぁ。

こんな時でも参拝客は訪れるもので、聖はそれの相手をしに出ていった。
よくよく気配を探ってみれば、寺中に妖怪の気配がわんさかと。
よくまぁこんな駆け込み寺をやろうとしたよ。

さてさて、なんやかんやで泊めていただいた事に関して感謝の念を。

「いやいや、聖は元から泊める気みたいだったし、私らも話は聞いていたしね？」
「私等？と言いますと、他にも仲間が居られるので？」
「ああ、そうだね。紹介しようか？」
「それは是非とも」
「んじゃあ行こうか」

ナズーリンに連れられ、部屋を後にする。
この寺、微妙に構造が複雑で内部の様子が外からは全く見えないように移動する事が出来る。
内部構造を覚えなければ、あっさり迷ってしまいそうだ。

「失礼します。御主人様、お客様です」

一番始めに連れてこられたのは、大きな広間。
恐らく仏等を奉っている部屋かな？
それにしては、肝心の大仏がないし……居るのはナズーリンの言う『御主人様』だけ。
髪の毛が黄色と黒の斑模様。というか虎柄。頭のてっぺんに花が咲

いている。
ずっと此方に背を向けながら、微動だにしない。

……つーか、寝てないか？アレ？

「……御主人様？」
「…ナズーリン、私は外に出てるから。ご存分にどうぞ」
「はい？……あっ…」
「ではでは……」

真っ赤になったナズーリンを尻目に扉を締め、畳に腰を下ろす。

「……～～～～～～～！！」
「～～！？～～～～～～～！？」
「～～～～～～～～～！！」
「～～～～～！！？」

……。

…あ、スキマにそういえば幽香特製の紅茶があったっけ。

……ズズーッ…。

「……美味い」

出来れば砂糖が欲しいけど、我儘は言えぬ。

「～～～～～～！！」
「…～～～～……～～～～～～」
「……～～～～～～？」
「～～～！」（キリッ！）
「～～～～～～～！！」
「～～～！？？」

何か今、面白い話が聴けそうだったけど……まぁどうでもいいや。
キリッ、とか聴こえたような気がするけど、気のせい気のせい。

「…はぁ、お待たせしました」
「……でわでわ、お邪魔します」

再度、扉を開き内部へ入る。
今度はちゃんと此方を向いて出迎えてくれた。

……多少、涙目なのは気のせいとしよう。うん。

「ええと貴女が詩菜さんですね。初めまして、私は『寅丸（とらまる）　星（しょう）』と申します」
「いやいや、こちらこそよろしく頼みます」

うむ、好印象なりけり。

寅、ねぇ。虎の妖怪か。
うーん、このヒトも強い気配がするなぁ。

円形なのか星形なのか。
ま、それこそどうでもいい事か。

「今、何か物凄い不謹慎な事を考えなかったかい？」
「嫌ですねナズーリン。そんな不謹慎な事を考えるヒトに見えます？」
「ああ、見える」
「……すいません」

うーん……どうもこの鼠には頭が上がらないみたいだ。
鎌『鼬』なんだから、鼠は捕食する方なんだけどなぁ…。
……『窮鼠、猫を噛む』？
いやいや、私鎌鼬だっての。

「え、えーと……」
「ああ、いや申し訳無い。御察しの通り、私が『詩菜』と申します」
「はい、よろしくお願いします」

うーむ、美しい大人の女性って感じだね。
私なんかとは大違いだ。

ん？おや？

神力？

「…失礼ながら、貴女は妖怪ですよね？」

「「ッ！？」」

……アレ？もしかして地雷踏んだ？

「……確かに私は虎の妖怪でもありますが…歴とした毘沙門天の代理でもあります！」

「あぁ、毘沙門天の代理ですか。なるほど」

なら神力があっても当然か。

「……もしかして、君は初めから妖怪だと見抜いていたのかい？」

「へ？ええ、神力が見えたので何故かと思っただけですが？」

「「……」」

あ…ら……？

居たたまれない空間から脱出し、ナズーリンに再度連れられ寺の奥に来た。

「…御主人様は私らと違って、妖力を隠して信仰を集めているのさ。毘沙門天として人間から信仰をね」

「……つまり、あっさりとそれを私は見破った。と…」

……それなら、まぁ…あんな空気になるよね…。

「…まぁ私が連れてきた事もあるし、御主人様も油断していたのかね」

「……それと寝起き、という事もありそうですけどね」

「…まぁね」

毘沙門天かぁ……。

龍の眼光⇒（マカカジャ）×４⇒メギドラオン

うーん、鬼畜だ。

「…ちょうど時期としては良かったよ。村紗が居てね」
「ムラサ？」
「そう、村紗船長。…皆居るかい？」

廊下の奥の扉を抜けると中庭に出た。
そこには尼の格好をした女性とでかい入道雲と何故かセーラー服を着た女性がいた。

……いや、ツッコミ所が多すぎる。

「ナズーリン。彼女は誰なの？」
「例の妖怪。詩菜だよ」
「へぇ、彼女が？」

セーラー服って……時代背景は何処に行っちゃったのよ？
それに良く良く見たら、この入道雲。顔がある。
妖力を纏っている所を見ると妖怪なのかな？
……とすると『見越入道』かな？

……って、そのまま見上げてたら死ぬんじゃなかったっけ？見越入道って？

「詩菜！！」
「ふぇいっ！？何でしょうか！？」
「……ボーッとしてる君を紹介している所だよ」
「ああ、すみません」
「なんか不安ねぇ。貴女、怪我は平気なの？」
「ええ、大丈夫です」

……そんなに重傷だったの？私は？

「御心配ありがとうございます。えーと……」
「ああ、私は『雲居（くもい）　一輪（いちりん）』こっちが『村紗（むらさ）　水蜜（みなみつ）』で、この雲が『雲山（うんざん）』よ」
「えーと、一輪さんに村紗さんに雲山さんですね。よろしくお願いします」
「よろしくねー♪」
「なんで私が下の名前なのか解らないけど、よろしく」
「勘です♪」
「……なんとなく貴女の性格が、今ので解りかけたわ…」
「それはそれは」
「……」

しかし……、
……何故、私はこう…寺の重要人物に挨拶しているのだろうか？
それも……結構な期待を寄せられている気がする……。

謎だ……。

まぁ、そんな多忙な一日も過ぎていった。
昼食や夕食もご馳走になった。

…しかし、何故私もあの輪に入っていたんだろう？
聖に寅丸、ナズーリンに村紗、一輪に雲山。
どうみてもこの寺の仲間達の食卓の輪に、私は混じったらおかしいと思うんだけどなぁ……？

「…ナズーリン」
「ん？どうした？」
「どうして私は普通にこの家族に混じってるのかな？」
「…訪れたのは君だろう。この寺は『来る者拒まず』だ」
「……納得いかないなぁ」

妖怪と人間の共生。
紫の夢に近い形でこの寺は実現している。

だけど、それはすぐにも破綻しかねないギリギリの状態で続いている。

……紫が直接来ないのは、そのせいかな……。

「……そしてさぁ」
「うん？まだ何かあるのかい？」
「……なんで私は、抱き枕になってるの？」

ナズーリンが私の世話係になったのは分かるさ。昨日の怪我もあるしね？

なんで寅丸は後ろから抱きついてきているんだ!?

「…御主人様が可愛いと思っているからに決まってるじゃないか」

「可愛いって……」

そんなの言われても、正直それほど嬉しくないんだけど……。

「…スー……クー……」

「……ナズーリン」

「…あまり五月蝿くするなよ。御主人様が起きてしまう」

「寅丸から抜け出すの、手伝って…」

女性にこんな言葉は禁句だけど……重い……。

「…頑張れ」

「…ううぅぅわあぁぁ……」

長い長い溜め息が出た。恐らく幸せが一年分は詰まっているに違いない。

翌朝。

「ふぁ…？おはようございます……」

「…お、おはよう……」

「…んむ…厠……」

「御主人様、厠はそっちじゃないよ」

「……んー…？」

「…かっ…身体が……」

べきゴキバキゴキィッ

「……すまない。今度からは助けるよ…」

「……うん。お願い……」

こ、腰と首が……。

ボッコボコにしてやんよ！！

天狗の里に急行中。

理由？

えーっと、聖の所に泊まって何日か経ったんだけど、たまたまその時に『ロリ姉御』の真相を偶然にもちょいと聞いたんだよ。偶然だよ？うん。

何でも『どこぞの天狗』が、どこぞの天狗以上に素早い妖怪が『姉御』と呼ばれているのを聴いて『そいつは我等一族の希望の星じゃあ！！』とか言い始めて、じゃあもっと親しみやすい二つ名をつけようとかっていう事で、男の大天狗以上の権力者及び私を好んで止まないファンの天狗やら妖怪を集めて大会議を興し、結果、新興宗教かとも思う程の熱血振りのロリコンどもが決めた二つ名が『ロリ姉御』って訳で、

……ぜってーぶっコロス。

《ｓｉｄｅ　天魔》

儂等はその頃、とある新入りについて頭を悩ませておった。
その新入りは、里に新しく入ってきた天狗で、この里から産まれ出

でた者ではなかった。
その為か、年齢が百にも満たぬ存在の筈が、かなりの力を持ってこの地にやって来よった。
他の天狗達は『力で押し潰すべきだ』や『追放しろ』等の意見が出ており、果てには『殺してしまえ』等と言う輩もおった。
無論、そういう天狗は大天狗の意見も儂と同意見じゃったので、その天狗は消えて貰ったがそれでも大多数の意見が、その娘は危険だとの話ではあった。
…儂は仲間外れや割れる事、そういう事が一番嫌いじゃ。
だから儂は出来る限り穏便に済ませたい。
しかし、大天狗をも黙らせ、あの娘も押さえ付けれる案がない。
儂直属の部下にするなど、大天狗を押さえ付ける案等は幾らでもあるのじゃが…。
如何せん、新入りに対する有効な手立てがない。
大天狗数人でも苦戦するであろうし、速さだけなら儂等天狗の中では間違いなく頂点に位置する新入り。
力を競い合ってその実力をお主等が見極めてはどうじゃ？…と唆しても、大天狗どもはあの速さに恐れをなして、勝負を仕掛けようとしない。腑抜けな奴じゃ。
若い世代に実力者が出るのは嬉しいが、それと同時に儂等の世代がここまで腑抜けだとは思わなかった。
かと言って儂が出て勝負すれば良いと言い出せば『天魔様が出ればますます調子にのるだけです！！』
……何がしたいのじゃお主等は。

そもそも、この会議室の前の部屋で待機させておるのじゃぞ？
幾ら聞こえないような音量で喋っておっても、あやつの能力では意味がないじゃろう。
全く、こうして会議を長引かせる事自体が既に新入りに逆効果がある事が解らぬか？

解らぬのじゃろうなぁ……。

「天魔様！どうするのです！？」
「即刻！この里から追い出すべきです！」
「まぁ待て、何でお主等はそこまで奴を排斥しようとするのじゃ。新入りも仲間であろう？天狗の矜持はどうしたのじゃ？」
「しかし…！」
「奴は我々を脅かす存在です！」

ほぉれみろ、やはり地位を守りたいだけではないか…。

「……はぁ。お主等の言う事も確かかも知れぬが…」
「でしょう！？ならば即刻何かしらの処置をすべきです！！」
「今すぐ牢に監禁すべきだ！！」
「脱獄されればどうする！？恨みを買った私達は……！」

……はぁ……今すぐ大規模な人事異動でもすべきかの……。

「お主等！落ち着ｋ「チェストォォーー！！！」ガッバアァァァ！！？」
「「「「「てっ、天魔様ぁー！？」」」」」

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

天狗の里に到着。

志鳴徒の姿はあまり知られてはいない為か、やはり近付く度に『貴様何者だ!!』等と言って突っ掛かって来る天狗達。
天魔をボコる為に体力温存をして突っ切ろうとするが、中々にウザい。まぁウザい。ホントウザい。

ま、そんな時に馬鹿弟子どもに逢えて良かった。言い訳が通るしな。
……しかし、コイツらもあの会議に参加していたようなので、取り敢えず顔面以外をしこたま殴ってやった。
ほら、せっかくの顔パス権に傷が付いたら、駄目だろ?

「…こっ、ここです!志鳴徒先生ッ!!」
「はいご苦労だ作久。縞・弥野、見張ってろ。誰か来ようとしたら死んでも止めろ。出来なけりゃ俺が死なす」
「「了解です志鳴徒大先生!!」」
「……やっぱ、五月蝿いから今のうちに殺っとくか」
「「「スンマセンデシタァッ!」」」

「おっけー、よろしくな？」
「「ハイ！」」
こういう時だけ役に立つ……無駄に。

どんどん襖を開け、廊下を渡り、記憶している大広間に向かう。
「あ、まだ会議中ですよ！？」
「知らん」
「私の会議中なんで邪魔しないで下さい！？」
「知らん」

大広間手前の部屋で見た事もない女の子の天狗が居たが、まぁそんな事はどうでもいい。
大方、天魔の娘か何かだろーよ。

「こうなったら実力行使するわよ！！私の速度に追い付いてこれる！？」
「知らん」
「さっきから無視しないでくれない！？」
「知らん。ちゃんと返事は返してるだろ。それよりも俺は天魔に用がある」

「…天魔様に？って、貴方天狗じゃない！？」

良いから、さっさと俺の右手を離せ！！
掴まれてるのは反射出来ねぇんだよ！？

「山の妖怪でもないのに天魔様に逢わす訳には行かないわ！ここで止まりなさい！！」
「ああ？何かほざいたか？良いから退けや」

と、思っていたらかなりの高速で回り込まれ、俺の前に立ち塞がられた。
……天魔の娘、じゃないな。似てない。
いや、それよりもだ。
たった今、明らかに『音速』を超えていた。
にも関わらず、俺や襖に衝撃波が飛んできてもいない。

……ふぅん？

「…新入りか。見た感じ能力持ちか？」
「……ようやく私を見たわね…」
「ふむ、お前さん。名前は？」
「相手よりも自分からが普通じゃない？」
「ああそうかい。俺は……まぁ『志鳴徒』だ」
「…今の間は何よ」

詩菜の方を名乗った方が手っ取り早いかな、とも考えたが……。
…まぁ、姿にあった名前を名乗ろうかね。

「で？お前は？」
「…『射命丸（しゃめいまる）　文（あや）』よ」
「ほー、能力は？」
「……私は能力持ちだとも言ってもないんだけど？」
「嘘付け、あんな高速で動いて衝撃波が出ない訳がないだろ。いや、むしろ衝撃波を消し去っていたなお前？」

どうやってかは解らんが、衝撃波が出たのは見えた。
見えたがコイツは、すぐに消してみせたんだ。

「…貴方も似たような能力なの？」
「まぁな。……いや、そういう話をしてる場合じゃねぇよ。天魔に逢わせろや」

……なんか、ヤクザっぽい喋り方になってるな。俺…。
まぁ、別にいいんだけど。

「駄目よ。部外者は即急にこの里から出ていきなさい！」
「ああ！？良いから退けや！！」

……もう、完全に…ヤのつく自由職の人に…。

「退きません！！」
「……ああ、もういい。分かった」

よぉ～く、分かったよ。

スキマオープン。
強制退去。
スキマの先は里のすぐ外。あの速度なら即座に帰還出来るだろ。知

らんが。

「え!?いやあぁぁぁぁ……」

「……おっけ」

妖力よーし、神力よーし、能力よーし、準備よーし。

さて……、

駄目男どもに制裁を下してやろう。

「チェストォォーー!!!」

「ガッハアァァァ!!!?」

「「「「「てっ、天魔様ぁー!?」」」」」

襖を思いっ切り蹴り、天魔ごと吹き飛ばす。

うむ、奇襲は成功。

だが……まだまだ終わらんぜ?

馬乗りになってオラオラのラッシュ。言ってないけど。

「テメェ!!詩菜になんつーあだなを付けてんだコノヤロォ!!」

「ブホォッ!?志鳴徒!?何故お主がここにグハッ!!」

他の天狗、ポカーン。

「お前完全に狙ってるじゃねぇかこの変態!!いい加減にしろよロリコンが!!」

「ベブッ!?何じゃ!何の事じゃ!?」

「ほおぅ？まぁだ白を切るのか貴様は？」

変化、詩菜。

「「「「「『ロリ姉御』だ！！」」」」」

……あ、駄目だこの里。

「…よぉーし、全員死刑じゃボケェーッ！！」

妖力、神力、能力、スキマ、湯飲み、机、木片、千切った羽、肉体、全て使う！！

サバイバルは現地調達が基本だぜうけけけけけけ！！！

「かっ、完全に壊れておる…！」

「てっ天魔様ぁ！？いいいかがなっなされますかぁ…！？」

「無論そっ総員退避じゃぁ！！」

「にーがーさーなーいー♪」

襖を開けるとそこにはスキマが！！

スキマを通り抜けると、そこは部屋の反対側に！！

「誰も逃がしはしないよ？さぁこの狭い室内！！壁は神力と能力で破壊不可能！！弾幕撃てば仲間に命中！！……理解、頂けたかなぁ？」

「可愛く言っても変わらないからな！？」

「あらそう？じゃあ」

変化、志鳴徒。

「せっかくリーチを短くして手加減してあげようかと思ったんだがなぁ…」
「この馬鹿！！お前のせいで余計逃げ場がなくなっちまったじゃねぇか！？」
「うるせぇ！？お前はロリ姉御にボコボコにされたいって言ってただろ！！」
「いや、死ぬから！？問答無用で死ぬからアレは！？」
「そうか。なら遠慮なくしよう」

変化、詩菜。

「……天魔、ここに居るのって全員会議に加わってた変態？」
「い、いやそれは言う訳には……」
「言わないと」

スキマに手を突っ込んで、木刀を取り出す。
思いっきり振りかぶってテーブルを粉微塵に砕く。

「こうするよ？」
「全員そうじゃ！！」
「「「「「天魔様ぁぁっ！！？」」」」」
「うるさい！！お主等も土下座しろ！！」
「じゃあ全員死刑って事で♪」
「「「「「すいませんでしたァァッ！！！」」」」」
「だが断る！！」
「ッッ！？」

スキマから更に幽香お手製ハーブティーを一飲み。
幽香ごめんよ。味わう暇なんてないみたい。

「……わかっておったよ…お主が許さぬ事などな……」
「…へぇ？」
「じゃが！！儂等の野望は！こんな所で終わりはせぬわ！！」
野望って……。
「天狗の長として！！同志達を引っ張る会長として！！」
……会長、って……ロリコンの集まりの…？
うわぁ……。
「詩菜ァ！！貴様を今ここで我が物にしてやるわ！！」
「言ってる事かっこいいけど中身最低最悪だ！？」
「流石会長！！そこに痺れる憧れるぅ！！」
「ええ！？駄目だよこんなのに憧れちゃ！？死ぬよ！？廃人になるよ！？」
「同志よ！！詩菜が動揺している今こそ勝機じゃあ！！全力で襲い掛かるぞ！！」
「「「「「おうッ！！！」」」」」
「こんの…変態どもがアァァァ！！！」
「掛かれェェ！！」
「「「「「「「「「ウオオオォォオオオォォォォォォッッ！！！！」」」」」」」」」

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

……まぁ、

聖みたいに身体能力を俺以上に強化出来たり、

何でもありの幽香との戦いみたいな弾幕がなければ、

この戦い、もしかしたら負けていたのは俺だろう。

「ハァ！ハァッ！！…ぐっ、勝ったぞォ！！」

そして途中で志鳴徒に変化して、やる気を削がなかったら、本当に慰め物になっていたかも知れない。

狭い室内。弾幕合戦じゃなくて肉弾戦で本当に良かった。

「ハッ、ハッ、ハッ……へへ、天魔！俺の勝ちだよなぁ？」

「ぐっ……お主の勝ち、じゃ…じゃから、退いてくれ……」

「…ふぅーい……疲れたー…」

いや！やっぱ大乱闘だったら、倒した敵は積み重ねないと駄目だろ？一番下に居るのが天魔。その上に大天狗五人が完全に気絶して折り重なっている。

いやぁ……仕事したって気分だ。

「たっ、頼む！退かしてくれぇ！！」

「いーやーだ。めんどくさい」

「お主どこまで鬼なんじゃ！？」

「『鬼殺し』だもん♪」

ま、そろそろ解放してやりますかね。

……一応、大天狗どもの脳味噌に衝撃を与えて更に昏倒させる。

「……（もう『鬼畜姫』でも…）」

「何か言ったか？」
「何でもないぞ！？」
「……ハァ、やれやれ…」

変化、詩菜。

「もう変な二つ名は付けない事。良いね！？」
「「「「「詩菜ちゃんッッ！！？」」」」」
「だっかっらっ！！『気絶しろォォ！！！！』」
「「「「「「耳がァァァァ！！？」」」」」」

狭い個室だったら初めからこうすれば良かったよ。
大絶叫。増幅。反射。反射。反射のハウリングボイス。

「……あら、泡まで噴いてら」
「…こおっ、鼓膜が……」
「それでも気絶しない天魔さん。天狗の長は伊達じゃない」
「なっ、何も聴こえん！？おおい！？何て事をしてくれたのじゃ！？」

ありゃ、予想外の威力に成長してる。

まぁ、頭に直接声《衝撃》を響かせる事で代用する。

「その間はこうやって通訳でもしようか」
「おお……それはありがたい…」

「で、まだ謝りの声を聴いてないんだけど？」
「……申し訳無い。すまぬ…」
「はい♪よく出来ましたー♪」

残り少ない妖力を微妙に天魔に渡す。
大天狗を持ち上げる位の体力は回復して貰わないと困る。私じゃ出来ないんだし。

私の能力【衝撃を操る程度の能力】は、弾き飛ばすには最高なんだけど、物を持ち上げるとかそう言った力仕事には向いていないのである。まぁ、仕方ないっちゃあ仕方ない。

「！？…良いのか？」
「何が？」
「…ここで儂を回復させたらまた襲うやも知れぬぞ？」
「じゃあ次は両手両足を完璧に複雑骨折させてあげよう♪」
「……」

ワカッテクレタカナー？

最速の座（前書き）

タイトルで『最速最高〇〇〇〇〇〇〇』って打ったらアウトなんだろうなぁ……。

最速の座

《ｓｉｄｅ　詩菜》

天魔の自宅、なう。

……何故か叫んだシーンからスタート。おお、メタいメタい。

「はぁ!?何で私が射命丸とかと勝負しないといけないのよ!?」

「…お主が倒した上層部の輩が戦う手筈じゃったのじゃ」

「自業自得でしょ？」

ヒトに失礼なあだ名を考える暇があったら、その女の子の事を考えなよ、って思うのは私だけ？

「いや…まぁ、そうかも知れぬが……」

「それに、私がいないと天魔も何も聞こえないんじゃない？」

「……いや、それもお主が…」

ああ言えばこういう奴だな…。
全く、失礼な！

あれから一日経って、
天魔は必死に鼓膜の治療に妖力を費やし、他の大天狗達は自宅療養。
会議にかけられていたらしい、あの天狗の少女も、報告が来るまで自宅待機せよ。という命令が下った。

……あの天狗がそれで、大人しくなるとは思えないけどねぇ…。
そこまであの子を知ってる訳でもないけどさ。

天狗達が地位確保の為に、強大な力を持つ部下に強く当たるのも分かる。
が、やはり私としては天魔の意見に賛成である。
天狗の矜持はどうした。お前ら特有の仲間意識は何処に行った？と言ってやりたい。

そこで、私が話を聴いている内に天魔が思い付いたのが、冒頭のシーン。となる。

「まぁ、やっても良いけどさぁ……？私に対してメリットというか、良くなるような事があるの？」
「ぐ…確かにそのような事はあるとは言い切れぬが……」

射命丸の為にはなるかも知れないけど、ねぇ？

私の労働が増えるだけじゃない？場合によっては、だけど。

「頼む！！」

「……」

……はぁ。

またもや悪癖が。

…いや、悪癖じゃあないかな？この場合は。

「……利害も何も考えないで、自分の気持ちだけで相手に頼み込む。そういうの、嫌いじゃあないよ？私はね」

「へ？……じ、じゃあ…！！」

「良いよ。やってあげる」

「助かるッ！」

親しいと思ってるヒトから頼まれると断れないって奴がね。

「……ちなみに、天狗の里で詩菜の姿はよした方が良いじゃろうな」

「……ちなみに、さぁ？私が里に出たらどうなる？」

「…恐らく、未婚者のほとんどが群がるのじゃなかろうかの？」

天狗＝ロリコンの方程式が完成した！！

「…もうやだこの里……」

「はっはっはっはっは」

「笑ってんじゃないよ馬鹿ァ！！」

「グボッ！！？…し、詩菜……金的は…あんまりじゃ、なかろうか……？」

「うるせー、生々しい感触味わっちゃったから御相子よ」

「…どっ、どんな等価交換……？」

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

結局、志鳴徒に変化して勝負する事になった訳で。
全くもって面倒な事になってしまった。
……もう一回潰してやるべきか？いや、めんどくさいし気持ち悪いから止めとこう。うむ。

「それで？どうすりゃ良いんだ？」
「うむ、双方が得意で、尚且つ簡単な勝負をしてもらう」

山から少し離れた平地に、俺、射命丸、審判役の天狗（詩菜の会議には参加してない奴）、天魔が揃っている。

後は何故か観客がいる。この四人から離れて安全そうな所に陣取っている。むかつく。

……オイ、そこの酔いどれ天狗。なに美味そうな酒を呑んでんだ。

「…天魔様、その前に結局この妖怪は誰なんですか？」

「あー……」

…ま、確かにいきなり里に現れた妖怪と競えって言われてもなぁ。しかもその相手が天魔と随分と親しげにしていれば、疑問を感じるか。

「天魔とはちょっとした友人。昨日は共通の友人の話でここに来た」

「へぇ？その割には随分と乱暴な事をしたようね？耳を聞こえなくするなんて？」

「いやそもそも向こうが先だし、それにちゃんと能力で手助けしているぞ？」

「何がどうであれ、貴方は天魔様を傷付けた事に変わりはないでしょう？」

「「……」」

「……あー、ごほん。二人とも、良いかの？」

おっと、勝負の説明の途中だった。いかんいかん。

「勝負は簡単じゃ。単にどちらが速いかを競う」

「……天魔様、それは私にとって有利すぎませんか？」

……ほほぅ…？

「……天魔、ぶっちぎって普通に勝っちゃって良いんだよな？」

「「……」」

「…いや、じゃからそんなに険悪にならなくても……」
「「さっさと勝負を始める！！」わよ！！」
「……はぁ、わかった…」

審判の天狗、俺等がフライングをしていないかの監視役が横につき、天魔はどちらが早くラインを越えるかの確認の為に、ゴールの方へと向かった。

観客席からは射命丸を応援するような女の声が聞こえる。恐らく同年代の女天狗かね？
…なんだ、里全体から嫌われているのかと思ったが、そうでもないみたいだが？
まぁ、どうでもいいか。射命丸が返事をするどころか見向きもしないとかなんて。

「あら、空にあがらないの？」

奴からの声で上空に顔をあげてみれば、かなり高い所に射命丸がいた。

……というか、その位置からはスカートの中が丸見えじゃないのか？何故か見えないが。

…まぁ良いか。

「…俺はそういうのは必要ないのさ」

空中にあがったら、寧ろ俺は無力と化す。

足場が無い為に、物理の反動や衝撃も巧く作れなくなるからだ。

「…大層な自信ね。その自信も完璧に折ってあげましょうか？」

「折れるのは、お前だよ」

多少厨二っぽく決めてみた。特に意味はない。なんとなく。

コースはそれほど長くはないし、単に直線のコースだ。

土質は雑草でしっかりしている。多少は草が邪魔になるかも知れないが、まぁ問題にはならない。

距離は……さほど差が開かないかも知れない。狭すぎて。

俺は能力は『衝撃』だけ。スキマは使わない。

スキマは発動までに時間がかかるし、短距離ならば普通に衝撃でぶっ飛んだ方が速いからだ。

さてさて、どーなるかなー？

向こうにいる天魔から合図が届き、スタートの審判の手が上がる。
降り下ろされた時がスタートだ。

射命丸の周りに風が集まるのが分かる。
…やはりそういった能力か。風を操ってるのか？
変わって俺は、単にクラウチングスタートの格好をする。
どちらかと言うとベストなのはジャンプをしまくってる状態が……
…ああ、スタートする？分かりましたよ…。

「よーい……どんッ！！」

全身全霊を込めて地面を蹴りまくる。
後ろに相当の砂が弾丸のように弾き飛ばされているだろうけど。

射命丸の様子は見ない。見る必要もない。つーか、見る時間も無い。
速過ぎて。

パァンッ！
…という効果音はないが、一秒もかからず天魔の横を通り過ぎる。
衝撃を操りブレーキも完璧。地面に罅が入ったけど。

「……む、むぅ」

…天魔が唸ってる。って事は……。

「くっ！！あれだけ言う程の実力はあるわけね…！」
「…ありゃ、んだよ。結構競り合ってたのか？」
「……すまん、あまりにも速すぎてワシの目では微妙な差が解らぬ」

つまり、コイツ、射命丸、中々に速い。

うーん……能力全開にして勝負してこれか。
参ったな。あまり乗り気じゃない感じでやっていたけど……、

…なんか楽しくなってきた♪

「んじゃ、もっと距離を伸ばそう」
「いや、しかし…」
「良いですね。決着を着けましょうよ」
「……好きにしてくれ…」

溜息を吐いているが、この企画を考えたのは、『天魔』。貴方だ。

今度は海岸から、遠くに見える崖までの競争。
俺等は海岸の波打ち際に並び、
天魔は崖の上で飛んで決着を判断し、
どちらが先に崖に到達出来るか。という勝負になった。
距離は先程の約十倍ほど。土質は不安定な砂。

「先程みたいには行かないわよ。絶対に突き放してやるわ」
「オメェこそ。後で泣いたりするんじゃねぇぞ？」
「だっ！誰が泣くもんですか！？」

さて……面白くなってきたし。

ちょいと閑話でも繰り広げてみる。

「なぁ、射命丸とやら。この勝負に命を賭けてるかい？」
「…賭ける、って訳？それとも…負けたら死んで御詫びをするのかしら？」
「いやいや、賭け事じゃなくてだな。何が何でも勝つ！って意志があるかい？そういう確認さ」
「……あるわよ」
「ふぅん？」
「…何よ、その顔は…」

いやぁ、べっつに～？

「審判、確認があるんだが？」
「はい、なんでしょうか？」
「試合開始の前に、能力で何かしらの『準備』をしてもいいのか？」
「……あなた方の足元にある線を越えてしまうような策略は駄目です」
「ん。この線を越えなければ、良いんだな？」

つまり、始まってもいないのに線を越えて何かしてはいけないと。
ふむふむ。

……このレースは、審判役の天狗とゴールで待つ天魔との距離をどれだけ早く駆け抜けれるか。という競争だ。
だからその分、その二人から離れればそれだけ直線距離は長くなる。という訳である。
まぁ、そんな事は関係しているがどうでもいい事であるのだが。

「……試合放棄でもするの？」
「んな訳あるかい」

審判から離れ、射命丸からも離れる。２０ｍくらいの距離をとる。

「…その位置から、始めるのか？」
「ああ、始めてくれ」
「……」

射命丸は真っ直ぐに天魔の元に行けば良いのに対して、俺は微妙に斜めになっている為に微妙に距離が開いた。本当に微妙な差なんだが。

まぁ、俺もアイツも誤差の範囲に入るだろ。これくらいなら何も変わりはしない。

能力発動。

射命丸とやら。
命張らんと、楽しめねぇぜ？
場合によってはだけどな！

背後の空間を圧縮。と言っても範囲は１ｍｍ（ミリメートル）。
たかが１ｍｍでも、空間圧縮の爆破範囲は比例して大きくなるから、馬鹿には出来ない。

「ッ！貴方何を…ッ！！」
「おいおい、試合は始まる寸前だぜ。私語は慎みなされ」
「……」

空間圧縮で風が急に俺の方に流れたのに気付いたのか？流石流石。
審判役の天狗は何も気付いてないのにな。流石は能力者、ってところか。

……俺の周りにいる奴等はどいつもこいつも、才能の塊ばかりか？
…まぁ、どうでもいいか。
俺は俺なりに精一杯生きてくだけです。ハイ。

「よーい……

妖力で身体を覆う。
更に、神力でも身体を覆う。
能力では保護をしない。してしまったら意味が無いし、そもそもそんな簡単に防げる訳が無い。

――――……どんッ！！」

圧縮砲、発射！！

――――バゴンッッ！！

「……痛ぁ……いかん…これは。ヤヴァイ…」

崖に見事に着地。…寧ろ着弾？
…背中がじりじりと……焼け爛れてるのか？
崖には見事なデスマスク……いや、人型？

……あ、振動で崖にちょっと罅が…。

「…お、お主……今、何をした……！？」

「…ふぅ……んな事より、射命丸は？」

単に空間圧縮で自分を弾き飛ばしただけだっての。

まぁ、服の背中部分が焦げて千切れ飛んだけどな。地味に痛い。泣きそうだ。嘘だけど。

…おぉ？射命丸さんはちょうどゴール手前の草むらで腰抜かしてら。

ザマァｗｗ

よたよたと歩いて彼女に近付く。

……うん？なんだか鉄の味が口に広がる。咳で血が出た。あれ？

骨が折れた？

「…さーてさて、射命丸さんよ。俺の勝ちで良いよな？」

「……あ、貴方……」

へっへっへっ、まぁ自分でも飛んでる途中が認識出来ない程のスピードだったしなぁ。

おかげで突っ込んだ崖の尖った岩が刺さって痛いの痛いの…。

……あれ？なんやかんやで結構重傷じゃないか俺？ゴホッ。

「お、お主！？背中はどうしたのじゃ！？」

「あぁ、やっぱり酷い？」

だと思ってたんだよねぇ。

風が吹く度に傷口に塩を振り掛けられてる感じ。
…衝撃、衝撃だ。これは衝撃の痛みだ。だから薄れてくれ、頼む…
……！
……無理か。
あ、でも骨折の痛みは退いて来た。何故だ。

「さーて……」
「…とりあえず、来い。今すぐ治療じゃ」
「めんどくさいから嫌」
「そういう問題ではなかろう…！」
「…はぁ、今ちゃんと修復してるから。天魔の家に向かってる時には完治してるっての」

神力をかなり注ぎ込んでいるから、まぁ一時間あれば治る。

…というか、知り合いに神力を持ってる妖怪って、あんまり居ないんだよなぁ。
案外、俺みたいな妖怪ってのは居ないのかね？
……居ないんだろうなぁ…。

「ほれ、治ってきてるじゃん」
「……」

じうじう音がしている辺り、相当グロイ光景が広がってるだろうなぁ。
おっと、ならその光景を隠すべく、服も修理しますかね。

あ……服を脱ごうかと思ったら、射命丸が居たんだった。

「…お～い？射命丸さ～ん？」

「……」

あ、だめだこりゃ。完全に呆然としてら。

……それだけショックが大きかったのかね？大きかったんだろうなぁ…。

俺も追い抜かれたら、ショックで呆然とするだろうなぁ。

…これほど魂が抜かれた様な表情はしないと思うが……。

しかし、ここでこうしていても仕方ない。

「……で、天魔？この後はどうするんだ？」

「……そうじゃな…」

……だから、治療して大丈夫だっての。

チラチラ見てんじゃねぇよ。腹立つ。

「…とりあえず、ワシの屋敷へ向かうとするかの」

「了解。射命丸も連れてくぞ。放って置いたらどうなるか解らん」

この何も見えてない眼。見てくださいよ奥さん。真っ暗ですよ、ええ。びっくりです。

「…解った。それよりもお主、本当に大丈夫なのじゃな？」

「だぁーッ！！しつこい！！強制転移！！開けスキマ！！」

「のぅ！！？」
「……」

天魔と射命丸の足元に同時にスキマをオープン。
…二つ同時に展開したのは初めてだったけど、予想以上に…疲れるな……これは…。

まぁ…俺も向かうとするかね。

「あ、審判！二人ともちゃんと送り届けるから大丈夫だからな！！安心して里に戻ってくれ！」
「は、はぁ……？」

よし。
んじゃ、俺も向かうか。
スキマオープン♪いざ行かんスキマツアー。

「よっと」

スキマというツアーを終えて、見えてきたのは、
机を押し潰して憮然とした表情の天魔と、
隅の方に眼を開いたまま横倒しになっている射命丸。
…これはひどい。

「…あ～……色々と、失敗…した？」
「……後でお主が加工した机を送れ。早めにな」
「……了解」

…まぁ、仕方ないよ…ね……ハァ…。

…三人目？

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

さて仕切り直して、
…机はもう元に戻せないが、まぁ雰囲気は頑張れば戻す事が出来る。
筈。

「…で、依頼通りに射命丸の心を折ってやったぞ」
「……ああ。見事に折ってくれたわい」
「……」
「「……」」

未だに茫然自失の状態の射命丸さん。
ちゃんと椅子に座らせているにも関わらず、その瞳には何も写ってないようにしか見えない。
つーか、真っ暗すぎて怖い。

「……どうするよ？ここまで木端微塵に粉砕するとは思わなかったんだが……」
「…ああ、ワシもここまで影響が出るとは思わなかった…」

「「……」」

気まずい沈黙。

「……そ、そうじゃ！お主の『衝撃』で何とか呼び戻せれぬか！？」

「あ、ああ！なるほど！！」

コイツの衝撃を無くしてやれば良い訳だ！

早速とばかりに立ち上がり、射命丸の頭に右手を置く。

……なんか、絵的にはあまりよろしくない状態じゃないか？これ。

…まぁ、いっか。

ショック！

「…ほい。どうだ？」

「……あ、あややや？」

…言葉を出したっていう点では大成功。

……自分の名前を連呼するのはどうかと思うが…。

「さて…気分はどうだい？」

「…あ……え…？」

「お主は勝負に負けた後、ずっと呆然としていたのじゃ」

「……ああ、負けたのね。私は…」

はてさて、お説教タイム。

「天魔がお前に言いたい事は、力をあまり見せ付けない事。だ」

「…いや、まぁ…確かにそうなのじゃが……もうちょっと優しい言い方は…」
「これが性分なんで」
「嘘を付け。前の詩菜の時はまだしも優しかったぞ」
「いやいや、アレはだな。ああいう性格を演じていたと言うか何と言うか」
「なんじゃ、お主も裏表があったりするのか」
「ひどくね？ていうか妖怪に裏表があるのか？人間の負の部分が具現化した存在なのに」
「妖怪に拠るじゃろ。どんな精神から生まれたからとかにも拠るんじゃなかろうか」
「ほお。んじゃあどんな奴から生まれたか解ったり覚えてるのか？」
「いや、全く解らぬ」
「じゃあ、意味ねぇじゃねぇか」
「そうじゃな」
「完結しやがったよコイツ」
「……あの、どういう話か解らないのですが……？」
「そういえば、お主は仕事はどうしたのじゃ？」
「ん、もう帰るよ。詩菜で。つーかわざわざ志鳴徒に変化させんなっつの」
「…あ～、すまぬ」
「はぁ……てか、そんなに可愛いか？」
「それは無論！！」
「ああ、やだやだ男ってのは。もう一回潰してやろうか？」
「それは困る！！」
「……あぁ、やだやだ。男ってのは。ホント」
「いや、貴方もそうでしょうが……」
「いやいや、志鳴徒にそういう言葉は使えぬぞ？」
「そもそもさぁ？どうしてあんな姿で生まれたのか皆目検討がつかねぇよチクショウ」

「良いではないか。可愛いし」
「お前そればっかじゃねぇか」
「何を言う。女天狗達の目標とも言われておるんじゃぞ」
「絶対二度と詩菜の姿で来ない」
「おいおい、ワシ等を生殺しにする気か？」
「一生妄想してろ」
「…も、妄想……」
「え？何？本当に詩菜ってこの里で有名なのか？」
「はい…？ええ、まぁ。知らない者は居ないかと」
「……絶望した。天狗の将来に絶望したよ！」
「ま、まぁ…良いではないか？」
「良くねぇよ……なぁ、お前もそういったクチ？」
「詩菜ですか？いえ、そういう体型でもないので」
「……だよね」
「まぁお主の二倍はありそうじゃよな。身長は」
「うるせぇ、また鼓膜を破ったり潰したりするぞ」
「ようやく音が聞こえて来た所じゃぞ！？しかも潰すのか！？」
「やる時にはやる。それが俺、志鳴徒」
「鬼か！？」
「『鬼殺し』ですんで」
「……えっと、もしかして…貴方が……？」
「『志鳴徒』にして『鬼殺し』『中立妖怪』の二つ名がある『詩菜』で御座います」
「…あ…え？……はい！？」
「まぁ、普通はそんな感じだよね」
「お主のように、どちらも本体、というような妖怪なぞ滅多に居らんわい」
「ですよねー。でもまぁ、擬態したり変化するのは居るでしょ」
「まぁ、そういうのはおるが……口調が詩菜になっておるぞい」
「……またか。んならいっその事」

変化、詩菜。

「…ほい。っとまぁこういう事って訳で」
「……」

再び茫然自失状態になっている射命丸さん。
……あれかな？
憧れていたアイドルが、自堕落な生活をしていた事を、目撃したようなファンの落ち込み方みたいな。

……駄目だ、自分でアイドルって言ってて悲しくなってきた…。
何処のぶりっ子だよ私は。

「さて。んで、どうするの？」
「どうするとは、どういう事じゃ？」
「だから、射命丸の事」

どうせ、ちゃんと力を抑えて集団に馴染む様な事をしていても、一度睨まれたら簡単にその状況が変わる訳でも無いだろうし。
出る杭は打たれる、それも無慈悲に。って奴だね。

「…何じゃ、意外と心配しておるではないか」
「よし、鼓膜の次は鼻腔だ。射命丸、捕まえろ！」
「えええええ！？」
「やめろ！？これ以上何かを破裂させるでない！？」

「んまぁ、そんなどうでもいい事は置いといて」
「……どうでもいいの？」

どうでもいいんだよ。細けぇ事は気にすんな！！って兄ちゃんが言ってた！！

「誰よ……」
「…そうじゃな……ふむ…」
「文はどうしたい？」
「…いや、いつの間に貴女は私を名前で呼ぶようになったのよ」
「ノリで」
「……」

違う言い方をすれば、なんとなく。

というか『射命丸』って呼びにくいよね。
幾月みたいな。いや、あんな寒いギャグ出す奴だったら呼ぼうとすらしないと思うけど。

「……私は…」
「私は？」
「…私は貴方に勝つ程の速さが欲しい」
「……そっか」

……あ～、頑張れ？いや、なんかこの言い方は良くないな……。
貶してる感がプンプンする。

「では詩菜、お主が射命丸を導けば良いではないか」

「「……は？」」

今なんつったコイツ？

「じゃから、お主の仕事にこやつを連れて行けば良いではないか。それならば射命丸の修行にも繋がるではないのか？」

「……天狗の奴等からも眼を逸らせれる、って訳？」

「…ああ」

ああ、やだやだ。組織ってのは。

「そうだねぇ……」

聖、星が何も言わなければ、あの寺でも受け入れてくれるかな？他からはちょいと意見が来るかも知れないけど……。

まぁナズーリン曰く『来るもの拒まず』なら大丈夫だと思うし。

…後は、文が妖力隠せるか隠せないか。かな？

……まぁ、私としちゃあ別について来るのは良いんだけどね？弟子としたら、私は教える物なんぞ一つも無いんだけどさ？それはそれで良いのかな？

…適当でいっか。彩目の時もそうだったし……妹紅の時も、ね。

「別に私は良いよ？仕事って言ってもそんな大した物でもないし」

「そうか…お主は、どうする？」

「あ、条件として妖力を隠せる程度の技術はあるよね？」

「…いや、そうそうそんな技術を持っている奴は居らぬぞ」
「うぇ、マジで？」

また変な部分をアピールしちまったって訳かい。
…隠遁術を知らない輩が多すぎじゃない？
妖怪でそれを知らないってのは、致命的じゃないかと思うんだけど……？

「となると弟子になるのかね？……いや、それは無いかな」
「なんでじゃ？」

性格的に。
…いや、まぁそこまで文の事を知ってる訳でも無いけど。

「んま、弟子とか連れ添い云々はどうでもいいとして、文がどうしたいのか。だけどね」
「……解りました。ついて行きましょう」
「「お？」」
「…何ですか、その反応は」
「いや、だって…ねぇ？」
「…ワシも場の繋ぎにとしか考えてなかったのじゃが…」
「「……」」

……いや、それは…無いわぁ。
場の繋ぎで、あんな考えを提供するってのは…それは無いわぁ……。

天魔を見詰め、そこから逸らした所で文と眼が合う。

同時に頷き合い、文が座っている天魔の後ろへ。私は前に立って息を吸い込む。

「お？お主等は何をする気じゃ？」
「天魔様。今のアレは、無いです」
「そうそう、女の子の心情を理解しなよ？」
「いや、お主は違うじゃろ？」
「あやー、頼む」
「了解です」
「ぬがっ！？」

文が能力か何かを使い、天魔の二の腕に風が渦巻き始める。
私は掌に超小型台風を造り出す。
破壊力も実証済み。一本の木からギターが造れます。

「天魔様、迂闊に腕を動かそうとすると筋肉まで削り取られますよ」
「おい！？ワシは天狗の長じゃぞ！？」
「無駄だよ？この部屋から外に衝撃音は出ないから、幾ら騒いでも無駄ー♪」
「ワシ怪我人！！？」
「「知るか」」
「鬼！！」
「どんどん竜巻を近付けてくよー？」
「ヒィィィィ！！？」

……。
……ふぅ……。

「…飽きた」
「じゃあ、やめますか」
「そーだねー」
「…ハ、ハァ……？」

そもそもそんなドSじゃないし。
気分が乗れば別だけどねー？

「んじゃあ、文、私について来るのね？」
「…ええ、貴女の速度に追い付けるまで」
「おっけ、妖力を隠せたり出来る？」
「……」
「まぁ、別に隠さなくても良いっちゃあ良いんだけどね」
「…良いの？」
「寺の奥底にずっと潜んでる覚悟があるなら」
「寺！？」

あれ？言ってなかったっけ？
……言ってなかったか。逢ってからずっと喧嘩してたし。
まぁ、説明すればオールオッケー。

「そうだよ？ちょっとした寺に住んでるんだけど」

通称『妖怪寺』
責任者は、外法に手を出し既に八尾比丘尼の如き長寿の『聖　白蓮』
その聖が信仰する神、毘沙門天。の使い。そして妖怪『寅丸　星』
それの見張り役兼手伝いの『ナズーリン』無論？鼠妖怪。

見越し入道とその娘？『雲山』と『雲居　一輪』
更には見事な船を持った舟妖怪『村紗　水蜜』

あの寺は、彼女達に惹かれた妖怪やら人間やらヒトがわんさかと集まるのである。まる。

「……妖怪だらけじゃない」
「だから『妖怪寺』なのさ。…まぁいつ人間にばれるか解んないけど」

ばれたら私はどうするかな……。

…多分、見捨てるかな…。
可能な限り、聖達を助けると思うけど……、
自分も巻き込まれそうになったら、反旗を翻すように逃げるかもね。

……ああ、嫌だ嫌だ。
こんな自分が嫌になる。

……そんな事言って、妹紅の時は大失敗したんだよねぇ……。

「……詩菜さん？」
「…そういう呼び方なんだね。や、良いけどさ」

いかんいかん、顔に出てたか。
ポーカーフェイスが崩れてたか。

「ふぅ……ま、詳細は移動しながら話そうか」
「…え!?今から行くの!?」
「え、駄目？」
「準備とかあるのよ!!」
「ああ、なるほどね」

一定期間何処かに泊まって行く事はあるけど、定住なんてしようとも思わないからなぁ。
そういうのは思慮が足りてなかったね。

「んじゃ、準備はさっさとした方が良いよ。あ、私の家の場所、解る？」
「……家があるのね。意外だわ」
「…まぁ、普段から使わないけどね」

そろそろ掃除でもするかな。
最後に来たのっていつだろ？
……妹紅の時以来？いや、彩目と依頼でバッタリ出会った時かな？
そういえば慧音さんどうしてるんだろ？彩目もだけど。
まだ二人で活動してるのかな？

閑話休題。

「まぁそういう事だから、準備できたら私の家に来てねー」
「……解ったわ」

「場所が解らなかったら、そこに転がってる天魔に訊いてねー？」
「…途中からワシ、消えてなかったかの？」
「「気のせいでしょ」です」
「……いつの間にそんな仲良しになったのじゃ…」

さぁ？

「……という事で、自宅に久々に帰ってきてみたは良いけど…」

ひどい。何がひどいって埃がひどい。
うーわ、埃でサッカーボールが出来るよ?これ。

まぁ、とりあえず竜巻で大まかに掃除。
玄関を開きっ放しにして、外にはき出す。
…後は、水拭きぐらいかな?
倉庫代わりのスキマから雑巾を取り出し、近くの水場へ向かう。

水場というか川というか小川というか。何というか、そういう感じの場所。
そういう場所で、雑巾が吸った水を絞る。
…絞る。
……絞る?
…絞れない。
……絞れない…だと…!?

なんとまぁ、詩菜の腕力では雑巾を絞れない。

「……なんてこったい」

しょうがないので、

変化、志鳴徒。

こちらに変化して、再度雑巾を絞る。

……おお、よく水が出る。

…なんだ？この敗北感……。

何とか立ち直り、自宅の大掃除を開始するべく、絞った雑巾で床を拭く。

…詩菜ではちょうどだったこの家も、志鳴徒だと少し手狭に感じる。

というか、さっきから頭をガンガン壁にぶつけてる。

衝撃は能力で消しているんだが……ええい！！めんどくさい！！

変化、詩菜。

こうすると腕力がなくなるから、更に労力が増すんだけどね。

まぁ、こちらの方がスムーズに行くんだし、別にいっかな？良いよね？誰に訊いてるの私。

…こうなると、壁まで吹きたくなるなぁ。

でも、この身長じゃあ届かないんだよねぇ……。
いちいち変化するのもめんどくさいなぁ…。
というか、天井ぐらいまで拭こうと思ったら浮かないと駄目だし。

…そもそも飛べないってのは妖怪にとって致命的なんだよね。
しかし……どうしたら飛べるのさ？
前世の考え方が飛べないようにしてるのかね？
空に受けるのはヘリウムガスが入った風船とか、気流を掴んでいる飛行機とかだけだッ！！みたいな？
…上空、気流…衝撃と気流……積乱雲…ラピュタ…うん？
のぁ～、駄目だ！衝撃と空を飛べる様なイメージが繋がる案が一つたりとも思い浮かべれない。
イメージ出来ないとそういった風を再現出来ない。
……う～ん、参った。

まぁ、衝撃で吹き飛ぶジャンプとかダッシュとかで代用してるし、別に困っちゃあいないんだけどね。
別にわざわざ飛んで移動するよりも、スキマとかがあるし。

……ああ、こうやってどんどん自堕落な生活になるのかな……。

まぁ、気を取り直して。

「…よし！」

これで良いかな！
家具…と呼べるような物も無いけど、全部吹き終わったし。

……もう夜も更けたし、飯にしますか。んで寝よ。

今日は……川魚の塩振りでも頂こうかしらね～。

道中

《ｓｉｄｅ　志鳴徒》

ドンドンと扉を叩く音で、睡眠中から帰還する。
音がする方は…玄関からか。

……うあー、寝癖ひでぇし声もガラガラだ。
水……んん、あー……ねぇし…。
…そういえば昨日の掃除で、腐ってたのか茶色く変質しちゃった水を捨ててたんだった……。
ミスったー……。

「……あー、そこに居るのって…文か？」
「ようやく起きましたか…」
「あー、すまん…ゴホ」

あ、あ〝ー、う〝んッ！
駄目だ。喉痛い。

……川で顔とうがいをすべきだな。
という訳で、微妙に乱れていた服装を直し玄関を開ける。

「おはようさん。中でちょっと待っててくれ」
「はい？」

「おらぁ顔洗ってくるから。ゴホッ！あと喉も」
「は、はぁ…分かりました」

文を迎え入れ、入れ換わりに水辺へ近付く。
顔を洗ってうがい手洗い、ついでに髪の毛も一応整える。
新鮮な川の水だ。未来の飲んだらヤヴァイ工業用水なんて混じっていないさ。
とても冷たくて美味しい、川の天然水である。

あー、あー、マイクテストマイクテスト。うん。
よし、治った。

しっかし……口開けながら寝る癖は直さねば。
詩菜の時には起きないのになぁ……アレか、美少女補正か。
……ないわな。

ついでに朝食用の川魚を二、三匹捕っておく。
捕獲方法は単純明快。
水の中で、ある一定の範囲内に魚が気絶する程の衝撃を響かせるだけ。
ちなみにこれが電撃だったら立派な漁法である。禁止されてるけど。
何もしていない筈なのに魚が水面に一斉に飛び出し浮かぶ姿は、まるで念力か法力によって魚を釣っているようにゲフンゲフン。

まぁ、つまりはそういう事なのだ。何がそういう事なのかは知らないが。

さーてと、四匹も釣れたし、

「うい、ただいまっと」

「……この場合は『おかえりなさい』と返すべきなのでしょうか…」

「さぁ？」

ん～……まぁ昨日と同じ塩焼きでいいか。

手早く腹を切り裂いてー、内臓取り出してー、腸とか糞も取り出してー、エラを取り除いてー、串を口から尻尾まで突き刺してー、うーん、グロいー。

あ、どうせなら川でやれば良かった。それなら台所も汚れないし取り出した部分は餌になるんだし。

あっちゃー。

「ま、後で川にでもばら蒔くか」

「美味しそうですねぇ」

「とある弟子直伝さ」

でも、内臓も美味いと思うんだけどなー……ほろ苦さとか。

あとはこれに辛み大根があれば最高なんだが…。

まぁ高望みはしないで、純度の低い都の塩を染み込ませるように魚を揉む。

カセットコンロなんてのは存在しないので、部屋の中央の小さな囲炉裏に火を焚き串を挿す。

「随分と早かったが、朝飯は？」

「……いただけるので？」

「…だと思ったよ。半分ずつな」

「ありがとうございます！！」

……感謝するのはいいが…。

「…そんなわざわざ畏まった口調は使わなくていいぞ？」

「いえいえ」

「いや、いえいえじゃなくてだな……」

「あ、もうこれは焼けそうですね。これをいただきましょう」

「……」

……普通、捕ってきたヒトから食べるのが当たり前じゃね？まぁ別に良いけどさ。

「そういえば荷物はどうしたんだ？」

「…私はこの里に来てから、あまり日数が経っていませんでしたので」

「ふーん。ま、荷物がないのは別に良いがね」

俺は二本目。文は二本ともとっくに食べ終わっている。

…ん、コイツは塩が足りなかったか？ちょいと薄いな。

「…日数が経ってないのに、同世代らしき女の子には随分と応援されていたような気がしたが？」
「……あれは……」
……。
…ふむ。
「…よし、ごちそうさまでした。…んで」
変化、詩菜。
「…これなら話しやすいかな？」
「……ふふ」
我ながら機転を利かせたつもりなんだけど、笑われた。何故だ。
「…まぁ気にしなくていいわよ。天狗の組織の、所謂固い部分」
「……それはそれでどうかと思うけどねぇ」
日本古来の縦社会か。
昔からの伝統だって知ってたはいたけど、こうも目の当たりにすると嫌な感じだなぁ。

「……というか、口調は？」
「さぁ？何の事かしら」
「……」
…何なんだし。

旅は道連れ、世は情け。
意味は何なんだろ？
旅は道連れの部分は何となく分かるとして、世は情けは何なんだろう？
世界は情けないとか？世界は情けで出来ているとか？そもそも情けって何よ？
カルタも深く考えてみたら、案外面白いのかも知れない。
……ていうか、これで合ってたかな？あれ？間違ってる？

てな所で、閑話休題。

別に急ぐような旅路でもないので、文と共に歩いて寺に向かっている。
旅の途中で話し合って親交を深めようではないか。
とか言いつつ、結局ほとんどが私から文への質問ばかりなんだけどね……。

「ねぇねぇ、妖怪になったのが最近ならさ？それ以前は何だったの？」
「鴉ですね。そこから妖怪『鴉天狗』になったんです」
……口調に関しては、もう何も言うまい。
私だって詩菜と志鳴徒の時の口調が別れている理由を巧く説明出来るとは思わないし。

「カラスかぁ。てなると由緒正しい天狗、って事になるのかね」
僧とかが修行を積み、培った力を邪道の為に使い、高慢ちきになると天狗になる。とかいう話もあるけどね。
まぁ、諸説あるけど。

「…でしたら貴女は何の妖怪なんですか？」

「……うーん、紫…ああ私の上司ね？上司曰く」

貴女は種族が『鎌鼬』にも関わらず、
三体で行動しない。
妖獣のような獣に変身もしない。
獣人のような人間じゃない部分が付属している様子もない。

だから貴女は鎌鼬であっても、他の『鎌鼬』のような三位一体の妖怪じゃあなくて、私のようなある種の特異な妖怪なんじゃないのかしら？

「…との事」
「……はぁ…分かったような分からないような」
「まぁね。私もイマイチ良く分かんない」
「……」

私が鎌鼬だって名乗っているのは能力に関係なく、爪で色々切り裂く事が出来て姿を消す事が出来るから。
それと、始めに確信出来てしまう御告げにも似たような感覚があったから。

能力も『衝撃を操る程度の能力』で、私が衝撃を風と捉えれなかったら、鎌鼬とくっつかなかっただろうしね。

「能力と言えば、結局教えてもらってないんだけど？」
「……私の能力は『風を操る程度の能力』です」
「…なるほどね」

普通の天狗ですらかなり速いのに、その『風』を思いのままに操れる文はそらもう、トップクラスのスピードスターになれるだろうねぇ。

それならあの自信も納得だわ。

……地上専用の私に、空中専用の文か…フフ。

「……それならば」

変化、鎌鼬。

唯一私が空中で自由に動けるタイプって訳だが……。

「…文、私を操作できる？」

「……風のようですが…私には操れなさそうです」

「…ふむ、そっか」

まぁ、そういった情報が入っただけでも良かった良かった。

変化、詩菜。

「……ややこしいですねぇ」
「私はこういう無駄な事とかが大好きなのさ。本当に大好きッ！」
「無駄な事なのだという自覚はあるんですね…」
「無駄な事じゃないさー。ちゃんと意味もあるよ？多分」
「多分って……」

そんなに意味を探していたら、結局最後には、
『生きる為』
『何故生きる？』
『生きる為』
『何故生きる？』
のエンドレスになると思うんだ。自論だけど。

「…随分とまぁ、面白い考えの御方の様で…」
「自覚はある気がする」
「……」

…なんだ、その眼は。

さてはて、そんなこんなでうろうろと歩きつつ、それでも聖達の寺には真っ直ぐ向かいつつ、要するに気分的にはぶらり旅気分だけど、目的地にはちゃんと向かっている気分。
ようは、目的地まで時間もあるし、ここでお土産探そうぜ！！的な感じの修学旅行。

うん、まぁ、どうでもいいな。

私達は普通に人が使うような道を通っている。
そうなると当然、人間とすれ違う訳であるのだが。
基本、私は妖力を隠している。というか抑えているので大丈夫なのだが、文はその限りではない。

という事で人間は退治屋でもない限り、怯えて逃げるだけなのだが。

「……さてさて、どうしたものかな」
「……」
目の前で、人間が妖怪に襲われている。
巨大な蟻のような怪物に人が襲われている。襲われている人は武装している様子もない為、恐らく退魔師とかではないだろう。
それに四十代以上に見えるあの肉体は、妖怪退治に全く縁のなさそうな程の細さしかない。
結論、このまま観ていれば確実に１０分以内には死ぬだろう。
あっさりとあの妖怪の血肉に変換されて、あっさりと吸収されてしまうのだろう。
とりあえず、隣の文に声をかけてみる。
「文ぁ、君はこの光景をどう思うかなー？」
「これにですか？別に何とも思いませんね」
そりゃあそうである。彼女は妖怪なのだから。

しかしこの天の邪鬼体質な私。どうとも思わないと言われると、つい助けたくなる。

「へい、そこの蟻妖怪」
「ギ？ギギギ……ナンダ？」
「そこの人、見逃してくれないかなぁ？……いや、そうじゃないな」

いつもだったら気に入った方を助けてるんだけど、

「四の五の言わず、さっさと退けや虫けら」
「ッギサマ！！ギサマカラクッテヤル！ギギ！！」

神力を開放して、妖力を抑える。
うっかり力加減を間違えると、未だに腰を抜かしっぱなしのオヤジが粉微塵になっちゃう。

まぁ、幾ら酸が飛んでこようと高速で近付いて、

「どりゃー。右ストレート」

で、粉砕出来るから別にどうでもいいんだな。
当たれば確かに致命傷になるけどね。

うん、死体も残さず削除完了♪

「さて、おじさん平気かい？」

「……」

ポカーン

……ここはあの方式でいってみよう。

指先から神力をなくし、妖力もなくし、次弾装填！目標確認！方向良し！距離良し！発射準備！3、2、1、ファイヤー！！

「デコピン喰らえ」

「あだっ！？」

衝撃を操り驚愕の感情を引っ込めさせる。

やってる事は単に気付けにしか見えないが、実は本当に気付けである。なんたる罠。

……あ、『イグニッション・ファイヤー！！』の方が雰囲気出たかも。

「おっ、お嬢ちゃん！？い、いや神様…？」

「どちらでも良いよー？助けたのは『私』なんだから、結局は変わらないよー？」

「ん？…まぁ、いいか。すまない助かった。ありがとうございます」

「いえいえ。好きでやってる事ですので」

受け答えが間違っているような気がしてならない。

というか、絶対に間違ってる。うん。

「おじさん、ここは危険だよ。何処に向かおうとしているの？」
「え？ああ、守矢の神社に向かおうとしてるんだ」
へぇー、ほぉー。
それはそれは。随分と長い旅路ですなぁ。
……ふむ。
「どうだろうおじさん。私にちょいと捧げ物をしてくれたら、神社の所までの安全を保障してあげよう」
「おお！それは本当か！！ありがたやありがたや！！」
自分が話している相手が偉いヒトだと分かると急に態度を変える。
まぁまぁ、人間らしくて結構。
「じ、じゃあ好きなだけ持ってってくれ！！」
「お、本当に？」
「ああ！！」
「……んー、じゃあこの魚と芋を貰っていくよ」
これで当分の食糧は問題なし、と。
「じゃあ…汝の往く先に障害が顕れん事を祈って……眼を閉じて」
「？は、はい！」
「空気が変わって私の気配を感じなくなって、人の話し声が聞こえたら、眼を開いてね？」
「わ、分かりましたッ！！」
よーしよしよしよし。

「行くよ」
「ありがとうございました！！」
「うん。貴方を助けた『詩菜』をよろしくねー？」

スキマオープン。
いきなり地面に穴を開けるようなドッキリではなく、対象は動かずにスキマが動いて対象を呑み込んでいく。

……移動完了♪

「おっけー。文も出てきて大丈夫だよ」
「……本当に噂通りなのね」

……予想通りの内容だろうけど……。

「……ちなみに、どんな噂？」
「『お人好し』」
「……」

…言い返せねぇ。

道中（後書き）

途中のネタ紹介
・釣りキチ三平
・美味しんぼ
・地球防衛軍
・メタルギアソリッド３
・真・女神転生？

…まぁ、どうでもいい事だけどね。
しかし……こういうのは伏字とかにすべきなのかな……？

竹篦返し（前書き）

竹篦返し（シッペガエシ）

かなり短め。

竹篦返し

《ｓｉｄｅ　詩菜》

「……」

…私は、何をしていたんだか……。
期待に添えずに、何をやってるんだか……。

「……ハハハ、ほんと。馬鹿な事をしてるピエロだ…」

目の前にあるのは、どう見ても、
『争った痕がある寂れた寺』にしか見えない。

つまり、私が天狗の里でどんちゃん騒ぎをしていた時に、聖達は必死に戦っていた訳だ。『妖怪との共存』を受け入れる事の出来ない人々との、意識と認識との戦いに。
力が抜け、膝から崩れ落ちる。

能力も発動せずに、膝に石ころが突き刺さる。

……本当、情けない。

「……詩菜さん」

文が声を掛けてくる。それにも反応出来ない。

……人間は、自分より違う存在を知恵を惜しみ無く使って排除する。

そういう存在。

そういう存在だった私。

今、その人間に対して、猛烈に憎しみしか湧いてこない。

「…詩菜。貴女が絶望するにはまだ早いみたいよ？」

「……え？」

文に言われ、視界をあげる。

涙で良く見えないけれども、確かにあれは……。

寅丸と、ナズーリンだ。

「詩菜ッ！！」
「詩菜さん…御無事でしたか……良かったぁ…」
「……寅丸も、ナズーリンも…無事だったんだね…」
「はい……けれど…」
「……他の皆は、殺されたのか…」

再び黒い気持ちが沸き上がって来る。
壊したくなってきた。人間を。あの存在を。

「…いえ、封印されたんです」
「……封印された？」
「ああ、魔界に……村紗や一輪達は地底に封印された」
「私達は、運良く逃げ切る事が出来たみたいで……」

……大方、聖が別々の方向に逃げろ。とか言って皆を逃がした後に自分一人だけが殿（しんがり）を務めようとしたんだろう。
それを一輪達が見ていて加勢に乗り出そうとした時に、纏めて一網打尽に…か……。

「…詩菜さん？」
「……」

…憎い。
正直に言ってこれほどまでのばか正直に自らの正義を通そうとする人間が、本当の本当にムカつく。

……ああ、くそ。
迂闊に手を出して、そのまま人を食べそうな自分にも、腹がたつ。

…自身の『衝撃』、衝動を抑える。
紫との契約もあるし、私の思いもある。
今回の思いは奥底に仕舞い込もう。

……今度、輝夜か永琳の所に行ったら、ストレス発散方法でも聞いてみようかな。
ついでに死ぬ程の弾幕でも浴びてみようっと。

「詩菜ッ！！」
「えっ！？」

顔をあげてみれば、皆が私を見詰めていた。
主に、左手を。

「…ありゃ」
「ちょっキミ!?平気なのか!?」

ナズーリンが心配して大声を挙げるのも、まぁこれを見れば仕方無いかな。
私の左手はとても強く握り締められて、鎌鼬の爪が私の掌を貫通していた。
ゆっくり、ゆっくりと爪を元の長さに戻して、右手で柔らかく左手を揉みほぐして、左手を開かせていく。血はダラダラと垂れていて、滑って中々に開きにくい。

「…大丈夫だよナズーリン。私の回復力を知らない筈ないよね?」
「それはッ!…そうだが…」

親指の爪を刺さっていなかったが、他の指の爪は手の甲まで貫通していた。

あ~あ……。

「……とりあえず、寺の中に入りましょう」
「…そうだね。詩菜さん、そちらの方は誰なんだい?」

おっと、文の説明をしてなかった。

「こちら私の相方」

「鴉天狗の射命丸と申します。よろしく」
「そうか。まぁ…今は散らかっているが、ゆっくりしていってくれ」

広間の障子はそのほとんどが破られ、柱の木片が其処ら中に飛び散っていた。

「お茶もないが、まぁゆったり座ってくれ」

所々に血痕もある。けれど死体は何処にもない。
多分、人間は誰一人死んでないんだろうね。どうせ。

「……これから、寅丸達はどうするの？」

私はこうなった以上、ここに留まるつもりはない。

……ここに居れば居るだけ、その分憎しみが溜まりそうだし。

「…私達に封印を解く程の力はありません。此処を……守ります。聖達の帰る場所として」

「……そっか…」

私は……。

「…君はどうやら、此処を出ようとしているみたいだね」

「ッ……うん、ごめん…」

「何を謝るんですか？」

「…だって、用心棒みたいな感じで私を受け入れたんじゃないの…？」

「…馬鹿だな君は。生粋の馬鹿だ」

「そんな事で聖が貴女を受け入れると思っていたのですか？」

「……ふぇ？」

笑いを堪えているような表情と、多少小馬鹿にした感じの卑下した表情が私を見ている。

「大体、妖力が私達よりも少ない妖怪を当てになんかしないよ」

「ぐっ……」

「此処を何処だと思ってるんですか？通称『妖怪寺』ですよ？」
「……御主人様、それは何も関係無いんじゃあないかな？」
「…えっ？」
「兎に角、私達は受け入れただけだ。言っただろう？『来る者拒まず』だと」

…え……ええ～！？

「…全く……何を恥ずかしい勘違いをしてるんだか……」
「詩菜さん……それはないですよ」
「じゃ、じゃあ受け入れただけなのなら、どうして私だけあの団欒の中に入ってたの！？」
「いつもあんな感じですよ？聖曰く、大人数の方がご飯は美味しい。だそうですから」
「たまたま君が、他に寄って来ていた妖怪が居ない時に来ただけだ」

うわぁ……。

うわーーーーッ！！？
恥ずかしいッ！！超恥ずかしい！！
何これ何これ！？どんだけ恥ずかしい事を素で考えてんの私！？
一気に汗が噴き出してくるし暑い！！寧ろ顔が熱い！！

うわぁ……。
…もう顔を挙げられない……。

「…まぁこんな恥ずかしい妖怪は放っておいて、射命丸さんとやらは詩菜さんについていくんだろう？」
「はい。……私もこんな恥ずかしい事を考えてる妖怪だとは、思いもしませんでしたが…」
やめて！もう私のヒットポイントはもうゼロよ！？

「……此処はもうすぐ寂れていくだろう。妖怪達や…人々を吸引する魅力を持った、聖が居ないんだから」
「…私達は、それでもこの寺を守って行きます」
「君達は前の妖怪達と同じように、この寺から旅立つと良い」

ナズーリンと寅丸の、確固たる決意。
その決意に私が考えていた、妖怪の山付近に寺ごと引っ越してみる。という提案も言う事が憚れた。
仮に提案したとしても、それは聖の意思に反するとか言って、賛成しないのだろう。

「寅丸達は…それで良いのね？」
「ああ。何が問題あると言うんだい？」

「封印はいつか壊れる物です。その時まで私達が聖達の帰る場所を護るだけです」
「……分かった」
その時、その封印が解かれるのはいつかは分からないけれど、
「頑張って……そして、泊めて下さって」
ありがとうございました。
二人は私の見た所、今日一番の笑顔だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5122s/

風雲の如く

2011年11月27日01時49分発行